

---

# 世界に忘れられた少年

木桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界に忘れられた少年

### 【Nコード】

N1697L

### 【作者名】

木桜

### 【あらすじ】

いつもと変わらない学校生活を送ると考えていた神崎ハル。だが、そのいつもと変わらない生活はある夢を見ることで崩れ始める・・・

## 第一話（前書き）

はじめまして。初めて小説を投稿した作者です。文章構成とかすべてにおいて上手にかけている自信がないので期待せずに読んでくださいお願いします。また、この作品は自分の趣味で書いているので不定期更新になります。

## 第一話

私の名前は神崎かみざきハル。15歳で中学校に通っている普通の中学生だ。周りには面白い人や気難しい人などさまざまな友達やクラスメイトがいる。そんな普で楽しい学校生活をおくっている。

そしていつもの楽しい一日が終わりまた明日を迎えるために眠った。しかし、意識が覚醒するとそこはどこまでいっても真っ暗闇のような空間だった。朝が来たと思った私はその場所に一瞬びっくりしたがたぶん夢の中だろうと思ひ冷静さを取り戻した。その空間にしばらくいるとどこからかわからない少女が遠くにいた。その少女は金髪でなんともいえない雰囲気を出していた。何かしゃべっていたようにも見えたが遠くにいたので聞こえない。そんなことを考えているときの次の瞬間意識が薄れていくのを感じた。「ああ、夢が覚めるのか」と感じその意識を手放した。そして目が覚めるといつものベッドの上だった。あの夢なんだったのかと考えること数分

「まあ、しょせんただの夢だしそこまで考えることないか」

そこで私は夢について考えることをやめてまたいつもの一日を過ごすことにした。

## 第二話

朝ごはんを食べ終えしばらくすると学校に行く時間になったので学校に行くことにした。学校にむかう途中私の友達「前田勇樹」にあった。前田勇樹は私が学校でよくしゃべる友達のひとりでありいつもは礼儀正しくまじめ(?)なやつだがたまに毒舌になったりいつもじゃありえないことをいったりするやつにもなるおもしろい友達だ。そしていつも最初に会うときは

「おはようございます」

と決まったセリフを言う。だから私は「……………」と決まって無視をした。そうするとあいつは

「おい、無視するなよ。悲しいじゃねえか」

と言ってきた。こんなたわいもない会話をしながら二人で学校へむかった。

私の趣味は読書で好きなジャンルはファンタジーだ。だがほかのジャンルもまんべんなく読んでいる。学校へつくと私は時間がある限り読書をするこれもいつもの後景だ。たまに前田勇樹がおしゃべりに着たり邪魔をしに来たりするが無視をするといつの間にかいなくなる。そうしていつの間にか読書タイムも終わり授業の準備をしようとしたころ前田勇樹が私の机の前にやってきて話しかけてきた。

「ハル大丈夫か、なんか変な顔しているぞ」

「どんな顔していたんだ？」

「事件の真相を追う名探偵みたいな顔していた」

「おかしなたとえ方だな」

「ひどい！だって本当にそんな顔だったのに。名探偵のシャーロックホームズが事件を考えるみたいなお顔 だったんだぜ」

「お前はシャーロックホームズを見たことがあるのか？」

「ない！」

「口からでまかせなのかよ」

「まあこまかいことは気にするな」

「はいはいわかりました」

そこで私達はおしゃべりをやめて勇樹は自分の机のところに戻り私は授業の準備を再開した。だが私は頭の中ではさっき勇樹が言っていたことをかんがえていた。

(まさか顔に出るぐらい夢のことについて考えていたなんて)

次からは表情に出さないように気をつけようと思いつつももう授業も始まるので夢のことを頭から追い出し授業に専念することにした。

午前の授業が終わり給食時間になった。給食時間にたまた私のクラスに別のクラスの友達、かなた たつや金田達也がやってくる。でも大体やってくる理由が、

「おい！！ちよつと君！」

私の読書に妨害である。うるさいのでいつも無視しているのだがたまに本を盗られるのでめんどくさい人である。そして今日の私の行動は・・・

「・・・・・・・・・・」

無視である。

「お〜い。むししてんじゃねえよ」

「・・・・・・・・・・」

「お願いします無視しないでください」

「・・・・・・・・・・」

「もういいよ！！」

するといきなり読んでいる本をとってきた。さすがに無視できないので

「なにするんだ総理大臣」

これは達也のあだ名である。あだ名の由来が歴史の話をしていると

きにペリーと総理大臣の話が出てきているときに達也が総理大臣のまねをしていたのがゆらいである。

「だって無視するんだもん」

「総理大臣が国民の自由を奪っていいのか。それとこんなところにいるだけでさっさと自分の大使館クラスにもどれ」

「ええ〜〜やだ」

「なんでだよ」

「暇だから」

もしこんなのが未来の総理だったら未来は絶望的だなと言おうとしたら先生が来たので逃げていった。しかし、ちゃんと本は置いていつているのが総理大臣のいいところ。だが読書時間はつぶされて給食時間になってしまった。最初のときはいらいらしたがもういつものことなのでため息で終わった。





## 第二話（後書き）

・・・これ、面白いのか？と、自分で思う作者です。

### 第三話（前書き）

なんか全然東方に関係ない話ばつかですが今回から入っていきます。  
作者は東方の原作をあまり知らないので問題点とか間違っているところがあれば感想で書いてくれると助かります。できたら解決策も・  
・  
・  
・

### 第三話

私からしたら騒がしい友達との会話やみんなが給食を食べ終えた後の午後の授業も終わって今は前田勇樹と一緒に帰路についている。

「今日の午後の授業大変だったな特にあのおっさん先生の授業」

「ああ」

午後の授業は給食を食べた後だけあってみんなちよつと脱力気味だった。そこに午後の授業で熱血(?)じみた男の先生が一喝入れたのである。そのおかげで最初のほうはみんな真剣みを帯びた空気で授業をしていたが終わった後にはもう生きる気力も残していないような脱力感にまみれていた。私は特にどうにもなっていないが勇樹には応えたようだ。

「マジどこのドラマの授業方針だよってかんじだよな」

「あの先生のことだから「俺の授業のルールだ」とかいうんだとおもうよ」

「たしかにな」

あはははは・・・と笑いながらもほかにもほかの先生のことを話していきかえる道が分かれたところで別れた。

「じゃあまたあしたな」

「ああ、またあした」

そうしてあとの残りの道をひとり私は家に帰った。

私の家族は四人構成で父親と母親、姉とわたしで成り立っている。父親と母親は家のことをすべて姉にまかせ旅行（逃亡、この場合教育する義務から逃げた）なのでなかなか家に帰ってこない。家のことには私の教育も入っているので迷惑極まりない行動である。おかげで『教育の一環だ』とか言ってこき使われるのでさらにこまる。できたら一人暮らしを望むがまだ中学生だしできないのでしかたなく家に帰っている。

家に向かって歩き中……

「ただいま」

「おかえり〜」

と言ってきたのは私の姉、神崎みほだ。20歳だが家にいるときは幼児退行（言動が幼児みたいになること）を引き起こしたんじゃないかと思うくらいに行動がおかしい。普通の大人（私が想像する大人）じゃありえない。『一緒にお風呂にはいろう』とか『暗いのはいやだ』などの言動をするのである。だが姉いわく『これは演技』らしいので外ではしゃきつとしているとか。

「なにしているの」

「夕ご飯つくろうとしているのよ」

こんな姉でも家事はなぜかやろうとするから不思議だ。ちなみに味は悪いわけじゃない。たまに新しい味に挑戦して不思議な味を出すことはあるが……

私も待つているだけだと罪悪感がでてくるのでいちよう手伝う。

「あら〜やさしいねハル」

「そうですね〜わかりましたのではやく料理作りに専念してください」

「ハーン」

自分ひとりでも少しはできるが一人のとき以外はやらないしやりたくない。

なぜなら、味つけやレパートリーの数などはまだ姉にはとどかず、つくって姉にふるまったとしてもいろいろとうるさくなりそうなのが理由である。

なので今はまだ修行中である。

夕ご飯づくり中……

できあがったのでさっそくたべるのだが食べるときは一緒のテーブルでも姉とは少しはなれて食べる。じゃないと『ハル、あ〜んして食べさせて』とか言うからである。現に

「ハル食べさせて」

とか言っている

「いやです。自分で食べたらいいじゃないですか」

そうしてくれないと自分が食べられないのでこまる。

「いいじゃない、お姉ちゃんが食べさせてあげるから」

なに！思考が読まれた！？違う、問題なのはそこじゃない

「そんなことをされるのはわたしがいやです。ていうか姉が嫌がないのが不思議です」

「ぶぶぶもいよいよぶんでたべる！」

そういつてやっとな自分で食べた。私も急いで食べるそして姉よりずっと早く夕ご飯を食べ終えしよつきを洗い、いそいで自分の部屋に逃げて鍵をかける。

「は〜」

このごろは自分の部屋＝秘密の楽園オアシスになっている気がする……  
だが

まだ姉は部屋にこもることを許してくれないらしい……

どん！いきなり窓から入ってきた。

私たちの家は二階建てで私の部屋は2階にあるのだが余裕で窓から

入ってくる。

姉の運動能力にも驚きつつ入ってきた理由を聞く。

「はあくなんですか姉さん」

「一人が怖い」

いいとしこいて何言ってるんだとかはおもわない。いつものことだからである。

「わかりました。この部屋にいてもいいですが私が寝るときまでです」

「はい」

・・・あつかいやすいのかにくいのかわかりにくいひとである。

こんなことが寝る前まであったがいつものことなのでなんともおもわなかった神崎ハル

だがそんな日常に埋もれて夢のことをあまり深く考えていなかった

そのゆめが日常を変えることも知らずに



## 第四話

姉を自分の部屋から追い出しゃつと眠ることができた神崎ハルはそのまま深い眠りに落ちると思っていたがなぜだか意識ははつきりとしていた

「なんだ？どうしたんだ私は？」

びっくりしたそして混乱しそうになったがこれが二回目だということと思い出したんだん冷静さを取り戻していったわたしだが・・・

「まさか二回も連続で同じ夢を見るなんて」

その夢の場所がなんと前と同じ場所だった。私はこれは自分にたいしての何かなのかと疑っていたが、前とは少し違うことにきずいた。

「前の夢には金色の髪をした少女がいたが今回のはいないのか・・・  
・・・だがこの夢はいつたいどういうことだ。誰かが私にのろいをかけたとか・・・  
まさかそんなのをやったとしても効くはずないのだがもし聞いたとしたら誰がやった・・・見つけたらやり返してやる

何か行動を起こしていないと嫌な性格のハルにとって何もできない真つ暗闇は生き地獄であった。

「くそっ！！この状態はいつまで続くんだ・・・普通にかんがえたら寝ている自分が起きるまでだよな・・・おーい起きる自分、朝だぞー・・・やっぱ起きないか・・・」

はたからみたら精神異常者にみえるが誰もいない真つ暗闇なので大丈夫である。

「んつまてよ……夢の中だから現実ではありえないこととかできたり起きたりするんじゃないのか？よし！一回やってみるか……よし空を飛ぶ！……って何も起きないか……あゝあ暇だなあゝゝ」

「そついえば私の体ってどうなっているんだっけ……いまの私は精神いしだけなのかな？」

いちようは確認と思いつつ自分のほほをつねる

「いた！体も来ているのか？でも精神が痛いつていつているのかもしれないし……じゃあ体ごとの場合はどうなるんだ体が夢の中ってことは今現実には私の存在がないってことか？まさかなゝほんつとこのせかいどうにかならんかねゝ」

するとその言葉に世界が答えるかのように世界がゆがみ次の瞬間には向日葵の咲き乱れている光景に変わった。

「うわゝこの世とは思えない光景だ……うん？あそこに誰がいる……いつてみるか」

だが自分は走っているつもりのハルだったがまわりはぜんぜん進まず逆にだんだん遠のいているいつぽうだった。

「どついうことだ？夢から覚めるのか？」

そう思ったとたん体から力が抜けハルは意識を手放した……意識が戻りあたりを見渡すとそこは自分のベッドだった。

「なんだったんださっきのは……しかも夢なのにちゃんと覚えている……なぜだ？」

自分に自問するハルだがだんだんバカらしくなってきたので

「まあたまにはそういうこともあるだろ」

自己完結でおわらせて朝ごはん学校準備をすることにした。

昨日はうるさかった姉も今はいない。なぜなら姉の職業は教師で授業の準備があるため早く出るためだ。おかげで朝は疲れないですむもしこんなのが毎回続いたら学校につく前に倒れる自信が私はあった。さて朝ごはんもできたしこんどは学校へ行く準備つと。

そして着替えるのご飯を食べた……たべ終わると後片付けをして学校へむかった。がっこうへ向かう途中いつもならここらへんで会う私の友達前田勇樹と会うのだが今日は会わなかった。『めずらしいな』と思いつつも『まあ、たまには寝坊だったり早く行っていたりするよなとこのことについて考えることをやめ学校へ向かった。』

学校に着くとそこには勇樹がいた。でもいつも自分が会う勇樹とは違う気がしていた。

『どうしたんだろっなんか悩み事か？』

それなら昨日みたいに私もはなしてやろう。とおもいながら勇樹に話しかけてみた。

「おはよう勇樹。なんか悩み事でもあったのか？」

「・・・・・・・・・・」

「おいおいこんどはおまえが無視かよ」

「・・・・・・・・・・」

「わかった、わかった。次からはムシしないから」

「あなたは・・・・・・・・」

『やっとしゃべったな。相当無視が嫌だったのか？』

「あなたはだれですか？」

・・・・・・・・・・時が止まった気がした・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・ちよつとまで！なんだ、新たな嫌がらせか？

「なに？新たな嫌がらせか？」

「ちがいます。心からの質問です」

「またまた」

「ほんとうですー！！」

・・・・・・・・・・

どういふことだ！？わたしのことを忘れていたと？たしかに芝居

と考えるにはうますぎるしなにより最初に会ったみたいによそよそしい……私の記憶がないということは何か昨日事件でもあったのか？

「なあ勇樹。昨日事件でもあったか」

「いえ。ありません」

まあ、じけんのことを忘れているかもしれないしな。まあ先生が来たらわかることだし自分の席にでも……なに……なに……なに……

わ、私の机が、、、、ない……

「勇樹……」

「何」

「このクラスって人数これだけだったか？」

「うん」

『おかしい……おかしいぞ！なにがどうなっているー!!』

私は急いで教室から飛び出し職員室に突っ走った。そして職員室でじぶんの担任のクラスの先生を呼び出して聞いてみた。

「せ……せんせい。わ……わたしのつくえがないのですが……」

「あ？ちよつとまつてて……」

そうして職員室に戻ると何かボードみたいなものをもってきて

「君はこのクラスの生徒じゃないよ」

………は？この人は何を言っている？

「先生もう一度お願いします」

「だからこのクラスじゃないよって。別のクラスだと思つよほかの先生に聞いてみる？」

コノクラスノセイトジャナイ………

一瞬暴れたくなるような気が爆発しそうだったが抑えて

「いいですありがとうございます……」

そういつてはしつて教室に戻っていきほかの生徒の珍しいものをみるような眼を無視して鞆を取り学校から出た。そしてそのまま家にもどり自分の部屋に戻った。

「どうしたんだよ、どうなっているんだよ……まさか！これも夢！？なるほどそういうことか」

感覚が現実リアルとつげているが感情でねじ伏せベッドに戻ったがなかなか寝付けなかった。

「………そりゃそうだよな。夢の中で寝れるわけないか……。暇だしどうしよっかな」

焦る気持ちを抑えつつわたしは読書をすることにした。だがこの読書に没頭しすぎて、このことについて考えるのを忘れてしまった。そして、そのためにこのあと命にかかわることになるとは思いもしなかった。

読書をしている間に時間が過ぎていきまたこのことについてかんがえようとしたところあるたいへんなことを思い出した。

『そうだ！！姉は？姉はどうなっている？この家にそろそろ帰ってくるはずだ……』

案の定すぐにピンポンとおととともに大きな声が聞こえた

「たっだいま〜」

おもわずおかえりーと返しそうになったけどぎりぎり抑え込み二階に隠れる。そしてどんな行動を姉が起こすのかをみる

「あ〜あつかれた〜今日の夕ご飯何を作ろっかな〜あ、弟はいるかな？」

やっぱり！！姉は覚えていた！！！そのことに喜び嬉しさを覚えながら姉に声をかけるようと思いい声を出そうとしたら姉も一緒になってこういった。

「な〜んてね。やっぱり弟がほしいな〜」

「私ならここにいるぞ姉さん」

姉は人がいたのに驚きつつ私は姉が言ったことに絶望していた。

『私は・・私の事はみんな忘れている？そんな・・じゃあ私はどうすればいいんだ？』

と絶望していたが大変なことを思い出した。

『早く逃げないと！！！！』

そうおもった瞬間私は自分の部屋までダッシュして部屋に入り鍵をかけた。姉は突然のことにまだついていけずに呆然としているのか足音が聞こえない。今のうちにあるだけ自分の金を取り出してひつよう最低限のものをかばんにいれた。そしてドワに耳を立て音の確認をした。だが音は聞こえないのですこし状況のせいをすることにした。

『私が知っている人は全員私の事を忘れていた・・・・これからどうするかは後から考えよう・・・姉はどうした・・さつきから音が聞こえないが・・・まさか！！！！』

そうおもったときパリンとガラスが割れる音がした。その瞬間その考えに至ったことに感謝しながら私はドアを開けそこら辺にあったものを適当につかみ一階に思いっきり投げてドアの隅に隠れた。そのあとに、どンドンどンドンと階段から何かかが落ちる音がした。そして次の瞬間何かか弾丸のように飛び出しだしていった。いなくなったら私は窓のほうへ駆けて行きそこから飛び降りてなんとか神崎家から抜け出した。まだ追いかけてくる可能性があるため少し遠い学校



へと走って行った。

がっこうにつくと足がいきなり震えだして立てなくなった。さっきのドアのところをかける姉の顔はすごいものだった。その顔を今になって思い出してあしが

うごかなくなってしまうたのである。姉はありえないくらいの運動能力の高い人で危ない人である。私は姉の能力を受け継いで姉ほどではないが普通の人より高い運動能力を持っているからちよつと走ったくらいで苦しくはならないがなぜか今、胸がくるしかった。そして、同時に眠気にも襲われて意識を失いそうになったがその眠気に抵抗する。だが、抵抗もむなしく私は意識を手放してしまった。

## 第五話（前書き）

口調を原作通りに書いたり表現したりするのが難しいですね。

まちがっていても、もうこれでいいかな？

・・・ダメですよね〜

## 第五話

・・・目覚めると夢の中で見たどこかの向日葵が広がっていた。また夢のなかなのかと思っっているとなんだか悲しくなってきた。私はこんなときによく夢を見れるなどあきれもしたがこのあとどう生活すればいいかという不安のほうが大きかった。

もしこのまま夢から覚めたら私はどうなっている？現実では知らない人が家に入っているということと不法侵入になっていると思うしな。・・・またそのことだけの記憶が消えていればいいのだがそんなうまくいく世の中ではないだろう。

とりあえずは戻ったら現状確認からするこちに決めて、私はあたりをみわたした。ん？あつちに誰か人がいる・・・あ！前の夢で見た緑色の髪をした少女だ。またいつてみるか。

そう思って走ろうとしたら自分のかばんが足元に落ちていた。『夢の中になぜ？』と思っただがそれを拾って緑髪の少女に駆けていった。

「あの～すみません」

「なにかしら」

「ここって何処ですか？」

「初対面にはまず名乗るものじゃなくて？」

「・・・すみません。私の名前は神崎ハルです」

「私は風見幽香」

名前を名乗ったのでさっきの質問を口に出す。

「あの〜ここってどんな場所ですか？」

「……………しばしの沈黙のあと幽香さんが言う。」

「あなたもしかして外来人？」

「外来人？外来人ってなんですか」

「外来人はこの世界の外側から来た人のことよ」

この世界の外？夢の世界の外ってことは現実世界ってことか？だが何で夢の世界に来る人にそんな呼び方で呼ぶんだ？……………しかないここは笑われるの覚悟で単刀直入に聞いてみるか。

「このせかいの世界の外って現実世界のことですか。」

「……………あれ？どうした、なんかおかしい質問した？したつもりはないけどな。それともあきれすぎても何も言えなくなっているとか。」

「あの……………あなた……………はい？」

また、聞こうと思っていたところに幽香さんが言葉を挿んだ。

「あなたこの世界を夢だと思っているの？」

そりゃそうだ。これが夢じゃなければ何なんだ。私は異次元にでも行ったのか？それとも誰かにここに運ばれたのかなのか？

「はい。これは夢だと思っています」

「やっぱりね」

「あの〜何がやっぱりなのでしょう」

「あなたは勘違いをしている」

「はい？」

「ここは夢の世界なんかじゃない。ちゃんとした現実。そしてこの世界の名前は幻想卿というのよ」

「……………え」

言葉が出ない……………どういうことだ？本当に異次元にでも飛んだのか？だとしてもどうやって？誰が？……………

「この世界は異次元空間とかそんなものじゃないわよ」

考えていたことが読まれた？でも異次元じゃなかったら何なんだ？

「ここはどこにあるんですか」

「あなたたち外来人が住んでいた場所のすぐ近くにあるわ」

「じゃあなんでみえなかった」

おもわず口調がいつもに戻るがそんなこと気にしている場合じゃない。

「この世界のどこかの誰かさんが外からは入ることのできないのを見ることができない結界や境界を張ったからよ」

口調がおかしかったことに心の中で謝つてと、いままできいたことをまとめると……………

1ここは夢の中じゃない

2ここは異次元でもなければ別世界でもない私たちの近くにあったけどただ見えないし入れない結界などがまわりに施されている幻想卿という場所ということ

までよ……………そしたら

「私はここから出られるのですか？」

「できないこともないけど今は無理よ」

・・・よし。わかったことに後1つ追加だ。

3 現実世界には今のところ戻ることができない  
なるほどかばんがあったのはここがこういう世界だったからなのか  
はあ、これからどうすればいいのだろうか。ここには自分の家がな  
いし（現実世界にもなかったが）金は使えないと思うし働こうにも  
未成年だからな。ってかここら辺に人が幽香さんと私しかいない  
ことが一番問題だ。

「幽香さん」

「なにかしら」

「あなたはどこに住んでいるのですか」

「ここよ」

わ、おすごいな。こんな人気がないところでよくすごせるな。まあ  
そこはあまり問題じゃないが

「いつかはここから出られるんですよね」

「ええそうよ」

「それまで私でもできる仕事とか知ってませんか？」

「仕事かは知らないけど世話をしてくれそうなところぐらいならあ  
るわ」

なんともあいまいだがこの際しようがない

「そこに行く道を教えてくれませんか？」

「いいわよ。今日は機嫌がいいから連れて行ってあげる」

この人はすごい優しい人だと頭の中で記憶した

「ありがとうございます」

そしてそこに案内してもらおうとした瞬間腕をつかまれて

「目を閉じたほうがいいわよ」

なんていわれて一瞬なんのことだかわからなかったが次の瞬間空を  
飛んでいた。しかも人間ありえないスピードで・・・

「うわあああああ~~~~」

もう絶叫を上げることしかできなかった。

地面についたら吐き気と頭痛に見舞われたが、数分すると元に戻った。目の前にはどこの城だよって思うくらいでかい屋敷がある（私のイメージが可笑しいのかも）が、そのことを聞く前に

「幽香さん」

「なに」

おもいつきりのニヤケ顔。こうなることを予想していたのか次の質問の答えを予想しつつ質問した。

「こうなることを予想していましたか？」

「してたわ」

「ひどいです」

「私はいじめるのが大好きなのよ」

「……前言撤回！優しい人じゃないサディスティックな人に変更だ。」

「それにしてもどうやって飛んだんですか？この世界は私たちの世界より科学が進んでいるのですか？」

「違うわよ。私は人間じゃなくて妖怪」

「え」

幽香さんのいつていることにおどろいて変な顔でもしているのだろう。幽香さんのニヤケ顔が治ってない。

「ここには人間はいないのですか」

「いるわよ。人里に群れて暮らしているわ」

妖怪がこんなにも人に近いとは思わなかった。てつきり怪獣だった  
り体中が毛むくじゃらだったりきもちわるいのばかりだと思っ  
ていた。

「さつき空を飛んだのは妖怪だからですか」

「ちがうわ。やろうと思えば誰だって飛べるわよ」

「じゃあにんげんも」

「ええ」

空を自由に飛ぶ人間・・・こわ！（なにを想像していたかはご自由  
に考えください）

もう質問したいこともなくなったのでここで別れることにした。

「ここまで送ってくれてありがとうございます」

「べつにいいわよ、遊ぶこともできたし」

笑顔で危ないことをいう幽香さん・・・大変だ。

「じゃあいつてきます」

「ええ、逝つてらっしゃい」

なんかいつてらっしゃいの文字が違うような気がしたがこれからの  
ことを考えるためにあまり気にしなかった。



## 第六話

幽香 s i d e

あゝ面白かったわ。このごろは誰も私のところに迷い込む人が少なくなっていたから久しぶりに楽しんでよかったですわ。最初はただの外来人だと思いましたがあの人には少し不思議な力を感じたので将来性を感じて生かしておきましたのよ。そしてら働くところを探すと言い出したのであそこにつれていったのですわ。あそこなら能力開花もいやでもしないと生きていけませんしあの人の要望もたぶんかなえられるとおもいますし。ふつうの人なら人里かあの神社に送ると思いましたが、あいにく私はふつうのひとじゃないのよ。私は最強のフラワーマスター風見幽香よ！さあ、あの子が生き残るか死ぬかみものですわ。そして、生き残ったときには今度は私がバトルしてあげますわよ！

ハル s i d e

なんか誰かに襲われる様な気がして一瞬身構えた。だが全然誰も来ないのでまた歩き出した。まあ身構えたところで相手が妖怪なら手も足も出ずに終わるんだと思うがいつもの習慣だな。姉に襲われそうになったら・・・はあ。そういえばもういつもじゃないんだよな。もうあのころにはたぶん戻れないだろう第一この世界から出れるか自体怪しいし。・・・そういえば夢のことは言わなくて良かったのかな？たぶん言わなくてもだいじょうぶだったんだろうな。幽香さんは私を助けたのは興味本位みたいだったし。だけど助けてくれたのには変わりないしできたらお礼がしたいな。

このときいったお礼が自分の生存率を下げた瞬間だとはおもいもし

なかつた私。

歩くこと約十分・・・

おお～すげ～なんだこの馬鹿でかい屋敷はよくテレビとかでこんな城みたいなものを見たことがあるが実際に見るともつとでかく感じた。・・・おつとぼ～つとながめている場合じゃない早く入らないといつ妖怪に襲われるかわからないからな。そうおもってその館に向かつてダツシユした。

その屋敷の近くにはだれもいなくシ～ンと静まり返っていた。

(どうしよっかな～私こんな屋敷とか持っている友達とかいなかっただから屋敷の訪ね方知らないし大声で呼ぶにしても恥ずかしいしかといつてもずつと待っていても人が来ないかもしれないし勝手に入ったら不法侵入でだめだし～ん)

こうしてこの屋敷の人を呼ぶか入る方法を検討しているころ後ろからいきなり声が聞こえてきた。

「あの～」

「はい？」

「どちらさまでしょうか」

「はい！私は神崎ハル。外人です。そういうあなたは・・・中国の外人ですか？」

「なっ！ちつちがいます！私は中国なんかじゃありません」

うお！中国という言葉にすごい反応してきた。じぶんが中国の外人人と思つたのは中華服がありえないくらいにあつたので中華服が本当に似合う人は中国人しかいないと思つたからだ。だがなぜか怒っているようなので一応謝っておく。

「すみません。中華服があまりにも似合っていたものですから。中華服が似合う人は中国人しかないと思っていたからなんです。」  
「ほ、本当ですか」  
「はい、本当です」

そう言うと顔から怒りの表情は抜けたがまだ顔は赤いままだった。感情がまだ高ぶっているんだろうと自己解釈した。

「あっあの」

「なんででしょうか」

「なんでここにいるのでしょうか」

「ああ、ここにいるのは幽香さんが私が外の世界にもどるまで働かせてくれるところはないかと聞いたところここを紹介してくれたのです」

「なるほど」

「なので・・・わかりました私が案内しましょう」・・・うわ！

いきなりどこからともなくメイドの姿をした人が出てきた。本当に一瞬だったので時間をとめて移動したんじゃないかと思った。

「あっあなたは・・・」

「私はこの屋敷でメイド長を勤めております十六夜咲夜です」

なまえを聞くのも忘れていたがそれより聞きたいことが私にはあった

「少しいいですか」

「いいですよどうかしましたか」

「あなたは妖怪ですか」

「ちがいます私は人間です」

・・・アリエン。言葉が出ないぞ。人間にぱつと出てぱつとなくなるといふことができるのか。それとも空を飛ぶことを死ぬ

ほど修行とかをしたりするとこんなに速くなるのか。

「人間でも修行とかができればそんなに速く移動できるものなのですか」

「ちがいます。これは私の能力です」

「・・・・・・・・」

「・・・・能力とは人間風に言うと超能力のことです。ここではたまたにそういうものを持った人が生まれたりします。ちなみに私の能力は時間を操る程度の能力です」

「なるほど」

だからさつき一瞬できたように感じたんだ。だがさつきそれと一緒にになにか感じたような気がするが・・・・気のせいか。

「ではあなたのご用件は」

「はい、できたらここで外にかえるまで働かせてほしいんですけど・・・・」

「わかりました。一緒についてきてください」

といって門を一瞬であけて歩いていった。このときまた変な感覚を覚えたが体に支障がなかったのでほっといて咲夜さんについていった。

（あつ中華服の人のなまえを聞くの忘れた）

まあ後で聞ければいいかとおもいながらまたあるきだした。

一方名前を聴き忘れられたほうも名前を聞くのを忘れていた。

うわゝ外もただどなかのほうも広い。何がと言うとこの屋敷だ。コレでもかと言うくらいに広いだが外の大きさといまいちつりあわな

いので咲夜さんに聞いたところ

「この屋敷は私の能力を使い少しおおきくしているのです」

なるほど。説明によると咲夜さんは時間だけじゃなく空間とかも操れるみたいだ。だが時を止めることはできるが時を戻したり進めたりすることはできないらしい。咲夜さんの能力はなかなか応用のきく能力だな。なんてせこい能力だと私は思う。まあ、これぐらいないとこの馬鹿でかい屋敷のメイド長は務まらないか。

そんなことを考えているうちに咲夜さんがとまりある部屋に案内してもらった。

そのなかはまたしても広い部屋だった。

どこまで伸ばせるんだよ部屋を……咲夜さんの能力は強すぎる。

だがその広い部屋にぽつんと私たち以外に一人少女がいた。

「お嬢様、お客様を連れてきました」

そのお嬢様は幼いがなんとなく人間じゃ出せなさそうな空気を作り出していた。

「やっと来たわね。私の名前はレミリア・スカーレットよあなたも名乗りなさい」

「私の名前は神崎ハルです」

「それでここに来たのはなぜかしら」

「ここに来た理由は外の世界に返れるときが来るまで働かないといけないのでそこでこの働く場所を紹介されたのできてみた……が理由です」

……

あくやっぱりだめかな？面接の受け答えなんか全然やったことないしそのときの態度もわからないので適当にやったんだがやっぱいけなかったか。

「・・・いいわ、ここで働かせてあげる」  
え？うそマジ？やった！・・・いやまてもしかしたら幽香さんみたいな言葉が来るかも知れないし・・・  
「あなたには私の妹の世話をしてもらおうわ」

そんなのでいいのかだったら・・・

「お嬢様！！」

「咲夜は黙つときなさい」

「・・・」

「・・・それでどうするの」

いまの咲夜さんの慌てぶりに少し疑問があるが私はここ以外を知らないの

「いいですよ」

「・・・いい？何も聞かずにそんな簡単に承諾しても？」

「はい」

「・・・いいわ。今日からでもいいし明日からでも。給料のほうは後ほど」

「はい、わかりました」

「それじゃ咲夜この人にこの屋敷を案内して頂戴」

「・・・かしこまりました」

というなり咲夜さんは私のところにいて気が付いたら図書館みたいなところになっていた。みたいというのは図書館みたいなものの規模がかすぎるのである。だが私はこれ以外呼び方を知らないなので図書館と呼ぶことにした。中には本に何かが埋まっているようにものが見えたがとりあえず見なかったことにする。

・・・

いろんなところをみて回り最後に自分の部屋に来た。なぜ自分の部

屋があるのか聞いたところ「まだまだ空き部屋たくさんありますし気にしないで下さい」とのこと。また夕食になったら呼ぶということなので私は寝ることにした。

咲夜 side

妹の世話をさせると聞いたときはさすがに驚いた。そしてその後のハルにとって最悪な末路も見えてしまった。なので止めようと思っただがお嬢様に止められてしまった。お嬢様にもそんなことくらいわかってはいるはずだがそんなことなど知らないみたいに進め、そして、ハル様は承諾してしまいました最悪への道とは知らずに……

私はハル様の案内の後、お嬢様の部屋をたずねていた。

「お嬢様、少しよろしいでしょうか」

「いいわ、入ってきて」

まるで私が来るのを予想してたかのように即答した。私はいつもどおりに部屋に入りお嬢様に話しかける。

「お嬢様。なぜハル様に妹様の世話をさせようとするのですか」

「あら。あなたがそんなことを言うなんてどうしてかしら」

「それは……」

「フツツわかってるわ。大丈夫よ運命は私の手の中にあるんですもの」

「……わかりました。私はこれで失礼いたします」

私はそういつてドアを閉めて夕食のじゅんびをするためにまた歩き出した。私はお嬢様の従者でありながらも人の心配をしてしまうくらいで何回目だろう……この館に迷い込み遊び道具となつてばらばらになつていく人を見たのは……だが今回はお嬢様は大丈夫と

いった。だから私はお嬢様を信じる。絶対的な根拠などないが従者は主についていくものなのだから……

ハルside

あゝあよく寝た。起きてあたりを見渡すと夕方になっていた。そろそろ咲夜さんが来るなと思いい扉の前で待つことにした。だが咲夜さんはすぐにはこなかった。だから私はレミリヤさんの妹の世話のしかたを考えることにした。

考えること数分その内容がまとまったときちょうど咲夜さんが来た。

「夕食です。付いてきてください」

「はい」

歩いて移動すること数分……

食堂のドアの前に着いたとき私はここまでしてくれらんだったら今日から仕事をやらなくちゃと思いき咲夜さん話すことにした

「咲夜さん」

「夕食を食べた後妹さんのところに連れて行ってください」

「いいのですか」

「なにがですか」

「……わかりました」

そついつて会話を終え食堂に入り夕食を食べることにした。食堂には前には見られなかった顔の人がいた。咲夜の案内で自分の席に着いてレミリヤにはなしかけた。

「レミリヤさん」

「なにかしら」



「今日からあなたの妹さんの世話を始めたいと思います」

そう言うと突然隣に座っていた二人の少女が驚きの声を上げた。

「あなた・・・正気？」

「そうですよ」

「正気ですよそれとあなたたちはどちら様でしょうか」

そういうと左の紫色の髪の少女が「パチュリー・ノーレッジよ」といい右の赤い髪の少女が「小悪魔です」といった。

「あなた、自分がなに言っているかわかる？」

「理解しているつもりですが」

「全然してないわ。妹を世話をするということは『パチュリー』・・・フラン！」

「私の新しい世話係？うれしい！早くあそぼうよ！」

「まちなさいフラン」

そうやって姉のレミリアが私を連れていこうとするフランちゃんをとめる。

「この夕食が終わってからよ。そうしたらここで遊んでいいわ」

「ほんとう？やったー！」

そしてフランちゃんはパチュリーさんの隣に座り静かになった。

「さあ自己紹介もおわったし食べてもいいわよ」

「わかった」

そうして私は食べ始めた。だがレミリアとフラン以外の視線が常に私の食べ物に来ていた。その視線に私はしらず夕食を食べきった。

「さあ遊びましょう」

そういつてフランが立ち上がった。それが戦闘の合図とでも言うように・・・

## 第六話（後書き）

はあくコレを書くのに4時間もつかってしまいました。書くのは疲れますが妄想がどんどん膨らんで楽しいです。

## 第七話

ハルside

私もフランちゃんが立ち上がると立ち上がり早速仕事を開始する  
ことにした。

「私の名前は神崎ハルです。これからよろしくお願いしますフラン  
ちゃん」

「よろしく。じゃあ早く遊ぼう。」

まずは自己紹介から。これは当たり前のことだ。

次は・・・あれ？何構えているのかな？フランちゃん？やっぱりい  
きなり知らない人に世話をされるのはイヤなのかな。

「私が世話係じゃ嫌かな？」

「うん。全然嫌じゃないよ。だから遊ぼう」

そういったとたん何か飛んで襲い掛かってきた。私はとっさに横  
に避け、物体が飛んでいったところを見た。その壁にきれいに穴  
があいていた。・・・えっとなにかな？つまりフランちゃんの  
考えは、「遊ぶ＝殺し合い？」なのかな？まさかな！ただ興奮し  
すぎて手が滑ったとかだよな。

「あの～遊ぶってまさか殺し合い？」

「うん！だから簡単には壊れないでね」

うわ～笑顔でいってきましたよ。大変ですね～・・・ってやばい  
！ただベビーシッターみたいなことをするのかと思いきゃこんなこ  
とだなんて！

またさっきの物体がこんどは三つ飛んできたのでさすがに横にステ

ツプだけじゃ避けられないので横に転がって避ける。

危ない危ない！こんなにくらったら一撃であの世行きだ。

くそっ！どうしたらいいんだ！私は攻撃できる手段なんてないしいつまでも避けるなんてスタミナの無い無理！それに襲い掛かってこられたりしたら一環の終わりだ。だからさっきパチユリーさんたちが私に正気かを聞いてきたのか！

「避けているだけじゃつまんないよもっと楽しもうよ！」

むりむり！これ以上楽しんだらショック死してしまうって！

・・・ってそんなに弾つくつたらもうさすがに避けられないって！  
「まてまてまて！そんなに作つたらさすがに遊べなく・・・」  
「いつけー！」  
「・・・っての話をきけー！」

数十にもなる弾が私に襲い掛かってきた。一つ一つ確実に避けるがだんだん体力が限界になってきた。そして・・・

「ぐはっ」

被弾してしまった。私は数メートル吹っ飛ばされて倒れた。左腕の感覚がない。直撃したのは左腕だったようだ。しかし体のあちこちも痛くて動けない。これは完全に万事休すだ。

「もう終わりなの？まっいいや。じゃあバイバイ」

そういつてさっきの倍の数の光の弾を出してきた。

こんなボロボロなのに容赦ねーな。・・・私・・・死ぬのかな。いや、まだ死にたくない！私にはまだやりたいことがあるんだ！動け！動け！私の体！

必死に体に鞭をうって体を立たせて光のたまと向き合った。

「まだ遊べるの？」

「ああ、まだ・・・な・・・」

そついうなり光の弾を飛ばしてきた。今度は避けようとせずにフラ

ンにむかっていった。実際はもう避けられる程の体力がなかったのだ。・・・そして視界が真っ白になった。

気がついたら同じ場所で仰向けに倒れていた。・・・あれ？私は何をしていたんだ？え〜とたしかフランの弾に当たって・・・そうだフランは？！私は立ち上がりフランのほうを見た。フランはさっき見たときのように笑っていた。でもなにかおかしい。さっきから動いている様子がない。それどころかすべてが止まっているように見えた。

「どうなっているんだ??」

「時間が止まっているんです」

「咲夜・・・さん。これってどういうことですか？まさか私を助けるために・・・」

「違います。これはあなたがやったことです」

「そうなのか」

すごい。これが時間を止めるということなのか。

「でもなんで今になって発動したんでしょうか？」

「あなたが自分の能力に気付くかしないと発動しないのよ、なぜか砕けた口調になっているし」

「あれは仕事用です」

なるほど・・・って声に出ていたのか

「はい、出ていました」

・・・思ったことをすぐ声に出さないよう練習でもするかな・・・

「あなたもいつもの口調でいいわ」

「これがいつもの口調ですが」

「うそ？」

「・・・わかった。これでいいか」

「いいわ。それじゃあ本題に戻りましょう」

「この後どうするかってことだな？」

「そう。フラン様はまだまだ本気じゃない。本気になれば私でも生き残れるかわからないわ。」

「そんなのに私、勝てるのか？」

「勝つとはいっていないわ。そろそろお嬢様が何かすると思うし」「といますと？」

「あなたを生かすための行動を起こすということ」

「何か根拠でもあるのか。」

「ないわ。でも主につくのが従者でしょ？」

「わかった。どうせそれ以外に助かるすべはなさそうだし。」

「じゃあそろそろ時間を進めてくれないかしら？」

「・・・あのくどうやって??？」

「感覚で大体わかるものだけど、最初的时候は念じるのが一番ね。」「わかった」

そうしてまた時間が動き出した。時間が動き出してみんな私が別のところにいきなり跳んでいたので驚いていた。だがレミリアとフランが別の反応をした。

「やっぱりね。」

「すごいすごい!!また遊べるね!!」

レミリアさん。はやくこの状況をなんとかしてください。

「フラン今はだめよ。これからもっと強くしてまた戦わせてあげるから今日はこれでおしまい」

「もっと強くなるの!?わかったいいよ。」

そういうとフランは私のほうにとんできて

「じゃあ強くなったらまたあそぼうね!!」

と行って去っていった。

「つかれた〜〜」

もうこんな体験は嫌だ、できれば二度とやりたくないのだがさつきレミリアの言っていたことだとするとまた戦わせるんだろっし・・・

・・・まあとりあえずお礼言わなきゃな。

「たすけてくださってありがとうございます」

「別にどうってことじゃないわ。さあ聞かせてもらいましょうかあなたの能力のこと」

「私の能力は咲夜さんと同じ能力みたいです」

「ふくん。本当なの咲夜」

「はい。私は時間が止まるのを確認しました」

「わかったわ。それであなたはどうするの？ここで働く？それともここを出て行くか」

「普通ならもうこんな体験をした後じゃ逃げ出したい気分ですが私にはここ以外に行く当てがないものですから」

「わかったわ。じゃあまた明日から妹の世話をしてもらっわ。衣・住・食ありでね。ここで外に帰れるまでいとけばいいわ」

「ありがとうございます」

「それともう普通にしゃべっていいわよ」

「わかった」

「あら、以外に素直ね」

「さっきも言われたからな」

「あらそう」

そういつて私はみんなの方に向き直り

「これからお世話になります神崎ハルですよろしくお願いします」  
しばしの沈黙そして

「パチュリー・ノーレッジよ。よろしく」

「小悪魔です。私はパチュリー様の使い魔です。よろしく願います」

こうしてさっきまで死に掛けていた時間が過ぎていった……

## 第七話（後書き）

ここで能力のことについて書いていますがこれは主人公の能力の一端です。いつか本当の能力を書きますのでそのときを待っていてください。



## 第八話（前書き）

・・・テスト・・・

それは、人類の天敵と呼ばれる存在。そして、私はそれにいまぶち当たっている。

これを超えて生きている人間は数すくな・・・い分けないですよね〜。

## 第八話

死に掛けていた昨日も嘘みたいに終わり朝がやってきた。私はいつもだったときの習慣で朝早く起きている。たぶん今起きているのは咲夜だけだろう。というのも昨日、正式な雇用になったときにこの紅魔館の説明やレミリアたちの説明を受けた。レミリアとフランは吸血鬼で夜に活発に動くらしい。らしいと言うのは外の世界での吸血鬼とこの吸血鬼ではちょっと違いがあるからだ。能力はレミリアが『運命を操る程度の能力』でフランが『ありとあらゆる物を破壊する程度の能力』とのこと。

次にパチュリーノーレッジ。パチュリーは魔法使いで図書館の中で生活しているらしい。喘息持ちで体が弱いそうだがそれ以外には普通そうだ。能力は『魔法を使う程度の能力』。

最後に小悪魔。小悪魔はパチュリーの使い魔で元はサキュバスらしい。どんな悪魔なのか聞こうとしたら赤くなって逃げてしまった。そうとう大変な悪魔なのかと思ってもう二度と聞かないことにした。能力はなく最初は驚いたが本当は能力があるほうが珍しいらしい。そして、みんなの自己紹介からするとみんな夜に動く人たちなので今は咲夜だけしか起きてないだろうという結論になった。

私は昨日ケガをした腕を見た。昨日よりは良くなっているがまだ大怪我の枠をでない程度である。おかげで明日すぐには世話を始めずに腕が完治してから世話を始める事になった。私はこの間にフランが出していた光の弾や飛ぶことができるようになるために修行をしなくてはいけない。私だつてまだこの年で死にたくないからだ。能力もあるが攻撃的な能力じゃないしそれに今のところ使える回数に限界が早いのであまり頼りにしないことにした。

「さて、どこにいこうかな」

今は修行してみんなを起こすわけにもいかないし図書館で調べるにもパチユリーがいると思うのでいけない。とりあえず私は外に出て新鮮な空気を吸うことにした。

外に出てみると昨日、門の前で話していた中華服を着ている少女がいた。正直にいうと名前を聞くのを忘れてさらに存在まで忘れていた。だが、昨日の説明ではこの門番をしている紅美鈴という名の妖怪で気を扱う程度の能力なのだそうだ。

「あの～すみません」

「はい？」

「紅美鈴さんですよね」

「はい、ところであなたは……」

「私はここで正式な雇用になりました。昨日に会いましたよね」

「え～と？……あつ神崎ハルさんですか？」

「はいそうです。今日からこの仕事仲間です。よろしくおねがいします美鈴」

「はい！おねがいます」

顔を赤くして泣きながら美鈴は言ってきた。私は何かしたのかと思いついてみることにした。

「どうしたんですか。なにか私しましたか」

「いえちがいます。私あまり名前で呼ばれなくて。いつもあだ名だったりするものですから、名前で呼ばれたのがうれしくついで

「そうですか。ならよかったです。次からも名前で呼ばせていただきます」

「ありがとうございます！」

美鈴はいきなり抱きついてきた。私はいきなり抱きつかれることで

顔を赤くし言葉にもおもわず素がでてしまった。

「なっ、なにするんだ」

「……え」

そして少しすると自分がしたことに気がついたのか泣き止んだが赤面して

「じっ、ごめんなさい」

「いいですよ別に」

「そうなんですか？」

「そうですよ」

「わかりました。……ところでさっき素がでましたよね」

「（やつぱりきずいていたか）……はい、でました。次から素がいいですか？」

「はい。（そのほうがハルさんに近づいた気がしますもんね）おねがいします」

そうとううれしかったんだなと思いハルも笑顔になりたわいもない話にはなをさかせていった。

こうして話している途中に咲夜が朝食の時間になったと伝えに来たので朝ごはんを食べて早速、修行をすることにした。

「早速だが、まず何をやればいいんだ」

「まず弾幕や魔法、スペルカードルールについて話すわ」

説明が終わるとあるひとつの疑問があったので聞いてみることにした。

「スぺルカードルールでは致命傷負っても死ぬことはないんだろ。だったら昨日のフランはなんだったんだ」

「フラン様はスぺルカードのことをあまり理解していないわ。ただカードを使えばいいと、しかね」

「なんできちんと説明しない」

「説明はしたわよ。でもフラン様は少しだけ性格が捻じ曲がっていて、言っても『カードを使って壊せばいいんだ』としか解釈しないわ」

「なるほど。だったらまずその性格をどうにかしないといけない。でもどうやってやればいいんだ？」

「戦って勝てばいいじゃない。そうすれば話を聞く冷静さぐらいは取り戻すはずよ」

「それができたら最初からそうしているよ。フランの能力が効かないというのがせめてもの救いだな」

「フランの能力は時間を操る能力と相性が悪く、能力を使って破壊しようとしてもこっちの能力で壊そうとする物の時間を止めて壊せないようにできるから壊せない。」

「でも、能力がなくても強いには変わりないわ。だから弾幕や飛べるようになるための訓練をしましょう」

「はぁ・・・わかった」

「生き延びるためにはしかたないんだよな。しょうがない、がんばって訓練しますか。」

訓練が始まって約1時間ぐらいしたところで咲夜が訓練終了をつげた。今日はまだ体とかを怪我しているので実戦練習はなかった。だが弾幕の出し方や空を飛ぶときのイメージやコツなどを教えてもらった。

「あなた、コツをつかむのが早いわね」

「まっ、これでも外では本とかばっかりあさっていたからな。イメ

「ジとかならずすぐできるさ」

「なるほどね。明日は様子を見て実戦練習でもしましようか」

「（・・・はつきり言ってやりたくない。あんな死ぬ思いをなんともしたくないし）わかった。でも、明日すぐには直らないと思うぞ」

「大丈夫よ。あなたはもう吸血鬼だから」

「なに！！！」

「嘘。冗談よ」

「・・・冗談にも限度がある」

「悪かったわ。とりあえず今日はゆっくりしていいわ。この紅魔館からでて別のところを見回るのもいいんじゃない」

「遠慮しておこう。ここを出たら最後、すぐに妖怪に襲われそうだしな」

「そうね」

そうして私は咲夜と別れた。しかし、ずっと何もしないのは自分の性分にあわないので自分の趣味のひとつ、読書をするために図書館へ行くことにした。

図書館について中に入ると、すごい数の本が置いてあった。とりあえず適当に本を取って見てみる。中を見ると意味わからない文字のオンパレードだった。見ていても気分が悪くなるだけなので戻して別の本を探す。

「ん〜。もつと簡単のとか中学生が読めるのではないのか」

そういいながら本を探していたら後ろのほうで本が落ちる音がした。何が起きたのかと思っていってみるとそこにはほんの山があった。そして、その中に人の手らしきものも。

「だいじょうぶですか〜」

「・・・」

返事がない。とりあえず本を落ちたと思われる棚に入れていって山をかたづけると紫の髪が出てきた。

「パチュリー!？」

「……………」

やばい!パチュリーは喘息持ちだったから急がないと喘息がひどくなる!

「今、本をどけますから」

そついつて本を急いでどかしてパチュリーを引っ張り出してみると・

……………

「ムキユ」

気絶していた。このまま抱えているままじゃいけないのでとりあえず起こす。

「パチュリーおきろ」

「……………」

「おい」

「……………」

「やっとおきたか」

パチュリーは起きて今の状況を確認するといきなり顔を赤くして

「あなた……………なにやってるの」

「なに……………って、パチュリーを助けたただけだが」

「ちがうわよ！」

そういうなり昨日のフランみたいな弾幕をだしてきてゼロ距離の私はそれをおもろにくらってパチュリーを放して吹っ飛んだ。

「いつて〜。なにするんだよ！」

「それはこっちの台詞よ！寝ている人をいきなり抱きかかえるなんてどういうつもりよ！」

「はあ〜？私はパチュリーがほんが落ちてきて中に埋もれていたから助けたんだよ。そしたらこら辺に置いとくわけにもいかないから抱きかかえたまま起こそうとしたわけ」

「……ほんとに？」

「ああ、ほんとうだ」

「勘違いして悪かったわ」

「気にするな。いきなり抱かれていたらそりゃびっくりするしさ」

まあ、吹っ飛んだときに腕を痛めて更にひどくなったこと意外は一件落着だし。

「ところであなた。ここで何をしているの？」

「ああ、せつめいするとだな」

そして、説明すること約五分。説明が終わるとパチュリーからこの図書館についての説明を受けた。

「なるほど。じゃあ私が読める本もあるというわけか」

「そうよ。だからがんばって探してみるといいわ」

その言葉……手伝う気はないようだな。



「……はいはい。わかりましたよ。じゃあがんばって探してみ  
るとしますかね」

どうせって暇つぶしできただけだしちょうど暇つぶしってことで良  
いか。

そうしてまた本探しを再開した。

## 第八話（後書き）

私はあまり2ch用語知らないがために堅苦しい文章になっているのにきずきました。できたら個性として捉えてくれたらうれしいです。あと、文の書き方がころころ変わっているのですが調整中なので読みズライとは思いますが見捨てないでください。お願いします。

## 第九話（前書き）

頭を強打しまくって（リアルに強打された）考え付いた展開がまともなものがない！

## 第九話

本を探して約30分、やっと自分が見られる本を見つけた。何か戦いに使えるといいなと思いきり期待しながら本を開けると中身は何かの呪文がいつぱい書かれた本だった。

（おいおい、何だコレは。何かの呪いの儀式の言葉か？）

実際に唱えてみようと思いきり唱えようとした瞬間

ドッカーン！！

爆発する音がした。何が起きたのかと現場に行ってみるとそこには私が考えていた本来の魔法使いの格好をした白黒色の魔女みたいな少女と倒れているパチュリーがいた。

「おい！大丈夫か！」

「・・・ええ。大丈夫」

爆発を受けたみたいにボロボロなパチュリーが起きたがはっきりいって大丈夫にはみえない。

「何が起きたんだ？」

「あそこにいる泥棒が本を盗みに来たのよ」

「おいおいそりゃないぜ。私はただ本を借りにきただけだぜ。私が死ぬまで。」

「なにいつてるのよ！それじゃあ泥棒と変わらないでしょほっ！」  
「ほっ！」

「大丈夫か」

「・・・大丈夫よ。こんなやつ、喘息さえなければ」

「あんたも敵なのか」

「まず先に自己紹介からだろ」

「おっとそうだったな。私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだ」

「私は神崎ハル。普通の人間だ」

「何で普通の人間がこんなところにいるんだ？」

「さあな。ただ昨日からフランの世話をしてここで暮らしている」

「へへえ。じゃああなたは強いのか」

「（ここは嘘を言っただけで退場してもらおうか。戦いになれば私に勝ち目はないし）ああ、すつごく強い」

「なるほど。じゃあ戦うか」

「ちよつとまで！今のは嘘だ！本当はものすつごく弱い！だから敵が強いから戦ってみたいなんて考えするんじゃないか」

「勝ったほうはこの本をひとつ借りていけるんだぜ。いくぞ！」

「ちよつとま」恋符『マスターパーク』！！」

「くそっ！」

私は能力を発動して魔理沙が出した極太レーザーを隣にいたパチュリーを抱き上げて避けて本棚の後ろに隠れて能力をといた。

するとその極太レーザーが元私たちがいた場所に当たり大きな爆発音を出した。

（あつぶねーなあれ能力無しじゃ絶対避けきれない）

（あなたなにやってんのよ！）

（待てそんなに暴れるな！いたっ！）

顔を真っ赤にしたパチュリーがいきなり暴れだして八ルの腕から落ちた。

（なんだよ避けるためにただ抱き上げただけなのに）

（あなた女心つても理解してないでしょ）

（なんのことだよ。それより今のことをかんがえようぜ）

（はあ……。わかったわよ）

（とりあえずパチュリーはここにいとけ。たぶんこんな音がしたら咲夜がもつすこしで来るだろうし私は弾幕は出せるけどこの腕じゃどうにもならないし元から実力だっただけかなわないだろうし）

（たしかにね。わかったわ、その作戦でいいわ）

そうして小声での作戦会議を終え、私はまた能力を発動して少しづつくりさせようと思って魔理沙の前で能力解除をした。

「うわっ！」

案の定魔理沙はさっきまで探していた相手がいきなり出てきてびっくりしていた。おもしろいぜ。

「何で攻撃しないんだ。それに目に見えないほどのスピードで動くなんて……おまえ何者だ」

「攻撃できる体じゃないし、攻撃できる技も持ってないんでね。私は普通のニンゲンだから」

「そんなのあるわけ」

そのときまた時間が止まった。となりには咲夜がいた。

「やっぱり来た」

「あたりまえよ。こんなドンパチやられちゃ嫌でも来るわ」

「で、どうするんだ」

「見ときなさい。弾幕ごっここの決闘のやりかたを」

「わかった」

じゃあ私はパチュリーのところに戻りますか。

戻ると同時にまた時が動き出した。

「！」

（し〜）

（……びっくりしたわ）

（「ぐめん。いきなりきたらびっくりするよな）

（それに顔も近いしね）

（……）

うわっちか！私は思わず突き飛ばしてしまった。

（いった〜）

（ごめん！ほんっつとつにごめん！）

（別に大丈夫。コレでおあいこさまよ）

私は戦いのほうを見た。すごい弾幕の数で戦っている二人に驚きだ。これは幻想卿での戦い方（一部の人は普通におそつてくるが）だから私もいつかはできるようにならないとな。結果は咲夜の勝ちか。で魔理沙は負けたことで悔しがっているな。

「くっそー。また負けたぜ」

「さあ、もう用がないなら帰ってくれるかしら」

「そのまえにひとつハルに質問があるぜ」

「なんだ」

「いきなりあらわれていきなり消えたりするその力は能力かそれともお前の力か？ちなみに私の能力は魔法を使う程度の能力だぜ」

「ああ。私のあれは能力でやっていてその能力は咲夜と同じだ」

「なるほど。だとしたら更に難しくなるな」

「なにが？」

「本を借りに来るのがだぜ」

「.....」

「じゃあ、そろそろ退散するとするぜ」

「もう二度とこなくていいわよ！」

そついうと魔理沙はすごいスピードで図書館をでていった。まるで嵐のようだな魔理沙は。

さてと、片付けでもしますか。

途中、自分が読めそうな本があったから読もうとしたら片付けるのをやめて読もうとしたらおこられた。そして、片づけが終わるとみんなはそれぞれの自分の活動を再会するためにまたバラバラになった。まあパチュリーとはバラバラといってもすぐ近くののだが。私は魔理沙が来る前にやろうとしていたことをやろうとおもってさつそく何かの呪いみたいな呪文を読むことにした。が、唱えてみても何も起きるはずもなくしくんとしていた。やっぱり何もおきないよなと思って本を閉めようとしたらいきなり光の弾幕が飛び出して図書館の中を飛び回り始めた。そしてその弾幕はパチュリーに激突した。

「……えつと……大丈夫か!? パチュリー!」と思ってまた様子を見に行った。パチュリーはさつきみたいに見事に気絶していた。まあ、横からいきなりきたらそりゃ誰だって気絶すると思うが。

私は起こそうと思ったが、ここで起こしたら起こした後に殺されそうな気がした。

だが決断の末起こすことに決めた。逃げたら後がもっと怖いと思っただけだからだ。

「パチュリー」

「……う」

パチュリーは起きるといきなり考えだした。

「さっきのはなんだったのいきなり横からなんか衝撃が」

「(どうする……私がやったってことには気づいていないらしい。だがやっぱり嘘をつくのは嫌だ) あれは私がやったんだ」

「え」

「ごめん。悪気はなかった。ただおもしろ半分でへんな呪文を唱えてしまって、そしたら光の弾幕ができてパチュリーにあたってし



「まったんだ」

「なんですって!」

「ごめん!許してください!」

パチュリーが怒こつていると思ったので頭を下げて謝った。しかし、パチュリーはなぜか驚いたままだった。どういう意味だ?

「ハル。さっきあなた呪文を唱えたらでた。といったわよね」

「あつああ。確かにそうだった」

「それがどういう意味かわかる?」

「いえ、まったく」

「はあ・・・あなたには魔法が使えるということよ」

「ふん」

「なんで驚かないのよ」

「だって魔法つて修行すれば誰だって使えるものだろ」

「だったら人は全員魔法使いと呼ばれているはずよ」

「えっじゃあ私が使えたのって」

「そう。才能がある、ということよ」

「うそ!?マジ?やったー!」

「え?ちよつと!あなた!」

私はうれしすぎて喜びがとまらなかった。なぜかという魔法が使える。弾幕作らなくてすだとおもったからだ。そしてついでにフライングのときの戦闘の幅が広がるし勝つ確率も増えるし。

「ねえ、聞いているかしら」

「ん?なんだ?」

「私をいつまで抱き寄せているつもり?」

「.....うわー!」

私は喜びのあまりパチュリーを抱き寄せていることに気が付かなかったようだ。私の顔は今真っ赤だろ。パチュリーの顔も真っ赤で今にも茹で上がりそうだし。私は抱き寄せていた手を離し後ろに下がり、そして土下座の姿勢をとり、頭をぶつける勢いで土下座した。

「すみませんでした！」

「いいわ、別に気にしていないから」

「だがまだ顔真っ赤だぞ。まだ怒っているんじゃないのか」

「ちがうわよ！これは……」

「これは？」

私はパチュリーを見つめる。だがパチュリーはそれを避けるようにして後ろを向いた。なんだよ。やっぱりまだ怒っているじゃん。

「（もう！鈍感なんだから）はあ。なんでもないわ」

「え。なんでもないってどういうことだよ」

「とにかくなんでもないの」

「……わかった。許してくれてありがとう」

私は笑いながら御礼を言った。だがパチュリーはまだ顔を背けたままだった。

「なつた相手にあんな事されたら顔が真っ赤になるのはあたりまえよ」

「ん？なんかいったか」

「いえ。なんでもないわ。それよりあなたの魔法の説明をしてあげる」

なんとなく話はぐらかされた気がしたが説明を聞くことにした。

魔法の説明が終わると急に体がだるく感じたので自分の部屋に戻った。

（まあこれだけフル稼働していたら疲れるよな。部屋に戻ったらさっさと寝ちゃおう）

戻ると倒れるようにベッドにもぐりそのまま眠った。

「うっ、頭が痛い」

起きるとなぜか頭痛がした。風邪か？と思い次の日からは安静にすることを決意した。部屋の外から咲夜の声が聞こえてきた。

「ハル。夕食よ」

「わかった。すぐ行く」

私は要らぬ心配をかけないよう頭痛を我慢しながら食堂へ向かっていった。

食堂には昨日よりは少なくいるのはレミリアだけだった。

「よう。今は夜だからこんばんはかな？」  
「フツツ。そうねそのほうがいいんじゃないかしら。それより二」  
での生活一日目はどう？たのしかった？」  
「まずまず、といったところかな」  
「フーン。まあ、いつかはここでの生活が楽しくなるわ」  
（いつか・・・ね。そのいつかはフ란のことだろうな）

そこで会話をやめて私は夕食をとることにした。食べ終わった後は頭が痛かったためいろいろと理由をつけて部屋に戻ることにした。じゃないとすぐぼろが出そうだし。そして、すぐにベッドに倒れてそのまま寝た。

レミリア aside

「咲夜」

「どうしましたお嬢様」

私はハルの事について考えていた。私の能力の運命を操る程度の能力は最初はハルの未来をみていた。だが、次の日になって見てみるとなぜか見えなくなっていたわ。私は運命を操ってみたが効果はなくコレまでそんなことがなかったので異例の事態だと考えていた。

「ねえ。ハルは今日何をしていたの？」

「私が見ているときは修行をしていてそのあとは図書館で魔理沙と遭遇。そしてそのあとずっと図書館にこもっていたそうです」

「パチュリーとにているわね」

本の虫第2号ね。

「はい。それとパチュリー様がハル様には魔法使いの才能があると

「いつていました」

魔法使い？最初見たときは能力があるのは感じたけどそんなものは感じなかったわ。

「咲夜」

「はい」

「ハルをできるだけ観察していてくれないかしら」

「いいですがなぜ能力で見ようとしないのですか」

「見えないのよ。まったくね、なにかにさえぎられているみたいだね」

「わかりました。できるだけ見張らせていただきます」

「ありがとうございます。もう下がっていいわ」

咲夜は一礼をして部屋からでていった。

（あの子、なにか大変なものを抱え込んでいるに違いないわ。だって私の能力が聞かないんですもの。時を操るだけじゃ私の運命からは逃れられないしね。いろいろと話す必要がありそうだわ）

私はそこで考えをやめて結論を出した。

すべては、フランのことが終わったら始めましょうと。

ハルside

ここ紅魔館に来て一週間がたった。頭痛がしたあの日のあと咲夜に

聞いてみたが能力の使いすぎだといわれた。実際思い当たるのが多かったし頭痛も治っていたのでそうなのだろう。ここに慣れてくると日課になるものも出てきた。朝はかならず美鈴のところに行くようになって図書館にも毎日行くようになった。朝毎日行くようになったのは美鈴が私があると喜ぶからだ。なぜ喜ぶかは知らないがたぶん暇なんだろうとずっと一人の門番は。図書館は私の本を読みたいからだ。おかげで本の虫2号のあだ名がついたが実際そうだし何もいえない。修行もいい感じに進んで戦える程度にはなった。魔法はパチュリーに教わったりしなかったりでありすすんでいない。そして体の怪我也完全に治りそろそろフランの相手をしないとけない。

「咲夜」

「なんですか」

「今日、フランの相手をしようと思う」

「ついにきましたか」

「ああ。そして勝ってちゃんと話をきいてもらおうぜ！」

「はあ。死なない程度にがんばってきてください」

なんだよ。最初はすごい勢いでとめようとしたのに。時を操れるからといって逃げられるとは限らないのに。

私はフランのところへ向かった。能力は使わずに徒歩で。

.....

フランのところにつくといきなり抱きつかれた。

「やった！やっときてくれた！」

「そんなにうれしいのか」

「うんだって遊ばなくてつまらないんだもん」

「そうか」

「じゃあさっそくあそばさうよ」

「・・・いいぞ」

さあ、死ぬ覚悟だ私。修行で得た力をここで全力でだすぞ！

「あは！いつ『ちょっとまって』・・・なに〜?」

「フラン弾幕ごっこをしているか」

「うん！カード使って倒すんでしょ！」

だめだ。ぜんぜんわかっていない。だがここは話をあわせる。

「ああ。そして、勝ったほうは負けたほうに願いをひとつかなえてもらうんだ」

「うん！私のほしいのはあなたの命！」

うわ〜ありえないくらい笑顔だ。そうとうやばいぞ。あいてを殺すときに笑顔っていうのは。

「じゃあ私もフランの命だ」

命をとろうなんて思っていない。今はこの方がいいと思ったからだ。

「いいよ。じゃあはじめ！」

いきなり全力かよ！

私は時間をとめてフランのうしろへ回る。そしてそこにフランに劣るが避けられないくらいの弾幕を作る。そして能力を解除する。

「えっ」

「ゆるせ」

全部の弾がフランにあたり爆発をおこした。私の弾幕は誘導性じゃなく力任せの直線しかない。だが能力のおかげで四方八方からそれを出すことができる。普通ならこれで決闘は終わりだが今は普通じゃない。

「いった〜。すごいね」

「まあな」

相手が死ぬまでの本当の決闘だからな。

「じゃあ私も。簡単にこわれないでね？」

「大丈夫だ。簡単にはこわれななさ」

フランが能力を使おうとした。だが発動しない。

「あれ？なんで壊せないの？」

「言っただろう？簡単にはこわせないって」

改めて感じる・・・私の能力すごい。

でもどうする。こっちじゃ決定打がないし能力使用にも限界がある・・・ここはあれを・・・

つかってみるか！

「さあ。いくぞー！」

まだ自分の能力が効かないのが理解できず呆然としているフランに今私が出せる最大の威力をのせた殺傷設定の一枚のスペルカードをだす。



「流符『ライトスター』」

これは魔法を組み合わせたスペルカードだ。小細工なんてない魔理沙のマスタースパークみたいな力技だ。流星群みたいにフランに押し寄せていく。そして直撃した。ミサイルが爆発するような音がして部屋が光でいっぱいになった。

「うわっ！まぶしっ！」

こんな密室で使うと大変なことになるな。まぶしすぎて何も見えんだんだん見えるようになってきてフランを見るとボロボロになっていた。もう戦えなさそうなくらいに。

「あ……」

「おっと」

いきなり倒れたので支えてあげることにした。

「負けた」

「ああ。私の勝ちだ」

実力で勝った気はしないが。

「さあ、私を殺して」

「まあまあ。私はフランを殺しに来たんじゃない。私はフランを世話をしに来ただ」

「うそ！私と一緒に居たいなんて言う人どこにも居ないわ！」

「いや違うな。ここに居るじゃないかフランの目の前に」

「……ほんと？」

「ああ」

そういうなりフランが泣き出した。そうか、ずっと一人ぼっちだったんだよな。よし！私がこれから楽しいことをたくさん教えてやるう。もちろん戦い以外で。

私はまた頭痛がしてきたので泣きつかれて寝ているフランと一緒に眠ることにした。

## 第九話（後書き）

大図書館にある魔法の書とか魔道書とかって以外に日本語多いんじゃないですかね？だってほら、幻想郷も日本のどこかという設定ほいですからね……. . . . . といっても作者の妄想ですが。

## 第十話

私は起きると自分の部屋じゃないこととフランが居ることに驚いた。だが昨日のことを思い出してそのままフランの部屋で寝ていたことをおもいだした。

「あつ、おきた！」

なぜかフランが起きている。吸血鬼って夜に活動するんじゃないか？ たっけ？

「何でこんなに早く起きているんだ？ 吸血鬼は夜に活動するんじゃないのか」

「ちがうよ。寝ているのは太陽が出ている間何もできないからだよ！」

「なるほど。で、なんでフランは起きているんだ。暇になるだけなのに」

「ちがうよ！ 暇なんかじゃないよ。だってハルがいるんだもん」

そうだったな。世話係の私がいたか。今日からいろいろ忙しくなるな。

「たしかに。じゃあまずはみんなに挨拶だな」

「うん！」

なぜかフランが手を掴んで来た。おいおい何する気だ。まさか何かしたらすぐに壊せるようにとかじゃないだろうな。

「なんで手を握るんだ」

「ダメ？」

「ダメじゃないけど理由を聞かせてほしい」

「え〜と・・・ハルがおにいちゃんみたいだから」

そんな恥ずかしそうに言われましても。しかしお兄ちゃんか。まあ別にいいか何かが変わるわけでもないし。

「じゃあ思いきっておにいちゃんと呼んでもいいぞ」

「ほんと！」

「ああ。本当だ」

「じゃあおにいちゃん一緒に行こう！」

「わかった」

そして私たちは歩き出した。だがこのときのことを私は後悔することになるとはおもいもしなかった。

私とフランはみんなが居ると思われる食堂に行った。だが誰一人としていなかった。なぜ居ないのか？・・・そういえばまだ朝だったな。しかたない。美鈴のところについてみるか。

私はフランと一緒に美鈴のところに行くことにした。

美鈴のところにつくと美鈴は寝ていた。ちなみに今はまだ外は薄暗いのでフランも大丈夫なのだ。

「どうしよっかな。起こすか？」

「う〜ん。起こすなら・・・」

私はフランが言っていたずらして起こすという意見に賛成して行動を起こした。内容は弾幕を耳元で爆破させるといふ地味で寝ている人には一番つらいと思ういたずらだ。フランはまだ力がコントロール

できていないので私がやることになった。

「いくぞ」

「うん」

どっかーん！

美鈴はびっくりするのでなく怒るわけでもなくいきなり起きると襲い掛かってきた！

「うわっ！ちょっとまって美鈴！私だハルだ」

「えっ」

あぶない。もう少しで肉片になるところだった。音だけで敵がどこに居るかわかるとは・・・さすがすぎる。

「ごめんなさい。悪気はなかったよねお兄ちゃん」

「そうなんだ。ごめん。ちょっとしたいたずらでやったんだごめん」

「あの。お兄ちゃんってどういうことですか」

いたずらよりもそこ！？まあいいけどな。

「これはフランが『ハルが私が大好きなフランにはお兄ちゃんと呼べたみたいって』そうなんだよ・・・ってまて！ちがうぞ！美鈴！」  
「そんな！ハルさんはそういう趣味なんですか！ひどいです！最低です！」

「どんな趣味かは知らないが誤解だつてば！」

美鈴を説得するのになぜか私が美鈴の願い事を聞かないといけないうことになってしまった。何もしてない私はなぜか疲れた。

「そうですね。ハルさんにそんな趣味はないですよね」

「そうだよ。お兄ちゃんにそんな趣味ないよ」

「だからそんな趣味ってなんだよ」

あとでフランにはお話ししないといけないな。行く先行き先こんなことされたらたまらん！

私は誰かが聞いていると危ないと思いはなしをかえた。

「そういえば美鈴はこんなところで寝ていてもいいのか」

「えっ」

なんか非常にまずいことに気づかれた顔をしている。やっぱり恥ずかしかつたのかな。こんなところで寝ていたのが。

「やっぱりですか。大丈夫ですよこんなところで寝ても別に恥ずかしくもなんともないですよ」

「（よかった。別のところに勘違いをしているみたい）はい。そうですね」

「むっお兄ちゃんそろそろ戻らないと日が出てきたよ」

おっと、確かに出てきているな。じゃあそろそろもどりますか。

「じゃあ、またな美鈴」

「えっあっはい！また」

「じゃあ早く行こう」

そうして私とフランはまた戻っていく。戻るとき美鈴を見たら悔しがっている顔をしていた。なにに対してかが私には分からないのでとりあえず見ないことにした。

中に入るとまず私はフランの説教を始めた。フランはこれを予想していたらしく逃げようとしたが私の能力ですぐに捕まえた。フランには私の能力のことは言っていないので逃げ切れないことを知らない。そして、人の付き合い方から始まる講習がはじまった。

講習がおわるとフランはとても笑っている。人に接する第一歩がうれしいのかな。まあ素直に聞いてくれる事はうれしいが、な……。なるほど。適度の冗談は好感がもてるのか。だったらまたやっちやお)

なんかフランが大変なことを考えていた気がするがそこは世話係として進歩したことに期待して信じてしよう。だがまたやることなくなった。今度はやっぱりフランに行きたい場所を決めさせるのがいいか。

「なあフラン。次はどこに行きたい？」

「え〜と・・・ハルにまかせる！」

「やっぱりか。じゃあ図書館に行くか」

そうしてまた歩き出した。

図書館に着くと小悪魔さんにあつた。パチュリーの使用魔だから当たり前なんだがそのパチュリーが見当たらない。

「こんにちはハルさん。フラン様に勝つたのですか？」

「実力で勝ったわけじゃないさ。自分の能力が効かなくて戸惑っているところに弾幕を死ぬぐらい打ち込んで戦闘不能にしたんだ。そして後は話し合いで説得したんだ」

「へ〜」

「今日から少しずつ絶望していた毎日を変えてやるからなフラン」



「うん！」

「ハルさん。あなたはすごい人です」

そうかな。そこまでたいしたことじゃないと思うが。

「そんなことないよお兄ちゃん」

「えっ、お兄ちゃん？」

「これは『私とハルの仲だから』 そうなんだよ。……て、まて！ またかフラン！」

「え！ ハルさんそういう趣味だったんですか！」

「違うよ！」

フラン。さっき言ったことちゃんと聞いてなかったのか。それとも何かの嫌がらせか。

「フランさっき言ったよな」

「うん！ 軽い冗談はあいてに好感が持てるって」

なるほど。確かに言ったがこれは軽い冗談じゃないと思う。それにいつもこんな事されたら私の身が持たん。

「フラン。これは軽い冗談とは言わないぞ」

「えっ そうなの？ ごめんなさい」

「いいよ。次から気をつけてくれ」

「は〜い」

「あの〜」

「なんですか」

「今の話からするとさっきのは冗談なんですか？」

「そうだ。趣味の意味が分からないが冗談だ」

「そうですか。よかったですパチユリー様が……」

「パチユリーがどうかしたのか」

「いえ！ なんでもありません！」

なんで逃げるんだよ。パチュリーがどこにいるか聞けないじゃないか。能力で探そうとするとたぶん時間かかるし・・・どうよっかな。

「ハルー！パチュリーいたよー！」

見つけるの早いな。どうやって探しているのか聞きたいもんだ。あれ・・・またかパチュリー・・・本の中に埋まるのが大好きなのか？これなら確かにすぐ見つかるな。

「フランえらいぞ」

「えへへへへ」

私は本をどかしてパチュリーを救出した。毎回のように本に埋もれるってどのくらい積んでいるんだよ。

「けほつけほつ・・・助かったわ」

「どういたしまして。というかパチュリー毎回のよう本に埋もれているよな」

私がないときはどうするんだよ。・・・あつ、そこで小悪魔さんか。大変だな小悪魔さんも。

「大丈夫よ。それくらいじゃ死なないわ」

「たしかにな」

「それより・・・フランを連れてくるってことは・・・」

「ああ、ちゃんと説得できた」

「よかつたじゃない。死ななくて」

「ふっん。心配してくれていたんだ」

「！ちつ、ちがうわよー！」

そういつても顔が真っ赤だぜ。以外に顔に出るタイプなんだなパチユリーは。

「お兄ちゃん、私もませて」

「・・・お兄ちゃん？」

パチユリーおまえもそこに反応するのか。フラン顔がニヤ付いているぞ・・・まさか！

「それはね〜ハルと私が『フランやめろ！』愛し合っている仲だからだよ」

「・・・」

ああ、やばい！フランのやつ私の話聞いていなかったな！また変な誤解を生んじゃうじゃないか！

「ねえ・・・ハル。それ本当？」

くそーフラン絶対許さんぞ！しかもパチユリー・・・目が怖い。

「そんなわけないでしょ。ただお兄ちゃんって呼ばせているだけだよ」

「・・・そうなの。」

はあ・・・危なかった。美鈴みたいに暴走されたら大変だからな。

「・・・さて、フラン、覚悟はできているか？」

フツ、逃げ出したって無駄だ。

「ひどい！二人で愛し合った仲なのに！」

ふん、そんなこと言ってもだめだぞ。

「・・・」

なんでパチユリーが怒るんだ？そしてなんで魔法を唱えようとするんだ・・・まさか・・・

「パチユリーその魔法を唱えるのをやめてくれないかな」

できたら私にそれを向けるのも・・・やばい！パチユリーはマジだ

！こんなのくらったら・・・

「ハルの馬鹿　　！！」

「フランの馬鹿　　！！」

フランおぼえてるよー！

私はパチユリーの意味が分からない怒りによって吹っ飛ばされて意識を失った。

フ ラ ン s i d e

あつ、お兄ちゃんが吹っ飛んだ。

「お兄ちゃん大丈夫？」

「・・・」

気絶しちゃったのか。大変だなお兄ちゃんも。

「パチユリ」

「なによ」

「お兄ちゃんどうするの？」

お兄ちゃんが気絶したのは私が言ったあれが悪いのは分かっているからたすけてあげないとね。

「どうもしないわ」

「でも私が言ったの全部嘘だよ」

「えっ・・・」

怒りで判断が付かなくなっていたのかな。でももうやった後だしね。

「だから、私とお兄ちゃんが愛し合っているのは嘘でただ私がそう呼んでいただけ」

「じゃあなんでそんな嘘ついたのよ」

「面白かったから」

小悪魔の場合は別の意味で誤解したけど美鈴とパチユリーは行動に出ているもんね。ハルが好きっていう気持ちがある。

「じゃああなた」

「そんなのバレバレだよ。でもお兄ちゃんは気づいてないけど」

「……」

まあ、さすがに可愛いそうだからひとついい事してあげるか。美鈴にもしたんだし。

「お兄ちゃんずっとあのままじゃ可愛いそうだからひざ枕してあげれば」

「……そんなことできるわけないでしょ」

「でも美鈴はひとついいことあったよ」

「どんないいことかしら」

「ハルにひとつだけ願いを聞いてもらう」

うわ、パチュリー固まっているよ。……私はそろそろ逃げるとしますか起きたら何されるか分からないし。

「じゃあお兄ちゃんによるしく！」

「あつ、ちよつと！」

こんどはここで鬼ごっこの開始だ。

ハルside

うん？なんだどうなっているんだ？私は確かパチュリーの魔法に直撃して……そこで意識を失ったのか。でも今はどこだ？なんかしたがやわらかいし……起きよう。

起きてみると驚いた。柔らかかったのはパチュリーの膝枕だったのだ。

どういうことだ？誤解されてなぜか攻撃されたってことはまだ誤解していたってことだよな。主にフランのせいだ。しかもフランは逃げているし……なるほど、最高の暇つぶしってことかフラン。いだらう！つかまえたら態度に表すまで講習だ。おっと、考えがそれだな。パチュリーを起こして聞いてみるか。

「パチユリー」

「ん」

なにげに声が色っぽい。そしてなぜ私をみて顔を赤くする・・・やっぱりまだ誤解しているのか？

「パチユリー。まだ誤解している？」

「ごっ、誤解なんてしていないわ！」

「だが顔真っ赤だぞ」

「！」

気づいていなかったのか。

「私になにか変なこと言っていないかった？」

「大丈夫だ。私も今起きた」

「そう。なら良かった。（夢があんなこととしていたなんて・・・ぜつたいに言えないわ）」

「さっきはフランがへんなことを言っでごめん。私が一部間違ったことを教えてしまったからだ」

「どんなことを教えたのよ」

「軽い冗談は好感が持てる」

「（たしかに同感だわ）それは間違いじゃないわよ」

「そうなのか。だがフランにはもうちょっと詳しく教える必要があるな」

「そうね。（つぎは姉が襲いに来るかもしれないしね）」

「じゃあ私はフランを探しに行ってくる」

「ええ、がんばりなさい」

「・・・どうした。やけに素直だな。」

「どうしたんだ。やけに素直だが」

「誤解で攻撃したのを反省しているからよ！」

「ふ〜ん。パチユリーはそういう素直なところがいいな」

「それってどういうこと」

「そのままさ。そのほうが可愛いって事」

まあ、ここにいる人ほとんどそうだがな。外ではこんなこと言わなかったのにだんだんこの色にそめられているな私。  
私は能力を発動してフランとの鬼ごっこを開始した。できるだけ早くフランを捕まえないといけない。じゃないとどこで言いふらしているか分からないからな。

## 第十話（後書き）

書きながらもこの展開におもわず笑ってしまっ作者です。そして、この小説が書けることがとてもうれしいです。



## 第十一話（前書き）

なかなか時間がなくて書けなくて・・・ホントすいません。（主にテスト勉強）

また書く速度も遅いのでなかなか進みません。（言い訳）  
早く書ける人とかがうらやましいです。（主に妬み）

こんな作者ですがよろしくお願いします。

## 第十一話

「フラン。お話しする時間だぞ」

「いやだー」

フランはすぐに捕まった。私がフランを捕まえる作戦を練ろうとして部屋に戻ったら私のベッドにフランがいたのだ。おかげですぐ捕まえられて早くもお話タイムだ。

「フランは何であんなこと言ったんだ？」

「楽しいからだよ。お兄ちゃん」

性格の曲がりがここにも出ているのか？

「そんなことするとほかに人にもかまって貰えなくなるぞ」

「大丈夫。こんなことするの、お兄ちゃんだけだから」

わかった。こいつはただのSだ。

「はあ。お兄ちゃんだけならいいがそれも程々にな」

「うん！」

ほかの人には迷惑がかからないならいいか。これも世話係の使命だ。

私たちはこの後の時間を全部フランとの模擬戦ですごした。途中咲夜さんが来たりフランが変な事言ったりしたがそれ以外はいつもと変わらなかった。死に掛けはしたが・・・

「は、つかれた」

力の加減を分からせるために模擬戦はちょうどいいが毎日やっていたらいつか死ぬな。ただでさえフランの弾幕一つ一つが即死並みだというのに疲れて動きが鈍くなるなんてことになったら・・・想像するのをやめよう。

「フラン。どうだ？少しは力の加減できるようになったか？」

「うん。わかんない」

そうだよな。初日でコントロールなんてできるはずないよな。私の場合は力があまりないからすぐコントロールできたが。

「お疲れさま」

咲夜が飲み物を持ってきてくれた。どうやったらこんなタイミングよく持ってこれるんだ？ ・ ・ ・ たぶん長年の勘だろうな。

「ありがとう」

「フツ、どういたしまして」

「ありがとう咲夜」

「はい。フラン様もがんばってください」

「うん！」

いいな。この光景。フランもあの性格さえなければただの可愛い少女だな。あの性格さえなければ ・ ・ ・ な。

「ねえお兄ちゃん。これからどうするの」

「うん」

そうだな。もう今日考えていたことすべてやったしな。

「他にやることないから自由ってことで」

「はい」

「ハル。あなたはお嬢様のところについてきなさい」

「あ、もう起きているのか？」

「ええ」

「わかった。すぐ行くこつ」

「お兄ちゃん後でね」

「ああ、後でな」

私は移動するために能力を発動しようとしたができなかった。

・ ・ ・ たぶん、力の使いすぎだな。しかたない、歩いていくか。

私は歩いていこうとしたら咲夜が能力を使ってくれた。

「ありがとう。咲夜」

「別にあなたのためと思ってやったわけじゃないわ。お嬢様のため

よ

レミリアはこんな忠実なメイドを持ってよかったな。さて私も行くとするか。

「入ります。お嬢様」

「どうぞ」

まだ夜じゃないというのにピンピンとしている。レミリアたちは本当に吸血鬼なのか？

「あら、よく生きていたわね、ハル」

「あたりまえだ。ここで死んでたまるかよ」

「そうね。あなたには帰る場所があるものね」

私の帰る場所か……。

「……そうだな」

「これからもよろしくお願いするわ」

「わかった」

私は自分の部屋に戻ることにした。

私はどうすればいいのだろう。

部屋についてから自分のこの後について考えていた。

私はこの世界の住民じゃない。だから早くこの世界から出ないといけない。それは分かっている。だが外でどうやって生きていけばいいんだ？ここに来る前だってちよつとした事件起こして犯罪者扱いだろうし。それに誰も私のことは覚えていていなかったし。……はあ、なんだかんだいって外の悪口しか行っていないな、私。まるでここに本当は残りたいみたいだ。でも……どつちなんだろう。

「お兄ちゃん」

「ん。フランどうしたんだ」

深く考えに耽<sup>ひ</sup>つてしまつて気づかなかつたみたいだな。

「お兄ちゃんと一緒に眠ろうとして、行くとたらお兄ちゃん、何か悩んでいるみたいな顔していたから」  
なるほど。心配してくれていたんだな。

「大丈夫だよ。心配してくれてありがとう、フラン」

一日で急成長したなフランは。

「えへへへへ。じゃあさっそくお兄ちゃん一緒に寝よう」

「まて。なぜさっそくになるんだ」

「私が進歩したご褒美」

「・・・しょうがないな」

なかなか鋭いな・・・フラン。

私が寝るのにもちようどいい時間だったので一緒に寝る事にした。  
ちなみに私の部屋で。

「おやすみ、フラン」

「おやすみなさい」

そうして、私は眠りのなかに入つていった。

・・・眠りについたはずだったがなぜか意識がはっきりとしていた。

このごろは全然こんな夢見ていなかったのに。どういうことだ？  
いままでもからすると何かが起きる前触れか？しかも回りは一番最初に  
見た夢と同じ真つ暗闇。どういうことだ？・・・悩んでもしかたな  
いか。じゃあ前みたいはどこかに行きたいって唱えてみるか。

「やっとあえた」

「！・だれだ！」

唱えようとしたら急に目の前に目と手がたくさんついている気持ち悪い空間からこの空間に最初にいた金髪の少女がでてきた。

「ずいぶんと探したわ」

「おまえはだれだ」

「わたしは八雲紫。ひさしぶりねハル」

なぜ私の名前を知っている？

「なぜ私の名前を知っている」

「あなたをずっと見ていたからよ」

「どういう意味だ」

「そのままの意味。見ていたのは外の世界でだけどね」

「外の世界ってあなた、この幻想卿からは出られないんだぞ」

「あら、そうかしら。幽香に聞かなかった？」

なに？・・・じゃあ、まさか・・・

「出られる方法っていうのは本当にあるのか」

「ええ。そして出られる方法が私の能力」

「？どういうことだ」

「私の能力は境界を操る程度の能力。このあなたの夢に入ってきたのも夢と現実の境界を操ったからよ」

「・・・なるほど」

だから私の夢に入ってこれたのか・・・って問題はそこじゃない。

「なんで入ってきた」

「フツツ、聞きたい？」

「ああ・・・聞きたい」

「それがあなたの今につながる話だとしても？」

どういうことだ？・・・とりあえず聞くか。

「そうだ」

「わかったわ。まず最初あなたの夢に私が入ってきた頃を覚えてい

る？」

「ああ」

「あのとき、私はたまたまあなたの夢の中に入ってしまったの。そこであなたをここに連れ込もうとしたわ」

「なんでだ」

「つまらないから、おしゃべりでもしようと思ったのよ」

「・・・」

「でもそれが間違いだったわ。そこであなたは能力を手に入れてしまったもの」

「？・時間を操るこの能力か？」

「違うわ。あなたの本当の能力は能力を操る程度の能力よ」

「はあ？そんな能力使ったことないぞ」

「いえ。あなたは無意識でつかっているのよ。その能力をね。実際そうでしょ、あのメイドと同じ能力が出るなんておかしとおもわない？そして魔法の才能。あなたは外の人間なのに魔法の才があるなんておかしと思わなかったの？」

「・・・」

「ありえない。無意識にだと？」

「じゃあ、私の能力の効果は？」

「それは本人しか知らないわ。あなたがその能力を意識しないとね。もつとも私の知る限りでは・・・」

「どんな能力なんだ」

「簡単に言うと別の人の能力を取ったりできるんだと思うわ」

「・・・なんでだ」

「私、あの夢で能力を取られたんですもの」

「・・・そうなのか」

「私は体から何かが奪われるのを感じて力をつかったわ。そしたらつかえなかった。最初は驚いてあなたに詰め寄ろうとしたわ。でもあなたはどんどん離れていって最後にはいなくなつた。私をおいて」

「閉じ込められたのか」

「ええ。最初はずっとこのまま死ぬまでいるのかと思ったわ。でも少しすると何故か能力がまた使えるようになったわ。私は急いで脱出し、この世界にくるまで寝ていたって訳」

「だったら最初から私のところに直に来いよ」

「あなた、次あつたら殺されるかもしれないあいてに自分から行く？」

「・・・たしかに」

そうか。私に能力を奪われたんだから当たり前か。でも戻ってきたんだから普通はコピーっていうだろ。・・・いや、妖怪ならやっぱ私なんて瞬殺じゃね？まあ、いいや。

「私はあなたがいた世界に行ったわ。なぜここに来たのかわかるためにね。そしたらみんな・・・というより世界からあなたの存在が消えていたからおどろいたわ」

「まさかあんた・・・」

「私じゃないわ。あなたよ」

「は？」

「あなたは無意識のうちに自分で自分の存在を消したのよ」

そんな・・・すべて自分がやったというのか。あんなに絶望した出来事を作ったのは自分だって言うのか。

「私はそれを元に戻そうと境界をいじったわ。でも無駄だった。境界が乱れすぎて分からなくなっていたんですもの」

「・・・なあ」

「なにかしら？」

「私はこれからどうすればいいんだ。私はこの人でもないし、外の世界の人でもない。私はどうすればいいんだ」

「そんなの知らないわ」

「え」

「わたしは神ではないわ。まあ幻想卿あちこち探せば神はいるでしょうけど」

・・・わかっているさ、そんなこと。



「でも関係ないんじゃない。あなたがどこにいるかなんて」

「どういう意味だ」

「あなたがこの人じゃないというのならこの人になればいい。あなたが外の人じゃなければ外の人になればいいわ」

「なん・・・だと」

「答えを急ぐ必要はないわ。でも決まったら私をよんでちょうだい。すぐに出てきて聞いてあげてからあなたの答えを。ここで生きるか、外で新しく生きるか」

そう紫が言ったとたん世界が真っ白になった。思わず目をつぶってしばらくしてあけると私の部屋だった。となりにはフランが寝ている。

・・・はつきりいつてどうしたらいいかわからない。あときは悲しかった。みんなが私のことを忘れていて。でも今はここでみんなとであつてすごい良かったと思っている。この記憶を消した能力にもだ。だが私はこの人じゃないし邪魔だと思われるかもしれない。ここをでるか、ここで暮らすかなんて・・・どうすればいいんだ私は。・・・とりあえずここいつものところに行ってみるか。

私が門のところに行くと美鈴がおきていた。いつもはだいたい寝ているけど。

「おはよう美鈴」

「おはようございます」

「どうするか・・・」

「美鈴」

「なんですか」

「私そろそろも戻れるみたいなんだ」

「そうですね・・・」

「でも戻るか戻らないか迷っているんだ」

「え……なんでですか」

「私の本当の能力は能力を操る程度の能力でその能力を使って自分の……自分の存在を世界から消させたんだ」

「……そうなんですか」

「でも私はこの世界の人じゃない。そして外の世界の人でもなくなつた。私はどうすればいい」

「どうしていままで教えてくれなかつたんですか!」

「……美鈴の怒っている顔、初めて見た。」

「私も昨日、夢で知つたんだ」

「どういうことですか?」

「夢の中に八雲紫がでてきて、私の本当の能力と記憶についての真実を語ってくれたんだ」

「紫さんがですか」

「あれ……なんで知っているの?」

「何で知っているの?」

「紫さんはこの幻想郷を管理している偉い人です」

「えっ……そうなの?そこまで偉いの!」

「でもなんで紫さんが知っているんですか?」

「外の世界にいたとき私の夢の中に入ってきて、そのときに私の能力が発動して紫さんの能力をコピーしたからだ」

「コピー?それがあなたの本当の能力の効果だつたんですか?」

「うん。実際にやって見せようか」

「はい」

「じゃあ美鈴。能力をつかって私に襲い掛かってこい」

「わかりました」

そう言うなりトンでもないオーラが美鈴さんに漂つたが、すぐに消えた。

「あれ?」

「これが能力をコピーすることだ」

「でもなんだか力が」

「今、美鈴の能力は私に移ってコピー中だ。すぐに美鈴に戻る」  
「なるほど」

だからフランにも勝てた。だがコピーした能力の使い方はわかるものの、コントロールは訓練しないとつかない。咲夜ときはただ使っただけだからできたんだ。そういえば、咲夜は盗られるときどうだったんだろう。あのときはいろいろと大変だったから気づいていなかっただけか？・・・あとで自分の能力について調べる必要があると思う。

「じゃあその能力で紫さんのコピーしちゃったんですか」

「そうみたいだな」

「そしてその能力をつかって自分とみんなの境界をいじって世界から消えたわけですか」

「ああ」

「・・・別にいいんじゃないですか」

「・・・どういうことだ」

「外の世界に戻らなくてもいいんじゃないですかってことです」

「どうしてだ」

「私はハルさんにあえてともうれしかったからです」

「でもみんな私のことどんな風に思っているか分からないし・・・  
もしかしたら邪魔なんてことも・・・」

「ぜったいにみなさんいて欲しいと思っています！今からみなさんに聞きに行きましょう！」

私は美鈴に手をつかまれ紅魔館の中につれていかれた。

美鈴はみんなを呼び出して食堂に集めさせた。みんなの視線が痛い。特に何故かパチュリーの視線。・・・やっぱり邪魔がられているのかな。

「みなさんに聞いて欲しいことがあります」

「なによ・・・」

眠りを邪魔されてイライラしているな、レミリア。

「ハルさんがここに来た理由です」

「・・・わかったわ。聞こうじゃない」

私は自分の能力と外の世界で起きた出来事について話した。能力のほうはみんな半信半疑だったためレミリアの能力を使ってもらってコピーしようとしたがなぜか使えなかった。前にレミリアは能力を使おうとした、ということなのでそのときにその能力もすでにコピーしたんだろう。だから私は紫の能力を使って紫を引きずり出した。少しイラついた顔だったが気にしない。決めるときは呼べといっていたのは紫だし。そして、これでみんな納得して今度は美鈴が本題を訊いた。

「ハルさんはここにいていいのか迷っています。みんなの邪魔になっ  
っているんじゃないかと」

特にパチュリーに対して思っている。

「そんなの決まってるわ」

「・・・私はこれで嫌われていたらどうしよう。」

「邪魔じゃないわよ」

「そうです邪魔じゃないです」

「お兄ちゃんはお兄ちゃんだよ！」

「そっそうよ・・・大切な人よ」

「・・・そうなのか、みんな。」

「ここにいたかったらずっといさせてあげるわ。そのほうがみんな  
うれしいだろうしね」

「・・・ありがとう。みんな」

一人でマイナス思考に走っていた私が馬鹿みたいだ。最初は悲しか  
ったけど・・・今は違う。今は前あった日常みたいに楽しい現実が  
ある。私はこの今を捨てたくないと思った。それと勝手にマイナス  
思考に走るのもやめよう。

「紫」

「なにかしら」

「私は・・・ここに残りたい」

「いいわよ」

「は？なに、それだけ？」

「べつに何かとろうつて訳じゃないわ。ただ管理人として・・・ね」  
「なんとも含みのある言い方だな。」

「はあ」

「じゃあ私は戻るわ」

「・・・戻っていった。なんだったんだ紫は。」

「ハル。気をつけたほうがいいわよ。あいつはなにを狙っているか  
分からないから」

「忠告ありがとうレミリア」

「フツ、さて美鈴、覚悟はいいかしら」

「え？なにがですか？」

「主人の眠りを妨げたことによる罰に対してよ！」

「え〜！！そんな、ひどいです！」

「レミリア！思いつきりやっちゃいなさい！」

あゝ美鈴が咲夜に連れて行かれた。美鈴ありがとう。この恩はいつ  
か返すから十分に逝ってくれ。そしてなぜパチュリーが今度は手を  
握るんだ。

「あの〜パチュリー」

「なによ。美鈴だけにいい思いさせてたまるものですか」

えー何がいいことなのかわからない。まあ別にいいか。

「ありがとうな。パチュリー」

私は邪魔だと思われると思ったが実は大切に思っていてくれた  
ことに感謝して私はとびっきりの笑顔をみせたつもりだが

「！」

おい！パチュリーどうしたんだ！喘息か？・・・疲れて眠っている  
だけかな。

「あのハルさん」

「どうしました。小悪魔さん」

「（鈍感すぎるこの人）いえ、私がパチュリー様をお連れします。これでもパチュリー様の使いまですから」

「いえ大丈夫です。私が図書館に運びます」

「（そんなことしたら起きたときに・・・）気にしないで下さい。私がやります」

「いえ私が」

「（はっ！もしかして本当の気持ちに気づいているとか）・・・わかりました。お願いします」

「はい」

よし図書館に行くか。

「うう、フランは寝る」

「ああ。おやすみフラン」

フランは酔っぱらった人みたいに歩きあちこちに頭をぶつけながらまた眠りに行った。あれで大丈夫なのかと思つたが人じゃないので大丈夫なんだろう。私たちも行くとするか。

私はパチュリーをお姫様抱っこして図書館へ向かった。途中、美鈴の悲鳴が聞こえてとても心が痛んだ。私は心の中でつぶやいた。

（ありがとう、美鈴）

そう思わずにはいられなかった。なぜなら美鈴があの行動に出なかつたら私はどうなっていたかわからないからだ。あとでちゃんとお礼とかないとな。

そうして図書館についたは良かったがパチュリーが目を覚ますと何故か攻撃されて顔を真っ赤にして怒られるとは思ひもしなかった。

「なんでハルがここにいるのよ！」

あのととき笑顔を向けられて思わず気絶してしまった私を今、悔やんでいるわ。おかげでまたいつもの怒鳴りからでてしまったじゃない。「それはパチュリーをお姫様抱っこしてここまで連れてきたからだ」「なっ、なんですってー！」

とてもうれしはずなのに次の言葉はそれを裏切るような言葉だった。

「お姫様抱っこは自分が好きな人にやってもらうものよ！それをあんたなんかになにに口走っているんだろう、私。」

「悪かった。そんなことを知らずにやってしまっ（意外にメルヘンチックだな）」

しかも真面目に謝られてしまった。途中なかへんなこと考えている気もしたが。

「もういいわ」

「ありがとう。ところでパチュリー」

「なによ」

「ありがとうな。大切に思っていてくれて」

ああ・ダメ！そんな笑顔こっちに向けないで！じゃないとまたへんなこと言っちゃうかもしれないのに！

「そんなことあたりまえよ」

「・・・そうだな」

そう言ってハルは図書館からでていった。

たまに思う、私は何をやっているんだろうと。これじゃ嫌われていっぽうだわ。いくら美鈴より一緒にいる時間が長いといってもこれじゃだめじゃない。・・・はあ、どうしたらいいのかしら。

「さてどうしよっかな」

私は今、スキマの中に居る。私は能力を使いこなそうと思ってすきまのコントロール訓練ついでにスキマで移動することにした。だが美鈴に会いに行きたいがどこに居るのがわからない。レミリヤたちはたぶん自分の部屋に連れて行ったのだろうと予想をつけてスキマを開く。だがまだ使い始めなのであまりうまく指定ができないとおもつ。落ちたときに誰かの上に居ないことを祈ろう。

「キヤ！」

「お嬢様！」

やってしまったよ。しかもレミリヤの上に。

「ごめん！」

急いでどいて、とりあえず謝る。じゃないと命が危ない。

「大丈夫よ。それよりなにかしら。ここに飛び込んでくるなんて」

「ああ、美鈴を探しているんだけど、どこに行ったか知らないか」

「ああそれならいつもの場所に戻ったわよ」

「そうか、ありがとう」

私は何かを言われないうちにスキマを開いてまた中に入った。そしてすぐに門の場所にすきまを開く。だがまたちゃんと場所を決められずまた落ちることになった。

「あ」

「え」

・・・この状況、非常にまずい。私は今度は美鈴の上に落ちてしま



い、今は美鈴に馬乗りの状態である。こんなのが外で見つかったらまず間違いない警察に通報だろう。

「え」と

美鈴。なにを迷っている。

「ごめん！」

この言葉何回目だ。

「（もう少しこのままでもいいのに）別にいいですよ、気にしないでください」

「ありがとう」

退いたといえど普通はいけないことだ。

「ところでこんなときにどうしたんですか」

「そうだった。美鈴に言いたいことがあったんだ」

「（こっ……告白！）なんですか」

「ありがとう」

「（……はあ）」

美鈴。なんで悲しい顔するんだよ。

「どうして悲しい顔するんだ」

「大丈夫ですよ。何でもありません」

「だったら別にいいけどな。……美鈴、私はもし美鈴がいなかったら今ここに居なかつたんじゃないかと思う。本当にありがとう」

「いえ。気にしないでください。私は……好きな人のためにやったことですから」

「ん？なにかいった？」

「いえ！なんにも！」

そうか？まあいいや。

「じゃあまたあとで」

「はい」

・・・ハルさん、いつてしまいました。私、肝心なところでちゃんといえなかつたです。早くしないとパチュリーさんに先を越されそうなのにこんなことではダメですね。願いことを一つ聞いてもらう約束で無理をすれば恋人になってくれそうですが私はハルさんに心の底から好きになってほしいです。

「はあ・・・どうすればいいでしょうか」

なかなかいいアイデアが浮かびません。・・・そうだ！願い事でデートに誘うのはいいかも！そして、そのまま・・・そうなれば早速行動です！まずは主人に聞かないと。

「えっ、ハルとお出かけしたいですって？」

「はい」

「うん」

やっぱりだめでしょうか。

「パチュリーもあなたもほんとうに一途ね  
やっぱりばれていましたか。」

「でも、今はダメね。ハルは自分の能力としっかり向き合って、しつかりと使いこなせるようにならないといけないし」

「そうですか・・・」

「大丈夫。時がこれば許可するから」

「あっ、ありがとございます！」

やりました私。これで一步前進です。

私は浮かれながら主人の部屋をでていった。

レミリヤside

「いいんですか、お嬢様」

「ええ、心配ないわ」

私が今すぐをやめさせたのには理由があった。一つは本当に能力のコントロールの事。もう一つは幻想卿の知識をつけさせる為よ。いくら能力コピーやそのときに奪った妖力があるとしてもいろんなところにつつこんでいったら危ないもの。

「今はいろいろとハルも忙しいし、なにより私がすぐにデートに行かせると思う?」

「どついう意味ですか」

「見ているこつちも楽しめないと嫌じゃない」

そう。このごろ毎日何一つ面白いことがないじゃない。

「お嬢様。覗き見するつもりですか」

「ええ、そうよ。従者を見守るのが主人の務めですもの」

・・なかなかない事言つたわ私。

「そうですか。なら今すぐ行かせなかつたのも楽しむ計画を考えるためですか」

あら、さすが私の咲夜。わかっているじゃない。

「そういうことよ」

さて、いつが良いかしら。

ハルside

私はスキマの中で寒気がするのを感じた。何か悪い予感がすると思つたがいつものマイナス思考のためだと思ひ気にしないことにした。「なにをするかな」

そういつても何も思い浮かばないのが現状だ。図書館にいつているいるするのもいいがさつき出てきたばかりなので行く気がしない。・・・そうだな、能力の訓練でもするか。なんとなくフランと同じで能力を扱えていないのが悔しかったのだ。これでは世話係がつとまらない！

「でも何処でやろうかな。能力はどんなのコピーしているか分からないし使い方だってまだ曖昧だし・・・でも紅魔館をでるって行っても私じゃまだ危なさそうだし・・・このスキマならいいかも」

「あら、それならいいところがこのスキマ以外にもあるわよ」

いきなり出てくるな紫。しかも話まで聞いていたのかよ。でも、その良いところって何処だ。かなり気になる。

「そうなのか。だったらそこに案内してくれ」

「いいわよ」

私はいつもの紫と違う気がしたがこれまたさつきと同じ理由で気にしないことにした。

(なにごとポジティブに)

私は紫についていきながらスキマをでた。

## 第十一話（後書き）

今思えば主人公の設定とかをまだ書いていなかったたのでそのうち書きたいと思います。

## 第十二話（前書き）

うゝなぜか投稿する時に内容確認をするとこれでいいのかって思っ  
てしまってなかなか投稿出来ない作者です。

## 第十二話

スキマからでてみるとそこには最初私がここに来たときにいた向日葵が咲き乱れている場所だった。ここにはたくさんの思い出がある。私が幽香にであった思い出とか、幽香に死ぬかとおもった事をされたとか。そういうえば幽香の能力はどうなったんだろう。たしか花を操る程度の能力だったはずだが、コピーしたのかな。つかっている様には見えなかったが。だがそんなことよりお礼だな。幽香がいなかったら今頃どうなっているか分からないからな。

そんなことを考えているとき、私はここに来た理由を思い出した。「なあ紫。ここで練習するにしてはちょうどいい場所なんてどこにもないぜ」

「たしかにね。じゃあ言い換えるわ。練習するにはちょうどいい人がいるわよ」

「はどこにも人なんて

「あらハル、ひさしぶりね」

・・・いた。

「ひさしぶりです。幽香さん」

なにやっっているんだよ紫！もしかして幽香さんと戦えってか。

「紫・・・まさか」

「ええ、幽香がちょうどいい人よ」

私ははつきりいってやりたくない。命の恩人であるう方と戦うなんて絶対に嫌だ。

「さつきからなにを話しているのかしら」

「ハルがあなたに勝負を挑みたいから連れていって・・・と言って連れてきた私に感謝の言葉を贈ろうとしていたところよ」

「だれがそんなこと！」

この人、完全に面白がっているな。でも前、幽香さんは弱いものいじめといえどまったく力のない人には挑まないと言っていた。私は

力はあるがそのことには幽香さんはまだ気づいていないはず。だったらこのまま内容を誤魔化して・・・

「幽香さん。今のは紫が言った嘘です。私はあなたにお礼がたくて紫に連れて行ってとたのんだんです」

「あらそう。じゃあ一つ頼みごとを聞いてくれる？」

「いいですよ」

紫はまだニヤニヤしているがどうせってもう戦いは起こらない。残念だったな、楽しめるものが見れなくて。

私は心の中で文句を言っていたが幽香さんの言葉はその文句を無駄にする言葉だった。

「私と戦いなさい」

「え」

はいはい、ちよつと待とうか。どういう意味ですか紫さん。まさか全部予定どおりですか？

幽香もなぜ戦い？他にないのか。

「私があの時、簡単に逃がしたのはあなたに力があると感じたからよ。このごろいじめられなかったから暇していたのよ。でも力なき者をいじめてもたのしくないし、でもそんな時にあなたがきたってわけ」

「でもここではちゃんと戦い方にルールがあるだろ」

おもわず素が出てしまった。だがもう気にしない、このままじゃリアルな殺し合いになってしまう。

「そうね。確かにそうだね。でも・・・紫」

「なにかしら」

おいおい、なにを言うつもりだ。

「確かにここには戦い方にルールは有るけど外来人にそのルールは当てはまるのかしら？」

「そうね。私がルールをつけたのはこの幻想卿の人に対してだから外来人にそんなルールないわ」



え……マジ？

私は紫に文句を言おうとしたがスキマに逃げたのでできなかった。

「さあ始めましょうか」

そうして戦いが始まってしまった。

幽香 side

「さあ、わたしを楽しませてちょうだい」

最初は軽く弾幕を放った。だがあたれば即死レベルの弾幕を。その弾幕はハルの場所に当たって大きな爆発音をだした。これぐらいでハルは死にはしないでしようけど。

そして、予想どおりでそこにハルは立っていた。でもなにかおかしく感じた。ハルは弾幕を放って相殺した動作も見せなかったのに弾幕で確かに相殺した。あれはハルの能力なのかしら？

「ハル。今は……あなたの能力なのかしら」

「さあな。教えたらこの戦いやめてくれるか」

「そんなわけないじゃない」

あなたに教えてもらわなくても私が見破ってあげるわ。そしてそのときがあなたの最後よ！

そうして私はまたハルにたくさんの弾幕を放った。

ハル side

……さっきのは危なかった。いきなり弾幕が出たと思えばフラン

のとは比較にならない速さで飛んできた。思わず能力をつかって時間を止めてしまった。

「うそだろ。こんなに速いなんて」

今、幽香が放った弾幕は目の前でとまっている。能力はないことにした方がいいし分からせないほうがいい。ばれた時が私の最後かもしれないからだ。だから能力を使ったのはまずい。どうしようかな。

私はこの場から動かずに目の前に弾幕を置いて能力を解くことにした。いきなり別の場所にいたりしたら能力があるのがバレルからだ。そして能力を解除すると目の前で派手な爆発が起きた。・・・耳が痛い。

「ハル。今のはあなたの能力かしら」

いきなり感づかれていた。でもここはしらを切る。

「さあな。教えたらこの戦いやめてくれるか」

「そんなわけないじゃない」

幽香はサディスティックな笑みを浮かべて大量の弾幕をまた正面から出してきた。二度目とあってすぐに弾幕で相殺しようとしたがその後がありえなかった。幽香がその相殺で起きた爆発の中を抜けて私のところに飛んできて回し蹴りを出してきたのだ！

「グッ！」

声を出すことも許さない強烈な痛みを負いながら私は吹っ飛んだ。

死ぬかと思っただが奇跡的に意識があつたのでまた時間を操る程度の能力を使い持ち直した。

「ありえね〜。弾幕でも十分なのにさらに肉弾戦も強いって勝ち目がないだろ。・・・なるほどだからルールが必要なのか」

私は蹴られた腹のほうを見る。人間の体はそこまで頑丈じゃなくあちこちから血が出ている。今は蹴られた痛みで神経が麻痺しているのかその痛みはない。だがこれは早く治さないと絶対に危ないと思う。だが早く治しに行けそうにない。なにせ相手は弱いものいじめ大好き幽香なんだから。もう！ここで生き延びられたら絶対にこん

なところこないからな！

ふざけたことを考えていた私だがそんなことしている場合じゃないことに気づき、戦いをやめさせるためじゃなく勝つために作戦を練り、能力を使かうと能力をコピーてびっくりしている間に逃げるといふ我ながら幼稚な作戦にすることにした。これで私の能力も増えるし、仮にも命の恩人の幽香に怪我させないですむ。

私は弾幕を幽香の周りの向日葵に向けて設置して能力を解除した。幽香は私がさつきまで吹っ飛んでいたのに持ち直して攻撃を仕掛けていることに驚きつつも私が放った弾幕を避けようとした。でも、私は弾幕を幽香に当てようとしたわけじゃないので弾幕は向日葵に計画通りに当たり吹っ飛ばした。

「そんなのじゃあたらないわよ」

「たしかにそうだな。でも幽香の大好きな向日葵は吹っ飛んで一輪もなくなるだろうがな」

「たしかにね。でも私の能力で簡単に咲かすことができるわ」

そして幽香は能力を使おうとした。・・・計画通り行き過ぎて怖いぞ私。

「あら？なんで咲かないの、向日葵達」

かかった！

すぐにスキマを開いて中に入る。

・・追撃無し。作戦成功だ。

「あら、どうしたの」

スキマの中には私を死にかけにしている張本人の紫がいた。

「あら、どうしたの・・・じゃない！今、幽香の蹴りをくらって体のあちこちから血が出ているし猛烈に痛いんだよ！このもとを作った

紫！」

「この元を作ったのは私じゃないわ。避けられなかったハルが悪いのよ」

なに見ていたのか？しかも人間が妖怪の神速のけりを避ける？無理に決まっているだろ！

「はあ。もういいよ、とにかく私は人里に行つて医者探してくるから」

「それぐらいなら境界を操つて治せるじゃない」

「今のコントロールじゃ無理」

「じゃあ私が」

「そんなことしたら私の体がおかしくなる」

「あら失礼ね。まあいいわ、医者のところまで連れて行つてあげる」

「そんなことしなくても」

このあとの続きを言おうとしたがいきなりスキマが開き落とされてしまった。しかも落ちた場所は何故か竹林の中。紫、ふざけているのか？しかも落とされた衝撃でもものすごく痛い。

私は痛みを我慢しながら立ち上がり周りを見渡したがどこまでいっても竹林だった。どこかも分からないし歩くこともできないのでスキマをつかつて一度紅魔館に戻ろうとおもつたがどこからか分からないがウサギ耳がある少女がやってきた。・・・たぶん妖怪で能力持ちなんだろう。何故か頭が痛い。でもここは平然を保つて・・・

「あなた、何者？」

「何者といわれてもただの患者だ」

「？」

「どっかの危ない妖怪との戦いで負傷したから人里に言ってくると思ったら紫が医者のところに来て連れて行つてあげるとか言つてここに落とされたんだ」

「なるほど。でもただの患者ではありませんよね。なにせ妖怪と戦つてしかも勝つたんですから」

うっ！更に頭痛が！

「たしかにな。でも今は話せる状態じゃないんだ」

「・・・そうみたいですな」

「だから早く医者のおいでと思う人里に行きたいんだが紫はこの状況を楽しんでおるとしか言えない。ここには医者なんておられないわけじゃないか」

「ちがいます！ここに医者はおいでします。それもどんな病気でも治す医者」

そついうと少女は口をおさえて、しまった！というよつな顔を作つた

「・・・まじ」

こんなところに医者なんて・・・どんな人だよ。でもさすがに体から流れた血のせいでそろそろ危ないのでこの際誰でもいいな。

「すいません、その医者のおいでするところ知つておるか」

「・・・はい」

「できたら連れて行つてほしいんだが」

「・・・付いてきてください」

警戒はしているがこんなにあつさりお連れて行つてくれるなんて・・・この世のほとんどのやつが幽香みたいになつたと思つておいた。

私も一応警戒しながらついておいた。

付いていくとそこには永遠亭と書かれた屋敷があつた。

「ここがそつなのか」

「そつです」

そついいながら中に入るうとしたウサギ耳の少女はよくありそつな落とし穴のトラップにはまつて落ちた。

「うわ・・・大丈夫か」

「・・・はい、大丈夫です。てゐの奴、次会つたら八つ裂きに・・・」

「何か言いましたか？」

最後のほうが小さすぎて聞こえなかったぞ。

「いえ、それよりこちらへ」

私たちは今度こそ中に入った。

「あらウドンゲ・その人は？」

「はい師匠。この人は竹林の中で怪我を負って倒れていた人です。医者を探してこの近くまで来たそうですが道に迷ってしまったみたいです。そのところを私が発見して連れてきました」

なんかいろいろ違うが説明がめんどくさいのでほっとく。

「・・・なるほどね。ウドンゲ、もういいわ。後は私が診るからてゐを探す続きをしてきなさい」

「はい、師匠」

そうしてどっかについてしまった。私は師匠と呼ばれた人を見る。普通の医者なのか分からない格好をしている。さすがここで医者をしているだけあるな。（変な意味で）

「私の名前は八意永琳というの」

相手が自己紹介ならこっちもだな。

「私の名前は神崎ハルだ」

「・・・あなたがこっちに来た目的は何？」

普通に治してもらいに来ただけだが。

「目的つていわれてもこの傷見てわかるだろ」

「誰かから追われているとか？」

なぜそんな方向へ行く？・・・説明しなくちゃいけないか。

「違う。私はある妖怪と殺しあうはめになって戦って勝ったはいいが一発くらってしまって私にとってはそれが致命傷だったんだ。それで人里にいつて医者を探そうとしたら紫とかいうやつにスキマつていつてもわからないか。とにかく、それでこの竹林に落とされたんだ」

「まあいいわ。その妖怪はどんな奴だったの」

「うーん・・・いつも向日葵のところにおいてサディスティックな奴」

「・・・なるほどわかったわ」

これで会話は終わり私は診てもらった。診て貰った結果はここにくるまでに出血は止まっていたので貧血と体のあちこちが打撲しているだけだった。これには私が驚いた。さっきまでは歩いただけで痛かったぐらいなのに。

「あれ？そんなに軽かったの？」

「ええ、あなたさっきの話本当なのかしら」

「本当だ」

人間じゃありえない回復力だよな。もしかしたらいろんな奴の能力とか取ったからかもしれないな。・・・まったく、自分の能力に分からないこと多すぎだろ。まあとりあえず診て貰ったんだし、代金を払わないとな。

「代金はいららないわ」

「へ？」

なんで読まれた？もしかして能力？

「今のつて・・・能力？」

「違うわよ。私はそういうのが得意なだけ」

「・・・す」

こんなことを話しているとき、外からさっきのウサギ耳の少女の悲鳴が聞こえてきた。

「ウドンゲに何かあったのかしら」

「私が見て来る。代金の代わりだ」

「そう、じゃあお願いするわ」

私は能力を使わず走っていった。まだ完全に安心できないので自分の手札を見せないようにするためだ。また殺し合いなんてなったらたまらない。

行ってみるとそこにはウドンゲとは違うウサギ耳の少女がいたその後ろにはウドンゲが・・・

「見つ見ないてください！」

逆さまになって捕まっていた。思いっきり下着が見える状態で。残念ながら後の祭りなので隠そうとしたって無理。

「大丈夫だウドンゲ。気にしていないから」

「私が気にします！」



そんなこといわれたって・・・罿に掛かりやすいウドンゲが悪い。

「そつだ鈴仙気にするなウサ。じゃないと毎日罿にはまるのに体が持たないウサ」

「てゐにいわれたくない！」

たしかにな。そろそろ降ろさないと私も目のやりように困ってしま  
う。

「なあてゐと言う少女。そろそろおろしてやったらどうだ」

「いやウサ」

「しょうがないな」

私は時間を止めてウドンゲの下にいき弾幕を罿のほうに向けて放ち  
能力を解除する。能力をばらしたってこんな奴らならいつでも逃げ  
られると思ったからだ。

「え」

見事罿は壊れてウドンゲは落ちてきた。それを私がキャッチする。

「よし！これでいいだろ」

「なっなにをした！」

あら、ウサつけないの。まあ別にいいが。

「なにつて、能力使っただけだ」

「能力！」

残念だったなてゐ。

「ウドンゲ」

顔を見てみると顔が真っ赤だ。さっきのはそんなに恥ずかしかったのか。

「大丈夫だウドンゲ。私は誰にも言わないし本当に気にしていない、それに似合っていたぞ」

私は気にするなと言いたかったんだがウドンゲは更に顔を赤くしてしまった。

「はい、わかりました。ですから降ろしてください」

そうだった。お姫様だっこは好きな人にやってもらいたいことだったんだ。（パチュリーの教え）なるほど、顔が赤かったのは怒っていたからか。

謝ろうとしたがいつの間にかいなくなっていたてゐを探してくるといつてすぐいなくなってしまった。私はこのことを報告するために永琳のところに戻った。

「もどつたぞ」

「じくろつさま。なにがあったのかしら」

「ウドンゲがてゐとかいう奴の罫にかかっていたから助けってきた。今またそのてゐを追ってどっか行ってしまったところだ」

「めずらしいわね。こんなに罫に引つかかるなんて・・・なぜかしら」

何か考えていたが私を見んでいるだけなのでわけが分からない。何

か私しましたか？

「まあいいわ。ところでどうやって助けたのかしら。てめから助けるなんて事ありえないし」

「ん、それは能力を使ってやったんだ」

「あなた、能力があつたの」

「まあな」

無かつたら今頃肉片になっているところだ。

「その能力をおしえてもらえないかしら」

「なぜ」

「そこまで警戒しなくていいわよ。ただこの私でも見破れない能力はどんなものか知りたいだけ」

「・・・いいだろう。じゃああなたの能力も見せてもらおうか」

私は自分の能力であいてが能力を持っているか知ることができが能力が有るか無いかだけなので自分が教えるなら相手にも教えてもらうことにした。

「・・・いいわ。私の能力はあらゆる薬を作る程度の能力よ」

実際に薬を作ってもらった。そして私はその間にコピーをした。

「・・・今、あなた能力を使った？」

「そうだ、よく分かったな」

「一応ね」

どうやら永琳は抵抗しなかつたらしい。すんなり、コピーできた。

「あなたの能力は相手の能力を奪う程度の能力かしら」

「おしい。能力を操る程度の能力だ」

「なるほど。コピーしたってわけね」

「1」名答」

「まだ完全に能力を把握していないのね」

「・・・よくわかるな。」

「まあな。最近知ったばかりだし」

「なるほど。ちょうどいいわ、あなた・・・その把握ついでにやってもらいたいことがあるの」

「あやしい。またフランみたいなのや幽香みたいなのと殺し合いじゃないだろうな。」

「大丈夫。殺し合いとかじゃないから、ただその人の暇つぶしに付き合っただけなの」

「・・・わかった。信じよう」

私は永琳につれられ屋敷の奥にいった。途中、てゐの悲鳴が聞こえたが自業自得なのでほっといた。

「ここから先に私が言った人がいるわ」

「なぜ名前で呼ばない？」

「一応ね」

意味がわからないがとりあえず納得しとく。

「わかった。じゃあ行ってくる」

「ええどうぞ」

私は一人でそのある人が居る部屋に入った。でも警戒はしながら。入ったらすぐ首が飛ぶはいやだからな。

中に入るとこの屋敷にぴったり合う和風の服を着た少女がいた。

「はじめまして・・・だな」

「あなたは誰？」

「私の名前は神崎ハルだ。ここで診てもらった代金代わりにあんたの暇つぶしをしてくれといわれてきたんだ」

「私の名前は蓬莱山輝夜よ」

輝夜って・・・まさか、かぐや姫？

「輝夜ってかぐや姫なのか」

「・・・そうよ」

なるほど。だからさっき変な質問されたり警戒されたりしたのか。また月の追っ手と思って。私もたぶん馬鹿ではない。昔話ならかぐや姫は月に帰ったが帰りたくなかったのはわかっている。いろんな本であったし。それが本当か嘘か分からないけどそれがもし本当なら、たぶんそこに永琳がきてその願いを叶えたってところだろう。あのウサギ達は何故ここにいるかは知らないが。元からここに居たのかなんだろう。・・・じぶんで考えておきながらなんか邪推みたいだ。

「大丈夫だ。追っ手とかじゃない」

一応いつてみた。

「わかってるわ。そんなこと」

「ならいいんだ。またいきなり殺し合いになったりしたら堪んないからな」

「そう？楽しそうだけど」

おいおい、そんなこというのか？やっぱりほとんどの人幽香思考か？

「たのしくねえよ。死にそうになるののどこが楽しいんだ」

「あら、暇つぶしって私を楽しませてくれることじゃないの？」

「そうだが私の命が保証される限りでな。それに永琳が私の能力のコントロール練習も兼ねてって言ってたし」

「あなた能力持ちなの。私の能力は永遠と須臾を操る程度の能力よ」

「私の能力は能力を操る程度の能力で相手の能力をコピーできる」

「ふうん。じゃあ私の能力もコピーしたの？」

「していない。これは見るか実際にくらうかしないとコピーできないらしい。そしてコピーするとき一時的に相手は能力を失ってしま  
う」

まだコントロール慣れしていないから勝手に相手の能力をコピーしてしま  
うしな。

「そう・・・じゃああなたの能力のコントロール練習でもしまし  
ようか」

「ありがとう」

こうして私が少しはまともに操れるようになるまでの練習が始まった。私がコピーした能力は使い方は分かっているも元は他人の能力だけあってそれをすぐに操ることはできないので練習するのだ。練習の仕方はその能力を何度もつかって感覚を覚えること。輝夜に手に入れた能力をつかって感覚を覚えるというやり方だった。輝夜が「私は不死身だからどんなことされていても大丈夫」とのことなので輝夜を実験台にしている。まずは一番戦力になりそうな紫から手に入れた能力を練習した。輝夜の境界をいろいろいじって練習したのだが死にそうになったりと大変だった。おかげで輝夜の能力と紫から手に入れた能力のコントロールを手に入れた。

ほかにも手に入れた能力を少しだけ練習してある程度はつかえるようになった。今完全に使いこなせるのは咲夜とパチュリーと魔理沙？（あまり覚えていない）と紫と自分の能力だ。

「ふう、なんか疲れた」

「そう？私はとっても楽しかったわ」

そりゃ不死身ですからね。どんなことしても死にませんから。

あたりを見ると夕方になっていたので私はそろそろ帰ることにした。

「じゃ、そろそろ帰るわ」

「ええ、またいらっしやい。いつでも付き合っただけ」  
「わかった」

フランと一緒に頑張ってやらなくても済みそうだ。

私は元来た襖から出て行った。そこを出ると最初入った時みたいに永琳がいた。

「どうだったかしら」

「ああ、存分に練習できたし輝夜の暇つぶしにもなった」

「そう。よかったわ」

「今はもう帰るがまた来てもいいか？」

「いつでもどうぞ」

「ありがとう」

私は永遠亭をでた。そして能力を使って帰ろうとしたら上から鴉？かと思ったが誰かが私の前に下りた。

「私はこの幻想郷の新聞記者をやっております清く正しい射命丸文  
といます」

「はあ・・・」

何なんだこの人、早く戻って寝たい。

「いや、大変でしたよまったく。あなたを取材しようとしたら紅魔館に入ってたままでできませんし出てき

たと思いきやスキマに落ちたりするんですからね」

「はあ」

「ですが今ここであえた奇跡！ぜひ取材をお願いします」

せつかく頑張ってきたんだから少しはいいかな。

「いいですよ」

「ありがとうございます。では……」

こうして軽い質問タイムが始まった。

「ご協力ありがとうございます」

「気にするな」

軽いといっても一言二言じゃなくいくつか質問された。幻想卿にいつ来たとか何をしているかか……まあ新聞記者なら当たり前か。

「ではさっそく新聞を作りたいと思います」

「ああがんばれ」

そして飛んでどっかに行った。飛ぶとき能力を使ったみたいだがむやみにコピーしなくてもいいのでコピーしなかった。

早く眠りたいのですぐにスキマを開き練習の成果を発揮して紅魔館の自分の部屋にスキマを開く。まだ眠るのには早いので疲れたので寝る。それにフランも寝ているから仕事もできないしな。

そうして私は夢の中に落ちた。



## 第十二話（後書き）

外来人は普通は捕食される側ですからね。怖いです。

たまに出来事を省いたりしますが決して書くのがめんどくさいからじゃないですね。はい絶対に。それとウドングはやってしまった感じがします。

## 主人公設定（前書き）

自分なりにはがんばって設定書いたつもりですがおかしい点がありましたら感想に書いてくださいお願いします。あとやっとテスト終わりでした。

## 主人公設定

神崎ハル

性別：男 年齢：15歳

世界に存在を忘れられて幻想郷に来てしまった主人公。

一応、純日本人の黒髪黒目。人見知りで普段はあまりしゃべらずあまり怒らない。でも怒ったりするときはものすごい。しかし、しゃべらなくても行動はするしいろんなことをかんがえている、暇は嫌いな人。本を読むのが大好き。本の虫第二号で一号はパチユリー。マイナス思考に走る傾向があつたが悪い方向に改善中。（例えば相手が悪いことを考えているとおもつていてもマイナス思考のせいにして気にしないとか）主人公は鈍感ではなくあいてが自分を好きになつていれると思つてもその考えを否定する否定型。だから相手が正面から言つてこないと認めないし相手に好きになつてもらつた努力を見せない。今までやってきた事はすべて当たり前と思つてやってきたこと。とくにウドンゲのとか。弾幕は一応撃てるが今のところ飛ぶことはできない。

能力『能力を操る程度の能力』

この能力は紫がハルを自分の夢のほうに連れてこようとして精神だけが幻想郷側に行つた時に発動した能力である。

効果は相手が能力をハルが見ている範囲で使つたりハルに当てたりすると一時的に能力が奪われる。そしてコピーして返却される。簡単に言うとコピー機のような感じ。

コピーした能力はすぐに使えるがハルがその能力の所有者ではないのでコントロールとかは最初は全然だめで暴発が多い。だが能力を使う練習をやればその能力の所有者並みに使えるようになる。（なるだけで完全には使う事はできない）

コピーする、しないは今は自分の意思で決められる。現在コピーし

た能力は紫、咲夜、レミリア、パチュリー、魔理沙、美鈴、永琳、輝夜の能力である。後からもっと増える予定。

#### その他の設定

幻想卿の皆さんはほとんどみんな顔見知り。ハルはそのことを知らない。スペルカードルールは一応ある。

主人公のイメージ画像です。

> i 7 3 9 9 — 1 0 4 6 <

## 主人公設定（後書き）

画像を挿絵するのにはやり方がわからなくて2時間かかってしまいました。馬鹿な作者です。

他にも能力の効果はありますがそれはまたいつか後程・・・

## 第十四話

眠りに付いたはずなのに意識はあるしいつもの暗闇空間にいる私。なんだよ・・・私には眠ることは許されていないのか？ただでさえ疲れているというのに。

意識があるのならここでその意識を断てばいいとおもいここでも寝ることにした。だが徹底的に誰かは私を眠らせるつもりはないらしい。

「ねえハル」

「・・・」

紫・・・わざとか？

「早く私の夢から消えてくれ紫。私はすごい疲れていて眠い」

「わかつているわ。今日は一日大変だったものね」

「大変だったって紫・・・見ていたのか？」

「ええ全部」

「永遠亭のところもか？」

「そうよ。あなたも大変ね、女の子の下着を覗くなんて」

「ちがうぞ。あれはてゐが仕掛けたトラップに掛かったウドンゲが

悪い」

「そう？私だったらどんな理由だろうとあなたを襲っていたわ。つ

いでにてゐると第三者も」

「第三者？」

「そうだったわ。明日からあなた忙しくなるわよ」

「???どういう意味だ」

「ふふっ、明日になったら分かるわ」

そうして紫は消えていった。はつきり言って何がしたかったのか分からない。忠告しに来たのならちゃんとして詳細を教えて欲しい・・・まあもういいや、寝よう。

今度こそ眠った。

起きると、少しは疲れはとれたがまだ残っている気がした。もう一度眠ろうと思ったが眠れなかったので美鈴のところに行くことにした。もちろんスキマで。

「よつと」

「あつ、おはようございます」

また今日も起きている美鈴。なにか悪いものを食べたのか？それとも寝ていたときが異常なのか？

「美鈴この頃起きているよな。何か悪いものでも食べた？」

「違います！いつも寝ているわけじゃありません。もしかしてハルさん、私をそんな風に見ていたのですか」

「ごめん、悪かった」

「わかりました。じゃあ反省の印に私の頭を撫でてください」

わけが分からないがそれでいいならと思い頭を撫でることにした。

「わかった。（なでなで）・・・これでいいのか？」

「はい！」

美鈴は笑顔になった。顔が赤かった気もしたが太陽の光のせいだろう。

「だが美鈴が寝ているのってなんなんだ？」

「ただの睡眠ですよ」

やっぱりこの時間帯はみんな寝ている時間なのか。

「自分がただ早いだけなのか」

「いえそんなことないです。早起きはいろいろ得しますから」

「そうなのか」

「そうです」

「まあ、遅い早いなんてどっちでもいいや」

そろそろ図書館に行くか。

「じゃあ美鈴またな」

「はい！」

私はスキマを開け図書館へと向かった。

相変わらずこの図書館はいい。自分の趣味を行えるし外の図書館みたいに人がたくさんいないからな。私はここ図書館に来るときこのことを毎回思う。それにこの頃は何をしているのか魔理沙もこないから平和だ。読めない本は多いが。

私は自分が読める本を積んでおいたところへ行く。こんなに広いのに戻してまた探すなんてことしたら私の体力が持たないから積んで置いといた。最初は散らかしている感があったがパチュリーを見るとその気持ちもなくなった。(あんな山積みになっているのを見たらじぶんのがまだ綺麗に見えたから)

私が本を読もうとして本を取った時、ドアを壊れると思うぐらいにバン！とあけて美鈴が何故かやってきた。そしてなにか紙切れを持っている。

「ハルさん！これどういうことですか！」

「なんだ？」

私はその紙切れと思っていた新聞を見た。その新聞は文々新聞と書いてありその内容を見ると

『永遠亭の妖怪、ウドンゲが外来人とてゐの共犯に襲われてそのまえで下着をさらけ出される』

・・・はあ？なんだと？しかも何故か写真付き？まさか紫が言ったことって・・・

「ハルさん・・・あなたって言う人はこんな大変なことをする人だったんですね！」

「違う！これは射命丸とか言うやつが書いたでまだ」

「やっぱりハルさんは・・・」



おいおい人の話し聞けよ。

「ハルさんは女の敵です！」

おいおい、だんだん私には意味が分からなくなってきたぞ。しかもパチュリーが私たちが騒いでたため来てしまった。

「さつきから何を騒いでいるの」

「パチュリーさんこれを見てください！」

やばい・・・

「ハル」

「なっなんだ・・・」

「今日という今日は・・・絶対に許さない！」

パチュリーは呪文を唱え始めた。私は逃げようとしてスキマを開こうとしたら美鈴が蹴りかかってきた。

「なんで避けるんですかハルさん。ただちょっと懲らしめてあげるだけですよ」

「いや！そんなことしなくてもいから！それにそんなのくらったら死ぬ！」

パチュリーが詠唱を終わって魔法を私にぶつけに来た。私はとにかく走って避ける。

「おとなしくあたりなさい！」

「だからあたつたら死ぬって！」

咲夜の能力を発動して時間を止めて私は新聞を盗つてとにかく逃げた。レミアアのところに行きたいがまだ眠っているだろうしフランに言っても意味がない。こういうときは・・・一度別のところに行こう。私は咲夜の能力を解きすぐにスキマを開けてその中に飛び込んだ。

そして中には私の考えていたとおりに紫がいた。

「どうだったかしら？」

「紫の考えていたとおりのことが起きました！」

「そんなに怒らなくてもいいじゃない」

「だったらちゃんと詳細も説明しとけよ！」

「あなたが早く眠りたいって言ったのよ」

・・確かに。

「・・・ごめん」

「別にいいわ。その代わりに面白いものが見れたから」

「？なにかあったか？」

どうせって私の行動のことだろうが私の行動の中になにかおかしいことがあったか？

「ええ、たくさんあったわ。みんなも大変ね」

「？とりあえずこれから私は永遠亭のところへ行ってくる」

「どうして？」

「あそこの人はこのことまだ知らないだろうし」

「あれはこの幻想郷最速の天狗の射命丸よ。もうだいたいのところは配り終わっているわ」

「・・・なら私の無実を証明してもらおう」

「そう。私ならあの射命丸を襲いに行くわ」

「それじゃ根本的な解決にならないだろう。それにそれは後でやることだ」

「（結局やるのね）なるほどね。じゃあがんばってきなさい」

「ああ」

私は今度は紫に落とされることなくスキマを出た。

紫side

またどこかにいったわね。毎日が忙しい人だわ。でもそれを見ている人にとっては面白いからいいんだけど。でもいるんなところに行き過ぎても困り者だわ。ハルにはあることをやってももらいたいのに死んでもらっては困るわ。妹紅のところに行かせてもいいのだけど

あの能力は奪った後にだからもしかしたら死んでしまうかもしれな  
いしなにより殺し合いなんて輝夜としかしないわ。ハルから吹っ掛  
けることなんてしないだろうし……私がいろいろ操作する必要  
がありそうね。

私は博麗神社にスキマを開けて霊夢のところに行った。

「お邪魔するわ」

「言う前から入っているんだけど」

ただの礼儀として……ね。

「いいじゃないどっちでも」

「あんたって人は……もういいわ。何しにきたのよ」

「ひどい言い方ね。まるで私が悪いことしか運ばない言い方ね」

「実際そうでしょ！」

「そう？ 私はそんなことした覚えはないわ」

「はあ……あなたに言っても分からないわよね。分かるうとも  
しないのしょうけど。で、こんどはなんなの？」

「この頃の結界に歪みを感じなかったかしら？」

「……感じたわ」

「それって外来人が入ってくるときにあけた穴なの」

「どういうこと。結界が壊されたわけじゃないのに」

「違うわ。その外来人は自分の能力で穴を開けたのよ」

「能力ですって？ 外にいたら能力はあるとしても覚醒しないはずじ  
やないの？」

「私とその外来人の夢の中に入ったときに精神だけここに連れてき  
てしまったのよ」

「……やっぱりあんたじゃない！」

「でも悪いことを運んだわけじゃないわ」

「はあ……その外来人の能力はなんなの」

「私にはわからないわ」

「どうせっていつも後ろをつけていたりしてたんでしょ。知らない

はずがないわ」

いつもながら鋭いわね霊夢。

「ええ、でも能力のことは分からなかったわ」

「そうなの。じゃあいいわ、とりあえず帰す気はないのね。後ろをつけてばかりで帰そうとしなかったわけだし」

「違うわ。あの外来人が自分はここにいたいと言っていたのよ」

「・・・会っているじゃない」

「そのときだけに・・・ね」

「どうでもいいけどじゃあなんでこっちにきたのよ」

「そうね・・・ここに新聞は回ってきたかしら」

「新聞？さあ見ていないわ」

「やっぱりね。なら私がここに外来人が来るように仕向けるからそのときまでにあのデマ新聞記者が来たら止めておいてほしいの」

「なんでそんなことしないといけないのよ」

「そのときになったらわかるわ」

「・・・わかったわ」

「さすがは私の友達ね」

「あなたの友達になった覚えはないわよ！」

「フツ、そうね。そろそろまたハルを見に行かなくちゃ。」

私はスキマを開いてハルの行ったところへと向かった。

ハルside

スキマをでて私は今、永遠亭の前にいる。人の家の中にスキマを作って出るなんて不法侵入もいいところだ。紫はやってそうだが・・・法律もないからいいのか。

「あれ、ハルさんどうしたんですか？」

「ウドンゲ・・・その様子だと新聞はきていないのかな？」

「ウドンゲ。新聞とかもらったか？」

「いいえ、もらっていませんが」

「やっぱりな。そりゃこんなの持ってきたらさすがに殺されるに決まっているからな。」

「だったらこれを見てくれ」

私は新聞をウドンゲに見せた。最初は意味が分からなかったみたいだがだんだん顔を赤くして

「なっなんですかこれは!？」

「昨日あの時どうやら射命丸とかいう天狗妖怪がいたらしい。私は最後にあいつに会ったんだがそのときにこの悪巧みに気づけなかった、ごめん」

「いいえそんなことないです」

「いやあるだろ。みんなにあんなの配られたら自分だったらもう人生の終わりみたいなもんだからな。」

「ありがとう。とりあえずこの後どうするか決めたいんだが」

「だったら師匠の知恵を貸してもらいましょう!」

私はウドンゲに引つ張られて永遠亭の中に連れて行かれた。

中でウドンゲが永琳にこのことを説明するとなぜか笑い出した。・  
・なにがおかしい。

「フフツ・・おもしろいわね。ウドンゲよかったじゃない、これで人気者になれるわ」

「よくありません師匠!どれだけ恥ずかしいと思っっているんですか!」

「お嫁にいけなくらいかしら」

そうするとウドンゲが固まって何故か泣き出し始めた。

「あらそんなに悲しかったのかしら。こんなことに興味なかったとおもっていたのに」

「たしかに私も思う。妖怪って結婚できるのか?だがさすがにかわいそうだな。」

「永琳もうやめたほうがいいぞ。私だってこんなのがみんなに知れ渡ったら人生が終わったと思うからな」

加害者にされてもただけどな。

「そう？私は気にしないわ」

・・・永琳のすごさに改めて驚くよ。

「まあたしかに少しかわいそうね。ハル、あなたが泣き止ませて欲しいだけど」

「何故私？」

「大丈夫よ。ただこう言うだけでいいわ。『大丈夫、私が貰ってあげる』・・・とね」

「分かったこうだな・・・大丈夫、私がもらってあげ・・・ちよつとまで、マジじゃないよな」

「あら、本気よ」

危ない！私も取り返しのつかないことをやりそうだった。・・・恐るべし永琳。

「それともハルはウドンゲが嫌いなのかしら」

そんなこと言われても絶対に言わない！・・・なぜ私を見る、ウドンゲ。泣き止んだからいいけど。

「嫌いも何もまだ会ったばかりだし私はまだ結婚できる歳じゃない。それにウドンゲが自分で決められないで強制結婚させるなんてかわいそうだろ」

「はあ」

何故ため息なんだ。

「ウドンゲ。あなたもがんばりなさい」

「・・・はい、師匠」

「何が分かるか分からないがそろそろ本題に戻らせてもらおうぞ」

「はい、どうぞ」

「私はこの新聞のせいで私が住んでいる紅魔館の人たちにいらぬ疑いをかけられてその疑いはらすためにここへきた」

「なるほどね。ウドンゲに実際にそのときの状況をしゃべってもら

「うわけね」

「そうだ」

「疑いつてどんな疑いですか？」

「具体的には分からないが女の敵とかいっていた」

「そうなんですか」

何故かまた永琳がニヤニヤしだした。

「・・・ウドンゲも大変ね」

「え、なぜですか師匠」

「大丈夫よ気にしなくても。後で分かるから」

「はい、わかりました」

「ということだ、ウドンゲを少し連れて行ってもいいか？」

「ええいいわよ」

「ありがとう。じゃあウドンゲいくぞ」

「はい」

私はスキマを開いてウドンゲと一緒にはいった。

「うわゝすごいですね」

この景色は最初は気持ち悪いとしか言いようがなかったからな。

「私はもう慣れた」

私が紅魔館へのスキマを開こうとしたら紫が出てきた。永遠亭の中にはいったときにスキマの感じはしたがほっといっていたが今度はな  
んだ。

「ハル、あのデマ新聞記者を見つけたわ」

「見つけるも何もスキマなら簡単だろ」

「あいつはこの幻想郷最速よ。あなたじゃ見つけることさえ難しい  
わ」

そうなのか？場所のイメージとスキマさえあれば簡単そうなんだが。

「仮に見つけたとしても早すぎて逃げられるのがやっただわ」

「確かにそうだな。わかった、ウドンゲ・先に紫の方をやって  
もいいか」

「いいですよ。私もあいつを八つ裂きにしたい気分ですから」  
何気に危ないことをウドンゲも言うのか。まあ私もそういう気分だから別にいいが。

私たちは紅魔館には行かずに紫についていった。

スキマを出ると神社だった。立て札？見たいなものには博麗神社と書かれている。こんなところにいるのかと思っただが中から破壊音が聞こえたのでいると判断しウドンゲと一緒に中に入っていった。途中ウドンゲは何故か嫌な顔をしたが。

「あやややや！あなたは！」

「よう。デマ新聞記者」

私はできるだけ相手を威嚇しながら言った。

「あんたが自分で入って来たって紫が言っていた外来人なのね」

「そうだ、神崎ハルという」

「なるほどね、だから私にこいつの足止めなんかやらせたのね。私の名前は博麗霊夢よ。あゝあ、すこし賽銭のことかと期待していたの」

「賽銭なら後でやりに来てあげるさ」

主に自分の周りの人が静かになるようにだけどな。

「どうも。じゃあさっそくあいつをやっつけてくれる？」

「わかったまかせろ」

「あやややや」

「さあ、狂いなさい！」

どうやらウドンゲが能力を発動したらしい。いきなり文が倒れた。私もついでに能力を発動してコピーする。

「あれ？なんで能力が使えないの？」

「今私がウドンゲの能力をコピーしたからだ。少ししたら使えるよ  
うになる」

「・・・それがあなたの能力だったんですね」



言ってなかったのかよ永琳。

「へえ、もしかしてそれで紫の能力をコピーして幻想郷にきたわけ」「「」名答」

霊夢はすごい勘の持ち主だな。

「それでこいつどうしますか？」

「そうだなウドンゲと同じこととしてカメラで撮ってみんなに配るか・それともこいつに誤解でしたと謝罪の新聞でも作らせるか・・・」「最初のは嫌がらせには最適だけどハルが言っていたとおり根本的な解決にならないわよ」

たしかに紫の言っていることは正しいな。

「それに今逃がしたら謝罪の新聞じゃなくまた変な新聞くばってあなたの誤解をさらに増やすことになるわ」

「?どんな誤解だ？」

紫はニヤニヤしながらこう言った。

「いろんな女を無差別に襲うっていう誤解をね」

「だめです!そんなことしちゃいけません!」

「いや、しないからウドンゲ」

「だからここは配ったところをこいつに聞き出して直接誤解を解くほうがいいわ」

「・・・面倒だな。別にそんなことしなくてもいいんじゃないか？」

私は自分のまわりのだけ誤解が解ければいいと思うんだが」

「それじゃ私が困るわ。この幻想郷の管理人になるあなたには幻想卿の大体は知ってもらわなくちゃ」

「は?管理人?」

聞いたことないぞ。それに私にそんなでかいことできるはずがない。

「やっぱり裏があつたのね」

「知っていたのかよ霊夢」

「今分かったのよ。それにこいつに裏があるのはいつものことよ」

「そういうこと」

「開き直るな紫。私は管理人なんてでかいことできないぞ」

「いえ、今のあなたならできるわ」

「そんなこといったってな」

「簡単にいうと私と同じことをするだけなのよ」

「・・・確かにできそうだな」

ただ誰かをストーカーする紫と同じことってますありません。

「今すごい失礼なこと考えていなかったかしら」

「気のせいだ」

「ん」

そろそろ文が起きるようだ。

「そろそろ起きそうですよ」

「わかった。じゃあこの話は後にしてまずこいつをどうするかだな」

「私は脱がしてその写真を保険としてもってこいつに謝罪の新聞を作らせるほうがいいと思うわ」

「結局脱がすのかよ」

「それなら私がやります！」

ウドンゲは起きかけの文と文のカメラを持って隣の部屋に行った。

少しの間、服が擦れる音と文の息の音が聞こえていたが少しするとそれは盛大な悲鳴に変わった。

「キヤー!!!!」

私はいいざまだと思い顔を綻ばせた。

「ハル、あなたいやらしいこと考えていないわよね」

「そんなわけないだろ」

まったく考えていませんでしたといったら嘘になるが。

「やりました！」

隣の部屋からウドンゲが出てきた。だがウドンゲは大変なことを忘

れていたようだ。

「……………」

服を脱がされたままの文がそこにはいた。これはさすがに見えていなかったので思わず目を閉じようとしたが、目を閉じたら風に吹き飛ばされて後ろの壁に激突した。

「へっ変態!」

「ごめんなさい!」

ウドンゲが隣の部屋が見えないようにふすまを閉めた。

私はさつき受けたのが能力と分かったので一応コピーしていた。

「あらあら、たいへんなものをみてしまったわね」

「ああ、今のはやばいな」

記憶から消したいがなかなか消せるもんじゃない。

「すみません。仕返しができたと思って肝心なことを忘れていました」

「気にするなウドンゲ」

ウドンゲは何か私も見せればとか言っていたように聞こえたが気にしないでおこつ。

暫くしたら服を着た文がでてきた。涙目で一瞬かわいいと思ったのは気のせいだ。

「ひどいです!この責任どうやってとるんですか!」

「知るか。お前があんなガセネタなから悪い」

「ふっ、こうなったら……」

「もしまた変な新聞を流すようだったら私たちにも提案があるが」  
ウドンゲが写真をチラつかせる。それを見ると文はうなだれたがす  
ぐに復活して

「だったら『だめー！』」

文が何かを言おうとした時、ウドンゲがなぜか言葉をさえぎった。  
私も悪役になった気分になってきたのでそろそろ追い詰めるのをや  
めることにした。

「じゃあそろそろいくかウドンゲ」

「はい！」

「ちよつとまつたー！」

なんだよまだ何かあるのか？

「なんだよ文」

「私と勝負だ！」

「は？」

なに？また戦いになるのか？

「やるのはいいけどやるなら外でやって」

「そうね。そうしなさいハル」

また殺し合いかよ！しかも霊夢と紫はなぜ賛成？

私はウドンゲと一緒に逃げ出そうとしたがいきなり紫に殴られて動  
けなくなった。そしてそのまま神社の前に連行されて文は勝負する  
体制をとっている。

「なんで紫が殴るんだよ」

「あいつに管理人候補生の实力を見せてあげるためよ。もしたらも  
う二度とあなたのふざけた記事なんて書こうとしなくなるわ」

確かにそうだが戦いなんてできるだけやりたくないからな。

「がんばって下さいハルさん」

ウドンゲお前もか。

「・・・わかった。文」

「いつでもいいですよ」  
すぐに終わらせてやる。私も死にたくないしあいても一応は女の子だしな。

私は時間を止めて魔法を使った弾幕を出して一応、美鈴の能力の気を纏う。今まではできなかったが同時に二つ使えるようになった。そして時間を動かす。

「あややや!」

不意打ちだというのに一つも当たらずに避けられた。風を操る程度の能力は以外に厄介だな。

「次はこつちから!」

文は普通じゃ避けきれない数のかまいたちをだしてきた。人間を殺すには十分な数だと思う。だが私はそれに対して文の能力を使つてかまいたちをだそうとした。しかし練習も一切していないのでただの暴風となつてその場を飲み込んだ。

「ちよつと!神社が壊れるじゃないの!」

「ごめん!コントロールがまだできないんだ」

「だったらつかうな!」

「あややや!」

暴風が文を飲み込んだ。

「どつするんですか!」

「……どつする!」

私はまた暴風を作って相殺した。嵐が終わるとその中から文が落ちてきた。

霊夢 side

もう！あぶないじゃないの！こんなところであんな危ない技を使うなんて！神社が壊れたらどうするのよ！

私は結界をはって暴風が神社に届くのを防いだ。

「あなたも大変ね」

「だったら手伝いなさいよ！」

この役立たずの紫！

心の中でハルや紫に文句をいいながら結界を張り続けているともう一つの暴風ができてきて暴風どうしがぶつかり合い相殺した。そしてその中から文が落ちてきた。文は気絶しているらしく起き上がる様子がなかった。でも地面に激突する前にハルがいつの間にか下にいて受け止めた。・・どんな能力をコピーしているのかしら。たぶん今のはあのメイドのものだと思っただけ。

「これ・・どうすればいいんだ？」

文を見ずに私達に問いかけるハル。まあ、文の服がああ暴風のなかで破けて今の状態をだからしょうがないんでしょうけど。

「ハルさん。下を見ちゃいけませんよ」

「分かっているウドンゲ」

あのウサギはハルとはよくしゃべるわね。いつもはそんなにしゃべらないのに。

「おもしろかったわ」

私は全然面白くなかったわよ！こうなるなら実力を見たいと思って

賛成した私がばかみたいだったわ。

「なあ、霊夢。文が起きるまで神社に置いていてくれないか」

「いやよ。また何が起こるか分かったもんじゃないもの」

「・・・紫」

「そうね、家に送り返すだけならしてあげてもいいわ」

ありえない・・・紫が他人の手伝いをするなんて。

「ありがとう。じゃあウドンゲ、今度こそいくか」

「はい」

そうしてハルとウドンゲはスキマを開いていなくなった。

「じゃあまたね」

「もうこなくていいわよ！」

紫もスキマを開いてどこかにいった。はあ・・・あのハルって言う  
外来人が来てからみんないろいろ変わった気がするわ・・・

私も神社の中に戻った。戻る途中、賽銭箱の中をちらっと見るとそこにはお金が入っていたのでハルとはいい関係になれそうだと思っ  
た。

## 第十四話（後書き）

自分ではシリアスじゃない方向に書いたつもりですがどうですか？  
感想お願いします。



## 第十五話（前書き）

うん。中体連が大変で疲れた。更新がすごく遅くてすみません。

## 第十五話

ハルside

・ やつとで誤解が解ける。何故か誤解を解くのにすごい疲れているんだが。

「ハルさん、これからどうするのですか？」

「まずは美鈴のところだ」

パチュリーはまだ怒っている可能性あるしな。

私は美鈴はいつもの場所に戻っているだろうと思いい門のところにスキマを開けた。そこには案の定、美鈴がいた。

「・・・ハルさん」

「私はウドンゲを襲うなんて事してないっていったな」

「・・・はい」

「その証人を連れてきた」

「ウドンゲさん・・・本当ですか？」

「はい。私は襲われたんじゃないやなくて助けられたんです」

「?どういうことですか」

そこまで言わなくてもいいと思うんだが。

「私がてゐのトラップに引っ掛かったときにハルさんが助けてくれたんです」

「・・・そうですか」

「誤解がとけてよかった」

残るはパチユリーだけだ。

「今回は助けるために目撃したので許しますけど加害者だった場合はゆるしませんからね！」  
「分かった」

加害者になるつもりなんてないけどな。

「ウドンゲ、今度はパチユリーだ」  
「わかりました」

そうしてまたスキマに入った。

「・・・なるほどね」

スキマで図書館に移動してパチユリーに会い、まだ怒っているかと思っただが時間が怒りを和らげたようです。すぐに聞いてくれた。さつきまで戦いになると考えていたので杞憂で終わってよかった。

「やっと終わった」

いろいろ大変だったが後はウドンゲを送り届けるだけだ。ここまで来てもらったんだ、せめて送ってあげないとな。

「まだ終わらないわよ」

そういつて紫がスキマから出てこようとしたので私はそのスキマを閉じてやった。・・・今度は何をさせるつもりだよ。

「・・・あんなことして大丈夫なんですか？」

「大丈夫だ・・・たぶん」

スキマの事情なんて私には分かん。

「それより、ありがとうウドンゲ。おかげで誤解が解けた」

「いいです。気にしないで下さい」

ウドンゲは良い人だ。

「じゃあ永遠亭に送ろう」

「はい」

「早く戻ってきなさいよ」

「わかった、できるだけ早くもどってくるとするよ、パチュリー」

私はスキマを開こうと思ったがさっき紫にやった事を思いだしてしまった。

「・・・ウドンゲ」

「どうしました？」

「今、スキマ開けたらどうなる？」

「・・・殺されるかもしれません・・・」

「どうするか・・・私はまだ飛ぶことなんてできないし歩いていたらどれだけかかるかわからないし・・・」

「（これは・・・ハルさんの好感を深めるチャンス！）私は歩いていてもかまいませんよ」

そういつてウドンゲは何を考えていたのか顔を赤くした。だがそれにパチユリーが何故か反応した。

「ちょっとあなた、何か企んでるの」

「いえ、何も企んでなんかいないです」

「（あやしい・・・もしかしてこいつもハルのことが・・・）そう、ならいいわ。ハル、あなたも変な気を起こさないようにね」

「わかったよ」

私はそんなに大変な人に見えるのか？

私はそう考えて少し悲しくなったが、変なことはしないようにしようと決意をして、とりあえずウドンゲを送るために歩くことにした。

私たちは紅魔館から出て門のところに来ていた。

「あれ、ハルさん何処へ行くのですか？」

「ちょっと紫に嫌がらせじみたことをしてしまって、スキマで移動しようとしたら殺されそうなんだ」

「なるほど、ハルさんスキマ移動でしたからまだ飛べないんですよね」

・・・痛いところを突くな美鈴は。私は練習をさぼっていた私を恨む

ぞ！

「そうなんだよ。おかげですぐに送れなくなってしまった」

今思えばウドンゲだけ飛んでいけばいいのだが・・・ウドンゲからそのことを言ってきたらだな。

「だったらウドンゲさんだけで戻ればいいんじゃないですか？そのほうが早く着きますし」

「いや、それじゃここまで連れてきたのに失礼だ。それに、ウドンゲも少女なんだし」

「ハルさん・・・優しい人です」

「そう？ありがとう」

「ちなみに私をどう見ていますか？」

？何でそんなこと聞くんだ？・・・一応答えとくか。

「美鈴は強くて優しい少女だと思うぞ」

「・・・そうですか」

私は自分なりに褒め言葉を言っただつもりだったがちゃんと褒め言葉になっていくか心配だった。どうやらちゃんと褒め言葉になっていたらしく美鈴が笑顔になった。

「ありがとうございます」

「気にするな、いつも思っていたことだ」

私は本音を言っただつもりだったが、美鈴は顔を何故か赤くしていた。  
・・・怒らせた？

「ハルさん！早く行きましょう！」

私は美鈴にどうしたのかと聞きたかったが、ウドンゲに連れられて聞くことができなかった。

後で理由を聞かないといけないといけないなと思ったが、とりあえず今は私のやるべきことに専念することにした。

「あたいつてば天才ね！」

竹林は人里を通ったその奥にあるということなので、まずは人里を目指していたんだがゆっくり歩きすぎていたのかいつの間にかちよつと変で妖精にしては一段と強く、そして能力持ちの妖精が出てきた。一応こんな存在の説明を受けていたのであまり驚かないが。

「あたいの作戦は完璧よ！」

「………」

いきなり出てきて何が言いたいんだろうこの妖精。

「その外来人」

「……なんだ」

「あなた、あたいと弾幕ごっこで勝負しなさい」

「……はあ」

弾幕ごっこならいいが……なぜ？

「ハルさん。妖精は基本的にバカです」

「むきー！あたいはバカじゃない、天才よ！その証拠に私が考えた作戦で新聞に載っていた外来人を見つけたことができたんだから！」

「じゃあ・・・その作戦の内容は？」

「ふふん、聞いて驚きなさい。作戦の内容は・・・ここら辺で待ち伏せをする！」

「・・・バカだ」

ただのバカだ。そんな作戦、今私が歩いていなかったらかかるはずがない。

「だからバカじゃない！あたいは最強で天才のチルノ様なの！」

「わかったわかった。ところで、天才なチルノはなぜ私を探していたんだ」

「ふつ、やつとあたいが天才で最強つてことが分かったのね。いいわ、教えてあげる。それはあんたが新聞にのっていたからよ！」

・・・新聞つてあの新聞？でも何で探す必要があるんだ？それに天才とはおだてる為に言っ

たが最強とは言っていないぞ。

「なんで新聞に載っていたら私を探すんだ？」

「そんなの簡単よ。あたいが新聞に載らないで外来人が新聞に載っているのが許せなかったからよ。そしてあんたを倒してあたいがあんたより新聞に載るべき存在ということに分からせるためよ！」

なるほど。分かったよチルノ。

「やっぱりバカだ」

「むきー！もういいわ。勝負よ！」



チルノは私狙いの弾幕を大量に放ってきた。避ければいいのだが後ろにウドンゲがいるのでウドンゲもこれぐらいなら避けられると思っただが、時間を止めた。そしてウドンゲをお姫様抱っこして木の陰に連れて行く。そして能力を解除する。

(！何しているんですか！)

(ごめん。ウドンゲならあのぐらいの弾幕避けられると思ったが私は女には戦わせない主義だから・・・だめだったか？)

(いえ、そんなことはないです)

(よかった。じゃあとりあえず私はチルノを倒してくる)

(はい)

私たちは小声での会話を終了した。私は『どこいったのよ！』とか叫んでいるチルノの前に時間を止める能力を使って現れる。

「ばあ

「！あっあたいはこれくらいじゃびっくりしないんだからね！」

思いつきりびっくりしていると思うが。

「そうなのか。だったら今の表情は私を恐れていた表情なのか」

「ちがう！こうなったらあたいの本気を見せてやる！」

綺麗に私の作戦ど通りに事が進み、チルノが能力を使おうとした。

私はいつもの通りに能力をコピーした。

「あれ？なんで能力がつかえないの？」

「チルノがバカだからじゃないか？」

「あたいは最強で天才なの！」

「そうなのか・・・じゃあこれでどうだ！」

私はチルノからコピーした能力を使って冷気を思いつきりだした。どうせつてコントロールできないから調節しようとしても意味ないし。

「それはあたいの！」

「そうだ。私の能力は相手の能力をコピーする程度の能力だ」

「くっそー！」

これで終わりだな。

「じゃあ私の勝ちだ」

そういつて時間を止めてチルノの周りに弾幕をばら撒いた。能力が無く、チルノに避ける術はない。チルノは盗られたことには気づいていないようだがな。

そして、時間が動き出す。

「きゃー！」

弾幕は全弾命中した。そして私の勝ち。

「・・・よし、いくな」

放置していても大丈夫だろう。妖精だし。私はウドンゲのところに行った。

・・・が、ウドンゲはさっき私が出した冷気のせいで完全に凍ってしまった。まさに瞬間冷凍だがそんなこと言っている場合じ

やない。何とかして溶かさないと先に進めない。

考えた結果、溶かすのではなく破壊することにした。それなら、私にもできるし手っ取り早いからだ。そして、弾幕をぶつけて氷だけを壊した。・・・何気にうまいな、私。

「あれ？私はどうなって・・・」

「ごめん。私が遊び半分でチルノからコピーした冷気を操る程度の能力を使ってしまってそのときにウドンゲを凍らせてしまったんだ」  
「・・・すごいですね。一瞬で凍らせるなんて」

私も驚きだ。

「別に大丈夫なので早く行きましょう」

「分かった」

私たちはまた歩き出した。

「おお・・・ここが人里か」

いつも妖怪とかにしか囲まれていなかったから人が懐かしく思える。

「ハルさん、こっちに来たことないんですか？」

「ああ、いつもスキマで移動していたからな」

「なるほど」

いろんなところを見て回りたいがまずは永遠亭に行くのが先ということでもたウドンゲに案内されながらついていくことにした。

歩いている途中、ウドンゲは人里の人によく声をかけられている。ウドンゲが言うには永琳の代わりによく薬を売りに来ているからなのだそうだ。

「ウドンゲは里の人と仲がいいのか？」

「いえ・・・」

「それが普通か。私がおかしいだけだよな」

「それは違います。人によって妖怪に近づく人はいます」

「そうなのか？」

でもやっぱり人によってなら変人じゃないのか？

そう思っていたらウドンゲに近づいてくる女性がいた。

「鈴仙、いつも薬を届けてくれてありがとう。おかげでみんな助かっている」

「いえ、これが仕事ですから気にしないで下さい」

おおっ・・・さっきまでは一言だったのに言葉数が増えた。

「これからもよろしく頼む」

「はい」

・・・たしかに人によってさまざまだな。

私は会話が終わつたと思ひ歩き出そうとした。だがまだ終わつていなかったらしく今度は私にしゃべりかけてきた。

「君は確か……」

やばい……ここにも新聞は回っているはず。

「あの新聞に載っていた外来人か？」

「（やつぱり！）……そうです。ですが『あの新聞はガセネタだろっ』……なんでわかつたんですか？」

「あの文が持つてくるのはだいたいがあんなものだったりするからな。それにあんなひどい事されてウドンゲが君と一緒に行動するのは、思わないよ」

すごい……それだけで真実を見つけてしまうなんて。

「その通りです。おかげで誤解を生まずにすみました」

「いや、もし君が鈴仙と一緒に居なかつたら私は誤解していただろう。そうなつたら誤解していた私が悪いからな」

「わかりました。じゃあ私達はこれから行く場所があるんで」

「ああ、だがその前に名前を教えてください」

「私の名前は神崎ハルです」

「私の名前は上白沢慧音だ」

私達はまた歩き出したが、いちいち話すのも嫌だとウドンゲが言うので私がコントロールも兼ねて波を操り相手からは姿を認知できないようにしようとした。が、やつぱり最初はコントロールが難しく

て周りから私とウドンゲが見えなくなりました。ただけなのに全体が見えなくなってしまった。ウドンゲは自分だけは元に戻したがこんな全体は時間と力が大変かかるらしいのでまた練習を兼ねて私がやるはめになってしまった。おかげで波長はだいたいコントロールできるようになったが何回もやったので、力の使いすぎですごい疲れた。

そして今、私達は竹林の前にやっと着いた。

「・・・なんか、爆発音が聞こえるんだが」

「これは・・・また姫様とあの焼き鳥が殺しあっていますね」  
焼き鳥って・・・妖怪？

「殺しあっていいのか？」

「あの二人は死にませんから」

「へえ」。輝夜は分かるが、もしかして相手のほうは能力で死なないのか？」

「そうです。よく分かりましたね」

「私の能力も日々進歩しているんだ」

「そうですか。・・・とりあえず行きますか」

「ああ、じゃあウドンゲ、案内よろしく」

「はい」

まったく歩いたりしていないから一人では行ったら間違いない迷う。

・・・たまにはスキマじゃなくて歩いたりしてみようかなと思いつながら、私はウドンゲに付いていった。

ウドンゲに案内されてから着いた場所はここは本当に竹林か？と思うような場所だった。なぜなら、そこには竹林じゃなく焼け野原が広がっていたからだ。そしてその中に輝夜とさつきウドンゲが言っていた焼き鳥と思われる少女がいた。……鳥の妖怪だと思っていた私を許してくれ。

「どうしますか？」

「どうするかって言われていもな……輝夜とその焼き鳥って言う人はいつもこんな感じなのか？」

「そうです」

「……ならほつといてもいいだろ」

ただのじゃれあいみたいなものだろうからな。

そう思っていたが近くにいと危ないので少し離れて様子を見ることにした。死なない能力を一度見てみたいしもしかしたらコピーできるかもしれないし。でも無理にコピーしたらどうなるか分からないので一応は慎重にやりたい。

「そういえば……もう私はいなくてもいいんじゃないか？」

「まだいないとだめです」

「なんでだ？」

「それは……あの焼き鳥の新聞の誤解を解かないといけないからです」

「……そうか」

なんとなく乗せられている気がするが確かにそうだな。

「じゃあ早くこの喧嘩を終わらせよう」

「・・・そうですね」

「ウドンゲはここにいるだけでいいよ。私にやらせてくれ」

「分かりました」

よし、やるか。

しかし、やる気になった私だが勝手に決着がつくらしく二人で大変な大技を放とうとしていた。

「危ない！」

このままじゃ私達も巻き添えだ！

私は時間を止めてまたウドンゲを抱っこしてとにかく走った。そして、さっきいた場所より少し離れた場所でウドンゲを降ろして時間を止めるのを止めた。

「・・・また時間を止めました？」

「そうだ。あのままじゃあの二人の大技をくらっていたかもしれないな  
かったからな」

私がそういうと二人がいる場所から爆発音が響いた。

「・・・ありがとうございます」

「どづいたしまして。よし、様子を見に行こう」

殺し合いの結果を見に行くと輝夜はすごいボロボロで腕が一つなく、



焼き鳥のほうは少し服が焼けていた。・二人ともこんな殺し合いをして大丈夫なのかと思う。それに後処理も大変だろうな。

「・・・くっそー。また負けた」

「私に勝つにはその引きこもりをどうにかするんだね」

「ふん！それは永琳がいけないんだ！」

言い争っていて私達の存在に気づいていない二人。そして、輝夜のほうは腕がもう完治しつつあった。私は焼き鳥少女の能力を感知しコピーした。そうするとそれに気づいたのかこっちにきた。

「今、なにをした」

「私の能力で君の能力をコピーしたんだ。すぐ能力は使えるようになるから大丈夫だよ」

「・・・」

一瞬、何言っているのかが分からないようで、沈黙があった。だがすぐにそれを輝夜が破った。

「あら、ウドンゲじゃない」

「姫様、こんな戦いはしてはだめと言っていますでしょう」

「いいじゃない。どうせ死なないし」

「それに服だって」

「うっ・・・気にしない気にしない」

「はあ・・・」

「輝夜はなんでこんなことしているんだ？」

「暇だからよ」

「そうなのか・・・」

絶句したが焼き鳥も少しのフリーズから復活したようなので気を取り直して今度はそちらに質問をした。

「まず君の名前は？私は神崎ハルだ」

「・・・私の名前は藤原妹紅だ」

やっぱ焼き鳥って名前じゃなかったか。うどんゲたちがあだ名とかをつけただけだと思っていたがやっぱりそうだったのか。

「お前、さっき能力をコピーしたといていたな」

「そうだが」

たしか死なない程度の能力だったけ？

「つまりあんたも死なないって事になったのか？」

「私の場合はコピーした能力を選択して発動してそのコピーした能力の効果を得ることができんだ。だから自分がその能力を選んで発動したときだけ」

今は、能力を二つ同時に発動できるからどの道不死身だけどな。

「・・・わかった。輝夜、またいつか勝負だ」

「望むところよ」

たくさん質問とか来ると思っていたが意外にあっさり帰っていった。おかげで新聞のことを聞くのをすっかり忘れていたが相手もいつてこなかったところを見るとたぶん回ってきていないのだろう。ていうかそうであってほしい。

私は今度こそ永遠亭についてうどんゲを送れた。だがまた帰るときに歩くというのはすごい疲れると思っていたときスキマがいきなり下に関き落とされた。

中には当然紫がいるわけで私は怒られるかと思ったがでてきた言葉は意外なものだった。

「どう？大体わかったかしら？」  
「は」

どういふことなんだ？

## 第十五話（後書き）

作者は説明の文を入れていないとかがありますので設定の説明とかが欲しい場合は感想に書いてください。

## 第十六話

ハルside

怒られなかったことで逆に心配になった私は少し気をつけながらそのわけを聞くことにした。

「どういうことだ？」

「そこまで警戒しなくてもいいわよ。最初から怒ってなかったもの」「紫が言っても信用がない」

「あらそうかしら」

「そうだ」

「まあいいわ。私があなたにやってもらいたかったのは幻想郷を見て回ることでここににいる住民に軽い挨拶よ」

「なぜそんなことさせるんだ？」

「次期管理人だからに決まっているじゃない」

そうか、なるほど。私の行動は紫の計算どつりでやらせたいことも達成しているから怒らないのか。

「これでだいたいの人には顔を見せたわ。これでいろいろと困ったときに顔が利くわ」

「わかったが私は管理人は無理だ。それにフランの世話係だし」

「大丈夫。問題が起こったときにしか呼ばないわ」

「いや、じゃあ……」

「もしかして何をやればよかった事かしら？」

「そうだ」

いまさら抵抗したって無駄だということは悟った。

「やる気になってくれてうれしいわ。大体のあなたの仕事は・・・  
そうね、この幻想郷の守護かしら」  
「・・・それは・・・私には無理だ」

ただの人間がそんなでかいことできるかよ。それに私はまだこの  
地形を完全には把握していないし。

「大丈夫、そこまで厳しくやれということじゃないわ。自分の身の  
回りと異変が起きた時だけにやればいいわ」

「そんな軽くでいいのか？」

「外の世界とは違うのよ」

「・・・まあ、そうだな。わかった、がんばってみる」

「その前に飛べるように練習とここの地図を記憶してもらおうわ」

「・・・わかった」

結局フランと一緒に練習かよ。

「じゃあもういいわ」

「・・・そうだな」

私達はスキマの中での会議を終わり私はスキマを開いて紅魔館へと  
戻ってやることも特にないし、フランは大体夜に動くだろうからそ  
のときが来るまで寝ることにした。

そして、夜になって起きるといつもはいなかったフランがいた。

「あつ、やっと起きた!」

「おはよう」

「おはよう!」

やけにテンションが高いなフランは。何かあったのか？

「今日はやけにテンション高いな」

「そうだよ。いつもこの時間にお兄ちゃんが起きるのを待っていたんだよ。そして・・・ついに起きてくれた!」

「いつもって・・・なら起こせばいいじゃないか？」

「そしたらお兄ちゃんはフランを嫌いにならない？」

そうか、私が始めての友達みたいなものだからな。

「別に嫌いになつたりしないよ」

「やった!じゃあ次からは起こしてあげる」

「たのむよ」

「わかった!じゃあ早速・・・お兄ちゃん、弾幕ごっこしよう!」  
「いいよ」

私達は弾幕ごっこをするために外に向かった。ここの中でやったら壊しすぎるからだ。主にフランが。

そして、門のところについた。そこには、眠っている美鈴がいた。

「うん、これがいつもの美鈴だ」

本人に言ったら酷いとか言われそうだがな。

「お兄ちゃん。・・・またいたずらするの？」

「いや、しない。ここからもうちよつと離れた場所で弾幕ごっこはやるっ」

この時間、眠っていてあたりまえだし。

私達はもうちよつとだけ歩くことにした。フランは飛べるが私と一緒に歩いている。それを見ているとちよつと悲しくなった。そしてフランがいい場所があるということに付いていくと広場みたいな場所に着いた。

「こんなところあつたんだな」

いつもスキマで移動しているから気づかなかつたのか。

「うん！お兄ちゃん、弾幕ごっこしよう」

「いいぞ」

「私、お兄ちゃんが寝ている間にすごい強くなつたんだからね！」

「そうか。だがコントロールも付いたかな？」

「もちろん！」

フランの言葉を最後に弾幕ごっこが始まった。最初に弾幕を放つたのはフランで、フランは一直線の弾幕ではなく間隔がバラバラで避けにくい三色の弾幕を放ってきた。私はそれを能力は使わずで限り身体能力だけで避ける。人間の私にはかなりきついし当たったら死ぬかもしれないが死にそうになったときは妹紅の能力で何とかできたのでただひたすら避けた。

そして、全部の弾幕を避けきつた。



「よく考えたな、フラン」  
「えへへ・・・じゃあ次！」

今度は私狙いの弾幕を大量に放ってきた。フランが強くなった宣言をしたのだからこれだけでは終わらないだろうと思いつつ無駄なく少しの動きで避ける。そして思っていた通りでその弾幕の壁で見えなかったのを利用したさっきのバラバラ弾幕を放ってきていた。予想していたことなのでただひたすら避ける。私はフランがどう強くなったのか見たいため避ける。

全部避けるとさすがに疲れた。フランは大体1分近くは放なっていたな。

「はあはあ・・・さすがだな、フラン」  
避けられても体力を奪われるな、この攻撃は。

「次で最後だよ！・・・いつけー！」

これも作戦の内なのか休む暇を与えず間隔が狭い弾幕を出してきた。ルールはちゃんと教えてあるので一応は避けられるが、今の私には無理だった。私はそこで咲夜の能力を使って時間を止めた。

「フランはもとも力はあつたからな。それを活かしたことができたらすごい強くなるといったが、こんなに早く強くなるなんて・・・能力がなかったら今頃私は消えてなくなっているな」

私は妹紅の能力を発動させて咲夜の能力を解除させた。私は勝ちたいわけじゃないのでフランの弾幕をくらうことにした。そのほうがフランも自分に自信が持てるだろうし私も不死身の能力の効果を見ることができたからだ。

「あつ」

フランが何かいっていたようだったが私には聞こえず、思いつきり弾幕に当たってしまった。

すごい爆発音とすごい痛みを伴って私は吹っ飛んだ。

「がは！・・・痛い」

フランもだいぶ力のコントロールが付いたがそれでも痛覚は相当なものだな。能力があるといって避けるのは怠らないようにしよう。こんな痛み毎回わうと鬱になりそうだ。

「お兄ちゃん！」

「ああフラン、大丈夫だ」

「本当に？」

「そうだ。それにフランがちゃんと力を抑えられるようになっていたからな」

「そう？これで友達増えるかな？」

「増えるかどうかは分からないがとりあえず会える人は増えるぞ」  
ずっと紅魔館にこもっていて誰一人友達と呼べる人がいなかったんだもん。よし、私が夜の散歩に連れ出してやる。

「やった！」

更に広くなった広場で話しているとあたりが更に暗くなり真つ暗闇になった。だが私はフランと一緒にしゃべっていたので変化に気づけず頭の中もこの広場はフランの練習跡なんだとどうでもいい事を考えていた。

「あなたは食べてもいい人間？」

「！」

気が付いたら女の子がいた。そして大変なことを言っていた。

「あ、ルーミア」

「あ、フラン」

二人がなぜか話し合っている。もしかして知り合い？

「フラン、この人は今日のディナー？」

「ううん、私のお兄ちゃん」

いやそれは違う。

「へえ、じゃあ食べられないね」

「フラン、こいつは何だ」

「私の友達のルーミア」

即答かよ・・・危ない友達をお持ちで。

「ルーミアという少女よ。私は食べてもおいしくないし食べられないぞ」

「そうなのか」

「そうなんだよ。だから他をあたれ」

「わかった。ばいばい、フラン」

「ばいばい！」

二人は勢いよく手を振って別れを告げてルーミアは黒い球体にはいつてどっかにいつてしまった。黒い球体は能力みただったがコピーするとめんどくさい事になりそうなのでやめておいた。

「フランはいつルーミアと友達になったんだ？」

「ここで練習しているとき！」

そうか。さっき友達は増えるかと思ったが、危ない友達ばかり増えそうだな。

ルーミアがいなくなるとさっきまで真っ暗だった辺りがまた夜空の光で明るくなった。今日はこれぐらいにして別のことをしようと思う。

「フラン、今日は練習はこれくらいにしてどこか適当に夜の散歩に行かないか？フランにはもっとがんばって欲しいが休みも必要だから」

らな。それに私が寝ているときは一人でがんばっていたようだし」

「一人じゃないよ、ルーミアとかお姉ちゃんも一緒だったよ」

ルーミアだけじゃなくレミリアもかよ。

「レミリアは何か言っていたりしなかったか？」

「うん・・・」別になにも企んではないわ』」

ご本人レミリアが来た。

「いや、別にそんなこと考えていたわけじゃない。ただ私のことを変に教えていないか気にしていただけだ」

「別に教えていないわ。ただいきなり襲われるかもとしか・・・ね」  
「教えているし。しかも新聞見ていたのかよ。」

「フランは別にお兄ちゃんに襲われてもよかったよ」

「いや、良くないから。それにそれは嘘だから」

フランが逆に怖い。後、そんなことすると私が女の敵になってしま  
う。

「ふふっ、分かっているわ。じゃないと私が今、あなたと一緒に居  
るはずないじゃない」

「わかっているならいいけど」

「フランも分かったよ」

だいぶ話が脱線してきたがフランと一緒に散歩することになった。  
レミリア付きで。

「・・・なにやっているのかしら」

歩き始めてから少しするとなぜかハルがジャンプし始めた。どこかのウサギのまねかしら？

「いや・・・飛ぶ練習を」

「・・・どういう意味かしら？」

「恥ずかしながら私は飛ぶことができません！だから早く飛べるようになるためにこんなことしているんです！」

そこまで必死にならなくてもいいんじゃないかしら・・・

「飛ぶ方法なんて簡単よ。自分が浮くイメージを描きながら力を放出すればいいのよ」

「・・・そうだったのか」

なぜかハルは頭を抱えだした。ハルはどんな飛び方を考えていたのかしら。

「・・・できた」

ハルは少しふらつきながら飛ぶことに成功していた。

「ありがとうレミリア」

「当然よ。それに教えることは嫌いじゃないわ」

「・・・フランもこれで強くなったのか」

「当たり前前よ」

私達はハルが飛べるようになっても歩いた。夜だから日差しはないがただ歩きたかったからあるいていた。でも、目的地だけははっきりして人里を目指していた。でもはっきりとした理由はなかったが。

「夜に歩くと何処が何処だか分からなくなるな」

「そう？私はいつものことだから何も感じないわ」

「そうだったな」

「お兄ちゃん、人里に行ったら友達できるかな？」

「友達はそうすぐにはできるものじゃないよ。まずは顔見知りからだな」

「はい」

フランは完全にハルになついているわね。世話係として当たり前だけれどすこしうらやましいわ。私は・・・何もしてあげていないもの。

「どうしたレミリア。悩み事か？」

「・・・なんでもないわ」

とりあえずは現状維持ね。

私達はたわいもない話をしながら人里に向かって歩いてきた。だがいつもなら襲ってくるはずの妖怪や妖精はいなかった。たぶん私達が危険というくらいは察しているのだろう。でも、すこし静か過ぎるように感じた。

ハルside

ずっと歩いてきてようやく付いた。何で飛ばなかったのが今になつてわからない。飛ばばよかったと思う・・・すごい疲れた。

人里の中は昼と違って妖怪がいっぱいだっただ。それに昼より里全体が盛り上がっている気がする。

「レミリアはこの状況になっっていることを知っていたのか？」

「ええ、夜は大体ここに来ているわ」

夜遊びはいけませんと言いたい所だが私より年は上なんだよな。

「そうか・・・フランは何処に行きたい？」

「・・・全部！」

すごい上機嫌だな。初めての外だから仕方がないと思うが。

「そう、なら二人でいろいろ見てきなさい」

そういつてレミリアはどこかへ行ってしまった。ちよつと止めようとおもったが人ごみならぬ妖怪の集まりの中に混じって見えなくなつた。

「・・・もうちよつと一緒に居ればいいのに」

せつかくの姉妹なんだし。

「大丈夫だよお兄ちゃん。お姉ちゃんは少し素直じゃないだけだよ。それがお姉ちゃんの性格だし精一杯の優しさだよ！」

「そうなのか・・・なら今を楽しむか」

「うん！」

私とフランは人里を見て回った。私は一度来ていたがあの時は通るだけだったのでそこまで見ていなかった。だから私もフランと一緒に見て楽しんだ。妖怪が人を食べるだけじゃなく普通に人間が食べるものを人間と一緒に食べていたのをみたり、頭に角を生やした少女が酒をすごい飲んでいたり、妖怪や人相手に商売している人など現代とは違つところがたくさんあつた。フランはフランでいろんな

人にしゃべりかけたりしていた。一方的過ぎたので会話の仕方も教えなくてはと思った。

「だいたいは見て回ったな。フランは楽しかったか？」

「うん！いろんな人とおしゃべりできてすごい楽しかった」

「そうか」

そろそろ紅魔館に戻ったほうがいいと思いレミリアをスキマで探そうと思つたら九尾の妖獣がしゃべりかけてきた。

「あなたがハルさんですね」

「・・・そうだが」

また新聞のことか？

「私は八雲紫様の式神の八雲藍といます。以後お見知りおきを」

「はあ・・・なんで話に来る必要があるんだ？」

「紫様の仕事を手伝ってくれるとの事でしたので今偶然見つけたのでせめてあいさつをと思ひまして」

「・・・分かった。だが敬語はいいよ。普通にしゃべってくれ」

「そうか・・・分かった。じゃあこれで」

藍が帰るとき私は藍が能力を持つていたのでコピーした。藍はコピーに気づいたがそこまで気にすることじゃなかったらしく振り向くことなくどこかに行った。たぶん紫から私のことを聞かされていたのだろう。・・・ってか、紫すごすぎ。妖獣の最高峰の九尾を従えているなんて。

「お兄ちゃん今の人・・・お兄ちゃんの友達？」

「いや、顔見知りになっただけだ」

「じゃあフランと同じだね」

「そうだな」



私とフランはスキマの中に入りレミリアのところへスキマを開いた。レミリアは甘味所で座っていてなにか考えていたようだが私達が来てすぐにいつもの顔に戻った。帰りは歩いていかずスキマで戻りみんな別行動を取ることになった。私は歩きすぎで疲れたので眠ることにした。明日がいつもどおりであるようにと願いながら。

## 第十六話（後書き）

この頃はインターネットが何故かつながらなくて大変でした。

それと誰でもいいので早く書けるコツとかを教えてくださいませんか。  
おねがいます。

第十七話（前書き）

オリジナルの異変が始まります。

## 第十七話

ハルside

起きると笑顔の美鈴がいた。何故ここにいるのか。そして何故笑っている。

「おはようございますハルさん」

「・・・おはよう」

「私が何故ここにいるのか疑問ですよね？」

「ああ」

「少し前に私と約束したことがありますよね」

「・・・たしか、私の叶えられる範囲で美鈴の願いを聞く、だったな」

「はい。それを今聞いてもらいます」

「別にいいけど」

まさか戦えとかじゃないよな・・・まあ、美鈴かぎってそんなことはないか。

「私・・・あまりここから動いたことがなくて幻想郷のいろんなところをいっってみたいんです。ハルさん一緒に行ってくださいませんか？」

「それぐらいならべつにいいぞ」

「ありがとうございます！」

「じゃあさっそく行くか」

「あ、でも外はまだ暗いですよ」

「そうか・・・でも私は別に大丈夫だ。美鈴がいいのなら行こう」

「私は大丈夫です」

「そうか、じゃあ行こう」

そう言つてスキマをあけようと思つたが観光なら飛んだほうがいいだろうと思ひスキマを開けなかった。そして、紅魔館の前に来たとき私は重大なことを思ひ出した。

「そついえば美鈴はレミリアの許可を取つたのか？」

勝手に出て行つたりしている私と言えることじゃなかったが、美鈴は門番だから一応確認しておく。

「はい、レミリア様から確認は取つてあります」

「そつか・・・じゃあいくか」

・・・何処から行くのかな。

美鈴 side

主から許可が下りると私はもうすぐくうれしくて思わずハルさんの部屋に飛び込んでしまった。そして、すこしいきなりだったがハルさんものつてくれて二人でデートです。外はまだ暗かったけどハルさんも気にしてないようですし大丈夫ですよ。

「じゃあ何処から行く？」

実は大体は行ったことがあるんですけど・・・ここは嘘で通します。

「私はあまり分からないのでハルさんが決めてください」

「分かった。じゃあいつた事があるところとかを言ってくれないか」

「私がいつた事があるところは人里と永遠亭だけです」

できるだけ人がいないところに行かないと。

「よし、じゃあ行こうか」

「はい」

これでいろんなところに行って最後には・・・こつ告白を・・・

私は顔を赤くしたがハルはこつちを見ていなかったのと周りが暗かったことで顔が赤くなっているのには気づかれなかった。それにしても、この暗さは異常だと思う。いつもの時間だとするともう太陽が出ているはずなのに・・・まあ、たまにはこういう天気もあるのですね。

私は考えることを止めて今の大切な時間をすごすことにした。

ハルside

私は困っていた。案内するといっても私は永遠亭と人里と博麗神社にしか行ったことがなかった。向日葵のところは論外だ。いったら案内どころじゃなくなる。案内するときに永琳のところでも案内した方がいい場所のアドバイスを聞くことと思っていたんだが、もういつたことがあるといわれたら行こうにもいけない。・・・ここは知っているところから適当に回ってそのときに時間を止めて一人で幻想郷のあちこちを見て周り、案内できる場所を案内するしかないだ

ろう。

私は考えを決めて美鈴に行く場所を伝えてさっそく飛んでいくことにした。美鈴は少しだけ困ったような顔をしていたがすぐに笑顔で返事をしてきたので大丈夫なんだろう。

「じゃあいこう」

「・・・はい。でもハルさん飛べたんですか？」

「いや、一応はな」

「そうですか・・・なら落ちそうになったら私が抱っこしてあげます」

「男として遠慮したい」

プライドがどうなるか分からないからな。

私達は夜空と思われる世界を飛んだ。だが飛んでいるとき私は妖精のいたずらを受けると思っていたが受けなかった。たぶん美鈴がいたからだろう。だがそれだけじゃなく私達以外が動いていない気がしたので少し不気味だった。それは今が夜だからだと思うが。

そんなことを考えながら飛んでいると博麗神社にいつの間にか着いた。

「ここは博麗神社といってこの幻想郷を管理している人がいる場所だ」

「・・・そうですか」

なぜか美鈴のテンションが下がった気がする。

「今は暗いから挨拶はできないがこの近くを見るのはいいかもしれないな」

「そうですね」

美鈴が歩き出そうとしたとき、私は咲夜の能力を発動して時間を止

めた。私はその状態で空を飛びいろいろなところを見て回った。空からは光が少ししか出ていなかったためあまり見えなかったが、場所だけおぼえて戻った。幽香から幻想郷のあちこちの説明は聞いているのでそれだけでいい。

そして、美鈴のところに戻り能力を解除した。

「よし、じゃあ次いくか」

「はい」

私達は飛び、今度は妖怪の山のほうに向かって飛んだ。

「ハルさん」

「なんだ？」

「静かですね」

「そうだな」

「もし・・・幽霊とかが出てきたら飛びついてもいいですか？」

幽霊なら当たり前にいると思うが、美鈴は幻想郷をあまり知らないことだからたぶん生態系も知らないのかもな。

「いいよ」

「ありがとうございます」

そういうなり私に抱きついてきた。いきなりだったので落ちそうになったぞ。

「なにするんだ！」

「だって後ろにお化けがいたんです」

そういわれて後ろを見る。だがそこには何もいなかった。

「なにもいないぞ」



「ハルさんには見えていないんですか？」

「なに？人によっては見えないとかあるのか？」

「さあ、私には分かりません。でも・・・とにかくいました」

・なんか、ただ私に抱きつきたいだけのようない気がする。それでも嫌な気はしなかったので気にしないでおこう。これは男だからしょうがないよな。

しかし、私達の後ろで怪しいものが光っているのにこのとき私は気づいていなかった。

「ついたよ」

「ここは？」

「ここは妖怪の山といっているんな妖怪のたまり場だ」

「へえ」

「ここには河童や天狗がいて天狗はこの山の管理人みたいなものをしているらしい」

「そうですか。ハルさんは物知りですね」

「そうでもないさ。私は教えてもらったことをそのまま言っているだけだよ」

「それでもです」

「ありがとう。でも、この山に入るのは少し危険だから今はながめるだけにしよう」

「はい」

「じゃあ次のところにいこうか」

私達は次の場所へと向かうため飛んだ。だがこれでいいのか？案内といっても場所しかいえていないし詳しく中の内容までは今が夜で暗いから中に入ったら危険で入れないし、ぜんぜん案内になっていない気がする。

「なあ美鈴」

「なんですか？」

「こんな案内でいいのか？」

「いいですよ。ハルさんが一緒ですから」

「？意味が分からないぞ」

「気にしないで下さい」

これでいいなら私が気にすることもないか。

この後も私達はいろいろなところを回った。

だが、全部回ろうとしたんだが魔法の森だけが何故か見つからなかった。

（あれ？時間を止めて回ったときもそうだったがなぜか魔法の森だけが見つからない）

私は少し考えて、明るくなったら分かるだろうという結論に至った。

「ハルさん」

「どうした美鈴」

「あ・・・行ってほしい所があります」

「・・・べつにいいよ」

私は美鈴に連れられて鈴蘭が大量に咲く野原みたいなところに連れられた。暗くて辺りはそんなに見えないが一瞬幽香がいると思って身構えてしまった。

「どうしたんですか？」

「いや、なんでもない」

恥ずかしすぎる。お花畑＝幽香がいるという方程式がもう私の頭の中にはできているんだな。

「ハルさん」

「なんだ？」

「ハルさんは・・・好きな人とかいますか」

「友達みたいな感覚ならいるぞ」

「じゃあ・・・愛する人としてはいますか？」

美鈴は顔を赤くして聞いてきた。

「・・・いないよ。私にはどんな人も似合わないよ」

「そんなことはありません！」

勢いよく否定されたので私はすこし後ずさった。

「そんなことはありません。似合う似合わないなんて関係ないです」

「・・・」

「どれだけ愛し合っているかが大事なんです」

「・・・そうか」

でも私にはどんな気持ちが恋か分からないな。

「ハルさんは『みつけた』」

美鈴が何か言おうとした時、霊夢の声が聞こえてその後空から誰かが落ちてきた。声からして霊夢だと思うけど。

「いい雰囲気みたいだけど今はそれと頃じゃないわ」

「・・・はあ」

そういわれたため息をつく美鈴。私は何故ため息をつくのかわからなかったがたぶんこの案内が中断になりそうなのに悲しんでいるのだろう。

「それで・・・なにが大変なんだ」

「そうですね、何が大変なんですか!」

「そんなに怒らないでよ。この幻想郷の危機なんだから」

「「え」」

そんなにでかいことなのか。

「どんなことが起きているんだ」

「今、真っ暗よね」

「ああ」

さっきまでは空から光が漏れていたのに今はもう真っ暗だ。私達はそのなかでどうやって話していたかって?・・・方法は聞くなつてやつだな。

「おかしいと思わないの?」

・・確かに言われてみればおかしい。私が起きてから何時間も立っているというのに明るくなる気配が全然感じない。それどころかもっと暗くなっている気がする。

「ずっと暗いのはこの幻想郷の天気のせいじゃないのか?」

「バカなのあんた。・・・まあそこまでここにきて日が経っていないからしょうがないか。そんなわけないでしょ。あなたがいる外と同じよ」

「そうなのか・・・だとしたらおかしいな」

「いいままであなた達を探していたのよ。おかげですごい疲れたじゃない」

「なんで私を探すんだ？霊夢だけでも解決できるだろ」

「紫が呼んでいるの、とにかく人里に行くわよ」

「なんで？」

「あつちにいったらわかるわよ！」

霊夢は飛んで行こうとした。私はそのとき、霊夢が能力を使っていることに気づき能力をコピーした。そうしたら以外に霊夢が落ちてきた。私は時間を止めて真下に行き能力を解除してキャッチする。

「・・・」

霊夢に思いつきり睨まれた。

「ごめん。霊夢の能力が空を飛ぶ程度の能力という能力で飛んでいるとは思わなかったから」

「わかったから早く降ろしてくれる？あそこの人にずっと睨まれてるんですけど」

「・・・分かった」

私は美鈴の顔を見ないようにして霊夢を降ろした。

「飛ぶよりスキマで行ったほうが早い」

「・・・そうね」

私はスキマを開いて二人に入るように促した。美鈴には何故か女の人をナンパしないようにと言われた。私はするつもりはないのだが。そして、人里に着くと・・・

「あ、やっと来た」

何故か紅魔館メンバーがいた。今は太陽がないからいいのだが。その他にも永遠亭の人たちと妹紅と慧音さん、そして紫と後何人が知らない人がいた。

「なんでみんなここにいるんだ？」

「霊夢と紫に集められたのよ」

レミリアが言った。その隣ではパチュリーと美鈴が何故か睨みあっていた。

「なんで睨みあう」

「ハル。後で許さないんだから」

なぜパチュリーは怒るんだ？

「ふふん。先手必勝です」

美鈴がそう言うと美鈴はなにか風のようなものに吹き飛ばされて人里のどこかに飛んで行った。そして、その風のようなものをだして美鈴を吹き飛ばしたと思われるパチュリーも飛ばした方向に自分から飛んで行った。

・・・なんか、たいへんだな。

「あの二人、何やっているのかしら」

「同感だ、レミリア」

「今のことの発端が言ってもね。あなたは自覚していないのでしょうけど」

「今はいいからとりあえずこの異変のことについて聞いてもらえるかしら」

私が何のことを聞こうとしたら紫が割って入ってきた。

「・・・そうだったな。で、今幻想郷には何が起きているんだ？」

「みんなよく聞きなさい」

みんなの視線が紫に集まった。

「この幻想郷は今、植物に覆われているわ」

「はあ？」

「どういう事ですか？」

ウドンゲがみんなが思っていることを口にする。

「そのままよ」

その次に慧音さんがしゃべりだした。

「だが、一日でここまで覆えるぐらい植物を伸ばすことができるのか？それに普通の植物はここまで伸びないぞ」

「そうね」

「・・・じゃあ能力ね」

永鈴が言う。私はそういわれてすぐに自分の能力で能力の検索を開始した。幻想郷全体に大きく能力の検索をかけたら霊力の枯渇で倒れるが、今回は当てがあったのでそこに絞って検索。そして予想通り魔法の森のほうから能力を最大限に使っている奴がいた。

「そうみたいだな。魔法の森のほうで能力反応があった。・・やっぱり、だからあの時見つけられなかったのか。暗いから植物とは思わなかったぞ」

「そうよ。私はあと少しであれに閉じ込められるところだったわ」

私が知らないどこかの人形をそのまま人にしたような少女が言う。不思議な国のアリス？だったっけか？

「あなたの名前は？」

「私の名前はアリス・マーガトロイドよ」

「アリスさんは魔法の森の中にいたのか？」

「さみずけはしなくていいわ。そうよ、あそこに住んでいるもの」

「（魔法使いだから当然か）では首謀者の顔とか見たか？」

「そんな余裕ないわ。私は植物につかまらない様に逃げるので精一杯だったわ」

「植物なのに追いかけてくるのかよ」

「そうよ」

「そこでみんなで話し合って解決策を見つけないかということだな」

私とアリスがしゃべっているときに慧音さんが言う。

「違うわ。みんなを呼んだのは安全のためよ」

「どういうことだ紫。解決のためじゃないのか？」

「私もスキマで中は見たわ。あれの能力は植物を操る能力よ」

私が考えていると永琳が答えを出した。

「なるほど、どこでも植物があるなら操れるというわけね」

「そういうこと。だからあなた達をここにあつめたわけ」



「集めたのは私だけだ」

霊夢が言った。だが植物を操れるのならここも時間の問題だろう。

「この異変を解決するのはハル、あなたよ」

「え・・・何故？」

「相手の目的が何か分からないもの。もしかしたらこここの破壊かもしれない。ということでは今は今からこの幻想郷を覆う境界維持のために戻るわ。霊夢も博麗大結界の維持に当たらせるから残るのはあなただけということになるわ。それにあなたの肩書きはどうしたのかしら？」

「・・・分かりました」

「それでいいわ」

私達が話が終わると今度は霊夢の色違いバージョンの巫女姿をした少女が話しかけてきた。

「紫さん、私も霊夢さんを手伝ってもよろしいでしょうか？」

「ええ、いいわ」

「・・・私はどつちでもいいわ」

霊夢も許可してるからいいけど私は名前を聞かないと。

「あの・・・なまえを教えてくださいませんか？」

「おや、早苗にナンパかい？」

そついうなり何処からか後ろにしめ縄を付けた女性が出てきた。

「違います」

なぜ私はナンパをしていると誤解されるのが多いのだろう。

「・・・私の名前は東風谷早苗です」

「私の名前は一応知っていますね」

「はい、あの・・・新聞で」

「あれは嘘ですから」

「・・・そうですよね」

そういつと早苗は胸をなでおろした。・・・絶対さつきまで警戒されてきたよな。

「私の名前は八坂神奈子だよ」

「そして私が洩矢諏訪子だよ！」

いきなりまたどこからともなく幼児のような少女が姿を現した。

「・・・そうですか」

「反応が薄いね。私は神様なんだけどな」

「私も」

「・・・そうなの？」

私は近くにいる早苗に確認を取る。

「はい、二人とも私が祀っている神様です」

・・・本当にいるんだな神様って。

「わかった。どうも宜しく」

私は面倒になってきたのでこれ以上何か言われる前に紫と永琳たち

に向き戻り話を進める。

「じゃあ具体的に何をすればいいんだ？」

「中にいる奴を叩きのめせばいいわ」

「弾幕ごっこじゃなく？」

「ええ、だって相手は妖精なんだもの」

そういうとほとんどのひとが驚きの顔を見せた。そして、慧音さんが確認をする口ぶりで聞く。

「これだけのものを全部妖精がやったのか？」

「そうよ」

「・・・ここまでの力を持つ妖精がいたとは」

妖精だろうがなんだろうが私はさっさと終わらせて美鈴の願いの続きをしなくてはいけない。

「じゃあ紫、いつてくる」

私がそういうといきなり辺りが光がさした。ずっと暗かったのに目が慣れていたので眩しくて思わず目を瞑った。そして声が聞こえてきた。

「私も行くぜ！」

聞いたことのあるような声だった。

「・・・魔理沙！」

「なんだ」

「なんだじゃない！何をした」

まだ目が開けられない私は目を閉じながら聞く。

「私はこの植物の天井に穴を開けただけだぜ」

そうか。だからいきなり眩しくなったのか。

だんだん目も慣れてきたので目を開けると、ボロボロの魔理沙がいた。

「お前……」

「どうやって紅魔館に侵入するか考えていて決まったから外に出ると植物に襲われたんだぜ」

「……動機が不純だな」

「それより早く行こうぜ」

だが一人が増えるとは何故だか他にも増える。結局行くことになったのは私と魔理沙と妹紅に輝夜、フランとレミリアになった。妹紅と輝夜は不死身という理由で付いてきてフランとレミリアは面白そうという理由で来た。心強いがチームワークなどは最悪そうだし先が心配だ。

「……今度こそ行って来る」

「ええ、いつてらっしゃい」

私はスキマを開けて異変解決へと乗り出した。

## 第十七話（後書き）

この展開どうですか？感想宜しくお願いします。

## 第十八話

私はスキマを開き、植物で囲まれている魔法の森へと行くメンバーと一緒に中に入った。はつきり言って一人がいいのだがしょうがない。

「おおつ、ここがスキマの中か」

「魔理沙、感動はいいから作戦を立てよう」

「なんだ、そんなもの必要あるのか？」

「これはもしかしたら生死にかかわる問題なんだ。私と妹紅と輝夜は死なないからいいがそれ以外は死ぬ可能性があるだろ」

「あら私が簡単に消されると思っているのかしら？」

「違う、レミリア、そんなことは思っていない。だが全員ぶじで帰りたいんだ」

咲夜にも行く前にそういわれたし。

「お兄ちゃんは優しいね」

「優しいとかそんなんじゃないから」

「どうでもいいが早く行くこうぜ。私は早く仕返しがしたいんだ」

「何故来たと思えばそういう理由かよ」

「それで、どういう方法で相手を探すのかしら？」

「だからそれをいまから話したいんだ。・・・おい、さっきから殺しあっている二人・・・止めてくれないか」

私は妹紅と輝夜の殺し合いをなんとか止め、作戦を立てることにした。

「・・・頭から血が出るぜ」

「私は妹紅の能力をコピーしているから大丈夫だ」

「そうなのか」

「そうだ。じゃあまず相手を探す方法だがみんなはどんな方法が早く確実に相手を見つけられると思う？」

みんなが黙っていると先にレミリアが案を出した。

「あなたのその能力を見つける力で探せばいいじゃない」

「だめだ。私のその能力は私が自分で場所を指定してその範囲の中に入っている能力持ちを見つけるといふ効果だから探し当てるのに時間がかかる」

その上私がぶっ倒れる。

「だったら全部破壊して進もうぜ。植物は一応破壊できるみたいだし」

「魔法の森全体を破壊してもいいのか」

「・・・」

次に妹紅が言った。

「私が出す炎でその植物を焼くというのはどうだ」

「・・・いいかもしれない」

確かにそれなら必要以上植物を吹っ飛ばすことなく行ける。だが輝夜が対抗心を燃やしたのかその意見に異議を唱えた。

「それじゃ魔理沙と同じで何も残らないじゃない」

「ふん・・・私は炎をコントロールして必要以上には燃やさない」  
「そうかしら？あなたは何でも焼き尽くす焼き鳥屋じゃなかった？」  
「・・・私の不死の炎が焼き尽くすのは輝夜だけだ」  
「いい度胸よ！その役立たずな炎で私を焼き尽くせると思っているの？」

「なら試してやろう！」

「ちよつと待て！お前たちが話すと直ぐ喧嘩に発展するのか！」

二人は邪魔するのかと言いたげな目で睨んできた。だが邪魔しないと進まない。

「邪魔するのなら帰ってくれ」

「・・・」

「といつかなんで二人は付いて来たんだ？」

「私は・・・暇だったし自分もこの幻想郷で生きているという実感がほしかったからだ」

「私はずっと永琳に閉じ込められていて外のことが分からなかったから異変に乗じて外に逃げようと思ってよ」

妹紅と輝夜が同時に言う。そしてその後も同時に言葉を放った。

「「そしたらコイツも一緒に行きたいって言い出したのよ！」」

「・・・見事にはもっている」

実は仲がいいのか？

「なにはもっているんだ！」

「こっちの台詞よ！」

「ああもう！今は仲良くしないと強制退場させるぞ」



この言葉でやっと二人は落ち着いた。私はまた作戦会議を再開する。

「燃やすもいい案かと思ったがそれは最終手段として取っておこうと思う」

「じゃあ私のはどうするんだ？」

「魔理沙の破壊は逃走手段と隠れ技として持っておく」

「了解したぜ」

「私はどうすればいいのかしら？」

「・・・なにかいい案があるなら聞くが？」

「・・・あなたに任せるわ」

「フランも任せる！」

「そうか。私の案はフランとレミリアは囲みたいなものをやってもらうというものだ」

「あら、さつきは全員無事がよかつたんじゃないのかしら？」

「そうだ。囿といっても最初は二人で歩いてくれ。それに相手が寄ってくるかもしれない。私達はスキマで待機しておく。相手がそれにはまったら後は私がやる」

「・・・いいとこ取りね」

「・・・そうだな」

この後更に話し合った結果、レミリアとフランと輝夜と私で最初に行くことになった。妹紅と魔理沙はスキマで待機。最初の私達はやっぱり囿でおびき寄せたらみんなで叩くと言う作戦だ。何故私達を囿にしてこの異変の首謀者が寄ってくるのかという異議はなかった。まあみんな相手が妖精だとこんなお馬鹿な作戦でもひっかかると思っっているんだろう。私もその考えに賛成。

「じゃあ早速行動だ」

私はスキマを魔法の森の中に開けて歩き出した。

「いまさらだけどこんなに姿をさらけ出していいのか？ここは周りがすべて植物で何処からでも不意打ち可能だし、私たちの能力だつてばれる」

「妹紅は心配しすぎだぞ。不意打ちにかかるのはこのメンバーだと私ぐらいだろうし能力がばれたつてすべて対策できるようなものじゃないだろ」

「・・・そうだったな」

「それに相手は妖精よ。能力がすぐくても私達には及ばないわ」

「・・・そうだな」

たぶん妹紅も相手が妖精ということを一瞬だけ、ほんつつつの一瞬だけ忘れていたのだろう。私と一緒にレミリアの言ったことにならずにいた。だが、それでも相手がどんなことをしてくるか分からない以上、警戒はしないといけない。それに・・・

「辺りが真つ暗だ」

そう。私は人間だ。光がなくちゃ何も見えない。

「これでどうだ？」

妹紅が炎を作り出し、そのおかげで辺りがよく見えるようになった。だが以外に見えなかったほうがいいのかもれない。なぜなら他の植物は全部巨大化しており私達に襲い掛かってきていたのだ。だがその襲い掛かってくる植物をレミリアとフランが普通に破壊して行っていたので私達に被害は出ていなかったし普通に会話できていたのだ。だがレミリア、戦っていたのなら教えてくれ。

「・・・見えなかったほうがよかったのか？」

「見えていたほうがいいだろう。間違つて人食い花に突っ込んだりでもしたら大変だからな」

「そんなのもいるのかよ」

そんな中、植物を破壊しながらも余裕でレミリアが話しかけてきた。

「ねえ、どうやって妖精を探すのかしら」

「そうだったな」

私は能力を発動して時間を止める。そして霊夢からコピーした能力も使いながら森を高速で駆けて妖精を探した。自分が使っている能力は実質一つだからそこまで霊力を消費しないし、幻想郷に優しい。何度か木にぶつかって死にかけもしたが妖精を見つけることができた。その妖精はチルノみたいに人間サイズでチルノよりは大きく、少しだけふざけている様な顔つきだった。私の外の世界の友達だったやつ似ていたので一瞬だけその友達かと思った。そして、適当に光る弾幕をばら撒いて霊夢の能力の使用をやめ今度はスキマを開ける。時間を止めているはずなのに隙間は動いていた。まえに適当に開いたら動いたから開いた。たぶん、スキマは別世界とかになっているのだろう。と適当に結論つけてレミリア達のところに戻る。そして、能力を解除した。

「いま探してきた。それと少し後ろを向いていたほうがいいぞ」

私が言った瞬間、レミリアとフランは私が生きてきたことを理解しているのだろう。直ぐに私のところに飛んできた。それと同時に閃光手榴弾のような光が森の中を覆いつくした。私は目を瞑っていたから大丈夫だったがどうやら妹紅はくらったらしく悲鳴が聞こえた。

「大丈夫か？」

目を瞑りながら聞いてみるが何も返事がない。もしかしたら怒っているかとも思いいながらそろそろいいだろうと思いい目を開けるとフランとレミアはいたが妹紅がいなくなっていた。

「何処に行ったんだ妹紅は？」

「分からないわ。私達だって目を瞑っていたもの」

「吸血鬼でも目は丈夫じゃないのか」

「人間よりは丈夫よ」

「そうか。妹紅、何処行った？」

呼んでみたが返事がない。

「もしかして・・・敵に捕まった？」

「可能性はあるわ。相手は目が見えなくても植物を伝えて相手を捉えることぐらいできるでしょうから」

「・・・私のせいだ」

いつも外ではあの友達に会ったら何かしら軽く喧嘩の様なものをやっていたからここでも似ているという理由でついやってしまった。後悔は・・・ちょっとしている。

「あなたのスキマですぐ連れ戻す事ぐらいできるでしょう？」

「相手の力を捕捉して出現させるスキマでは妹紅と一緒に居る時間が少なすぎての力とかイメージが掴めていないから妹紅のところにスキマを出す事ができない」

「そう。でも気にすることないわ。どうせ不死身だし必殺の炎もあるでしょう？」

「・・・そうだが」

「さっさと敵のところに行って終わらせましょう」

「・・・そうだな」

そうしたらすぐに助けられるはずだからな。私はそう思ってレミリアとフランを連れてさっき見てきた妖精のところに行くことにした。

ハルが何かを言ったとき、閃光が走ってあたりが真っ白になった。強烈な光のせいで目が痛い。ようやく目が開けられるようになって目を開けてみるとあたりには植物の壁ができていた。

「なんだ・・・」

まだ少し目が痛いのが現状確認のため少しだけ炎をともす。周りは牢屋みたいに植物で覆われていた。

「もしかしてさっきの目くらましみたいなのをやった後に捕まえるという作戦に私ははまってしまったのか？」

実際そのようだったのでとりあえずここから脱出を試みる。だが炎ですぐ燃えると思っていた植物は・・・

「植物なのに燃えない！」

炎を思いっきり出して燃やそうとしたがなぜか燃えない。私は本当に植物かと思いい手に炎を灯して殴ってみると火で焼けた痕ではない

が傷跡はできた。

「・・・どうやら能力で硬くなっているようだ。それともこの森の植物がもともと硬かったのか？どちらにしろそれはそれで大変なことだ。ハルたちも捕まらないように願うしかないのか」

しかし、ここで私は魔理沙がドーム状の植物の上を破ってきたことを思い出した。

「もしかしたら純粋な破壊力があればいいのか？・・・それならやってみる価値はある」

私は片手に力を凝縮した弾幕を作ってみた。そしてそれを適当に飛ばして壁に当てる。牢屋は狭いから爆風が私にも当たるがその痛みだけしか私はくらわない。ものすごい痛みが慣れという物は怖いものだ、そこまで苦しむことなく終わった。

そして、壁には一筋の穴が開いていた。

「よし、これならいける」

だが、相手も破壊されているのに気づいたのか普通の植物じゃありえない成長力でさっき私が開けた穴を塞いでしまった。魔理沙があけた穴はそのままだったがあの時はあそこに能力の集中などをしていなかったただだったのか。

「・・・やっぱり妖精はすべてが馬鹿というわけじゃないな。これじゃあぶつ壊しても直ぐ再生して閉じ込められる。だが、まだまだ甘い。これぐらいするのなら毒を撒き散らすとかもつと牢屋を狭くして身動きが取れないようにやればいいものを・・・もしかしたら、捕まえて私を何かに使っつもりなのかもしれないな」

それならその妖精が出てくるのを待とうと思いついて攻撃を止めることにした。だが何もしないのは退屈すぎたので輝夜に愚痴を頭の中でいながら眠った。

ハル達が出発してから私はすぐに霊夢に人里に結界を張るように言った。

「霊夢、この人里に結界を張ってくれるかしら？」

「いいけどこんなに大きかったら結界を張ったとしても攻撃には耐えられないわよ」

「たしかに人里でも幻想郷の二割くらいはあるわ。でも私が張って欲しいのは防御用結界じゃなくて博麗大結界のような探知結界よ」

「そんなもの張ってどうするのよ。私は博麗大結界守らないといけないし、植物相手じゃ反応しないわ」

「大丈夫よ。相手はその植物に能力を使っているからその跡に探知するから。それに今ここにはたくさんのお戦える人がいるでしょう？」

「・・・そのためにみんなを集めさせたわけ？」

「いいえ。本当に安全のために呼んだだけよ」

「でも他にもいるわよ。そいつらは呼ばなくてもよかったわけ？」

「天狗と河童は山から出ないしあの戦闘狂を今呼んだらここが安全じゃなくなるわ」

「・・・それもそうね。じゃあ私は博麗大結界を守ってくる」

「その必要もないわ」

「・・・どういふことよ」

「相手は新しい妖精で幻想郷のことは何も知らないかもしれない。でも相手は幻想郷が世界だと思っただけでいいわ。それに普通はどちらも見えない、触れない、気づけないものだから心配要らないわ」

そう。あの妖精はここが世界のすべてだと思っただけでいいはず。この推測は高い確率で当たっているはずだ。だからここを覆って自分の世界という様に見せ付けている。そして後は自分が一番ということ。ここにいる奴に見せ付けられたいと思っただけ。なんという単純な行動なのかしら。所詮、妖精だから仕方がないのだけだ。

「・・・なるほどね。でもそれなら行かせるのはハルじゃなくてもいいじゃない。結界なら張っていけばいいわ」

「それじゃだめよ。あなたが暇なのは分かるけど今回は相手が能力で起こしている異変だからハルのほうが都合がいい訳」

「そうだったわね」

「だからどんなにあなたが日頃暇でイライラしていても今回は植物だけで我慢してね」

「イライラなんかしていないわよ！」

あら怖い怖い。霊夢も大変ね。

私は周りにいた幻想郷でも私が使えろと思っただけで人たちに向き直った。霊夢がまだ何か言っているがすぐに聞こえなくなるだろう。

「さっき私と霊夢が話していた通り、あなた達にはハル達が異変を解決するまで人里を守ってもらおうわ。何か異論はあるかしら？」

私がさういって慧音が手を上げた。

「異論は無いが自分を守ればいいなら人里でいちいち戦わなくても



いいんじゃないか？」

「だめよ。他のところで戦おうものなら四方八方から不意打ちが飛んでくるわ。ここは植物が他よりは少ないから少しは安全よ。それに私達が別のところに行つたとしてもここが攻撃されないという保証はないわ」

「・・・分かつた。できる限り戦わせて貰う」

「ええ、お願いしますわ。他に異論はあるかしら」

みんなはずつと黙つたままだつたので異論無しということまで話を進めた。

「結界を張つてきたわよ」

「ふふつ、早いね。みんな、死なないように頑張つて下さいね」

できることなら戦いなんて起こらないほうがいいのだけど。

場所のイメージだけを覚えてスキマを開いて妖精がいた場所にスキマを開いた。だがそこにはさつき見た妖精はいなかった。

「・・・いなくなっている。ここにさつきいたんだけどな」

「妖精はすべてが馬鹿じゃないわ」

レミリアがそういうと少しだけ周りの気温が下がった気がした。

「お兄ちゃんどうするの？」

「ちょっと待ってくれ」

私はさつきみたいに時間を止めて高速で探し回った。相手はそこま  
で遠くには行っていないかつたらしく直ぐ見つかった。私はレミリア  
のところに戻り能力を解除した。

「見つけた、ここから直ぐだ」

「そう」

「お兄ちゃんすごい！」

「ありがとう。とりあえず早く行こう」

私がスキマを開こうとしている時、レミリアとフランがおしゃべり  
をしていた。

「お姉ちゃん、相手はどんな妖精なのかな？」

「・・・そうね。少なくともどこかの馬鹿よりは頭が良い妖精よ」

「そうなのか。じゃあ強いかな？」

「どこかの馬鹿よりはね」

「じゃあ行くぞ」

私はその話を打ち切りスキマに入ろうとしたとき聞き覚えのある声  
がした。

「さつきからあたいのことを馬鹿馬鹿馬鹿と呼びやがって！あたい  
は馬鹿じゃないんだから！」

チルノが出てきた。また面倒な奴が出てきたと私は思いながらぼっ  
といて先に行こうとしたがチルノがそれを許さなかった。

「待ちなさい！」

「・・・なんだよ。私達は早く行かないと行けないんだが」

「私が天才で最強ということを思い知らせあげるんだから！」

チルノは話を聞いていないらしくチルノは氷の弾幕を放ってきた。私はそれを自分の弾幕で相殺する。

「レミアとフランは先にスキマに入ってくれ。」

「せいぜい頑張りなさい」

「お兄ちゃん頑張つて！」

頑張る気にもならない。私は前と同じで大量に弾幕をばら撒いた。だがチルノは意外にもそれを避けた。

「ふふん。そんなすかすか弾幕避けられないとでも思った？あたいは天才よ！これくらい余裕よ！」

「・・・どうやら馬鹿でも戦闘の知恵とかはあるんだな」

「ふん！見てなさい、私がいかに最強なのかを見せてあげるんだから！」

チルノは大きな弾幕を放ってきた。だけど大きいだけなので簡単に避けられる。

「ふふふ・・・いつまでその余裕が続くかしら」

「たぶん、お前相手ならずと続くだろう」

だがチルノの言う通り次が大変だった。またチルノがさっきと同じ弾幕を放ってきたのでよけると直ぐに後ろから弾幕が迫ってきていた。私は時間を止めてそれを避けた。

「なるほど。あのでかい氷の塊の弾幕を砕いてバックから攻める・・・私はまだまだだな」

チルノよ。確かに技術はお前のほうが上だったよ。認めよう。お前がただの馬鹿じゃなかったということ。

私は力の温存とかは関係なく魔法と能力を使った魔理沙のマスタースパークもどきを撃つ構えをとり魔理沙をまねて撃った。そして時間が動き出す。私が撃ったもどきレーザーはチルノに直撃コースを走った。チルノは弾幕で相殺しようとしていたが力が足りなかった。そのまま押されてチルノにあたり爆発した。妖精だからほっといてもいいのだが私はチルノに一言言っておきたかったのでチルノが見えるのをまつた。そして・・・以外にもチルノは元氣だった。どうやら植物が盾になったらしい。チルノの前には穴が開いた植物が並んでいた。

「それがあなたの全力？」

「違うが意外だな。植物がそこまで硬いなんて。それにチルノはこの異変の共犯者だったのか」

「違うわ！あたいは協力者よ」

どっちも同じだな。

「そうか。まあどっちでもいいが・・・チルノ、認めるよお前が馬鹿じゃないってことを」

「ようやく認めたわね？あたいが天才で最強ってことを！」

チルノはうれしかったのか馬鹿笑いを始めた。私はそれに乗って更なる提案をする。

「だが天才で最強なら私を倒せるはずだよな。しかもチルノ一人の力で」

「もちろんよ！」

「なら二人の最高威力で勝負だ」

本当は弾幕ごっこに威力なんてあまり要らないけどな。そういうなりチルノは冷気で弾幕を作り始めているが。私は何もしないでチルノが作り終わるのを待つ。そして・・・

「何もしないなんて・・・もしかして怖気づいた？」

「そうかもな」

適当に流す。

「いいわ・・・くらいなさい！」

チルノは私のようにレーザー状の弾幕を放ってきた。私は少しだけ動こうとしたが予想通りで足に植物が絡みついてきて動けなくなった。なにが予想通りかというと、チルノ以外の第三者が私の回避の邪魔をすること、そして・・・直撃した。チルノの攻撃は非殺傷なのかもしれないが最高威力だけあって殺傷設定並みの威力だった。

「ガッ！」

私は少しだけ血を吐く。だがそれに乗じて自分の弾幕を足元で爆発させて植物の絡みを取り、煙の中に消えた。・・・これはもちろん演技だ。

直ぐにスキマを開いて中に入る。これでチルノは私を追いかけこないだろう。たぶん。

「ただいま」

「血だらけね」

「演技の一つだ。リアルでいいだろ」

「そうね、飲みたくなるわ」

「・・・やっぱリアルじゃなくていいや」

「これからどうするんだ？話を聞くと妹紅が捕まったみたいだが」

「・・・私のせいだ。ごめん」

「あなたが謝ることじゃないわ。あの焼き鳥が捕まるからいけないのよ」

そんなことは無いと思うけど・・・相手が危機かもしれないのに輝夜はまだ喧嘩するのか。

「まあ、捕まったところで不死だから意味は無いけど」

「それが救いだよ。もし魔理沙とかだったら今頃どうなっているかわからないからな」

「それは酷い言い方だぜ。私だったら逃げ出すぜ」

「そう言うと思ったがあ植物は普通じゃないくらい硬い。私が力を凝縮したレーザーを撃つても少し穴が開くだけだったからな」

「威力が無かったんじゃないのか？私の攻撃は普通に貫通するけどな」

「植物の密度、その妖精の集中力で硬さが変わるんじゃないかしら？」

「そうかもしれないな。よし、相手はもう直ぐそこだから行こう」

「ええ」

「私も行くぜ」

「構わないよ」

直ぐに終わらせてやると気合を入れ、私はスキマを開けてスキマ空間から出た。

## 第十八話（後書き）

オリキャラの設定や能力ってすぐ思いついたりしますがこれでいいのか・・・っとよく悩みます。異変には必ず名前が必要ですかね？

## 第十九話

スキマから出るとさっきの妖精がいた。妖精だからなのかその妖精の回りだけ明るい。その妖精は私がスキマから出てきたからか、それとも見つかったことに対してなのかなかなか驚いていた。

「見つけたぞ。今回の異変の主犯」

「・・・なぜだ?!俺の完璧な作戦が見破られるだど?!」

この妖精はたぶんチルノみたいな性格だろう。最初にチルノが私と出会った時と同じようなことを言っているからだ。私は一応作戦の内容を聞いてみることにした。能力のことは聞かない。どうせコピーするときに分かることだ。

「その作戦とは?」

「聞いて驚け!この俺様がこの世界を手に入れるために考えた作戦だ!」

私はその言葉を聞いたとき、こいつはチルノと同じ性格でそれでいてチルノと同じくらい戦闘以外は能無し(馬鹿)なのだろうと確信した。

「まず一つ!この世界を植物で覆う!」

「覆って何の意味がある」

「そんなことも分からないのか。しょうがない、特別に教えてやる。なに、簡単なことだ。ここは俺様の物だぞと分らせるために植物で覆ったんだ!」

「それが理由?」



「そつだ！」

この自信満々の言葉を聴いている魔理沙にフラン、レミリアに輝夜は私と同じでコイツは馬鹿と確信しただろう。だが一応は説得に出るのでその言葉は出さないように目を合わせて頷く。

「次に二つ！世界に君臨するものは王様だ！王様には城がないといけない。そこで俺様はこの大きな城を作ったのだ！」  
「そうか。すごいな」

適当に相槌をうつ。心の中ではここは城じゃなくて牢屋だろ！と叫んでいたが。

「そして三つ！王様には必ず反乱を起こすものがある。それは王様ゆえ仕方の無いものだ。だから私は妖精以外の奴を襲つように植物たちに命令しておいたのだ！」

「・・・なるほど」  
だから襲ってきたわけですか。それにしても、命令が雑だな。上のものがそんなんじゃないやダメだろ。

「だがしかし、お前たちにその作戦を見破られてここまでこられるとは・・・まさか、俺様の家来になりたいんだな！」

「違う。私はお願いを頼みに来た」

「ほう。家来の頼みなら一つは聞いてやろう」

「この植物を元に戻してくれ」

「・・・何故だ。もしかしてお前は俺に反乱を起こす逆賊だったのか」  
「違うけどあんたがそうしないのならそうなる」

「いいだろう。王様の力を見せてやろう」

説得失敗だな。

私は戦う構えを取った。そうするとみんなが一斉に戦う構えを取るんじゃない。一斉にしゃべりだし始めた。

「コイツ馬鹿だな」

「そうね、馬鹿だわ」

「面白いくらいにね。ここまで考え方が単純だなんて……みんなが聞いたら呆れるわ」

魔理沙、レミリア、輝夜が同時に言う。そして、フランは……

「みんな、馬鹿馬鹿言っちゃ駄目だよ。これはしょうがないことなんだから」

フランも十分酷いです。

「何を喋っているんだ。まさか怖い分けじゃないよな？」

「ええまったく。それよりあなた……焼き鳥の女を見なかったかしら？」

輝夜が言う。だがそれじゃ全然伝わらないと思う。

「何のことだ？」

ほらやつぱり。

「あらしらないの……ならいいわ。ハル、さっさとやつつけちゃいませう」

「……そうだな」

「王に反乱を起こす愚か者たちよ……ここで朽ちるがよい！」

私はこの妖精の能力を早速コピーした。・・・たぶん、これがあるから霊夢じゃなくて私を行かせたんだろうな。相手が能力持ちで私と戦うのが始めてで能力にたよっているのなら、コピーしてすぐに終わるし。

「植物たちよ、あいつ等を襲え！」

「残念だがそれはもうできないよ」

コピーしてあるからすぐには能力使えないし。

「フツ、そんな見え透いた嘘、この俺様が信じると思つか？」

「こいつ、能力をコピーされた事自体に気付いていないんじゃないかしら」

「・・・そうかもいけない」

「そんなことどっちでもいいぜ。私はもうやるぜ！」

魔理沙があの手マスタースパークを撃つ構えを取った。私は巻き添えをくらわないように後ろ逃げる。

「いくぜ！仕返しのマスタースパーク！」

轟音を伴いながら放たれたレーザーは真っ直ぐ妖精に飛んでいき、その妖精をのみこんだ。

「やったぜ！」

「・・・これで終わりかな」

「・・・いえ、まだ終わっていないようね」

私は真っ暗の中、魔理沙がマスタースパークを撃った方向を見る。最初は何も見えなかったが少しだけ光が漏れ始めていた。どうやら

あの一瞬で能力が復活して発動したらしい。植物の盾でギリギリ防いだようだ。

「おいおい、ハルは本当に能力をコピーしたのか？」

「したけど戻るのが早かった。それだけ」

「・・・それで能力が戻って発動ができた、というわけね」

「そう言うことだ」

「・・・雑魚の割にはよくやるようだな」

「そうね。あなたはその雑魚に今から負けるのよ」

「ふん！戯言を！」

妖精は植物じゃなく緑色の弾幕を放ってきた。その弾幕は植物のように不規則に伸びてくるように飛んできた。これは私が弾幕を放って相殺する。

「お兄ちゃんは何で能力を使わないの？」

「私の能力には捕まえる能力があるものが無いからだ」

「植物を操れるのならそれで捕まえればいいじゃない」

「だめだ。コントロールができないからもしかしたらみんなに被害が出る」

「妖精だけを指定して襲わせればいいんじゃないかしら？」

「やっているんだがなかなか難しい。・・・みんなスキマに入ってくれないか？そうしたら簡単に捕まえられる」

「嫌よ。私は楽しみに来たのよ。ここで終わっては面白くないわ」

「フランもお姉ちゃんと同じ！」

「私ももつと仕返しが見たいぜ！」

「・・・お前たちは」

なにか言葉を言おうとしたが言えなかった。仕方が無かったのでレミリアたちが妖精を相手してそれでできなかつたら私が相手をする

ということになった。私は後ろでサポートすることにした。サポートっていつても見ているだけだけどね。

「・・・できるだけ早く終わらしてくれ」

そういうとみんな驚く速さで妖精への攻撃を開始した。始めはレミアが弾幕じゃなく素手で殴りに行っていた。

「くらいなさい！」

もうカリスマとか関係なくすごい笑顔で妖精に殴りかかっていた。妖精は植物を盾にしているようだった。だったと言うのは暗くて分かりにくいからです。

「殴りかかってくるとは愚策だな」

「そんなこと無いぜ！」

叫びながら魔理沙がレーザーを放っている。さっきからやっているけど魔力は大丈夫なのか？

殴りを防御しているので魔理沙が後ろから撃ったレーザーには気づけなかったようで、直撃したのか爆発を起こした。しかし、爆発で起きた煙が晴れると妖精が元気に存在していた。当たる直前に植物の盾を出していたらしい。植物で全体が見えるとはいえ、すごい集中力だと思う。全体が見えているといっても、意識しないと見えなからな。あの妖精もチルノみたいに戦闘には強いタイプなのか。

私は私でみんなが戦っている間、見ていただけじゃさすがに悪いのでコピーした植物を操る程度の能力を使って植物に私の命令だけを聞くようにあの妖精が命令したことから上書きをすることにした。植物に出されている命令を上書きするにはその命令のときにも

つっていた力を超える力が必要なようだった。だが相手は妖精なのでその力を超える力なんて直ぐに出せた。そして上書きは完了して普通の植物に戻るようにした。

「よし、これでもう植物は使えないぞ」  
後はみんながボコボコにするのを待つだけだ。

私は妖精のところを見た。妖精は四人に猛攻撃を受けている最中だった。さっき出した盾が存在しているので今のところは盾が守っているけど、それが無くなった時、妖精は・・・終るな。

「何故だ！？何故植物が俺様の命令に従わない！」

妖精が叫んでいた。私はその答えを出してあげることにした。

「私が命令を上書きしたのさ」

「何！？貴様も植物を操る程度の能力だったと言っのか！」

「まあ、少し違うけど一応はな」

「くそ！」

今頃気づいても遅いけどね。

「やっと気づいたの？最初からあなたに勝ち目なんか無かったのよ。それも気づかずに戦いを挑むなんて、どっちが雑魚かしら？」

「それに馬鹿だぜ」

「おっ俺様のことを馬鹿だと！」

「」「」本当のこと（よ）（だぜ）」「」「」

レミリアと輝夜、魔理沙が言った。さらにフランは妖精を庇ったつ

もりだけどもまた追い討ちをかける。

「だから、それはしょうがないことなんだよ」

「ウガー！どいつもコイツも俺様を馬鹿にしやがって！」

妖精はキレた。だけどキレたところでなにも変わらない。レミリアたちが最後の止めの攻撃を出した。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』！」

「禁忌『レーヴァテイン』！」

「恋符『マスタースパーク』！」

「神宝『ブディストダイヤモンド』！」

スペルカード宣言。いまやって意味あるか？・みんな、演出が欲しいの？とかいったら私のところにも飛んできそうだからやめた。レミリアは光から槍を取り出し、フランは光から剣を取り出していた。あとの二人は見えなかったが空気がさつきより重かったのすごい事をしているのが分かる。そして・・・みんな同時に放ち、またそのせいで視界が真っ白になった。それくらいすごい攻撃だったのだろうけど何も見えない。視界が晴れると真っ暗な視界だった。さっきまで妖精が光っていたが気絶したのか消えてなくなたのか光が無いので確認できないがとりあえず終わったようだ。

「レミリア、倒したのか？」

「ええ、今ここに倒れているわ」

「どうするの？」

「一応、コイツをみんなのところに運ぼう」

私はスキマを開いてみんながいる人里に戻った。戻ると私が最初スキマに入って異変解決に行った時のようにみんな普通にお喋りして

いた。この様子だと植物は襲い掛かってきていなかったのだろう。植物を操る程度の能力は能力使用者が意識を共有してその場その場の行動をさせるから、たぶんあの妖精は私達に意識がいつて人里を見る余裕が無かったんだろうな。

「あら、早かったわね。半日経たずに終わらせるなんて」

「早く終わらせようと頑張ったからな。それにみんなもいたし」

「後ろで引つ張られている妖精が今回の黒幕？」

私は霊夢に聞かれたので全員に説明することにした。

「そつだ。この妖精が今回の黒幕だ。能力は植物を操る程度の能力だ」

みんなは気絶している妖精をじーっと観察していた。そして、アリスが殴つていいか訊いて来たので後でやってくれと頼んだ。まだ、この異変は解決していないことが私には分かっていた。

「これで異変は終わりね。あゝあ、やっと帰れるわ」

「・・・まだよ霊夢。まだ植物がドーム状に幻想郷を覆っているわ」

「どうせハルが能力をコピーしているんでしょ。それで植物をどうにかすればいいじゃない」

「たしかに私は能力をコピーした。だけどこの植物を操る程度の能力は植物を伸ばすことはできる。だが消すことはできない。普通の植物に命令するだけだからな。霊力とかそんなもので作っているわけじゃないから腐らせるとかしかできないんだ」

「だったらそうすればいいじゃない」

「よく考えてみる。今はこの状態を保っている植物が腐れたらどうなる」



私が問うと永琳が即答した。

「保てなくて落ちてくるわ。そして、被害が出るわね」

「・・・その通り」

「もう！なんで次から次へと問題がでてくるのよ。私も殴っていない？」

「ダメ。殴ったところで意味ないし、起きたらまた攻撃される。この世界のルールを叩き込む準備ができてからだ。・・・フラン、その妖精をここにおいてくれ」

私は妖精を掴んでいるフランに自分の前に降ろさせた。そして私は能力を発動して植物を操り成長させてその妖精を閉じ込める檻みたいなものを作った。そしてその中にその妖精を運んで完全に閉めた。植物はもちろん魔法の森から地面の中から伸ばしてきたもの。いま起きてもこれで大丈夫だろう。妖精は私より力はもっていないし、この植物を破壊する力もないだろうからな。

私作り終わると霊夢が質問をしてきた。

「・・・こんなこととして意味あるの？」

「ある。この植物は魔法の森から伸ばしてきたものだ。魔法の森の植物はありえないくらいに硬い。中に閉じ込められたら終わりだ」

「あいつも能力が使えるんじゃないの」

「力で勝っている方の命令を植物は聞く。私のほうが勝っているから大丈夫だ」

「そう、じゃあこれからどうするか考えましょう」

「待ってくれ。その前に」

私は人里の一部分の上の部分の植物を腐らせるよう植物に能力で命じた。すると本当に腐り始めて、腐った植物が落ちてきた。そしてそれと同時に光が入ってきた。今はどうやらまだ昼のようだ。落ち

てきた植物は弾幕を当てて空中で塵にする。よし、これでみんなが見える。

「器用ね」

「そうでもないさ」

「今みたいに落ちてきた植物を片っ端から打ち落とせばいいじゃないの」

「少しづつならいいけどな。全部一まとめにやって落ちてきたものを打ち落とす自信は私にはないぞ。それに力も足りない」

私達は話し合った。話し合っている途中、輝夜がいないことに気づいた。たぶん幻想郷を見て回るために逃げたな。私は一応永琳には居なくなっていることを伝えることにした。後ですぐ捕まえられと思うが少しでも楽しんで来いという私からの同情の念だ。

そして、紫と永琳を中心にしていた話し合いは終わった。最終的には全部の植物を元の状態に戻さないといけないのでまずはドーム状の植物を腐らせて燃やすことになった。燃えるときは一つの火元から一気に広がってくれるからな。妹紅がまだ帰っていないのでその火をだす役をパチュリーが引き受けてくれた。魔法でいつきにボンツ！とやるつもりらしい。紅魔館のパチュリー以外の皆様は紅魔館に帰還。今は光がそこまで出ていないからいいが植物がなくなるというもの光がある世界に戻るからここまで、ということだ。

「よし、じゃあ始めよう」

まずは私が能力でさつきよりは大きく腐らせる。そして落ちてきた植物をパチュリーが魔法で燃やす。腐っていないときはすぐ硬いが、腐れば簡単に燃やせる。このとき妹紅がいればいいのだが魔法の森のどこかということしか分からないから私では探せなかった。

「頼むよ、パチュリー！」

「ええ、分かったわ」

パチュリーは炎の弾幕を出して落ちている腐った植物に当てる。そうすると炎が落ちてきている植物全体に広がり、燃え尽きて無くなった。

「よし、この調子で一気に焼こう」

「早く終わらせてよね。こっちは早く帰りたいんだから」

「できるだけ早くする」

私はさつきより広範囲を腐らせて落とす。それをパチュリーがさつきより少し大きめの炎の弾幕で燃やして塵に変える。これで人里上の植物は片付けた。

パチュリーは一息ついてから言った。

「一段階は完了ね」

「ありがとうパチュリー。私が炎の魔法を使えないから破壊するだけじゃ力不足になるんだ」

「気にすること無いわ。貴方が強制したわけじゃないから」

「そうか・・・また私に魔法を教えてくださいませんか？そうしたら次こんなことが起きたときパチュリーにこんなことさせないで済むからな」

「そうね・・・でも次からは等価交換よ。なにか魔法使いにやってもらうならそれなりの対価を払うのよ」

「・・・パチュリーは何が欲しいんだ？」

私がそう言つと何故かパチュリーが顔を真っ赤にして怒りだした。

「私になつ、何を言わせようとしているのよ！」

「いや、何って・・・パチュリーが欲しいもの」  
「もう!」

何故怒るのか分からない。

「まあ、今すぐに考えるなんて無理か。とりあえず植物をどうにかしよう」

「・・・分かったわ」

私達はまた植物を燃やすことを再開した。パチュリーがまだぶつぶつと何か言っているが何が欲しいかで考えているんだろう。そして魔法の森以外のすべての植物を元の大きさまで焼き尽くすことに成功した。

「よし、残るはここだけだ」

「何故直ぐに焼かないのかしら?」

「ここには元から生えていた木もあるんだ。それごと焼き尽くす訳にはいかないからな。ここからは私が全部やるよ」

私は飛び、魔法の森の上に行く。魔法の森全体の木の高さは覚えていないので予想で高さを決めて、それ以上の高さを破壊できるような位置に付く。そして、スペルカードに思いつきり力をこめて宣言する。非殺傷設定はもちろんない。

「光符『あふれる光』」

真っ白な光が私の周りに集まる。ぶつちやけどこかの死神が使う干本桜の真っ白版。これも破壊専門の技で私が力を凝縮して作ってある光の塊である。飛ばすもよし盾として使うのもよし、万能型に考えたスペルカードだ。形も変えられるので今は剣状に変える。いち

いち変えなくてもいいけど私にも演出というのが少しは欲しい。私は植物を腐らせ破壊しやすくして剣を振る。剣からはもちろん光の刃状のビームが出て植物を上の部分だけ切断していく。それを何回も繰り返して粉々にした。

「ふう・・・終わった」

「あれは力を凝縮して作ったものよね」

「ああ、私のスペルカード第二弾だ。はっきり言ってあんなことしないで普通に撃てばいいんだけど私も少しは演出が欲しかったんだ」

「・・・すごい力ね」

「どうも。よし、みんなのところに帰ろう」

私達はスキマを開いて人里に戻った。後一つやることがあったのだ。

「紫。妖精はどうするんだ」

「そうね・・・」

紫が考えているそばでアリスと霊夢が言った。

「「ポッコポコにする！」」

「・・・お前たち、それしか頭に無いのか」

「それは言うことを聞かないときのお仕置きにしなさい。今はこっちの世界のルールを教えてあげて見ましよう」

私は檻の前に行き植物を腐らせる。中ではまだ妖精が眠っていた。仕方ないので叩いて起こす。

「（ばしばしばしー！）」

「いった！誰だ俺様の安眠妨害をするものは！」

「私だ」

今から安眠じゃなくて永眠になりそうだけだな。

「お前・・・王に向かってその態度とは・・・死にたいようだな」

「消えたいのはあなたのほうじゃない？こんなめんどくさい異変起こしていて、しかもぜんぜん戦えなかつたし！」

霊夢に一瞬鬼が宿っているように見えた。ここの世界にいるという鬼以上の鬼が。

だがこの勢いで妖精は黙った。というか怯えている気がした。

「ハル、後は任せていいわよ」

「そうか・・・じゃあパチユリー、帰るか」

「ええ」

私の異変はやっと終わった。後は霊夢たちが何とかするだろう。どんなことを妖精はされるか私には見当も付かない。付きたくない。

## 第十九話（後書き）

ハルのいた世界では東方にかんするものだけないという設定です。そのほうがイメージに使いやすく、読者皆さんにも伝わりやすいかな？と思ったからです。もし、間違っているような事があれば報告をお願いします。

## 第二十話（前書き）

作者は夏休みに入りました。ですが、部活に夏休みの宿題などいろいろあつてなかなか小説が書けません。・・・こんなの、夏休みじゃない！



## 第二十話

紫に帰ってもいいと言われたが妹紅はどうなるのかと思う。あと、輝夜の事もだった。だが二人とも不死身だから大丈夫だろうと完結して気にしないことにした。なかなか酷いやつだと自分で思う。そして今、紅魔館への帰り道。私はパチュリーをお姫様抱っこしながら飛んで紅魔館へと向かっていた。スキマを開いて直ぐ戻ればよかったのだがパチュリーがスキマには入りたがらなかった。で仕方なく飛ぶことになった。だがパチュリーはさつき行った焼却活動で魔力を使い果たして飛べないらしい。仕方が無いので私がこうして抱きかかえて飛ぶ事になった。パチュリーは生きているのか？と思うくらいに軽かった。飛んでいるときに顔は見ないようにする事にした。こうやって飛んでいる私も恥ずかしいし、パチュリーはもっと恥ずかしくて目を合わせるだけで怒りそうだと思った。・・・というか、女の子全体がそうかもしれない。いい考えだ、これから気をつけよう。

「・・・これが幻想郷なのね」

「これがつて・・・まさかパチュリーも幻想郷の全てを見た事が無いとか？」

「そうよ。私はずっと図書館にいたんだもの。住民は宴会とかでよく来るから覚えているけどね」

ここまで目を合わさずに会話する。失礼だけどパチュリーが暴れるという恐怖が勝った。それにしても以外に幻想郷を知らない人はいるんだな。

「それなら、美鈴も一緒にだけど今日の残りを使って幻想郷を回るか？」

「・・・等価交換の代わりにそれもいいかもしれないわね。でも今日は遠慮しておくわ。だって疲れたんだもの」  
「分かった。いつでも待っているよ」

「・・・そういえば、あの妖精の名前聞くの、忘れていた」  
私達は顔を合わせないがいろんな話をしながら紅魔館に戻った。といつてもほとんどパチュリーの魔法講座みたいなものだったが。

霊夢とアリスのイライラは頂点へと達していた。大体の人たちは幻想郷が元に戻ったので自分の元の場所に戻っていった。永琳は居なくなっている輝夜に気づき、輝夜を探しに行つてどこかに行つてしまった。ウドンゲは一人で永遠亭に戻つていった。そして、残つていたのは紫と霊夢と魔理沙とアリスと妖精だけになっていた。

「まずあなたの名前を覚えてくれないかしら？」  
「ふん！貴様ら等に教える名前など・・・」

紫が質問して妖精が答えようとしたとき、後ろから黒いオーラを発している人達がいた。それに怯えたのか敬語で喋り始めた。

「・・・ラーソンです」

「(さすがね霊夢) 貴方は何故異変を起こしたのかしら?」

紫は鬼になり掛け二人に心で褒めつつ聞いた。だが、答えは紫達が思いもしない答えだった。

「俺様の世界だから何しようと思手だろ」

紫はこの言葉に少しだけ時間が止まった気がした。だが直ぐに動き出して紫はラーソン正すことにした。

「ここは貴方の世界ではないわ。ここは幻想郷。みんなが自由気ままに生きる世界よ」

「・・・なるほど。貴様は嘘をついているのだな」

「(何故そう思うのかしら?) 嘘なんかついていないわ。本当のことと言っただけ」

「そんなはず無い。この俺様はこの世界の全てを操れる力を持っている。だから俺様の世界なんだ!」

この時、紫はチルノみたいな自分が一番という思考がこいつにもあることを再確認した。そしてその考えと幻想郷のほとんどを占めている植物を操れる程度の能力から自分がこの世界の王だと思っていると確信した。

「(こつという面倒な人は・・・) 霊夢、戦ってもいいわよ」

紫は実力でねじ伏せてもう異変を起こさないように説得させるといふ荒業を実行した。実は紫も早く終わって眠りたかったのだ。

「分かった。ボッコボコにしてあげる！」

そういつて霊夢とアリスは紫の前にいるラーソンの前に出てきた。

「この異変の恨み、晴らさせてもらうからね！」

「いきなり襲ってきた事を後悔させてあげるわ！」

アリスはもつともな理由だったが、霊夢は八つ当たりのような理由だった。

「・・・いいだろう、俺様が強いって事を分からせてやるう」とラーソンは言った。だが顔が少し引きつっていた。

「早く終わらせてね」

そう紫が言うと二人は直ぐに攻撃を始めた。ラーソンはただひたすら避けていた。植物が少ない人里周辺では能力も無能だったようだ。

「・・・容赦ないなあいつら。あれは非殺傷設定なのか？」

魔理沙が言う。戦いは魔理沙の言う通り弾幕ごっこには見えずに普通の殺し合いに見えた。リンチとも言いが・・・。

「どうでもいいわ。とりあえず早く終わってくれればね」

「・・・以外に鬼だな」

魔理沙も魔法の森で死ぬ程度のマスタースパークを連発していたが本人は忘れているらしい。

紫と魔理沙がどうでもいいことを話していると戦いも終わったらし

い。すっかりした顔の霊夢とアリスが戻ってきた。後ろにはボロ雑巾のラーソンが居た。完全にリンチの後みたいだった。

「あゝスッキリした」

霊夢は完全に八つ当たりだった。

「・・・後ろの奴大丈夫なのか？」と魔理沙。  
「大丈夫よ。非殺傷設定だしね」とアリス。

アリスの言った通り、ラーソンは直ぐ起き上がった。

「お前ら！痛いではないか！俺様は王だぞ！何をするか！」

「へえ、王なのにこんなに弱いんだ。普通、王ならこの世界で一番強いはずなのにね」

「それは・・・俺様が戦い疲れていたところにお前らが戦いを挑んできたからだ」

言い訳を無視して紫が言う。

「分かったかしら？これが幻想郷なのよ。貴方は幻想郷の全てが貴方のものと言っていたけどそれは違う。さっきも言った通りみんな自由よ」

紫がそう言うのとラーソンは下を向き黙る。紫はさっき言った事に一つ付け足した。

「もちろん貴方がこの幻想郷の全てを自分のものにするのも貴方の自由よ。まあ、それに抗うのも自由だからそんなことしても無意味だけど」

ラーソンは考える顔をしていった。

「・・・そうか。ならば仕方ない、幻想郷のことは分かった。みんなが自由なら俺様も自由だ。と言う事で俺様はこの幻想郷最強を指すだけにしよう。ありがたく思えよな！」

チルノみたいな奴が増えた瞬間だった。力を持ちすぎた妖精は最強を名乗りたがる傾向にあるのだろうか？

「ではさっそく、そこの紅白の女、勝負だ！あ、もちろん一対一でだ」

「はあ？何故そうなるわけ？」

「さっき俺様が倒されたのはまぐれだ、たまたまだ、気のせいだ。それを認めさせるためもう一度勝負を挑む！」

この時霊夢はこれがどんなに大変な事になるかを知らなかった。

「ぶ〜ん？まあいいけど。それと私の名前は霊夢よ」

霊夢はまた勝負を始めた。紫はいつの間にか居なくなっていた。アリスも異変は終わったと自分の家に戻っていった。

私は飛んでそのまま敷地に入るなんて事はせず、パチュリーを連れて門のところで降りて普通に中に入る事にした。ここでは外のルールが通用しないと分かっても一応、礼儀としてやっておく。礼儀として正しいかも分からないが。門の前にて降りると美鈴がいた。案内の続きをやるか聞かないとな。

「美鈴……今戻った」

一瞬ただいまと言いつうになつたが私は家族ではないのでそのところは一応分けておく。

「ハルさん……なんでパチュリーさんをお姫様抱っこしているんですか？」

「全ての植物を焼却し終わって戻るとき、パチュリーがスキマに入りたくないというからトンで帰る事にしたんだけど、パチュリーは魔力を使い切つて飛べなかつたから私がこうやって一緒に帰ってきたんだ」

「……そうですか」

美鈴はパチュリーを見ている。私はもちろん見ない。

「とりあえず図書館までは連れて行くから」

「……その前にパチュリーさんの顔を見たらどうですか？」

何気に今大変な事を言ったな、美鈴。

「……見たら殺すわよ」

そしてパチユリーにも言われた。パチユリーに何が起きているのか分からないから見たいけどみたらやばい。いろいろとやばい。

「・・・見ないから大丈夫だ。・・・美鈴、後でまた幻想郷案内するか？」

「うん・・・後でまたここに来てください。今、考えときますから」

「分かった」

私は図書館に向けて歩き出す。中に入ったらめんどくさくなって飛んだけど。図書館に着いてもパチユリーはこつちを見るなど言い、私は目を瞑ってパチユリーを降ろし、そのまま顔を見ずに扉の前に来た。そして、パチユリーの一言。もちろん後ろから聞こえてくる。

「いい？どんな音や出来事が起きても絶対に今日は図書館へ入らないようにね！」

「・・・分かった」

なぜここまでするのか分からなかったが私はそれを誓って図書館を出た。すると扉を豪快に音を立ててパチユリーは閉じた。その後私が見えなくなるとドサツと言う音がした。正直、中を見たい。見るなど言われたら見なくなるのが人間だし。でも見ないでとりあえずまた美鈴のところに行ってみようかと思ったが少し早すぎるかな？と思い、もうちょっと時間を潰すために自室に戻る事にした。

だが、この時そのまま美鈴のところに行けばよかったと思う。自室には何故か輝夜が居た。

「やっと来たわね」

「やっと来たじゃないだろ。何故ここにいるんだ？あるとき居なく



なっているのに気づいたけど何故ここに来る」

「幻想郷を見てみたいからよ」

「それは分かる。だけどここに来る理由は何なんだ？いちいち一つの部屋まで見ないと気がすまないとかじゃないだろうな」

「フフツ、面白いこというのね。でも違うわ、私一人じゃ永琳の魔の手からは逃げ切れないもの。そこでハルが私をその魔の手から救うってわけ」

「私が犯罪に加担しているみたいだから嫌だ。それにそんなことしたら後で永琳が怖い」

というより怒るときの女の人怖い。姉と前の美鈴たちを見たときに確認した。

「断ったとしても私はずっとハルに付きまとうけど」

「……」

「大丈夫よ。ハルの能力ならばれないで済むわ。多分、絶対」

「どっちだよ。はあゝ……分かった。じゃあ直ぐ行こう」

私は諦めて輝夜の逃走劇に加担する事にした。見つかったとしても謝れば許してくれるよね、と言う考えで。

私は輝夜も一緒に連れて美鈴のところに行った。

「美鈴、決まったか？」

「あれ、輝夜さんは何故中にいるんですか？」

「ああ、そうだったな。輝夜は自分の能力で一瞬の時間を操ってその中で行動する事により認知できない速さで動いて、誰にも気づかれる事なく私の自室に入ってきていたんだ」

意味はないが自室のところを強調して言った。

「……つまり咲夜さんの能力と同じと言う事ですか？」

「まあそんなものだな」

「この能力はとても疲れるのよ。一瞬を行動できても私が早くなるわけじゃないから移動プラス能力発動で長くは使えないのよ」

「そうなんですか」

「そして輝夜は幻想郷のあちこちを見て回りたいと言う事だったが自分だけじゃ直ぐに永琳につかまってしまおうと言う事で私に協力をさせて捕まらないようにするということと今、ここにいる」

私はさせての所を強調する。意味は・・・ない。

「永琳だったら私が居なくなったら直ぐ探して捕まえようとするものだから困るのよね」

「輝夜も十分に困る。と言う事なんだがどうするんだ？美鈴」

「（・・・今回を引き延ばしたとしても次はパチュリーさんが何かしてくるかもしれない。ここは思い切って・・・）一緒にでもいいですよ」

「よし、それじゃ行こう」

「最後は博麗神社に行きましょう」

「どうしてだ？」

「妹紅だけじゃ少し飽きたわ。たまには別の人も弾幕ごっこしたいわ」

「私は別に最後ならいいですよハルさん」

「・・・最後ならいいか」

紅魔館から飛んで出ようとしていたとき、声が聞こえた。

「ハルさん。聞こえていますか？」

「ん？誰か喋った？」

「いえ、なにもいっていないわ」

「私です」

美鈴と輝夜が喋っていないのに声が聞こえるとは……。自分の頭がおかしくなった？

最初は何故頭に声が響いてくるか分からなかったが声がウドンゲの声だったので狂気を操る能力で声を響かせていると理解した。この狂気は操る程度の能力は使用者が一方的にしか声が届かないという効果があったのを思い出し、私も能力を使って答えた。電話みたいで超便利な能力だな。

「聞こえているよウドンゲ」

「よかった。あの、聞きたい事があるんですがいいですか？」

「いいけど、もしかして輝夜のこと？」

「はい、よく分かりましたね」

この時、私のところを輝夜が見ていた。私は話を続けた。

「まあね。私が戻ってきてきて植物をどうするかの時から居なくなっている事に気づいていたからな」

「そうだったんですか。というか、居なくなっているのに気づいていたのなら教えてください」

「まあずっと部屋に閉じこもっていたらさすがに嫌になるよなと同情して少しは楽しめということでしょうっておいた」

「はあ……。今、師匠が探しています見ついたら教えてくださいませんか？……。といっても探す気はないんですね」

「まあ見つけたらウドンゲと永琳が心配しているとは伝えておくよ」  
「おねがいしmきゃ！」

軽くウドンゲの悲鳴が聞こえた。

「どうしたウドンゲ？」

「(てる・・・) いえ何でもありません」

「じゃあまたな」

「はい」

私は能力を解除した。私が喋り終わったのを見たとき、たん輝夜が詰め寄ってきた。

「なぐんだ。ハルは私に同情してくれていたのね」

巻き込まれたらそんな気持ちも迷惑という気持ちに変わるけどな。

「まあな」

「それでウドンゲはなんて言っていたの？」

「輝夜を見つけたら伝えて欲しいってさ」

「貴方は優しいのね」

「私が輝夜みたいな生活していたら逃げ出したくなる気持ちも分かるからだ」

「そう。じゃあ早速行きましょう」

永琳に見つからない事を祈りながら私はまた美鈴の案内の続きを始めた。

輝夜がない事に気づいた永琳は、輝夜探しにでていた。だが、永

琳は必ず輝夜がここに来るであろうと予測してハルたちが幻想郷めぐりの最中、博麗神社で待ち伏せをしていた。霊夢はずっとラーソンと戦っているのが面倒になったので殺傷設定でラーソンをぶっ飛ばした後、逃げてきて博麗神社に戻っていた。

「……なんであんたがこっちにいるのよ」

「居てはダメなのかしら」

「……」

これはほうつておくしかないと考えた霊夢はとりあえず居ないものとする事にした。だが、ずっと無言でいるのが辛くなった霊夢はまた話す事にした。

「ここに来た目的は何？」

「貴女には用は無いわ。ただ、姫様が居なくなっているから探しに来ただけよ」

「……探す気無いじゃないのよ」

「そう？もう直ぐここに来ると思うわ」

「何を根拠にそんな事考えているのよ」

「フフツ、勘かしら？」

自分も大体が勘で動いている霊夢はそれで何も言い返せなくなった。実は永琳の方は勘じゃなく輝夜が考えている事を想像しての事だったが。

私は私が知っている幻想郷のあちらこちらを案内して数時間がたったと思う頃、やっと全部を見て回る事ができた。知識はあったが実際見てみると更に驚かされる。河童がいたり、咲夜がたまに行くという香霖堂というところにも行ってみたり、閻魔様がいる場所と続く道があつたりと、異変のせいで見れないところを見て回った。途中で文？とかいう天狗や永琳に会わなくてよかつたが逆に何か企んでそうで怖くもあつた。しかも私達は歩きじゃなく飛んでいたというのに。でも何を考えているかなんて私が考えても分からないので放つて置く。太陽は沈み始めていて帰るにはいい時間だった。だがまだ博麗神社が残っているため帰れない。そして今、飛行中である。

「面白いわね。幻想郷は。見ていて飽きないわ」

「よかつたな。美鈴はどうだった？」

「（・・・二人きりではなかつたけどこれで少しはハルさんに近づいたかな？）はい、よかつたです」

「じゃあそろそろ博麗神社に行くか。だが輝夜、神社に霊夢がいるとは限らないぞ。もしかしたら別のところ行っているかもしれない」  
「大丈夫。居なかつたら貴方と戦うから」

「・・・何が大丈夫なのか分からない。輝夜は誰かと戦えたら別に良かったんじゃないか？」

「・・・ハルさん」

「どうした美鈴？」

「気のせいかもしれませんがさつきから誰かに見られている気がします」

「？私は全然感じないけどな」

人間だから妖怪みたいに力に敏感じゃないし・・・そうだ、能力があつたな。

私は美鈴からコピーした気を使う程度の能力を発動した。確かに誰

かに見られているというように感じる。それでも、霧が掛かっているようではつきりしない。美鈴は妖怪ということと感度が人間よりも上なのと能力でその事を感じているのかもしれない。

「ダメだな。美鈴からコピーした能力を使っても私はそんな感じはしなかった」

「そうですか・・・」

「でも、私の能力を探す能力を使ったら能力反応があった。だから美鈴の言う通り誰かが私達を見ているのかもしれない。なにかしらの能力を使って」

「ハルの能力でコピーして覗かないようにすればいいんじゃないかしら」

「・・・私の能力は曖昧だな。コピーできない」

「そう」

「まあ、覗かれていても次で終わりだから気にしないで行こう」

「・・・そうですね、別に大変な事が起きるわけじゃないですからね」

話はそこでまとまって、また博麗神社に向かって飛んだ。

博麗神社に着いた。だが、やっぱり飛んでいるのにもかかわらず永琳に見つからないのには理由があったらしい。神社の鳥居のところにも永琳が見えたからだ。もちろん無視して私達はその鳥居を飛び越して神社の庭に降りた。

「・・・今、いたな」

「そうね」

「どっつするんだ？」

「ここまで来たらもういいわ。それにここで待ち伏せしていたというならここに私が何しに来るか知っているでしょうから」

私と輝夜が話しているといつの間にか永琳がいた。

「……輝夜」

私は鬼のような形相で来るかと思ったがそんな事は無く永琳は冷静に見えた。内心怒っているかもしれないけど。

「私がここに来た理由、わかっているのでしょうか？」

「……そうね、『たまには別の人とも弾幕ごっこがしたい』かしら」

「今回は怒らないけど、次こんなことしたら分かっているわね？」

永琳は輝夜に言っている筈なのに私にもその言葉を聞いている気がした。

「分かったわ」

「……そう、じゃあ済ましてきなさい」  
「ちょっと、何が済ましてきなさいよ」

霊夢が出てきた。そりゃでてくるか。なんせ今勝手に霊夢の家の庭に入っているわけだからな。

「霊夢、いいところにでてきたわね。私と弾幕勝負しなさい」

「なんであんとやらなくちゃいけないのよ。それに今日はもう疲れたわ。ずっとラーソンに追いかけられまわされてブツ飛ばすまで消えなかったんだから」



「誰だ？ラーソンって」

「あの妖精よ。とにかく私はたたかう気は無いから早く帰りなさい」

霊夢はそう言うともたまた中に戻っていった。私と美鈴も帰ろうかと話していたとき、何処からか声がした。

「じゃあ私とやらないかい？」

そういつて身長が小さくて角が生えた鬼みたいな少女が何処からともなくてできた。いや、ほんと。幻想郷はすごいね。

「誰？」

どっかで見た事あるような……

## 第二十一話（前書き）

作者は夏休みの宿題という強敵を倒してこのMy worldに平和を取り戻したと思われた・・・

だがしかし、新たな敵、期末テストが光臨する！！

作者はそれを倒す事ができるのか！？

後半へ続く・・・

とでも思っていたのか！？

## 第二十一話

私はどこかで見た事がある気がしたがコイツ・・・酔っている、とそれ以上は何も感じなかった。だが輝夜は知っているらしく笑みを漏らしながら話しかけていた。

「いいわよ。でも私がやるのはスperlカードルールを無視した戦いよ？」

「一応、ずっとあんた達を見てきていたから分かるけどルールは無視していいのお？」

美鈴が感じていた視線ってこの事かもしれないと一人考えてその鬼に能力が有るかを探る。するとやっぱり能力を持っていた。多分これのおかげで美鈴に気づかれないように私達を見れたのだろう。近くにいたら直ぐばれるし。

私がそんな事を考えていると、目の前にスキマが開き中から紫が出てきた。

「そうね、萃香の言う通りよ。でも・・・」

そっぴいよどみ、私のほうを見る。

「そうね、審判をつけてならいいわ」

私のほうを見て言ったって事は・・・私に審判をやれ、と？

「なあ紫・・・私に審判をやれと？」

「ええ、それかあなたでもいいわ」

そういつて永琳を指差す。とうかそれが正しいだろう普通。私はその戦いに関係ないわけで普通なら保護者の立場の永琳に審判をさせるべきだろう。

「・・・分かったわ。私が審判をやりましょう」

永琳は言う。表情は笑顔だったが心の中では笑っていない気がした。紫と永琳は仲が悪いのか？と思った。

「そう、それならもう戦ってもいいわよ。それとルールはスペルカードルールと同じにしてただそれを殺傷設定にするぐらいにして頂戴」

それだけをいうとまたスキマに戻っていった。・・・戻るの、早いな。

「相手に致命傷を与える決定打がでたらその時点で止めます。それでは・・・もうはじめてもいいわよ」

「ようすし、この萃香さんが可憐にやつつけてやるう」

「私を楽しませてよね」

戦いの宣言を聞いて輝夜と萃香が意気込んでいるとき、また霊夢が出てきた。

「・・・ここでやらないでよ」

そう一言言つとまたすぐに戻っていった。確かにその通りだ。ここは戦う場所じゃないし戦うにしても輝夜と妹紅がやっていたような戦いじゃすぐ神社が吹っ飛びそうだ。

「そうね・・・いつもの竹やぶで戦いましょうか？」

輝夜はそう言うと、先に飛んでいった。それに続いて萃香とかいう鬼もなにかつぶやきながらそれに続いて飛んでいった。私は永琳に話しかける。一応は輝夜の逃走に力を貸したんだから謝らないとな。

「永琳、輝夜を連れまわしたりしてごめん」

「気にしないでいいわよ。輝夜が逃げるとしたらハル、あなたの所  
ということは想像が付いていたわ。そしてハルが協力する事も」

「・・・さすがだな」

頭よすぎだろ、永琳は。

「・・・幻想郷には追っ手なんて来ないのは前からわかっているわ。  
ただ、いままでが過保護だったの。いろんなところに行くのはかま  
わないけど」

「けど？」

「問題を起こされては困るの。あの八雲紫に何を言われるかわから  
ないから」

「そうなのか？」

「ええ、少し前ぐらいにちょっとした事件を私が起こしてね。その  
ときあのスキマ妖怪に教えられたのよ」

「・・・そうなのか」

どういう原理かは知らないけど紫が追ってこないなら大丈夫なんだ  
ろう。いつかどういう原理かを聞いてみよう。

「だからべつにあなたは何も悪くないわ。だからもう気にせず帰っ  
てもいいわよ」

私に笑顔で話しかけてくる永琳。しかも私が聞いたかった事の答えを聞く前に言ってきた。

「そうか・・・なら今日は帰らせてもらってもいいか？」

「ええそうしても構わないわ。また輝夜を外に連れて行くときは監視役をあなたに頼むかもしれないわ」

「・・・まあそれくらいならばいいぞ」

その答えを聞いた永琳は笑顔のまま飛んで行った。そして、残った私と美鈴。

「美鈴、帰る？」

「・・・そうですね、・・・帰りますか」

私達ももうやる事やりたい事をやりつくした後なのですぐ帰えることになった。私達は飛んで帰ることにした。

「そのまえに」

私は寶銭箱の前に行き、ここで使えるか分からない外からもってきたお金を投げた。そしてかるく平和を願う。

「よし、いこうか」

私が飛ぶとそれに美鈴が続く。飛んですぐに美鈴が話しかけてくる。

「ハルさん、さっきなにをお願いしたのですか？」

「ちよつとした平和を願った」

この世には本当に神様はいるみたいだし、寶銭に金をつぎ込んで

損はないと思う。あなたしか・・・早苗だったっけ？あの子が祀っている神様は見たけど霊夢のところは見えていないな。いるけど姿を見せないのか？もしかして、見せないのが普通かもな。名前忘れたけど早苗が祀っている神様二人のうちの一人は小さくて神々しさが無く感じたし、そんな事を考えると見せない方がいいのかもな。まあ見えないと信じきれないというのもも人の心理でよくあるけど。

「・・・ハルさん」

「ん？何」

「夕日が綺麗ですよ」

どうやら考えに耽って目の前に意識が入っていなかったようだ。目の前には世界を赤く照らす夕日が見えていた。私は景色を眺めて楽しむとかそんな趣味とか無いけど、これは確かに綺麗と思える。

「・・・確かに綺麗だ」

「ハルさんはこんな夕日を見るのは初めてですか？」

「うん・・・夕日は見た事は有るけどこんないい場所ではなかったからここまで綺麗だな〜っと思えたのは初めてかな」

「そうですか・・・良かったですね」

「・・・そうだな。美鈴との約束も果たせし、この夕日も見れたから最高の日かな？」

異変は知らないけど。

「フフツ、そうですね」

美鈴が笑顔で言う。それは美鈴をかわいいなと思わせる笑顔だった。元からかわいいとか美人とかは思っていたけど（というか幻想郷の人って全員美人？）それを確実にする笑顔だった。

まあ、今そんなこと言ったらひかれそうだし、私はいまいち女を評価する目が無いらしいから言葉には出さないけど。

私達はこの後無言で飛んだ。この幻想郷は広いは広いが飛んでるのですぐに紅魔館に着く。だからこの無言の時間は苦痛にならなかつた。だが、霧の湖に来たとき、辺りが寒くなってきた。

まさか、異変のときに最強と認めたのにまた来るのか？と思っていたら、予想通りにチルノが私達の目の前に飛んでくる。はつきり言うて早く紅魔館へ戻りたいのだが無視するとうるさくなるので止まる。能力を使つて逃げてもまた後でごちゃごちゃしてきそうなので面倒だからやっぱり止まる。執拗に攻撃されそうだからな。

「・・・こんどは何があるんだ？」

小声で少し文句を言う。もちろん美鈴に聞こえないように言う。

「ハル・・・あなたはあたいを最強と認めたわね？」

「ああ」

「だけどあたいは気づいたの」

「・・・」

なににだよ。

「最強でもそれは今の話。もしかしたら今のあたひより強い奴が現れるかもしれない。そうでしょハル」

「ああ」

今でもたくさんいるけどな。それに今思えば私が最強と認めただけ



であって他の人は認めていないから結局自己満足でしかないよな。

「だからあたい・・・修行する事にしたわ！」

わーすごい。なんてこといったら攻撃されそうだから軽く返答する。

「確かにそうだな。修行頑張ってくれ」

「よぉーし！これからラーソンと大ちゃんと一緒に修行よ！」

そう言うとまた何処かに飛んでいった。今のを聞いたら何がしたかったのかわからないな。それに大ちゃんって誰だ。

「というか、修行して妖精は強くなるのか？」

私は美鈴に聞いてみる。美鈴は少しチルノには呆れたという表情のまま答えた。

「そうですね・・・力自体は修行では変わらないと思います。なにせ妖精は自然が具現化したものですから。ですが、戦闘の経験や知識は増えますから強くなるんじゃないですか？」

そうなのか。だとしたらチルノとラーソンは強くなるか？私も戦闘の知識や経験は少しくらいしかない。だが能力があるためここでやっていけている。チルノたちは力はそこそこしかない。だがそれを経験で補えばかなり強くなるのか？・・・まあ、戦いの知識があまり無い私には分からない事だし、私の事じゃないから気にしなくてもいいか。

「なるほど・・・解説どうもありがとう」

「いえ、どういたしまして」

「・・・行こう」

私と美鈴はまた飛び始める。紅魔館はすぐ近くなので今度はだれにも会わなかった。そして門の前に降りる。

「今日はお疲れ様。幻想郷の全てとはいかなかったけど、どうだった？」

「はい、幻想郷を見て回れてよかったです。あと・・・ハルさんと一緒に見れてとても良かったです」

「そうか、良かった。私もためになったからよかったよ」

「・・・そうですか」

美鈴が疲れたような顔でそういった。やっぱり少しは疲れているのかと思い少し休んだほうがいいといった。だが美鈴は大丈夫ですと行ってそれを断った。私は一応気にかけてながらも別れて自分の部屋に向かった。夜はフランの世話になっているからその計画を立てないとな。今は世話というより一緒に遊ぶが正しいとも思うが。

「はあ〜」

ハルが去った後、美鈴はため息を一つついた。

「・・・すこしはハルさんに近づけたでしょうか？」

美鈴は今日の事を振り返って考えていた。美鈴的には、最初は良か

つたが、後から異変が起きたりしてデートしているとあまり感じなかったのだ。

「うーん……あのとき思い切って告白しちゃえば良かったのせし  
ようか……」

そう考えて美鈴はその場面を想像して顔を赤くした。美鈴は恋愛にはあまり経験がない……というか、初めてのようだ。まあ、万年門番なのだから仕方のない事だが。

このとき、その言葉を聞いている者がいた。

「だったら、既成事実を作ればいいんじゃないですか？」

そういつて何処からともなく降りてきたのは、射命丸だった。

「それって……どういうことですか？」

こいつは大変な事を言ったのだが、言葉の意味が分からない美鈴は質問で返す。

「フツフツ……簡単な事ですよ」

射命丸はどこかの悪徳商人みたいに笑い、どこかの悪徳商人のよう  
なにやけ顔になる。

「それは夜」

途中まで聞いたなら美鈴もさすがに想像が付いたようで射命丸を天狗  
もびっくりな速さで空に殴り飛ばした。

「……もう、そんなことだめにきまっているじゃないですか……」

美鈴はそんな事もいいながらもやっぱりすこしは実行しようか悩んでいるのか少しの間、悶えていた。

「……でも私はちょっとその……あれは止めたほうがいいですね。私はそんな事は無しでハルさんと恋人になりたいです」

美鈴はそう決意すると門番としての仕事を始めた。

数分後、いつもの寝息に変わったが。

「……いててて……いきなり殴り飛ばさなくてもいいじゃないですか」

美鈴に殴り飛ばされ紅魔館から少し離れた場所で射命丸がつぶやく。殴り飛ばされたのは自分のせいだが射命丸はそうは思っていないらしい。

「その言葉を実行していたのならすごいスクープになりますね。しかも、ハルは事実のため何もいえない。……グフフフ、これで仕返しができます」

射命丸は前にやられたあの事をまだ根に持っていたようだ。あれも

自分のほうが悪いのだが、懲りない奴である。それに射命丸も自分が大変な事になっていている写真を撮られているのだが、それを忘れているのかグフフフと悪巧みMAXな顔で笑っていた。

外が暗くなった頃、私はフランが来るのを待っていた。私は睡眠する必要は今が無い。妹紅からコピーした能力でそれを必要としない用にできているからだ。だけど、私もさすがに二十歳くらいまでは年を取りたい。だから必要ない時は使っていない。能力を好きなきに発動できる事はすごい便利だと私は思う。まあ、どうでもいいことだけだ。

そのとき、扉が開きフランがやって来た。

「・・・おはよう、お兄ちゃん・・・」

まだ起きたばかりなのか目を擦っている。次からは私がフランの部屋で待つてあげようかな？でも、人の部屋に勝手に入るのはちょっとあれだから、フランに聞いてみるか。

「フラン、次から私がフランの部屋で待つていようか？」

「うっ・・・大丈夫、私がここに来る」

「・・・そうか」

これは精神が成長したのか？・・ちよつと私には分かりづらい。

「まあ朝・・じゃなくて夜の挨拶も済んだし、今回は真面目に予定を考えてみたから世話係の私に付いてきてもらうぞ」

「うん、いいよ」

まだ寝ぼけているのか頭をフラフラしながら私のところに来る。またどこかに頭をぶつけそうなので軽く支える。

「ここは仕事として水をぶつ掛けて目を覚まして教育？見たいな事をするべきか？それともフランが起きるまでおんぶなりするべきか？」

「あ」

フランはそう言う支えている私の腕を見ている。・・・どうしたんだ？

「・・・いただきます」

そういうなり噛み付こうとした。

「あぶな！」

私はフランを押しして手を離す。寝ぼけていて私から血を吸おうとしたのか。そういえばレミアとフランが吸血鬼という事を忘れていた。アブね。危うく血を飲まれるところだった。飲まれてもいいけどそれは少しだけならだし味を覚えてこれでおいしとかいわれて夜な夜な吸われるということになったら大変だ。

そう考えながら支えが無くなって倒れたフランを見る。・・ピクリ

とも動かない。

食べ物（血）は貰っているはずだからお腹がすいたって分けじやなくただ眠っただけの様だな。夜までずっと寝ていたはずなのにまだ眠れるのか。

なににすごいと思ったか分からないがとりあえず感心しつつフランが起きるまで私のベッドに寝かせて待つ事にした。

私もフランを待っているうちに暇になり、・・・眠った。

## 第二十一話（後書き）

諸君、私は妄想が好きだ。

はい、どうでもいいですね。この頃、自分でもどうしたんだと思うくらい、頭の中がカオスです。

作者は恋愛の事とかになるとギクシャクしてしまいます。皆さんはどうですか？



## 第二十二話（前書き）

人の家に勝手に入って堂々としている人は・・・

そして、勝手に入ってきて堂々としている人をみた家の人は・・・

もし許さない場合、『お前は俺を怒らせた』

許す場合、『あら、よく逝らっしやいましたね』

と快い返事が来るだろう。

## 第二十二話

フランの部屋で少し眠るつもりだったのがたくさん寝ていたらしく、起きたときには朝になっていた。・・・人の習慣はすごい。眠らなくてもいい体でもここまで眠れるのだから。・・・というか、私の体はいつたいていどうなっているんだ？不死のときは睡眠が必要じゃないだけであって眠れるのか。なるほど。

フランのベッドを見る。そこにはフランが・・・起きていた。

「おはよう、お兄ちゃん」

「え？」

何故、起きているんだ？吸血鬼は昼間は何もできないのに。

「どうしたの、お兄ちゃん？」

「いや、なんでフランは今起きているんだ、と思って」

「私はただ起きただけだよ」

「そうか・・・ならいいけど。どうするんだ？日が出ているからフランは外に出られないし」

「私はお兄ちゃんがいるから大丈夫だよ」

「・・・そんなこと言われてもな・・・」

まあ、たしかに私は世話係だけとき。

「・・・よし、じゃあずつとここにいるのもなんだからとりあえずフランが朝でもいけるところ行くのかな？」

本当は外の散歩に行きたいけどこの時間じゃ日が出ているので無理。

だからとりあえずいつでも来て良いとっていた永琳のところに行ってみようかな？

「うん！行く！」

こうして私はフランを連れて永遠亭に行く事にした。移動はもちろんスキマで、だ。じゃないとフランがどうなるか分からない。自分も吸血鬼は日に当たるとやばいという事ぐらい。しかしらないからな。

私はスキマを開いた。

「お兄ちゃん、何処に行くの？」

「うん・・・いつてのお楽しみという事で」

「はい」

私とフランはスキマの中に入った。スキマの中には紫はいなかった。スキマの中に住んでいるというわけじゃないと思うからそれが普通だと思うけど、やっぱり紫はスキマにいないとなんか怪しいし何故か安心しないな。

私はそのまま永遠亭へのスキマを開きスキマから出た。もちろん中を開く。フランに日光が当たったら大変だからな。

・・・自分でも思うけど親馬鹿みたいだ、私。

でもそんな事気にせず、とりあえずいきなり出てきたがいまいち驚いているのか分からない永琳に挨拶と謝罪をする。

「こんな朝早くに来てしまつてごめん、永琳。それと、昨日はどう

だった？」

・・謝罪と質問しかしていないな、私。

「気にしなくていいわ。ここはいつでも患者を受け入れる場所よ。それがただ私達の客・・あなたからすれば友人かしら、・・とりあえずそれだから大丈夫よ」

「・・とりあえずわかった」

「それで吸血鬼の友達を連れてこんな朝早く何しをしにここへ来たのかしら？まあ、前に行ったとおりここに遊びに来ただけなのだろうけど」

何処までも先を読んでいるな、永琳は。

「フランはここに来るのは初めてだと思うから自己紹介だ」

「は〜い。私はフランドール・スカーレットです！宜しくお願いします」

「ええ、こちらこそよろしく」

私はできるだけフランを外に出してあげて外を世界と人に触れて欲しいという考えのもとで世話をしているのだが、今ようやくそれにたどり着いたって感じだな。

「それでこれからどうするのかしら？姫様なら奥の部屋にいるけど」

「いや、何するって・・・」

そういえば、何も考えていなかった。いや、考えてはいたけどもう達成しているし・・・

「・・・何も考えていなかったようね」

「・・・その通りです」

弾幕ごっこをやるにしても外が日が出ているうちは何もできないし、  
・・・紅魔館に戻るか？

「ごっこで弾幕ごっこをやられても困るから・・・そうね」

そう言っつて椅子に座っていた永琳は立ち上がった。

「フラン、私と一緒に勉強なんてどうかしら？」

「うん！いいよ」

そうフランが答えるのを聞くと永琳は微笑む。

どうやら、永琳も私達の今後のことを考えてくれているらしい。しかも、ちゃんとした世話係としての使命を果たしている。

・・・なんか私、世話係に向いていないのかな？

「これはあなたがちゃんと仕事できていないわけじゃないわ。これは適材適所よ、ハル」

「え？」

私がさつき考えていた事は決して口に出していない。・・・永琳、さすがすぎる。というか、今思えば永琳も月の人なのか？そこらへんは勉強するときについてになるか分からないけど一応、聞いてみよう。

「あなたがいないとかわらなかつた事もあるでしょう？」

「・・・なんかあったか？フラン？」

自分では分からないのでフランに聞いてみる。これで無いといわれたら私は悲しすぎるぞ。

「うん、あった。私を外に連れ出してくれた事！私を変えてくれた事！」

「・・・そうか？私はただ仕事だったから・・・」

「そうね。あなたがそう思っていてもそれはあなたがいないと変わらなかった事よ。あなた以外にはできない事だったのよ」

・・・そうなのか？あの時、どんな気持ちでフランを世話しようとしたのかはつきり言っていて覚えていないが・・・まあ、私もちゃんと頑張っているという事でいいや。

「わかった、じゃあフランを頼む」

「ええ、でもその前に朝ごはんよ」

永琳がそう言うのと診療所の奥からウドンゲが出てきた。

「師匠、朝ごはん作り・・・」

私を見て固まるウドンゲ。・・・私、何かしましたか？

「うん、時間通りね」

「はあ・・・患者かと思いましたが何故、今、ここにハルさんがいるのですか？」

だよな。普通はそう思うよな。

「え〜と・・・話すと長くなるけど・・・」

「そうかしら？簡単に言えば『ハルは暇だからこの吸血鬼の子を連

れて遊びに来た』、ということよ」

「・・・そうですか・・・私は皆さんにウドンゲと呼ばれているものです。宜しく願います」

「私はフランドール・スカーレットです。宜しく願います」

最初誰に言っているのか分からなかったが、フランも挨拶したのでフランに言っていると分かった。そういえば初対面だったんだな。

「ウドンゲ、ハルたちにも朝ごはんを用意して頂戴」

「・・・はい、分かりました」

ウドンゲはこの料理当番をしているのか?・・・偉い。

ウドンゲは何故か私をみてからまた奥に消える。うん、少し私を見る目が他の人を見る目と何か違った気がする。・・・気のせいだな。

「フフツ、青春・・・かしら」

「何がだ?」

「さあ、何かしらね?」

「・・・」

言っ気が無いようだし、さっさと諦めよう。

「というか、朝ごはんなんていららないぞ」

「あら、こんな朝早くから食べてきたの?吸血鬼の館で?」

「いや、食べてはいないけどこの体は今能力使用中で食べる必要は無いからな。それに、フランは血が主食だぞ」

「それでも食べられない事は無いでしょう?人の好意はありがたく

受け取っておくものよ」

「・・・分かった。いただく事にするよ」

「さあ、あなた達は奥に先に行きなさい。私は少しやる事があるから」

「いいけど、ここの宿主を置いて先に行っているのか？」

「ここの宿主は姫様よ」

「・・・そゝなのか・・・分かった、じゃあ先に行つとく」

私は診療所の奥に行った。もちろんフランを連れて。

フツッ、どうしようかしらね？

ハルが診療所からでて奥に行き、独りになった永琳は考えていた。

（あの優しいハルなら喜んで薬の被験者なつてくれそうだけど・・・朝ごはんに軽く睡眠薬いれようかしら。・・・でも、もう死なない妹紅の能力を手に入れていたって可笑しくは無いわね。というよりさっきの能力使用中から察するに持っているとは断定してもいいかしら？でも、やっぱり普通にたずねた方がよさそうね。フツッ、まずは何の薬を試そうかしら・・・）

そんな事を考える永琳は不気味に微笑んでいる。実は朝ごはんやフランを勉強させることでハルに恩を売り、薬の被験者になつてもらおうと永琳は考えていた。以外に・・・じゃなく、考えている事がやばい永琳だった。



そんな永琳を窓から覗く奴が一人。そいつは永琳がいるのを確認したのかそれともか何をしようとしたのか分からないがすぐに窓から離れて、竹やぶに隠れていなくなった。

そいつは・・・ウドンゲと同じような、ウサ耳があった。

また、ハルが向かっている場所では、ウドンゲがハルや永琳のことを考えていた。

(ハルさんが・・・来ているなんて・・・これは師匠が?・・・さすが師匠。私は何も言っていないのにまるで分かっているかのよう  
に・・・次の薬は進んで飲もう)

盛大に勘違いしているウドンゲだった。それと次の薬はもしかしたらハルと同じものになり、そして、そうとうやばそうな感じだがいいのだろうか?

だがこのときのウドンゲは、そんな事を知ることではできなかった。

「・・・遅いわね、ウドンゲ」

ここのある主の輝夜は言う。いつもはこの時間ぐらいにウドンゲは呼ぶのだが今回はその時間帯にこない。時間帯といってもその人の勘だが。

「それとも、私が遅く感じているだけかしら?」

いや、ウドンゲが追加の朝ごはんや誰かのことを考えているから遅いだけで輝夜は当たっていた。

「・・・まあいいわ。いつてみましょ」

輝夜もウドンゲがいるところに歩き出す。

あゝえつと・・・ウドンゲのところに来たけど何をすればいいんだ？料理の手伝い？・・・多分不味くするだけだ。それにウドンゲがいつもと違う気がする。何で？といっても前あったときと違うということだけだ。

「あ、ハルさん。もう直ぐできますからね」

そついいながら笑顔で料理を作っている。・・・これが普通なのか。そう考えると聞き覚えのある声が出た。

「あら、朝早いわね」

声の主は・・・やっぱり輝夜か。

「輝夜、おはよう。こんな朝早く来てごめん。迷惑だと思つがやる事なくてな」

「私はフランドール・スカーレットです！宜しくお願いします」

フランも戸惑うことなく挨拶できるようになってる。うん、いいことだ。

「別にかまわないわ。こつちだって暇なもの」

「そういつてもらうと助かる」

今思えば宿主でもない永琳が私を勝手に入れても良かったのだろうか？・・・まあ、輝夜も別にいいって言っているんだし、これも永琳は読んでいたに違いない。

私は、ウドンゲが私達の分を作り終わるまで昨日の事を聞こうとしたがそんな時間は無かったようで、すぐにウドンゲは作り終えたらしい。匂いからして炒め物か？

「ふう、できました」

時代背景は古い感じなのに家の中にある家具、や食器は現代っぽい。・・自分感覚だが。そして私達は現代風な少し大きめのテーブルを囲んで朝ごはん。これも自分感覚。人の家で、しかもまだ日が経っていないのにこんな事していいのかと思う。

そしてタイミングよく永琳が来る。

「あら、いいタイミングね」

そして、みんなが朝ごはんを食べ始める。ちなみに献立は白米に魚の塩焼き、人参とその他もろもろの野菜炒めと味噌汁だ。魚の種類？そんなの知らん。野菜炒めに人参とつけたのは明らかに人参が多

い気がするから。

「おいしー!」

フランの口には合っていたらしい。ちなみに私はまだ食べていない。やっぱり、躊躇する。

「どうしたの?とつてもおいしいよ?」

「それはフランを見て分かるがやっぱり少し悪い気がして」

いきなり家に入ってきてしかも朝食まで出してもらうなんていくらなんでもなあ。

「そんな事、気にしなくてもいいわ。後でやってもらいたい事もあるし、それで元を取ったということでもいいわ」

「・・・わかった」

という事でまずは野菜炒めを食べる。・・・おいしい。

「おいしいぞ、ウドンゲ。いつも作っているのか?」

素朴な質問だったのだが、ウドンゲは何故か私から顔を隠していた。

「いえ、あの・・・」

「私達は当番制よ。この頃はウドンゲが作る回数が多くなっているけどね。なぜかしら?」

輝夜は私にいいながら私をみてニヤニヤする。・・・わけが分から

ない。

しかもウドンゲは何故か顔を隠すだけじゃなく、消えた。能力を使って姿が見えなくなっているだけだが。・・・拳動不審だな。

「まあ、いいや。・・・改めていただきます」

私もみんなと一緒に食べる。・・・シンプルイズベストだ。

そして、最後まで食べ終わりご馳走様の礼をする。私は少し食べるのが早いのかそれとも皆が遅いかまたは礼儀正しいのか、フランを除いて遅い。・・・フランにもレミリアみたいなカリスマオーラ？（私が名付けた）を感じさせるような教育しないといけないかな？・・・それはまあ、レミリアとかにも聞いて決めるか。

皆が食べ終わるのを待って、皆が食べ終わるとウドンゲが姿を現して後片付けに入る。手伝うといったが断られた。私は不器用とかそんな感じに見えるのか？断られた後、永琳が話しかけてきた。

「ねえ、ハル。一つやってもらいたい事があるんだけど」

「別にいいけど・・・やってほしいことってなんだ？」

さっきも良いといったしな。

「フフツ・・・薬の試験者になって欲しいのだけどいいかしら？」

永琳が不気味に笑っている・・・そんな微笑を見せられたら薬がすぐくやばい薬に聞こえるし想像する。だが、まさかそんなやばい薬を永琳さんが作るわけ無いだろう。しかも、さっきいいと言ってし

まったし。

「・・・一応聞きますがどんな薬ですか？」

一応聞く。永琳は能力でどんな薬でも作る方法を知っているし幻想郷だけに幻想的になったりする薬も作れるだろうしな。

「大丈夫よ。ただの元気になる薬よ。どんなものでも作れるからといって危ないものをそう簡単に人に飲ませたりしないわ。薬は場合によっては毒にもなりえるものよ」

確かに永琳は考えているようだ。ついでに私に対して不安を持っているかも。だが不気味な微笑みが止まっていけないからまだ不安があるぞ。

「あの・・・」

ウドンゲは後片付けが終わったらしいな。

「その薬、私も一緒に飲みますか？」

「・・・え」「」

ここにいる、フラン以外の人が驚きの声をあげた。もちろん、永琳もだ。

## 第二十二話（後書き）

吸血鬼を朝に起こすと何をしていいか分からないね。

人の家に勝手に入れる程度の能力（嘘）が有ってホントよかった。

永琳の能力ってややこしいですね。でもその能力で作った薬はすごいですね。

後、女の子ってどんな風に男の子にアプローチするんでしょうかね？男の場合は良く見るので知っていますか。

## 第二十三話（前書き）

薬って怖い。

これをいいわけに薬を飲まなかったら母に叩かれたけど。



## 第二十三話

私が驚いたのはまず一つ目によく話を聞いていたな、ということと飲んだらやばそうな事を知ってそんなウドンゲが飲むと言ったからだ。

驚いていた永琳と輝夜を見る。永琳はさっきと違って普通の笑みに戻っているが、心ここにあらずで考え中なのかな？一言も喋らないし。

輝夜は驚いた表情をしていたがすぐに笑い出した。・・・分けが分からん。

「（・・・青春ね）ええ、そうしてもらおうと助かるわ、ウドンゲ。ハルもウドンゲと一緒になら安心よね」

一人納得されても困る。だから一応ウドンゲに意思確認。

「どうしてウドンゲは薬を飲もうとしたんだ？」

「それは・・・その・・・」

・・・なにか言いづらい理由なのか？

「えっと・・・たまには師匠の薬の被験者に協力的になってみようかなと思って・・・です」

「・・・そうか」

だんだん声が小さくなっていったので聞き取りづらかったが何とか聞けた。やっぱりよく被験者になっているんだな。しかもたまには

というからもしかしたら永琳の薬ってやばいんじゃないか？ただウドンゲが拒んでいるという事もあるだろうがウドンゲはそんな事はしないだろう。・多分。そんなウドンゲが拒否したがる薬って・  
・あっ今思えば能力使えばよかつたな。

「ありがとう、ウドンゲ。危ない橋も二人なら怖くない！よし、早く飲もう」

「……そうしてもらおうと助かるわ。今、取ってくるから少し待っていて」

そういつて、永琳は奥の部屋に消える。その後、フランが喋りだす。

「ねえ、永琳今から何するの？」

「薬の臨床実験といつて、薬の効果を確かめる実験よ」

「薬って何？」

「体の成長を助けたり、体を健康にしたりいろいろな効果を出すものよ。……これで分かるかしら？」

「うん……だいたい」

そういえば、薬って妖怪の間では知っている奴が少なかったのか。妖怪は薬なんていらなからな。

「……私がいろいろ教えとくわ。その間に薬を試しておいて」

「……ありがとう、輝夜」

輝夜はフランと一緒に置くの部屋へと消えていく。それにしても教えておくつて言つたつて、何を教えるつもりだろう？変な事……は教えるわけ無いか。それにしても外の世界とはありえないくらい人との付き合い方が違うな。私もこの世界の人たちも。私は外の世界では知らない人には絶対に自分から話しに行かないのに行くよう

になっているし、ここは全ての人が優しい、気がする。うん、まあどうでもいいことだな。とりあえず、今を生きる。

私はウドンゲと一緒に医療所のところに移動する。永琳があそこでやりたいらしい。多分、異常があった場合に備えての薬ができるだけ近い場所がいいからだろう。

そんな事を考えている間に永琳が戻ってきてようだ。

「じゃあ、早速飲んでもらおうかしら？」

「ああ」

「ハルは能力を全てとっておきなさい。特に死なない程度の能力はね」

「・・・なんでだ？保険として発動したいのだけど」

「あれは発動者の変化を拒絶するの。だから薬を摂取しても変化の拒絶で薬を飲む意味が無いのよ」

「・・・よく知っていたな」

自分でもただ死なないだけしか知らなかったのに。

「・・・あの能力は私の薬がもたらした呪いみたいなものよ」

「え」

永琳は上を見上げながら言う。あの能力は永琳の薬を飲んでできた能力なのか。だがなんで妹紅が飲んでいるんだ？永琳が薬を渡したのか？・・・これも後でできたら聞こう。

「この話は聞きあげれば後で話してあげるわ。まだ時間はたくさんあるしね。とりあえず、はい、これ」

とって私に手渡した一つの錠剤。・・・やっぱり時代背景は古そ

うなのに、技術だけは現代並だな。いや、現代以上。

「元気になる薬といっていたが細かい効果の説明は無いのか？」

「ええ、だって始めての薬ですもの。・・死ぬ事はないわ」

「ハルさん。師匠の薬はいつも危なさそうなものばかりですが、師匠の言うとおり毒になるものはありません」

ウドンゲが小声で言うてくる。

「分かった」

これは永琳が言った事とウドンゲが言った事に対しての返事だ。

飲む前に永琳を見る。永琳は医者がよくもっている診療記録カードを片手に持って、もう片手はふでの様なものを持って、もう記録する体制を取っている。ついでに笑顔だ。

「・・・いきます」

ごくつと一飲み。ウドンゲが水を持ってきてくれたのでそれも一緒に飲む。そして、・・・ウドンゲも飲んだ。

「・・・」

私は体に何も変化はないか、私のできる限りの神経を集中させて探す。ウドンゲも同じことをしているようだ。

「どっかしら？」

「・・・今のところ変化はないな」

「ウドンゲは？」

「・・・私は師匠が言った薬の効果通りに、すごい体から力があふれている感じです！今なら何でもできる気がします！」

「そう。なら軽く質問するからここに座りなさい」

「はい！」

永琳は何を聞くつもりなのだろうか。

「妖力に変化はある？」

「・・・ありません」

質問と応答を繰り返して、応答のたびに永琳は何かを書きとめている。・・・この質問は薬の効果をより詳しく知るためだろう。やっぱり元気になる薬という名前じゃ渡される側も不安になるしな。だが私に変化がないのは何故？

そんなことを考えていながら、ウドンゲが質問を受け終わるのを待ち・・・終わった。

質問の内容が薬の効果を聞く質問だった事から私が考えていた事と同じ目的だな。

「ご苦労様。さて、次はハルね」

「私も質問を受けるのか？」

「ええ、そうよ。でも今ではないわ。あなたはまだ効果が出ていないようだから、効果がでてきたときに、ね」

「別にいいけど・・・」

効果がでてくるのは何時なのだろうか？ウドンゲに効いて私には効かないということは無いだろう。もし、効かなかったら私の能力発動なしの体でも、妖怪以上の体の抵抗力を持っている事に・・・もしかしたら今が元気だから効かないのか？

「永琳」

「あなたにはちょっと働いてもらおうかしら？そうしたら薬の効果が現れるかもしれないしね」

永琳に人の心を読む程度の能力を付け足した方がいいと思う。

「ウドンゲ、ハルと一緒に人里まで行きなさい」

「ええっ！」

驚きの声を上げるウドンゲ。・・やっぱり私、ウドンゲに何かしましたか？

「人里に行つて何をするんだ？」

「私達はたまに薬の出張販売を行っているの。それを今ちょうどいからやってきて欲しいのだけど、いいかしら？」

「まあ、いいけど・・・フランはどうするんだ？」

「様がみてくれているから大丈夫よ。様も暇つぶしができていいでしょう」

「そうなのか？」

「そうなのよ」

「・・・分かった。ウドンゲ、一緒に行つてくれないか？」

「え、あ、はっはい！行きます！」

「ありがとうございます。じゃあ行つてくる」

「ええ。途中で効果が出た場合に備えて、一応診療記録カードをウドンゲに持たせておくわ。それと、これが薬」

永琳はそういって何処からとも無く薬が大量に入った袋を出し、それをウドンゲに渡した。

「販売方法はウドンゲが知っているからよろしくね」

それを聞くと私は外へでた。ウドンゲもついてきてはいるが喋りづらい。まあ、普通男女一対一になっただれでも喋りづらくなると思うけど。ここに来てははじめは普通にしゃべっていたけど、私ウドンゲに何かしたみたいだし、すごい喋りづらい。だが、ここは意を決して話しかけるしかない。

「ウドンゲ」

「はっはい！なんでしようか！」

「・・・スキマで人里に行く？」

「えーと・・・私は飛んでから行ったほうが良いと思います」

「・・・何故？」

「それは、その・・・」

・・・やっぱり私が何かしたのか。私とスキマに二人でいたら危ない  
といたいんだな。

「大丈夫だよウドンゲ。私は何もしないよ」

「・・・え？」

「・・・え」

まさか、別の理由？・・・ここはもう、ダイレクトに聞こう。

「ウドンゲ、私はウドンゲに何かやったか？」

「・・・いえ、何も・・・もしかして、ハルさんは私がこんな態度  
を取っているのは自分のせいとと思っているのですか？」

「・・・ああ」

「気にしないで下さい。私はただ・・・」

次の言葉を何故か言わないウドンゲ。言いたくない理由があるのか？

「私にはいえない理由があるのか？」

「いえ！私はただ、貴方のことがすっす・・・」  
「？」

「すっごいな〜と思っていただけですよ。ほら、師匠の薬を堂々と飲んでしかもその薬の効果を受け付けていないなんてすごいです」

「それが理由なのか？」

「はい！それで尊敬しすぎて思わず襲いそうになるくらいでした！」

ウドンゲはそういって顔を真っ赤にして顔を手で隠す。薬と診療記録カードが空を舞ったので私が回収する。尊敬しすぎて襲うってどいうことだ？普通は嫉妬で襲うものだろ、多分。

女の子にはいろんな秘密があるということとそれについては考える事は止めた。・・・聞くこと自体が怖いし。

「とにかく、私が何か悪い事をしたというわけではないんだな？」

「・・・はい」

「さっきいったこともそれを伝えたかったんだろっ？」

「・・・はあ。・・・そうです」

何故ため息？

「じゃあ、行こう」

とりあえずスキマは無しということなので飛んでいく。

人里に向かうとき、ウドンゲは姿を消してひっそりと出てきてひっ



そりといなくなるというやりかたで人里を行き来しているという話を聞いた。何故そんな事をするのかと聞いたら、あまり人とは関わりたくないとのこと。その人の中に私は入っていないのか？それとも人外という扱い？・・・どっちでもいいか。

私も、ウドンゲに合わせて行動を取る事にした。そして、人里の中に入った。

「これからどうするんだ？」

「・・・師匠の言っていた通りです、一応」

「・・・私は出張販売なんて事やった事ないぞ」

「そうでしたね。じゃあバラバラじゃなくて一緒に回りますか？」

「ああ、頼む」

「・・・はい！」

こうして、私の始めての出張販売が始まった。出張販売は置き薬の確認と買い薬を出張してうるのが目的らしい。置き薬は永琳が医者として開業したときに、各家庭に薬箱を始めに配置したらしく、一定の期間になると使用状況を確認しに来て減った分だけ代金をとるというシステムらしい。現代にもそんな感じのサービスがあった気がする。

ついでに薬の中身は軽い怪我や病気を治すものらしい。その中身を確認しに今日は来た、というわけ。

買い薬は本当は永遠亭だけで販売するものだったがやっぱり人には永遠亭に行くことさえも困難らしのでこういうときのために一応、持ち歩く事になっているそうだ。

歩いて民家を回っているとき、どうでもいいことを思い出した。

「そういえば、今思えばあの罨ウサギは何なんだ？」

嫌というほどウドンゲに絡んできていたあのてみるとか言う罨ウサギ。あれは永遠亭の住民？まさかそんなわけないか。

「あいつは恥ずかしながら永遠亭に住んでいる仲間です」

「・・・へへえ」

だとしたら相当馬鹿なのか？同じ場所に住んでいる人にあんな嫌がらせをして。最初はいいが、戻ってきたときにしばかれる。そんなことだったら嫌がらせをしないほうがいい。いやがらせは一方的だからこそ意味があるんだ。うん、私いいこと言った。

「ですがこの頃はあまり永遠亭にいらるところを見ません。何かたくさんでいるのでしょうか？」

・・・そうだった！家に帰らないという選択肢もあった。さすが幻想郷。常識をすぐに忘れさせる所だ。

いろんな民家を回って軽く疲れてきた頃、ウドンゲが次でラストのコールをかける。

「今日は次で最後です」

「ああ、やっとか」

私は少し疲れてきたのにウドンゲはまだびんぴんしている。・・・慣れているから？

「ウドンゲはまだ元気があるな」

「はい。なにせあの薬の効果が効いていますから」

「・・・そうだったな。だとしたらそろそろ私も効いてくる頃じゃないか？疲れたし。」

そして、最後の家に来た。・・・見たことある家だ。ものすごく。

「あつ鈴仙じゃないか。置き薬の確認か？」

「はい」

どう見ても寺子屋。慧音さんの仕事場だった。

「おや、ハルも一緒なのか。君たちはいつも一緒に見えるな。付き合っているのかい？」

「えっ！・・・えっと、・・・その・・・」

「付き合っていません！」

ウドンゲが言うのを躊躇している間に私が言う。何故ウドンゲは躊躇したんだ？

「・・・なるほどな。ウドンゲも頑張ってくれ」

「・・・はい、頑張ります」

慧音さんがこんな事を言うとは思ってもいなかった。相変わらずここで頑張つてを会話に入れる理由が分からない。そして、何で私のところを二人そろってみるんだ。

そして、慧音さんのところの置き薬も確認、補充をした。終わった

ので永遠亭に戻る。ああ、疲れた。そして体が少し熱い。風邪か？

「よし、やっと終わったし、戻ろう」

「はい」

私達はまた人が少ないところで姿を消して飛ぶ。結局、薬の効果は現れ現れなかった。どうしてだ？疲れているし、体は少し熱いのに。

「ハルさん。体はどうですか？何か変わった事はありませんか？」

「うん・・・疲れたことと体が少し熱い事ぐらいかな」

私がそう言うと、ウドンゲは診療記録カードに何か書き始めた。多分今言ったことだろうけど。

「・・・今言ったことを書くのか？」

「はい。記録してきてといわれても何を記録したらいいのか分からないので、とりあえずハルさんの行動と体の状態を書きました」

私はその記録を見せてもらう。そこには私の行動と今の状態が書かれていた。しかも、字が綺麗だ。

「・・・すごいな」

「・・・ありがとうございます」

褒めたつもりだったが顔を背けられた。なんで？

なぜかを聞こうとした時、私の体に変化が起きた。体が一気に熱くなり、頭の中が真っ白になった。そして、ウドンゲを見たとき、自分じゃありえない感情がわいてきた。

・  
・  
・  
襲  
い  
た  
い。  
。

## 第二十三話（後書き）

次は少し十八禁かな？

みなさんは襲うのに期待？

フヒヒ、サーセン。

第二十四話（前書き）

フツヒツヒツヒツヒ・・・

以外だぜ。

## 第二十四話

「ウドンゲ」

「・・・どうしました、ハルさん」

私は今にもウドンゲに襲い掛かり、押し倒しそうだった。だが、そのまえに自分を自分で殴り、その考えを一時的にふっとばす。そして、ウドンゲに背を向ける。ウドンゲを見たら今にも襲い掛かりそうな自分がいたからだ。

「永琳に言っといてくれ。この薬は私には強すぎだ、と」

「・・・どうしたんですか、ハルさん？」

ウドンゲが出す声さえ今の私にとっては毒だ。効いただけで襲いそうになる。

「これ以上は何も言わずただ永遠亭にいつて伝えてくれ。少ししたら戻るから」

私はそれだけを言ってすぐにウドンゲのいる場所からはなれる。そして真っ先に魔法の森へと向かった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

魔法の森に着いて誰もいないところでやっと一息。だが気持ちは昂つていて、何でもやりたいという気持ちと、何でもできるという気持ちでいっぱいだった。はっきり言ってこの状態はかなり、やばい。目の前に人がいるなら倒したくなったり襲いたくなるし、頭に何か



したいと思っただけでその思った事をやりたくなってしまふ。今は何もやりたくないと否定しているからいいけど、これで誰かにしゃべりかけられたら大変だ。ここでは・・・考えたら探したくなるのでやめよう。

とりあえず、この薬の効果が切れるまで何をするかが問題だ。この薬はウドンゲ、たぶん妖怪には程よく元気になる薬なのだろう。だが私・・・人間には強すぎる。これじゃ麻薬と変わらないだろう。麻薬を吸ったことないけど。

そして・・・

「・・・よし、走ろう」

走る事にした。薬の効果が切れるまで。

そう思った瞬間、無性に走りたくなってきた。そして、走り出した。

「師匠、ただいま戻りました」

ウドンゲはいつもより早く永遠亭に戻ってきていた。ハルと別れた後、いきなりハルがどこかに飛んでいったので追いかけてようかと思っていたが、薬のことを伝えてくれといわれたので戻ってきていた。

「あら、ハルはどうしたのかしら？」

「それが・・・どこかに飛んで行きました」

「・・・どういふことかしら」

「いきなり自分を自分で殴った後、私に背を向けて師匠に伝言を残して魔法の森の方へと飛んで行きました」

「・・・その伝言はなにかしら」

「えっと・・・『この薬は私には強すぎた』だそうです」

それを聞くと永琳は納得の顔になってその後にくすくすと笑い出す。

「どうしたんですか師匠」

「いえ・・・ウドンゲ、あなたはハルが飛んでいった理由が分かるかしら？」

「・・・分かりません」

「そう。・・・ハルは、たぶん薬の効果が現れたから逃げたのよ」

「えっ！でも、何故逃げる必要があるのですか？」

「フッフ、元気になる薬はハルには強すぎた、ということは薬の効果が効きすぎた、ということ。そしてウドンゲの場合はただ元気になるだけだったものが、効き過ぎたらどうなるかしら？」

「・・・つまり、元気になりすぎたのですか？」

「・・・まあ大体あたっているわ。正確にはハルは麻薬、媚薬を嗅いだり飲んだりした状態と同じ状態になっているの」

「・・・媚薬とはどんな薬ですか？」

「ウドンゲは知らないのね。そうね、簡単に言うと元気になる薬、かしら？」

媚薬の効果を正しく伝えない永琳。

ウドンゲは詳しく聞こうとしたがそれは後でにしようと思い、麻薬について聞くことにした。

「・・・では、麻薬は？」

「麻薬は一時的に快楽を与える薬。でもそれは一時的。薬の効果が切れるとまたその麻薬が欲しくなる。その薬を使うごとに体は壊れていくし、金銭的にも問題が出てくるわ。でも、服用していないと破壊衝動などの感情がわいてきて衝動的になる。と、使ってもいいことの無い薬よ」

「・・・今のハルさんはその状態になっているのですか」

ウドンゲは言う。永琳は微笑みながら言う。

「少し違うわ。簡単に言うとも何でもやりたい状態、ね」

ハルが今なっている症状は確かに永琳が言った通りだった。

「ウドンゲ、診療記録カードをだして」

永琳は、薬を人里に行くときにハルの状態を記録するために持って行った、診療記録カードを見る。そこには永琳が知りたかったことが書かれていた。

「ちゃんと記録していたのね」

「そうですか？私はハルさんの体の状態を記録していただけですが」

ウドンゲは一定時間間隔でハルの体の状態を聞いて、記録していた。

「それで十分よ。・・・ハルはたぶんここに戻る前に薬の効果が出たのね」

永琳は、ただ体が熱いという報告を見て薬の効果がでたという事を

言い当てた。・・ちゃんと医療の仕事をしている人からみたら誰だつて予想が付きそうなものだが、ここでは永琳しかいないため永琳にしかわからないようである。

「師匠」

ウドンゲが永琳にたずねようとしたとき、永琳は何かを書き出し始めた。そして、書き終わるとウドンゲにその書いた紙を渡す。

「それはウドンゲとハルの薬の症状をまとめたものよ。やっぱり、被験者は妖怪と人間がいたほうがいいわね」

そう言うと、永琳は姫のところに行くといつて奥に消えていった。ウドンゲは渡された紙を見る。そこには、ウドンゲとハルの薬を飲んだときの体の状態などが書かれていた。

ウドンゲはハルの所を見る。そこには薬の効果がでたときの状態が書かれていた。そしてウドンゲは見逃せない一言を見つける。

「・・・」今のハルは何でもできると思ってしまう錯覚状態にあるようだ。普段は好戦的じゃなくても少し頭に戦うということが浮かんだだけで戦いたくなり、体が勝手に動き出す、そんな状態なのかもしれない。もしそこにウドンゲのような者が来たら間違いなく襲われるだろう。（性的な意味で）または間違いなく戦いを強いられるかもしれない。逃げた事から能力を使うという考えは浮かんでいないようだ。もしかしたら頭がそこまで考える余裕が薬のせいではなくなっているのかもしれない」

『ウドンゲのような者が来たら間違いなく襲われるだろう』ウドンゲはそこに目が止まる。そして、思う。

(これは、既成事実を作るチャンス！)

美鈴と違ってチャレンジ精神があるようだ。

ウドンゲはすぐに永遠亭を飛び出す。ただ、ハルを探しに。

というか、永琳は間違いなくこれを狙ってあれを書いただろう。しかも、まだウドンゲには元気になる薬が効いているし。

飛んでいくウドンゲを見て、うさつさと小さく笑ってるがいた。．．  
なにか、問題を起こすつもりだろうか？

姫さまこと輝夜のところに向かった永琳は輝夜の様子を見るために来ていた。輝夜は何をしているのか、永琳はそれが少し気になっていた。

永琳は輝夜の部屋の前に来た。

「姫、入ってもいいですか？」

「ええ、いいわよ」

返事を聞くと永琳は入る。輝夜とフランは、普通に座っていた。

「姫、弾幕ごっこはしなかったのですね」

「そうよ。私はそこまで戦闘好きではないわ」

フランと輝夜、どちらにも外傷はなく、服も汚れていないので戦っていないのは容易に分かるが。

「それでは何をしていたのですか？言いたくなければそれで結構ですが」

「永琳は言わなくてもすぐ分かっってしまうから言っわ。・私達は自分たちの昔話を聞かせあっていたの」

「・・・昔話」

輝夜の昔の事、それは、永琳にとって忘れたいものだった。いや、なかったことにしたい事だった。

「輝夜の昔話ってすごいね。空に浮かぶ月に住んでいたなんて」

「そう？そうでもないわ。それにここよりいいことはなかったわよ」

いつの間にか親しくなっている二人。親しくなるのが早すぎる。そんな二人を見て、永琳は昔の事について考えるのをやめ、話に加わろうとした。

「昔は大変でしたよね。追っ手から逃げる逃亡生活」

「そうね。今思えば、楽しかったわ」

死ぬ思いして楽しいのか。まあ、死なないから良かったのだろう。それに、永琳がいるから戦略的に負けないし。

永琳もそれに笑顔で答える。逃走生活の時、実際は輝夜のように楽しむ余裕はなかったのだが。

「そうですね。私達を戦略で捕まえようとする追っ手の戦略を破って逃走したときの追っ手の顔は今でも覚えています」

「すごい！で、それを乗り越えてここにきたんだよね？」

「ええ、そうよ」

フランの質問に輝夜が答える。

ここで永琳が話を変える。

「フランドール、あなたの昔話はどんなものかしら？」

永琳は、こんな昔話をするという事はフランにもなにか、大事な過去があると考えていた。それを聞いて何をするかは考えていないが、要は興味があつたのである。

「うん、フランって呼んで」

「分かった。フラン、教えてくれないかしら？」

「うん、いいよ。輝夜には教えていたしね」

永琳はフランの過去の話を聞いた。

どのくらい走ったんだ、私。

そう思いながら魔法の森を爆走している私。体は疲れを知らないのかまだ走っている。この薬の効果は何時切れるのだろうか。・・・切れた後が怖い。

そう思いながらまだ走る私だった。

「・・・うるさいわね。森の中で何かやっているのかしら」

アリス・マーガトロイドは言う。いつもはそこまで騒がしくない魔法の森なのだが今日は一段と騒がしく聞こえていた。

「これじゃ人形作りに集中できないじゃない」

そういつて人形作りをする事をやめなんで騒がしいのか見てみることにした。そして、できれば解決する。アリスは何故巫女まがいなことを私がするのと自分で自分に突っ込みながら外にでた。

外では見たことがある人が走っていた。そして、いなくなった。ついでに静かになった。その人がうるさい原因のようだ。

「・・・何やっているのかしら」

アリスはつぶやく。そして、止めて事情を聞くかと考える。だが、あんな速さで走っているのを止めるには弾幕を使わないといけない



し、なによりこんなところで走っている人を止める気には、なれなかった。変な人にはあまり関わりたくない。これは誰だって当たり前。

仕方ないので家に戻り、紅魔館から借りてきた本を読むことにした。決して魔理沙のように借りたわけじゃない。

「なんだ・・・今日はずいぶんと騒がしいじゃないか」

騒がしい音で魔理沙は起きる。いまは決して早起きといえない時間帯だ。

「もしかして異変か？・・・だとしたら行ってみるしかないな」

盛大に勘違いして服を着替えて帽子を被り、箒を魔法で取り寄せて外にでる。目指すは・・・もちろん、ハルのところ。

魔理沙は音がするところに飛んでいき、すぐに見つける。飛ぶスピードとハルが爆走するスピードでは当たり前だが飛ぶほうが勝った。

「なんだ、あの音はハルが走っていた音だったのか」

箒で飛びながら、そして木を避けながら魔理沙は言う。

「何ですつと走っているんだ？何かやばい毒キノコでも食べたか？  
・とりあえず止めるか。もしかしたら紅魔館の本を借りれるかもし  
れないぜ」

その判断は不味かった。

魔理沙はハルの隣を飛行して声をかけて何で走っているかをたずね  
る。

「ハル、お前何しているんだ？さっきからずっと走っているが」  
「……………」

ハルは、走る事だけに集中して答えない。魔理沙は質問を続ける。

「もしかして、毒キノコでも食ったか？」  
「……………」

ハルはこれにも答えない。永琳の薬はすごいものだ。

魔理沙は勝手に毒キノコのせいだと決め付けて何処からともなく、  
水色の液体を取り出す。(ちなみに手品のように取り出した)  
それをハルに飲ませようとする魔理沙。

「ハル、これを飲め」  
「……………」  
「……………しょうがねえな」

といて、魔理沙はハルに箒に乗ったままハルの前に立ちふさがる。  
ハルは自我を忘れているわけじゃないのであっさりと避けて走り去  
る。

魔理沙はめんどくさくなったのかミニ八卦炉を取り出して弾幕を撃

つ構えをする。

「ハルは不死身だからこれぐらい大丈夫だよな」

と喋って八卦炉からデカイ弾幕をドンツと音とともに撃つ。今のハルは能力を全て未使用状態だから当たって吹っ飛んだら間違いなく死ぬ。薬の効果で精神は途切れないが体はボロボロになっていくので・・・かわいそうな子。

ドゴツ！

ハルと弾幕がぶつかったとき、そんな音を立ててハルが吹っ飛ぶ。吹っ飛んだ先は何もないので大丈夫だが。

「よう、大丈夫か？」

この人、まったく心配していない棒読みだ。

ハルは起き上がり、魔理沙を見てニヤアツと不気味な笑顔になる。吹っ飛ばされたり走り続けた事もあって、もう抑える事がほとんどできないハル。

永琳の薬の効果が麻薬（または強走薬）から媚薬に変わった瞬間だった。

もちろん、ハルは魔理沙に襲い掛かる。いきなり襲い掛かれた魔理沙は突然の事に反応できず押し倒される。

「痛ってえ・・・どうしたんだよハル」

魔理沙の顔に焦りが出始める。魔理沙はフツ飛ばしたことを怒っていると思っていた。魔理沙それはいいから早く逃げろ！

「いまやったことは謝るぜ。私はただお前にこれを飲ませよう」と

魔理沙が言い終わる前にハルが行動に出た。

## 第二十四話（後書き）

他の人の小説とか見てやっぱり設定とか行き当たりばったりで決めないで最初から決めないと、と思って公式で決められていない設定を書きとめ中な作者です。

感想宜しくお願いします。

## 第二十五話（前書き）

Q 魔理沙、そんな装備で大丈夫か？

A 大丈夫だ問題ないぜ！

Q てゐ、そんなアイテムで大丈夫か？

A 大丈夫、問題ないウサ。

## 第二十五話

ハルは魔理沙の手から手を離して、胸あたりの服を掴もうとする。魔理沙もここまでくるとハルが何をしようとしているのかわかるので弾幕をハルとの間に出して爆発させる。ハルはまた吹っ飛ぶ。魔理沙もすこし、服が焼けたが。

「・・・狂っているのか、ハル」

ハルはよろよろと立ち上がり、ゆっくりと魔理沙に近づく。魔理沙はハルの目を見る。そこにはハルの意思がないように見えた。だが、こうなったのは魔理沙のせいだけだ。

「相当やばい毒キノコを食べたな。よし！ここは私のマスパでブツ飛ばしてから薬を飲ますしかない！」

魔理沙はミニ八卦炉を正面に構えてハルに向ける。ハルはゆっくりと起き上がり不気味な笑顔をしたままゆっくりと歩いて魔理沙に近づく。体は死にそうでも薬の効果で精神だけで生きているハル。すぐく・・・かわいそうです。薬の効果は切れた後がやばそうだ。

「・・・いくぞ！マスパ」

魔力をそこそこためてマスパを撃とうとしたとき、乱入者が現れた。

「待ちなさい！」

魔理沙に向けて弾幕を放つ。魔理沙はその弾幕に向かってマスパを放ち、その弾幕を飲み込みそれを撃った者をも飲み込もうとした。

もちろん避けられる。

「・・・なんだよ」

そこにいたのはウドンゲだった。

・・・う。・・・体が痛い。

走っていたせいで息も切れているがそれを気にするより、私は痛む自分の体の状態を確認してみる。手足は・・・動くけど痛い。首は・・・回るけど痛い。・・・頭は・・・ん？・・・軽い出血か。

かろうじて私の体は立っているようだがいつ倒れるかわからないくらいふらふらしている。走っているとき私は走る以外に考えていなかったが、途中で何かに転んだのかそれで意識が無いというか、なんか朦朧としていたような感じになっていたようだ。

息切れですごいきついので座る。薬の・・・効果が切れたから一気に疲れが襲ってきたのだろう。これじゃあ、元気になる薬というより、疲労がすごくたまる薬だな。

からだがすごく酸素を求めているようなので、これ以上は何も考えないようにして、上を見上げたただ呼吸に専念する。だけど、・・・体の痛みも相当だ。幻想郷に来る前はただの中学生だったんだ。こんな戦場でできるような痛みにはなれていない。



「ハル……さん」  
「……………」

今の声はウドンゲだ。けどどしゃべる余裕が無いのでただ見上げるだけにする。

「…………薬の効果が切れたんですか？」

「…………ちよつとまってくれ」

今考えるだけでもつらいんだ。

ウドンゲは察してくれたのか訊ねてこなくなった。

私は息を整えながら周りを見渡す。周りの木々がちよつと焼き焦げていて、魔理沙がいた。何していたかを考えるのはつらいので考えない。

落ち着いたところで私は話に応じる事にした。

「…………ふう。薬の効果は今さつき切れた」

座ったままでさっきの質問に答える。

「…………そうですか」

…………ウドンゲが落ち込んでいるように見えるのは気のせいか？……  
たぶん、気のせいだろう。

「ハル、お前は毒キノコにやられたわけじゃないんだな」

ウドンゲの後ろにいた魔理沙がそう言いながら近づいてくる。そういえば何故ここに魔理沙がいるんだ？

「ああ、毒キノコじゃなくて永琳という医者薬だ」

「ふうん。永琳の薬か。永琳はそんなやばい薬ばかりを売っているのか」

「違います。やばい薬と思われるものは一度臨床実験をしています。

・・今回がそうです」

「・・それがハルだったのか？」

「ああ、それとウドンゲもな」

「お前もハルみたいに人を襲うような状態だったのか？」

「違います。ハルさん・・人間には強すぎてこのような状態になつてしまつたんです」

「・・お前、大変なんだな」

魔理沙がそんな事を言うとは。・・まあ、もしかしたらただの泥棒じゃないんだな。

「いまさらだがなぜここに魔理沙がいる」

「ああ、それはだな・・私はお前が毒キノコでも食べて狂つたのかと思つて、体の毒を浄化すると思つ薬をハルに飲ませようとして来たんだぜ」

「・・ありがたいけど、私はただ走っていたただけだがなぜ狂っていると分かつたんだ？」

「それはだな、勘、だぜ」

・・勘かよ。しかも浄化すると思つ薬だろ。もしかしたらもつと酷い事になつていたかもしれない。そうか、ようは被験者にしよう

していたのか。

私が黙っている間、魔理沙が言う。

「飲ませようと思って近づいたけど、意識が飛んでいたのか呼びかけに応じなかったから思わず吹っ飛ばしてしまっただぜ」

「・・・転んだんじゃないかってお前が吹っ飛ばしたのか！」

「いやあ、あれは悪かったぜ。まさか吹っ飛ばすとは思わなかったぜ。そのときは、な」

「・・・はあ」

吹っ飛ばされた話を聞いていると痛みを体が意識し始めたのか痛みを感じ始めてきた。今思えば死なない程度の能力を使ってどうにかできたんじゃないか？ほら、永琳だってその能力は体の変化を拒絶して薬の効果を無効にするって言っていたし。本当かは分からないけど、永琳だから大丈夫だろう。

「なあ、ウドンゲ。妹紅の能力で薬の効果を無効化できたんじゃないか？」

私は永琳が言っていたことの確認をとることにした。

「・・・正確にはわかりませんが同じく不死の輝夜様に薬の被験者になってもらわないところを見るとそう思います」

「そうか、ありがとう」

私は早速能力を使う。使うと体の傷はすぐに治ってなくなった。体の変化の拒絶か・・・体の成長も止まるな。

「輝夜も能力で不死なのか？」

「私には分かりません。詮索する必要もありませんでしたから」

まあそうだよな。いちいち聞き出していたら輝夜と永琳の昔話だけで話をまとめて一日、ありのままだと半年ぐらいかかるんじゃないか？

「結局、ハルは毒キノコに侵されていたわけじゃないんだな？」

「ああそうだ」

私は魔理沙の質問に答える。

「ならもう行くぜ。・・・今思えば、私もハルをほつといて紅魔館に本を借りに行けばよかったのかもしれないな」

魔理沙は箒にまたがって風を撒き散らしながらすごいスピードで飛んでいった。・・・私達も戻らないとな。

「・・・よし、私達も戻るか」

私は立ち上がる。

「大丈夫ですか？まだ無理しないほうがいいのでは？」

「大丈夫。体は健康そのものだから」

疲れてはいるけどな。精神的に。

「・・・では、一つ確認を。ハルさん、今私をみて、・・・襲いたいたか、思いますか」

「いや、全然思わないから安心してくれ」

ウドンゲはため息を漏らす。・・・これは安心したからでたものだろ

う。残念がる要素は何一つないし。

「そういういえば、私は魔理沙を襲はなかっただろうか？」

「大丈夫です。私が脅・・・いえ、確認しましたから」

「そっ、そっ」

ウドンゲは興奮したよう私に迫り、私が思った疑問に答える。少しびっくりしたけど、襲っていないなら大丈夫だろう。確かな保証はないけど、襲われたら何か代償を魔理沙なら求めるはずだろう。本とか、本とか、被験者とか。

私達は飛んで帰った。今回もスキマは無し・・・スキマが嫌われているのかそれともそれを使う私が嫌われているのかと思うと心の中で苦笑いするしかなかった。

「はい、私の昔話はおしまい！どうだった？」

永琳はフランの昔話というフランの過去を聞いて内心で驚いていた。フランがそんな事をされて、そんなことをしてきた事に驚いていた。また、人のことで驚く自分に驚いてもいた。まだ、私は人間の心なんだと思っ

「どうだった、永琳」

「・・・正直に言うと、驚いたわ。まさかそんな事があったというのにこうして笑っていられるなんて」

「私もそう思っただわ」

輝夜と永琳が昔話の感想を言い合っていた時、フランが言う。

「でも、私をここに連れてきてくれたのはハルなんだよ」

フランがハルをお兄ちゃんと呼ばずに名前と呼んでいる!?!?!  
これは、そうとう真剣なんだろう。

「私を変えてくれたのはハル。あの赤くて何も無い空っぽの部屋から連れ出してくれたのはハルなんだよ。それがお姉ちゃんが編み出した運命だとしても」

フランは言う。あの出来事は今思えばレミリアが操った運命なのかもしれない。今となっては分かりようのないことだが。

「・・・ハルはすごいよね」

永琳がつぶやく。永琳は何を思っこの言葉を言ったのか。

「永琳、薬のことは気にしないでいいわ。私が作らせたんだもの。

それに、あの子の永琳には拒否権はなかったし」

「いえ、身分が上の輝夜に逆らう事は許されなかったけど、その後、それを」

永琳が輝夜の言葉を否定しようとしたとき、輝夜がさえぎって言う。

「もういいじゃない。もう終わった事よ。ね、フラン」

「そう!もう終わった事だよ!」

二人にそういわれた永琳はその事について考える事を止めた。

「そうですね。もう終わった事です。今は私もこの生活が楽しいです」

「そうよ、私もよ」

「フランも」

三人で言い、笑う。

「・・・私はすこし、やる事があるわ。・・・姫、お願いしてもいいですか？」

「ええ、お願いじゃなくてもするわ。私、の友達なんですもの」

永琳はその言葉を聞くと輝夜の部屋を出て行った。

「・・・そろそろ、ウドンゲが来る頃じゃないかしら？」

輝夜は一人つぶやいた。当たっているけど。

「ただいま戻りました」

私とウドンゲは診療所のところから永遠亭入った。飛んでいるとき思ったけど服が少しボロボロだ。汚れはどうかなるけどずっとこのままじゃいけないと思う。いつもは服装はあまり気にしないけどさすがに・・・なあ。

「・・・師匠は姫のところのようですね」

診療所のところには永琳がいなかった。薬の事をすぐ聞くためにここにいるかと思っただけどそうでもなかったな。

「ハルさん、私達も行きますか」

「そうだな」

フランも気になるし。

「輝夜様、入ります」

ウドンゲが先行して部屋に入る。

「あら、本当に来たわね」

輝夜はフランと一緒に向き合うように座っていた。

「お帰り！お兄ちゃん」

「・・・ああ」

お帰りは正しいのか分からないな。ここ、人の家だし。

「師匠が何処へ行ったか分かりますか？」

「さあ、わからないわ。たぶん、薬品保管室？かしら」

「・・・分かりました」

ウドンゲの質問が終わったみたいなので今度は私がいいたいことが



あるので言っ。

「ありがとう、輝夜。フランを見てくれて」

「私はフランを見てなんかいないわ。一緒に遊んだだけよ。私も暇になるところだったしね」

「そうか、ならよかった」

「輝夜様たちは何して遊んでいたんですか？見たところ弾幕勝負はしていないようですが」

・・・それは私も気になった。

「あら、ウドンゲも私が戦闘好きに見えるのね。・・・まあ、日頃の楽しみというか暇つぶしがそれしかないからしょうがないか。私達は自分たちの昔話をしていたのよ」

「・・・へえ」

二人の昔話か・・・すごい気になる。私より面白い人生を歩んでいるだろうし、夜になるまでの時間つぶしにもなる。外と違って義務も何もないから暇ができればいいこの場所はこんなふうに時間つぶしても時間が余る。

「二人も聞く？」

と、フランが私にとっては最高の一言をいう。もちろん即答。

「聞きたい」

「・・・私も、少し気になります」

どうやらウドンゲも少し興味があるようだ。誰でもあるよな、人の過去の話って。面白いし。

「うん、じゃあ話してあげる！」

そういって、フランは自分の過去の話を話し始める。今思ったけどどのくらい長いんだろう。意外に今日だけじゃ終わらなそうだ。

「うんうんうん……ラッキーだね」

永琳の薬品保管室の中、てゐはいろいろな薬をながめながら言う。  
こいつ……こんな薬品しかない場所で何をする気だ？

「さて……なにを借りていこうかな？」

……魔理沙と同じことをしようとしていた。

「……早くしないと師匠がくるようね」

いつもの勘でそう感じたのかてゐは棚においてある薬品を手にとつてはラベルを見るということを始めた。……そして、ある程度繰り返し返した後、一つの粉末状で袋に入っていた薬を手に取り、逃げようとする。

「あら、なぜ扉が開いているのかしら」

永琳の声が薬品保管室に響く。その声を聞いたてゐは、一瞬固まる

がまだ出口があるほうからは自分が見えていないはずだとウサギの姿に戻り薬品棚のスキマに隠れる。妖獣だからかなのか、ウサギの姿や人型の姿と変化ができるようだ。

この薬品保管室は永遠亭の地下にあり、部屋は正方形で大きさはそこそこの場所だ。部屋の真ん中に薬品棚が一つ。それはメインの薬を置く場所で、よく使用するものがおいてある。扉の前にはいろんな形の薬が置いてあり、よく起こる病気の薬を置いてある。そして扉から遠い薬品棚には、ハルに飲ませたようないろいろやばそうな薬品が置かれていた。

てゐは一番奥の棚のところに行ったので扉の所からは見えない位置にいた。だが、永琳にはそんなことはどうでも良かった。

「また、薬を勝手に持ち出そうとしているのね。今出てくるなら許してあげるけどどうかしら?」

永琳は自首を促す。が、もちろんてゐはでてこない。

(・・・いつものことだけど今回は来るのが早い。なぜ?)

てゐはそのとき、こんな事を考えていたようだ。

「でてこないならいいわ。いつものように見つけて軽く罰を与えなきゃね」

そういわれてウサギのてゐはすこしだけ体を震わせる。なんかいもこんな事をしては罰を受けているようだ。そして、そのことばに少しだけ反応した、というところだ。そんなことをされてもまたここへ来る、・・・懲りない奴だ。

( だけど、こんなところで捕まるわけにはいかない )

すこし闘志を燃やしたようだ。 ・ ・ 懲りない奴だ。

だが二人は動かない。それもそのはずで、永琳は扉の前にいる。出入り口はこれ一つ。 ・ ・ おわかりいただけただろうか。そう、永琳がここにいる限りてゐは迂闊に動けない。ウサギになれることもばれているし。ここにある薬は永琳には効かない事もてゐは知っている。前に粉末睡眠薬をばら撒いたら永琳は眠らず、自分が眠ってしまったという間抜けな結末を迎えたことがあったからだ。でも悪戯のためにここに来る、 ・ ・ 懲りない奴だ。

( ・ ・ ・ でも、こつちも早く手をうたないと相手がどんなこととしてくるか分からない )

てゐは一つ、用意していたあるものを取り出す。( どこからはとは言うな )

それは発煙筒らしきものだった。現代のものと形は全然違うが。というか、どこから拾ってきたんだ？

永琳はただ待っている。出入口が一つだから当たり前。てゐはウサギらしからぬ速さで発煙筒を投げる。普通のウサギは投げられないんだが、妖力があるてゐにはできた。

それは、コロンと部屋の真ん中に落ちて煙をだす。まずはこれで完全に視界を奪う。だがこれでは不完全だと感じたてゐはピッカツと

光る弾を数個設置。爆発しないようにただの妖力で場所の捕捉をされないようにのためだ。もう捕捉されていると思うが。そして、準備万端といわんばかりにうさぎのてりは歩きだす。人型の姿なら絶対に笑っている。

そして、ここまで準備してとりかかる執念がすごい。・・懲りない奴だ。

だが、視界を奪い囷を用意しても永琳には勝てなかった。睡眠薬は持ってきていなかったが、扉を永琳の隣を余裕で抜けたてゐはそのままの姿で地上に出る。だが、そこには人參がおいてあった。

「・・・フツ、私をなんだと思っているのかしら。こんな畏に引っ掛かるわけないじゃない」

・・・そうして引っかかって見事に捕まり、患者を診るための台の上に連行される、てゐだった。もちろん人參をかじったウサギの姿のまま。本能には勝てなかったようだ。・・残念な奴だった。

## 第二十五話（後書き）

私の小説は展開が進むのが遅い気がします。気のせいでしょうか？

感想お願いします。

## 第二十六話

輝夜とフランの過去を知った。それはすごい大きな事だった。輝夜は幻想郷に来るまでの間、追跡者を倒したりしながら逃亡生活していたようだしフランは・・・どれだけ悲しい状況だったのかが分かる。なんであんなに狂っているようだったのか、今なら良く分かる。レミリアはどんな心境だったのか、と私は思う。

「どうだった、面白かったかしら？」

「・・・これを面白いという人はなかないと思うぞ」

「・・・私もそう思います」

ウドンゲも私と同感して言った。それぐらい二人の過去は大変なものだ。

「あのとき、もしお兄ちゃんが来てくれなかったら私はどうなっていたのかな」

フランがぼつんとそんな事をつぶやく。

「うーん・・・まあ、いつもと変わらなかったんだろうね。部屋に閉じこもって人形と遊ぶ日々かな」

・・・やばい、すごく悲しい。あのとき、私はフランを変えられて良かったと思う。前に魔理沙と霊夢が相手をしたようだけどそこではあまり変わらなかったみたいだし。霊夢はあのときのフランを見てどう思っただろう。・・・こんなこと、本人に聞けることじゃないから分からないけど。

「そうね、私と似ているわ。私もここに来てから異変を起こすまでずっと部屋に籠りっぱなしで退屈だったわ」  
「・・・そうおもえる輝夜がすごいよ」

私だったらどうなっていただろう・・・考えられないな。

「あなたが私たちの話をどう思ったかはどうでもいいの。結果オライ、だしね」  
「・・・そうか」

頭になにを言えばいいのか、思い浮かばなかったのでとりあえず返事をした。

「・・・ねえ、ウドンゲ・・・さんは昔話ある？」

フランが何気なくウドンゲに聞く。私からしたら今までの昔話は重い話だったから聞きたくないんだけど。

「ウドンゲでいいです。・・・ありますが・・・ちょっと言いたくないというか・・・」

私はその言葉を聞いて思った。ウドンゲもつらい過去をもっているのかと。

「フフツ、いいじゃない。話してあげたら？」

「・・・それは・・・ちょっと・・・」  
「言いたくないなら別にいいよ。それは誰だって言いたくない事があるし」

私はウドンゲの昔話を催促する輝夜を止める。輝夜はそんなに人の昔話が聞きたいのか？



「そう？じゃあ私が軽く説明してあげる」  
「え……」

ウドンゲはそう輝夜に言われてちよつと驚いた後、私から背を向ける。・・そんなに危ない過去なのか？それとも別に何かあるのか？  
・・というか、輝夜は知っていたのかよ。

「・・輝夜は知っていたのか」

「ええ。それぐらいは一緒に住んでいることだし聞いたりするわ。ただ、あなたに聞いてほしくてね」

「いや、別に強制してまで聞くことなんて無いだろ」

たかが過去だし。まあ、それが自分が記憶喪失という状態で自分にかかわりのある過去とかな言われたらすごい聞きたいから思わず迫ってしまうかもしれないが、私はそんなどこかの漫画やゲームであるような人間じゃないし。

「まあ、あなたが私達に関わるなら私達のことは大体は把握してほしいわ。特に、ウドンゲはね」

「・・どうしてだ？」

「・・・ふう・・・さあ、どうしてかしら？とにかく聞きなさい」  
ため息が分からない息を一つつき、輝夜は話し始めた。私にはため息された理由が分からないし、聞く理由が分からない。人が言いたくない過去ならなおさらだ。

「ウドンゲはね、元は月に住んでいたのよ」

「・・・」

「細かく言つと長くなるから簡単にまとめて話すけど、ウドンゲは

ここに逃げてきたの。何故だか分かる？」

「・・・分かったら奇跡ものだな」

「まあね。少しヒントをあたえたら永琳なら解きそうだけど、まあそれはどうでもいいことね。ウドンゲがここ、幻想郷に来たのは・  
・月に嫌気がさしたからよ。まあ私と同じね」

「ふん・・・・そうなのか」

「・・・何か感想は？」

「いや、なにもない」

「私はウドンゲが月から来た事に驚きました」

なにも言う事はない。私からしたらもう何でもありな幻想郷で誰が何処からきたぐらいでは驚かない。フランはずっと紅魔館の中にいたからしょうがないけど。

「フランは素直でいい子ね」

「そう？ありがとう」

フランを輝夜が褒める。・・・今の聞いていると私がダメな奴に聞こえる。気のせいだろうけど。

「ウドンゲの昔話はもっとあるけど、あれだけはあなたに知って欲しかったの。後はウドンゲからね」

「・・・分かった」

ウドンゲは今も言うつもりはないだろうし、私は正直聞きたくないというのが本音なので聞くのはやめておく。過去をぼかして話すのはよくあることだし。

私は外を見る。朝からここにきてすごい時間がたったはず。まだ太

陽はあるがそろそろ夕日になりそうだ。・・・だいたい四時くらいかな？時計とかがないからとりあえず自分の直感で決める。

「・・・そろそろ帰るか」

そろそろ帰るべきだよな。朝から紅魔館の皆に挨拶なしに飛び出したり、ずっとここにいるというのも悪い・・・と思う。・・・元、私の姉は朝起きて私がいなことに気づいたら発狂しそうな勢いで私を探すだろうし。

「え〜！フランはもっと輝夜とお話したい！」

「フラン・・・」

「そうよ、私もまだ楽しんでいたいわ」

「・・・輝夜もか」

さすがに朝からいないからダメだと思っただけだなあ・・・。

「何故今すぐに帰らないといけないのですか？」

ウドンゲが聞いてきたので質問に答える。

「私とフランは朝早くから紅魔館から出ていてずっといなかっただけだがもう戻ったほうがいいかなと思っただけだ」

「う〜」

フランが頬を膨らませて不満があるといいたげな顔を作る。

「・・・はあ、じゃあこうする。私だけで紅魔館に一旦戻るからフランは輝夜と遊ぶ。・・・これでどうだ？」

「私は問題ないわ」

いや、輝夜に聞いているわけじゃない。

「うん……どうしよっかな」

悩むフラン。私的にはすぐ行ってすぐ戻ってきたほうがいいと思うな。別にただ確認すればいいだけだし。

「……うん。じゃあ私は待っていることにする」

「わかった。私もそれがいいと思うよ。じゃあ行ってくる」

「……気をつけてください」

ウドンゲに安全に気をつけるといわれてもね……どっちかというとうドンゲのほうがだろう。

とりあえず返事を返してから行く。

「分かった」

とりあえずスキマは使わず診療所のところまで行く。永琳にも一応は何処に行くかは言っておかないとな。

一瞬、なんか家族みたいだなと思った。だが、その事を頭から吹き飛ばす。

そして、診療所についた……

「あら、ハル。どうしたの?」

「……」

診療所には、診療ベッドの上に大の字で貼り付けにされているてゐがいた。てゐは私を見るなり言った。

「ハッ、ハル！助けて！」

「あら、往生際が悪いわね」

永琳はスルリとまた何処からか何か（早すぎて見えない）を取り出し、それをてゐの手首にブサッと刺した。

・刺さっていたものは注射器だったようだ。

「・・・何しているんだ？」

ちよつと冷や汗かきながら私は言う。

「てゐが私の薬品保管室に忍び込んだのよ。それで捕まえて、いろいろな薬品を試してみたりしていたの」

笑顔でさらつと言う永琳。・・・少しだけ、てゐに同情した。

「今刺した注射器には何が入っていたんだ？」

これも恐る恐る聞く。今のてゐは眠ったように動かないが、いったいどんな薬を・・・

「さつき打ったのは麻酔薬と言って打った相手を一時的に部分的に麻痺させるの。麻痺する時間と箇所は打った量と箇所によるわ。今のてゐには人間だと致死量の麻酔を大量に摂取させたから一時的に麻痺して動かなくなっているだけよ」

「・・・そうなのか」

麻酔だったのか。だが人間には致死量の麻酔を打って、てゐは眠っているような状態になっているのか・・・妖怪の体はやっぱり人間とは違うんだな。

「それで、どうしたのかしら。何か問題でも起きたかしら？」

「いや、フランだけ置いて一回だけ紅魔館に戻ろうと思う。すぐに戻ってくるから少しだけフランを頼む」

「ええ、分かったわ」

永琳にも言った事だし行くか。

私はスキマを開いて紅魔館に向かった。スキマを使うのが久しぶりに感じる。この頃飛んであちこち回っていたからな。多分それだろう。

「・・・紫はいないか」

軽く安堵。紫は大体が厄介ごとを持ってくることしかしないから、暇なときだけに会うか喋るかしたい。

だが、私の平和は別のスキマが開くのを目撃したために終わった。

「こんにちは。ハル」

「・・・ああ」

「どうしたのかしら？何か嫌な事があったのかしら？」

苦い顔をしているのは紫がここにいるからだけだな。

「いや、何も無い。私は急ぐから、じゃあな」

スキマを開けてスキマ空間から出て行こうとするとき、紫が言った。

「今日は何もやってほしいことは無いわ。薬には気をつけなさい」

その言葉を聞いて足が止まる。私は紫のところに振り向く。

「紫は私とフランが永遠亭に行ったところからずっとスキマの中から見えていたのか？」

「ええ、暇だったから」

「暇だったからって……まあいいけど」

別に見られてやばいことなんて何一つ無いし。紫も暇だったんだろう。幻想郷の管理者の仕事の量と違って意外に少ないのか？

「魔理沙に襲い掛かったときはついにハルも……ダメかと思っただわ」

・ハルも、って何が言いたかったんだ？すごい気になる。そのあとに言葉を繋げたって何かを言おうとした事がバレバレだ。

「ハルも……の後何が言いたかったんだ」

軽く紫をいじめられるかなという期待をこめて聞き返す。たまには紫を負かしたい。

「別に何も言おうと思っっていないわ。ただいい間違えただけ」  
「……そうか」

あゝあ、無理だな。

「ハルは輝夜達の過去の話を聞いていたみたいだけど、具体的にどんなものだったのかしら」

「?ずっと見ていたなら別に聞く必要は無いだろっ」

「ずっとあなたを見ていたわけじゃないわ」

ふん。そうなのか。だったら言わないで逃げるといつ手もあるな。これはプライバシーの保護だ。

「言う事はできないな」

「そう。なら別にいいわ」

何故かあっさり引く紫。私も言わなくていいのならとまたスキマを開こうとしたとき、また紫が独り言のように喋り始める。

「・・・ハルは月面戦争の事を聞いたのかしら」

私はまたしても振り返る。・・・完全に嵌められているよな、私。

「月面戦争ってなんだ？」

「教えてあげてもいいわ。その代わりにあなたがきいた輝夜達の過去を話してもらおうかしら？」

「・・・いいけどたいしたことないぞ」

そう言いつつも教えようとする私。誰だって知らないことは知りたくないよな。私がそうだし。

「別にいいのよ。私もちよつとした興味よ」

「・・・そうか。だが、私から話せるのは輝夜だけだ。輝夜は別に気にしてなかったからいいんだけど、フランは分からないからな」

「そう、話して」



「分かった」

私はありのままに輝夜の過去を話した。といっても、言われた通りに言ったわけじゃないぞ。自分の言葉で、だ。輝夜が月に昔住んでいた事、蓬萊の薬を飲んだため、罰として地上に来た事、月に帰るときに、永琳が協力して逃亡した事などだ。そして、この幻想郷にたどり着いて、この竹やぶの中の屋敷に住み始めたこともあったな。あの屋敷は永琳が作ったものらしいがどうやって作ったんだ？マンガでできそうな錬金術？・ありそうだな。そう思えるから幻想郷はすごすぎる。

話が少しそれたがそんなこんなで輝夜の過去を紫に伝えた。紫は何のリアクションも無くただ真顔でずう〜と聞いていた。・私的に感想が欲しいんだが。

「どうだ？」

こういうときは、ダイレクトに聞こう。

「そうね、なかなか大変な生活を送っていたのね」

よし、今度は私が聞く番だ。

「じゃあ、次は月面戦争のことを聞かせてくれ」

「ええ、夢の中で」

・・・え？紫、まさか話さないつもりなのか？

「おい、それどういう意味だ？」

「そのままよ。あなたが寝ているときに夢の中で話すわ」

「・・・今話して欲しいんだけど」

「時間が足りないわ」

「時間？」

「・・・そういえば、私は紅魔館へ行く途中だったな。すっかり忘れていた。」

「完全に忘れていた。じゃあとりあえず夢？・・・ってどうやってあれの中に意図的に入るんだ？」

「危ない。騙されるところだった。こう言うのって何詐欺っていうんだっけ？詐欺に当てはまるかも分からないがとりあえず知りたい。」

「大丈夫。私があるの夢に入るから。まあ一応は自分の夢と現実の境界を見ておくことね」

「・・・分かった」

「こんなところで紫をまったく疑わない私は馬鹿なのか？まあそれでもいいかな。私は別に気にしないし。」

「じゃあ夢の中で」

「ええ、夢の中で」

「自分でも変な別れ言葉だなと思いつながらスキマから出た。出た場所は紅魔館の門前だ。」

「美鈴」

「・・・」

門の前に立ち、美鈴がいるか確認すると、美鈴が寝ていた。これが普通だからいいんだけど。起こそうか迷ったが、まあ眠っている顔が幸せそうだし幸せな夢でも見ているのだろう。それが私をいじめの夢とかだったらちよつと心にひびが入りそうだけど美鈴に限ってそんな事はないだろう。

門を開けるとき、美鈴がハルさんとか寝言を言っていたのでちよつとミシツとなったが美鈴に限ってと考えてそのままなかに向かうことにした。ちなみに門といたがあれはなんというか演出だ。実際は人間の私じゃでかすぎて開けられない。筋力が足りないと申すかもしれないがそんな貧弱な人間じゃないと信じたい。とにかく、私が開けて入ったのは門じゃなく門の隣にある人間サイズの普通の赤い扉だ。

「ハル」

「うわ！」

中に入ると咲夜がすぐに来た。びっくりしてしりもちをつく。・・・心臓に悪い！目の前にいきなり出て来てこないで欲しい。時間を止めて移動すると私は動けるからこれは・・・どうやってやったんだ？能力は応用がありすぎて困る。

起き上がりながら私は言う。

「・・・すっごいびっくりした」

「あら、ごめんなさい。わざとじゃないわ」

そんなこといわれても絶対嘘だろ。私がびっくりしてしりもちつい

たとき、思いつきりニヤツと笑っただる。言わないけど。

「そうか。なんで時間を止めなかったんだ？」

だが、普通に疑問は投げかける。

「・・・たまには自分の能力をまんべんなく使う事も必要なのよ」

今一瞬迷っていたよな？さっき考えていた事が本当の確率が高くなつたな。それでも言わないけど。

「あれは空間を操ってすばやく移動したのよ。時間を止めるより力を使わないからいいわ」

「ふ〜ん」

・・・ああ、全然分からん。私にもできると思っただけでいいか。もな。まあ、とりあえず時間を止めるだけでいいか。

「あなたとフラン様は何故朝いかなかったのかしら？」

「え〜と・・・フランがちょっと起きる時間帯と寝る時間帯を間違えたんだ」

「・・・簡単にいって頂戴」

「・・・朝にフランが何故か起きていたんだ。朝だから紅魔館のなかじゃやる事がなくて暇になると思ったからちょっとスキマを開いて永遠亭に遊びに・・・いていた」

現代で言う不法侵入してだ。あれはフランが日に当たるとダメだからだからしょうがない事だったけどな。

「紅魔館の中の仕事ならいくらでもあったわよ。ここの妖精メイド

はあまり働かないしね」

「・・・プロの咲夜と並んで仕事したら私は邪魔じゃないか？」

これは決してやりたくないから言っているんじゃない。暇なら何だつてやるが（私ができる範囲で）プロと並んで掃除とかしていたら相手の手際の良さを見て驚き、自分の手際の悪さを見て萎えることもしれない。そう思うと行きたくなくなるんだ。フランの教育にはいかも知れないけどな。

「・・・それもそうね」

・・・すごい傷つく言葉だぜ。

「でも、経験を積み重ねないとうまくならないのも事実よ」

「・・・確かに」

だが私が萎えるから嫌なんだけどな。

「暇なときはいつでも来なさい。あなたは人間なのだから人間らしい事はできるようにならないとね」

そういつて咲夜微笑む。これは同じ人間だからだろうな。

とにかく私はここに来て一応は何処に行ったかも言っただけ大丈夫だろう。・・・よし、戻ろう。

「じゃあ、まだフランは永遠亭にいるから、戻るわ」

「ええ、日が暮れたらできるだけ早く戻ってきなさい。血を吸われたくないならね」

「え」

私はちょっと唾然としてしまった。その間に咲夜は空間をどうにかしてどこかに行ってしまった。フランが血を吸う?・・もしかして晩御飯に間に合わせろってこと?ああ、そんな簡単なこと忘れていたのか。分かった分かった、そうしよう。吸われるのだけは勘弁。

私はスキマを開いて永遠亭に行った。

## 第二十七話（前書き）

やばい、いろんな展開がありすぎて困る。とりあえず、その場で急展開じゃなく、ありえそうな展開を書きます。

という事で、できたのがこれだ。

1 2 3！びっぞ

## 第二十七話

スキマの中に紫がまたいるかと思った私だが、以外に紫はいなかった。スキマが家じゃないから当たり前だよな。・・・私、なんかい同じことで納得しているんだろう。とりあえず永遠亭に戻らないと。

私はスキマを開いて、永遠亭の前に出る。不法侵入はあまりしたくないからな。

だが、診療所の前に落とし穴があったらしく、警戒も能力の使用もしていない私は下など見ていなかった。歩こうとした瞬間下にボンツと落ちる。

そして、ドカツと大きい音を立てて穴底に下半身を強打した。

「・・・いつてえ」

これを誰がやったかは分かる。こんなものを本当に毎日やられていたらたまらん。だが何でここに？無関係な人がはまつたらどうするんだ。・・・もしかして私のはまると予想してか？くそ、なかなか策士のようなだな。それにこの穴、深いな。

最初はかなりムカついたが、こんなに簡単に罠にはまる自分を思うと逆に情けなくて笑えた。自分でも読書の時間を妨害されないと怒らないという優しい心の持ち主だと思う。外ではそうだったし。まあ、友達からの軽いいたずらとかは場合によっては注意したりしたけど。だが警戒心無さ過ぎだろ。このままじゃ妖怪に奇襲されたらすぐあの世行きだな。次からは気をつけよう。

とりあえず下半身が怪我して痛いので死なない程度の能力を使い、



強打したところを治す。やっぱり使い分けできるって超便利。ずっと発動していたらこのまま成長が止まったりして嫌だけど。とめるならせめて二十歳からだろ。永遠に生きるかなんてまだ考えていないけど。

強打して起こった痛みは怪我を治したため、少しずつ消えていって最後には無くなった。痛みがなくなったところで飛んで診療所の中に入る。そこには永琳がいると思ったんだがいなかった。

だが、さっきまでてゐが大の字に縛られていた診療ベッドの上に、足と手を縛られたウサギがいた。いや、手足というより胴かな。

だがなんでこんなところにウサギが縛られている？・もしかして、永琳たちの晩御飯？・ないない。絶対無い。てゐがいる時点でない。食べていたら絶対に今頃てゐは生きていないだろ。

私じゃ考えても分からなかったのととりあえずほっという輝夜の部屋に向かうことにした。が、診療ベッドから離れようとしたとき、何処からか声が聞こえた。

「？」

後ろを振り向き、出入り口のほうを見る。だが、そこには誰もいない。

「・・・幻聴？あほか。老化してるわけじゃないし」

自分でボケてツツコミを入れてみた。・・・なれない事はやるもんじゃない。

だが、幻聴ではないとしたらどこから？・・・聞き間違いではないは

ず。確かにハルと聞こえたし・・・またハルって聞こえた。これは  
確実だ。

私は耳を澄ましながら声の主の姿を探すけどなかなか見当たらない。

「やっぱ聞き間違い？・・・それともこのウサギから？ありえそうだが  
けどありえなさそうでもある」

探しても見当たらないのでとりあえずウサギをずっと見つめとく。  
これでもう一回ウサギ以外から聞こえて姿が見当たらなかつたらた  
ぶんでゐという事にして無視して輝夜達のところへ行こう。

そうしてウサギを見つめ始めたとき、以外にもすぐに声が聞こえた。

「まさか・・・本当にウサギが言っていたのか」

すごい驚き。ここのウサギは喋るのか？・・・もうわからなくなつて  
きた。このウサギに聞けば分かるかな？

「はあ、やっと気づいてくれたよ。普通、すぐ気づかない？」

「いや、普通はウサギが喋ると考えない」

「・・・それもそうだね。ところでさ、この縄解いてくれない？」

「・・・それはちょっと無理だな。君を何処で捕獲したかは知らない  
けど、私が捕獲したじゃないからな。捕獲したと思う永琳に聞いて  
てこないと」

私が永琳の名前を口に出したとき、少しだけウサギが体を震わせた  
気がした。

「だ、大丈夫だ。いちいち永・・・じゃなくって私を捕まえた人に聞

かなくても。捕まったウサギを助けるのに理由なんているかい？」  
「いる、だろ」

人のものを勝手に持ち出したりしたら怒られるし。確かにウサギの命がかかっているけど、まさか兎は食わないだろう。

「・・・じゃあ、私を助けてくれたら一つだけ幸福をくれてやるう」  
「?どういう意味だ？」

「そのままの意味さ」  
「・・・」

どうする？今ならこの兎がどういふ存在かを聞くことができる。いまさらどんな存在なのかを聞くとうとしても、絶対に助けないとダメって言うに決まっている。あつ、だが、永琳に聞けば万事解決じゃね？でもまあ、ずっとこのままって言うのはちよつと・・・なあ。

「助けたいけど、やっぱなあ」

「ああ、もう！大丈夫だよ。私を捕まえた永琳は私をちよつとした薬の実験に使っただけだからさ。もう用済みなんだよ。ただ永琳がほつといているだけなのよ」

「・・・じゃあ、喋れるのもか？」

「・・・チツチツチツ、ここから先は私を助けた後にお話しますぜ」

・・・やっぱりかよ。しかも、なにあの台詞。だが、永琳はただ薬の実験に使っただけか。・・・たぶんてゐの代わりだろうな。なんと哀れな。てゐのために捕まるとは。

まあ、嘘だったらすぐ捕まえばいいかな。そう思って縄を解く。縄はそこまでガツチリとは結ばれていなかった。

「ふう、ありがと」

「どういたしまして」

「（まあ、約束したし）・・・じゃあ、幸せをあげる」

「・・・それって目に見えるのか？」

「さあね。でもいいことは必ずあるよ」

なんだそれ。目に見えるか分らないということは、能力か？・・・  
試してみるか？

私は能力探知をする。・・・能力だったのか。・・・一応コピーしておこう。

私はウサギが持っている能力をコピーした。ウサギはちょっとだけ驚いた顔をしていった。

「・・・今、何をした」

・・・この人は勘が良すぎるだろ。力や能力に変化があったぐらいですぐ気づくなんて。・・・私が人間だから気づきにくいのか？・・・たぶん、ただ鈍感なだけだな。

「ただ能力を使ったのさ」

「あんたの能力は時を操る程度の能力じゃなかったのか」

「はあ？どういうことだ」

一応それも使えるが何故このウサギに分かったんだ？このウサギに使った事なんてないぞ。・・・しかも見ていたとしても瞬間移動したようにしか見えないはずだ。

「あつ？ああ、ウサギの大将のてゐから聞いたのさ」  
「ああ、そうか」

まあそれなら知っていて当然だな。

「で、さっきの質問」

「・・・ああそうだったな」

さっきので終わりかと思っていたぞ。

「まあ、助けたら教えてあげるっていったしね。私が喋れるのは私が妖獣だからだよ」

「・・・もうちょっと詳しく」

「・・・そういえばあんたは外来人だったね。妖獣は元はただの動物さ。それが長生きしていると私みたいになるんだ」

「なるほど」

「じゃあ、もういいね。それじゃ」

そういつて、ウサギは飛び跳ねてどこかに行った。私も輝夜の部屋に向かう。しかし、妖怪、吸血鬼・・・は妖怪の類に入るんだったな。それと魔法使い、妖精、神様、蓬莱人、そして妖獣がいるとは。さすが幻想郷。どこまでいつてもなんでもありだな。幻想と名前に付くだけあるな。もしかしたらもつとおかしな奴もいるのかもしれない。

輝夜の部屋に向かうとき私はそんな事を考えながら歩いていった。輝夜の部屋の前に来たら、輝夜の名前を呼んで入っていいか聞く。

「輝夜、入って」

「いいわよ」

・・・いいかけなのに返事をされた。私がかここにきていることを分かっていたのか。どうやったら分かるんだよ。

「・・・お邪魔します」

私は変な気持ちのまま入る。中では・・・ちょ！？なんで外に出かけようとしているんだよ！

「フラン！？外はまだ太陽が出ているぞ」

「うん、知ってる」

「だったらなんで？」

「それはね」

輝夜の説明をまとめるところだった。フランが外に出てみたいと言葉をこぼしたところに永琳が来て、なら行ってみる？と永琳が誘ったところ即答で、行く事になったらいい。

「だが大丈夫なのか？日傘ぐらいで」

永琳が用意したのかフランは日傘をもっている。だが、それだけでいいのか？照り返しとか何とかがっているいろいろあるんじゃないのか？

「お兄ちゃんは私が焼けることに心配しているの？だったら大丈夫だよ。永琳がすごい薬を私にくれたから！」

そういつて、薬が入った袋を私に見せる。

「この薬は日光をどうにかする薬か？」

私は永琳に質問する。世話係として一応は知っておくべきだからな。

「この薬は使った者の妖力や魔力を体から無駄に放出させる薬。これは力が大きすぎて薬が効果を表さない、または能力で効かないときに使って薬の効果を早めるために薬よ。日光を防がないとは思ってしょうけど、放出した妖力がたぶん日光を防ぐわ」

「たぶんって、これも試験段階なのか」

だとしたら自分が受けた経験上フランに使わせて外には連れ出したくないんだが。

「違うわ。そういう使い方をしたことが無いのよ」

「・・・そうか」

確かに。元の薬の効果の追加効果みたいなものだからな。そもそも外に行きたいがために使うものじゃないし。それにフランが行きたいといったんだしこれで永琳の薬に文句を言ってもしょうがない。薬の効果が見られなかったら紅魔館に戻ろう。

「ちゃんとしたものを作るには今では無理よ。材料と時間が無いわ」

「ああ、薬をくれてありがとう」

「姫も行ききたそうだったからね。一緒に行ってほしかったからわたしただけよ」

「永琳は行かないのか？」

姫の保護者だろうに。

「ええ、私は輝夜がよく言っていた自宅警備隊をやっておかないと

いけないから」

「なっ！別にそれは永琳が外に出してくれなかったからやっていただけよ！」

自宅警備隊に食いつく輝夜。自宅警備隊が何かいけないのだろうか？

「フツッ、ごめんなさい。ちょっとてゐが怪しいからここを空けるわけにはいかないわ」

あ、ウサギ。

「師匠、それなら私が残りましょうか？」

「いいえ、ウドンゲは行きなさい」

「・・・はい」

「永琳。さつき縛られていたウサギを逃がして」

「分かっているわ」

これも即答。もうなにも言わないけどな。

「あれはてゐよ」

「え！てゐって確か・・・」

人型でとてもあんな普通のウサギのようじゃなかったと思うんだけど。

「薬を試してみたらウサギに戻ってしまったの」

「・・・あれからもう元には戻らないという事か？」

「いえ、あの子はあれも元の姿。いつでも人型に戻る事ができるわ。私はてゐを縛っていたでしょう？人型になるとあれがどうなるか分かるかしら？」



「・・・人型より小さいウサギを縛っているから、人型になったとき、更に締め付けられるとか？」

「そのとうりよ。まあ、軽いお仕置きね」

「・・・ごめん。勝手に逃がしてしまっただけど・・・大丈夫か？必要なら捕まえてくるが」

「別に気にしないで。早く行つてきなさい」

「・・・分かった。行つてくる」

フランと輝夜はもう外に出ていたので、私も外に出る。後ろからは永琳の代わりとしてウドンゲもいる。

「フラン、何処に行こうとしているんだ？」

「うーん・・・わかんない」

「・・・」

なにも言えない。計画はちゃんと立てようね。あ、私は世話係だから私が立てないといけないのか。

「まあ、適当に歩きましょう。幻想郷は広いんだから」

そう、フランがいるから徒歩じゃないと移動はできない。とんだらすぐにフランが焼けてしまうだろう。飛ぶスピードで傘が壊れるからだ。しかも徒歩だと日陰もあるから日光は和らぐから、安全を考えて徒歩がいい。

「輝夜、適当と云ったって何処を歩くつもりだ」

「うーん、そうね」

輝夜は近くに落ちていた小枝を拾う。

「じゃあこの小枝の先が向いたところに向かって歩きましょう」  
「……………」

アバウトすぎる。私は暇になると死んじゃう人間でいつも暇にならないよう計画を立てまくっていたからなのか？

輝夜が投げた小枝が向いていた先は竹が覆い茂っている方向。少なくとも人里には向いていないと思う。自分の勘だから当てにならないが。ここへ来てまだ2ヶ月もたっていないし。

「ここに行くのか」

「ええ、大丈夫でしょ？でも一応は死なないようにね」

・ ・ なんだよそれ。

とりあえず、死なない程度の能力は発動させておく。ここに来て毎日ほとんど発動させている気がする。これじゃマジで背が伸びなさそう。

「じゃあ出発よ」

「ああ」

といて歩き出す私達。先頭はフランと輝夜の二人。その後ろからウドンゲと私という順番。

「あ、傘邪魔だね」

「・・・大丈夫か？」

竹が多くて傘が使えないからもちろん閉じないといけない。だが竹で影が大量にできているので傘を差さなくても大丈夫なようだ。も

ちろん、永琳の薬のおかげでもある、と思う。

そして私達は竹林の中を歩き続ける。

「そっぴいえば輝夜、萃香だっけ？あの鬼みたいな子供との戦いはどうなったの？」

人の名前を覚えるのは苦手だ。

「萃香は鬼よ。その勝負ね。話にならなかったわ。やっぱりスペカルール無しは妹紅とだけで十分ね」

「・・・という事は負けたのか？」

どういふことだと聞かれた人は多分思っけど、私からしたらその勝負は輝夜が負けたように聞こえた。

「ええ、その通り」

予想通りだった。

「やっぱり妖怪と戦うにはルール有りじゃないと無理ね。接近戦ですぐ吹っ飛ばされるし。特に相手は鬼。その守りの堅さと耐久力とあったら、ねえ」

輝夜はやれやれといったように笑う。

「ふ〜ん。じゃあウドンゲとフランもそんな感じで強いのか」

私はなんとなく言う。一緒にこうして歩いているけどその気になれば襲うこともできるのか。

「え、そんな事ないですよ、ハルさん。私は弱虫ですから。それに、ハルさんと輝夜様と妹紅にかなう人なんていないと思いますよ。だって、ほら、不死身ですし」

「でも、死なないだけ。勝つことはできないわ」「うーん」

何故か必死に反論しようとしているウドンゲ。

「私もハルと輝夜には勝てないと思うな。だって死なないもん」「フラン、死なないだけで勝てないから」

「そう？長期戦なら相手の妖力切れで勝てると思うけどな」

「・・・それがあつたか」

確かにそれなら、死なないこっちは有利だな。

「ハルは本物の殺し合いをした事が無いから分からないでしょうけど、痛みはあるのよ」

「それは味わった事があるから分かる」

「あと、精神も通っているから痛みでの気絶とか」

「・・・無理だな」

私は前輝夜と妹紅が戦っているときに吹っ飛んだ腕でもやばいと思つた。もし私ならずぐ気絶間違い無しだ。

「それにしてもイナバは謙虚なのかしら？自分を弱虫扱いするなんて。それともハルに守って欲しいからそんな事を言うのかしら？」

「いえ、そんなこと」

・・・なんで顔を赤くするんだ。

「フツツまあいいわ。いじめるのはほどほどにね」

私達はそんな話をしながら竹林の中を歩く。だが全然竹林に終わりが見えない。・・・もしかして迷った？

「なあ、輝夜。もしかして迷った？」

「さあ？わからないわ。この竹林。以外に広いから」

「そーなのか」

とりあえずそうみたいなので歩き続ける。だが一向に竹林以外が見えない。せつかくフランは昼に外に出れたのにかわいそうだ。

「・・・前にもこんな事があつた気がします」

ウドンゲが突然言った。そして、目に狂気のはしっていた。能力を使ったのだろつ。

「ウドンゲどうしたんだ」

「ハルさん、私、こんな事前にもありました。・・・というか、てゐを追いかけるときよく」

「これもてゐが絡んでいると思うのか？」

「いえ、これは妖精の所為だと思います」

ああ、なるほど。てゐにもう一つの能力があるのかと思つたぞ。さつき私が逃がしたウサギがてゐならてゐの能力はもうコピーしているからな。

「相手は多分、三人。そして三人とも能力持ち。そして、その能力の所為で姿、音が捕捉できない。それで相手はこっちの行動がある程度分かる状況。あいての位置を捕捉はできるが弾幕などでは避けられる状態」

・・なんか、いきなりウドンゲが戦闘員みたいな感じになった。私は何も言わずにウドンゲを見る。目は見ないが。

「・・・よし」

ウドンゲは私からして真正面の斜め上を見る。そして、手で子供が手でよくやるような銃の真似をして、そのさきから弾幕を放つ。

「きゃ！」

「うわ！」

「えっ！」

そんな声が聞こえて、視界に変化が起きた。といつても目の前に三体の妖精がいるだけだが。

今思ったけどさっきの兎が言っていた幸福はどこいった。

## 第二十七話（後書き）

次の展開も迷う作者。皆さんならどれがいいですか？

?まさかの聖蓮船のキャラ登場。

?まだその前に出す奴がいるから?は却下。ということで地底に1  
e t ' s g o .

??もまだ出していない奴がいる。ということで妖怪の山に行く。

??もハルにはまだ早い。という事で無難な向日葵。

??はどうみても死亡フラグ?ということをやっぱり適当にいるんな場所を回る。(そのときは細かく場所の事を書きます)

?チルノ

どれがいいですか?感想宜しくお願いします。ちなみに感想がきてもこなくても作者の望み通りに進む場合がありますので、ご了承ください。

## 第二十八話（前書き）

第二十七話のあとがきのアンケート？に答えてくれた方、ありがとうございます。参考にさせていただきますのでこれからも宜しくお願ひします。もちろん、読者皆様です。



## 第二十八話

その妖精はチルノと同じぐらいの大きさだと思う。隣で比べてみないとはつきりしないが。

「・・・やっぱりですか」

ウドンゲ私を見る。その目にはもう狂気はなかった。

「この妖精が今回の犯人です」

「・・・何の犯人だ？」

「・・・ハルさん、気づいていなかったのですか？」

「ああ、残念ながら」

「私も分からなかったわ」

「私も」

フランと輝夜も私と一緒にだ。分かったウドンゲはすごい。

「私達は多分、同じ場所を行ったりきたりしていたと思います」

「そーなのか」

ふざけていないぞ。ただここではこれが一番の返答だと思ったんだ。と一応心の中でい訳を言う。

「今、気絶している妖精の左から、ルナチャイルド、サニーミルク、スターサファイアという名前の妖精です。この妖精は三人とも能力を持っていて左から音を消す程度の能力、光を屈折させる程度の能力、動くものの気配を探る程度の能力です。この子達はまず光を屈折させて錯覚を起こして進んでいるように見せます。もちろん、自

分達の姿も屈折で見えないようにしています。その次に自分達が出す音を消して完全に場所を探れないようにします。これで普通は見つけられません。そして、気配を探る能力ですぐ妖力などでできた弾幕攻撃を察知して避けます。動いているもの限定ですが。また、自分達に近づいている事も分かるので素手では捕まえられません。三人そろえば完璧な悪戯ですが私には効きません」

「……そーなのか」「」

あ、被った。だがやっぱり私達からしたら知らないことだからこの返答は正しいと思う。

「ならば能力を探れば分かったな。まさか相手の能力の罠に掛かっているなんて思っていなかったからな。歩くときは常に探ろうかな？」

「そんなことしたら疲れますよ。まあなにか周りがおかしいと思っただけにやればいいと思います。ハルさん、この三人の能力、今コピーできますか？」

「……できないな」

「コピーするために起こしますか」

コピーする前提なんだな。次からはまらないようにする為だろうけど、たぶんわたし一人だとすぐはまりそうだな。

この時、私はウドンゲがすごい軍にいる人みたいに見えた。ここまでの対処といい判断といいすごい。私が間抜けなだけかもしれないけど。

ウドンゲが倒れている三人の妖精をべしべしって感じではなく。それで・・・起きた。

「あれ？何で倒れているの・・・って、あー！くっそー、またばれた！今度は少しずつ場所を変えてやっていたからばれないと思ったのに！」

真ん中のサニーミルクがそんな事を言った。

「あなたはまた私に悪戯をしにきたのですか」

「そうよ！あんたをギャフンといわせるためにね！」

ルナチャイルド？がウドンゲ言う。・・・やばい、どれがどれか分からなくなってきた。忘れるのはやっ！

「そのために私達はいろいろ作戦を立ててきたのよ」

「はあ・・・あきらめなさい。あなた達の能力は私には効きません」

ため息をつくウドンゲ。確かに人ならまだしも妖怪をだますなんてほとんどの無理だろ。

「そんなの、いつか覆してやるんだから！」

そうサニーミルクが言う姿がいきなり見えなくなる。音は聞こえたままだが、この辺は学習したのだろう。いきなり自分のそばの音が消えたら不自然だし、自分の場所を教えるにも等しい。私は妖力とか探れないから何処にいるのかまったくわからないけど、ウドンゲやフラン、輝夜がいる時点で意味が無いと思う。・・・そういえば自分は能力で分かるな。

「ハルさん、コピーしますか？」

「ん、まあしとくか」

おなじ場所をずっとぐるぐるするのは嫌なのでこの妖精たちには  
かわいそうだがコピーした。

そうすると姿がすぐに出てくる。私がコピーしたのは、光を屈折さ  
せる程度の能力と、動く物の気配を探る程度の能力らしい。

「よし！今のうちに！」

……必死に逃げ出そうとするサニーミルクがかわいそうに見え  
た。

「……サニーこっちに気づかれています」

「え……って能力がいつの間にか使えない！」

やっと気づいたサニーミルク。ほかの二人は気づいていたようだけ  
ど。

「なんで?!……もしかしてこの中に私の能力を使えなくさせるよ  
うな能力者がいるの!?……くっそ!こうなったらここにいる全員  
に悪戯してやる!覚えとけ！」

そんなことをいいながら竹林の中に飛んでいった。もちろん後の二  
人も続いて。

「はあ」

私はため息を一つつく。あの三人の妖精はいろいろと大変だな。な  
んか私も復讐の対象になったみたいだし。だが妖精は馬鹿な奴だけ  
じゃない事は分かった。

「普通に歩けるようになったみたいだし、行くわよ」

「何処に？」

「そうね・・・また小枝で」

そういつて輝夜はまた小枝を拾って今度は軽く投げる。向いた先は・・・私からして右のようだ。

「よし、じゃあ行くわよ」

「おー！」

乗り気なフランが輝夜について行く。私はその後ろについて行く。これで永遠亭に戻ったら笑えるけどな。

「ウドンゲ、ありがとうな。さっきのはかっこよかったぞ」

私達はまだ竹林の中を歩いている。さすが迷いの竹林と呼ばれるだけある。こんなに竹が多くちゃ誰だって迷う。私はウドンゲにさっきおもっていた感想を言った。ついでに感謝の言葉も。

「いえ、そんな事ないです」

「そうか？私には何処かの兵隊のようだったと思うぞ」

私は褒めたつもりだったがこれを聞いたウドンゲはさっきまで照れていたような顔をしていたのにちよっとだけうつむく。

「どうした、ウドンゲ？」

「・・・いえ、少し昔を思っていました」

「・・・ふ〜ん」

「ハルさん、私は幻想郷に来る前、月で戦闘訓練をうけていました。それはいつ起こるかわからない戦争のためです。私達、玉兎は戦闘要員で当たり前のようでしたが最初は何故戦わないといけないか疑問でした。ですが他よりも戦闘能力も秀でていたといわれ、浮かれてしまい、疑問も意識の奥底に沈み、ひたすら訓練に励んでいました。ですが、ある日模擬戦闘をしている時、ふと思ってしまうたんです。『何故、戦っているのか』と。普通の玉兎なら逃げ出すほど厳しい肉体労働をずっとこなしてきた私は玉兎の中では相当強い方に入っていました。ですが、あのときそう思ってからいきなり訓練するのが嫌になって行き、本当の戦闘が近いと発表されたときには、私は逃げていました。普通ならすぐに私の上官に当たる人が逃げ出した玉兎を捕らえてお仕置きするのですが、いままで私はそんな様子をみせていなかったからなのか、それとも能力のおかげなのか、すぐに地上に逃げられました。そして、ここにいます」

いきなりウドンゲがそんなことをいうので私は驚いた。無言の私に更に話を続けるウドンゲ。

「私はどっちかという自分勝手に臆病というイメージになっているので私が逃げても別によかったのかもしれない。特に地上は月の人にとっては地獄のようですから」

「ウドンゲ・・・」

「どうですかハルさん。私はそんな人だったんですよ、そんなダメな奴だったんですよ」

私はウドンゲを見据える。そこには狂気があった。私を巻き込みそうな大きな狂気。多分私が何処かの兵隊みたいとかいったからだな。

「だからあんなにかっこよく感じたんだ。へえ〜・・・驚きだったよ。ウドンゲの過去」

そこで言葉を区切る。そして続ける。

「私のウドンゲの過去の話の感想を言わせて貰うと、大変だな、と思ったよ。ただそれだけ。正直に言って私はそれしか感じなかった。それに傷つくのならごめん。それと、ダメなやつではないと思うよ。自分でも間違いないく逃げる。だって戦うの嫌だし。ウドンゲも最初そう感じていたんだろ？まあ、浮かれていたのは自分の能力がそのとき制御できなかったからとかそんなてきとうな理由でいいだろう」

私は笑いながら言う。今言ったのは全部本当のこと。最後の能力がどうのこうのは冗談だ。

「ハルさん」

ウドンゲの狂気が収まり・・・何故泣いている。すごい意味が分からん。

「ありがとうございます。私、これをハルさんに言うのが怖くて。いったらダメなやつと思われるんじゃないかと怖くて」

「大丈夫だ。私もそんなことなんてよくあることだ。だけど・・・友達ならそんな事笑い話だ」

とりあえず私なりにフォローー。

「フツヤつと聞いたのね。過去の話なんて所詮過去だから誰も気にしないといったのにウドンゲったらやたらに気にするんだから」

「まあ、そう言うこともあるだろ」

「そうね。まあ、とくにハルだから、だけど」

それはどういう意味だよ。

この後、私達は月の話をしながら歩いていった。ウドンゲの訓練内容を聞いたときは逃げるのが当たり前というようなものだった。これをこなしていたウドンゲがすごい。輝夜がいた場所とかウドンゲがいた場所ではすごい人付き合いの差があったのには考えられさせられた。

とりあえず、竹林を抜けているのでどうするのかを聞こうとしたら、まだ輝夜は前進するらしい。私は歩くことがあまりないからここが何処か全然分からない。だが進む。

私達の前にあるのは道ではないだろう。雑草が一面を覆い尽くしている。人は普通は人里からでないからこんなところに道を作るわけがない。だけど、妖怪とかがここで決闘したりもしているのか雑草はそこまで伸びていない。それともただ伸びていないだけかもな。

「はあ、なんとなくだけど寒くなってきたな。夜になりかけているからか？」

「うん、たぶんあちにいる妖精のせいじゃないかしら」

輝夜が言った先を見ると・・・何故ここにチルノがいる。いつも紅魔館近くの湖にいるだろ。・・・もしかして修行か？ラーソンもいるから多分そうだろう。

「周りが全て凍っていますね」

「ああ、前にチルノは修行するとか何とかいっていたんだ。たぶん



「ここで修行しているんだと思う」

「修行？そんなことして強くなるのかしら？」

「まあ、弾幕のレパートリーを増やすとか避け方とかなら極められるだろう」

「それもそうね」

「あー！あの妖精思い出した。たしかよく紅魔館に入ってくる妖精だね」

「そうなのか？」

「うん、私がお兄ちゃんに出会う前にも少し見かけていたかな？」

「何しにきていたんだ？」

「妖精は悪戯したがりますから、たぶんそのためでしょう」

「命知らずなんだな」

「お兄ちゃんもだよな」

「・・・まあ、能力もあるし」

「その前からだよ」

そのときは当たって砕けるだったんだ。ほかにいく当てなかったし。

「ハルさんどうするんですか？」

「いや、輝夜とフランに決めてもらおう。今日は二人が散歩に行きたいといったからな」

「そうね・・・私としては無視ね。今日は戦う気分じゃないわ」

「私も」

「じゃあそうしよう」

幸いチルノとラーソンは二人で弾幕で撃ち合ったりしているのだからうちには気づかなかった。ウドンゲが波長を操ってこっちを発見しづらくした事もある。

その二人を通り過ぎて更に前に進む。もう日が暮れて夕方だ。これ

でもフランは当たったら焼けてしまうのかな？

「日が暮れてきたわね」

「そうだな。ところでまだちゃんとしたところにつけてないけどそれでいいの？」

「私はそれで十分よ。久々に歩いたからもう疲れたわ」

「私も楽しかったからいいよ」

「ふ〜ん。まあそれでいいならいいや」

だが、せめて一つは発見みたいなものがあっていいんじゃないか？

と考えた私が愚か者だったのだろうか。私がみたくない景色がでてきた。

「・・・綺麗ですね」

「そっ、そう？」

「どうしたんですかハルさん？」

「いや、なんでもない」

「もしかしてここに楽しい思い出でもあるのかしら？」

・・・輝夜は絶対にワザとだ。

「いや、何も無い」

「この花なんていうの？」

「それは向日葵といって太陽にあわせて向きを変える花よ」

「そーなんだ〜。ありがとう、輝夜」

・・・早く帰りてえ。もう無理。今この向日葵畑に幽香がない事自体が奇跡って言うのに。せめて何処にいるかぐらい知りたい。能

力反応を調べてみたらここら辺には反応が無かった。とりあえず安心。

「お兄ちゃん、ここだけ枯れているよ」

「え」

私はすぐにフランがいるところに飛んでいく。・・やばいこれって私達のせいになれるんじゃない？・・能力で何とかなるか？

とりあえず花を操る程度の能力を発動させる。もちろんぜんぜん発動していないからちゃんとは使えない。とりあえず、咲かせてみる。

「あ、咲いた」

見事に咲いた。フランはそれを見て喜んでる。一応はこれは能力で咲いたということを教えといた。花は再生するとかそんな事考えていたら大変出いな。

私が咲かせた後、花がざわついているように感じるんだが気のせいかな？

「！ハルさん！誰か来ます！」

あゝ、よし、逃げよう。

「みんなちよつとこつち」

「何処に行こうとしているのかしら」

私が言い終わるまでに来た幽香。

「いや、ただ帰ろうとしていただけですよ」

「私に敬語は要らないわ。それよりあなた」

「・・・なんだ」

「いま、向日葵に何かしたかしら？」

「・・・ああ、ちよつと能力で枯れている向日葵を咲かせてみた」

あははははと乾いた笑いをする私。

「・・・そう、向日葵もそう言っているのだから本当のようね」

「じゃあ私はこれで」

私はあつちで楽しそうに景色を眺めている輝夜とフランのところに戻ろうとするが、制服の襟を掴まれてまた幽香と向き合う。

「・・・わかってるわよね？」

「いえ、分かりません」

「そう、なら決闘を申しこむわ」

でた。もう無理だつて！

「いや、断る」

「そう？なら今ここで襲ってもいいのよ」

「・・・それは止めて欲しい」

「あなたが決闘をするというのならばそうするわ」

絶対にやらん。

「ハル何しているの？」

輝夜達が私の所に来る。

「決闘を申し込まれているところだ」

「ふん。で、やりなさいよ」

「はあ〜!?!」

なんでだよ。

「今日はそれで終わりよ。最後を飾るいい勝負じゃない。それにスペカルールがあるから死にはしないわ。それにあなたの戦いも見たいわ」

「フランも!」

「そんな・・・」

「じゃあ決まりね」

もうだめだ、殺される! (精神が)

「大丈夫ですかハルさん」

「・・・ありがとうウドンゲ。死なない程度に頑張るから」

そして、私は幽香が待つ空中へと飛ぶ。

## 第二十八話（後書き）

ウドンゲの過去ってあっている？捏造もあると思いますがオリジナル設定という事で勘弁ください。あと能力についてもです。

## 第二十九話

「スペルカード枚数は3枚まで使用可能で時間制限は・・・まあ、この太陽が沈むまででいいかしら？」

「・・・ああ、いい」

日が沈むまで、か。私の弾幕で幽香を倒せるはず無いのでその時間まで耐え切る事にする。どうせつてあと少しだし。あっちもそこまです時間をかけないで私を倒すつもりでいるのだろう。

「じゃあ私がこの勝負を見届けてあげる。じゃあはじめ！」

下にいる輝夜が始めの合図をだす。その瞬間、私の横を何かが飛んでいった。

「？なんだ？」

「あら、余所見をされていていいのかしら  
「だつていま」

と行ってまた隣を何かが飛んでいく。

「・・・もしかしてこれ、幽香の弾幕？」

「そうよ」

「こんなの避けられるわけないだろ！」

ルールでは避けられない弾幕は禁止だからこれはあきらかにルール違反だ。

「必ず避けられないわけではないでしょう？だからルールは破って

いないわ」

「そんな」

「そうそう、言い忘れていたけど、賭けるものは私はあなたを一日こき使う事ね」

「・・・鬼畜だ」

そしてせこい。私は時間を操る程度の能力を使い、周りの流れを遅くして自分だけ早く動けるようにする。これでさっきの弾幕も避けられるはずだ。

「いくわよ」

さっきは避けられたら正気の沙汰じゃなかった弾幕が今では普通に見えて避けられるぐらいに遅くなっている。私が早くなっているだけだ。

私はそれを難なく避ける。

「やっと本気を出すのね」

「ああ、じゃないと死ぬ。能力で死なないけど痛みは相当なものだろうし。それと私は幽香と1ヶ月は戦わなくてもいいことを要求する」

「そう」

幽香はスペカ宣言はしないものの、弾幕が段々と増やしている。これは何故だか分からない。だが、こつちが弾幕で攻撃してもすぐ相殺されるし、傘で防がれる。これもせこいと思っただけどルール違反じゃないからなにもいえない。強いんだから素手でかかってきなさい！



「・・・そろそろかしら」

「？時間か」

もう日が完全に沈むまであと少ししかない。フランが日傘を差さなくともいいくらいだ。

「あなたはスペカを使わないの？」

「ああ、時間で逃げ切るつもりだ。だから回避に専念」

手の内をばらしてももう大丈夫だろう。

「そう。やっぱりあなたとは単純な殺し合いがいいわ」

「私はやりたくない」

「なら強制的にさせるわ」

というと目の前にいきなり迫っていた。幽香がとばす弾幕以上のスピードだ。だが目の前に来て何を

「うわー！」

殴るだと！？それって完全にルール違反だ！

体は幽香のパンチには反応できなかったのでとりあえず時間を止めて後ろに引く。そして時は動き出す。

「幽香、これは完全にルール違反だ」

「そう？私は弾幕を放っただけよ」

そういつて傘をくるくる回す。いや、どうみたってルール違反。

「ハル、確かに幽香は弾幕を放っているわ」

「え」

どういうことだ。

「私もそのときは能力で須臾を操って見ていたわ。確かに幽香はハルを殴る拳の前に弾幕を作っているわ。それを殴って至近距離で飛ばしたの。後ろを見て見なさい。意外にこの能力って疲れるのよね」

後ろには向日葵が無いところにすこし大きなくぼみが見えた。

「これって非殺傷だよな？」

「ええ、そうよ」

いやあ、怖い。絶対死なないのをいいことに殺傷設定にしているだろう。それぐらいの威力だ。

「それじゃいくわ！」

やっぱり殴りかかってくる幽香。弾幕じゃ避けられると悟って体も使ってきた。一応は見えているけど速い。しかも殴るのをやめずに連続でなんかいもはなってくる。時を止めて距離をとってもすぐ目の前にいるし、さっきから弾幕の数が増えてきた。一回のパンチでショットガンのように飛び出す弾幕。しかも押し出し効果で速い、速い、速すぎる。反撃なんてする余裕も無い。避けるのに専念すればいいがこれじゃ人間の私はいつか被弾してもおかしくない。

「うわ！いつ！おわ！」

私は変な声を出しながら避ける。上に飛んで避けたり下に避けたり左右に避けたりして大変。

「どうしたの？もう終わり？」

「正直終わりにしたいです」

長い。後ちよつとなのにこんなに長く感じるなんて。ここは向日葵を人質に逃げ切る？いや、そんなことしたら間違いなく殺し合いに発展する。私もそれはちよつとやりたくないからやらない。須臾は時間を止めるのも同然だからルール違反だからダメ。それに一瞬のあいだに弾幕はなつたとしても弾幕も止まったようになって意味が無い。

「あら、もう日が沈むわね。じゃあ」

そういつて傘を前に突き出す。なにをする気だ？

「じゃあせいぜい避けてみなさい」

そういつて、放つたものは魔理沙をこえた極太レーザーだった。

「ちよつ」

私は時間を止める。レーザーは目の前で寸止め。私は場所を移動してそして時は動き出す。だが、動き出した瞬間私がどこにくるか分かっていくかのようにすぐレーザーが飛んでくる。このままじゃいつか被弾してしまう。

「こうなつたらスペカ宣言！」

こっちもスペカで乗り切る。あっちのほうが早く出したから防御に徹したら逃げ切れるはず。日もカウントダウンできるぐらいのあと少しで沈む位置にあるし。使うのは光符『あふれる光』だ。

私は光を剣状にしてマスパもどきに飛ばす。壁にしたら見えなくなつて何処から飛んでくるか分からないからな。

「え！？ちよつ！」

私の真横から弾幕が飛んでくる。不意だったのですこしビックリした。これは時間を止めての移動で回避。時が動き出したとき、輝夜のカウントダウンが始まった。時間切れが近いということだろう。

「10」

私は幽香の姿を探す。何処いった？姿が見当たらない。

「9」

一応は不意討ちを予想して光を自分の周りに漂わす。いわゆる弾幕の盾。霊夢たちみたいに結界ができたらなあ。

「8」

もう諦めたのかと思った時、暗くなりかけていた視界が白くなった。そして、下からマスパもどきを傘に宿した幽香がでてきた。視界が白くなったのは

「さあ、残りわずかよ。せいぜい逃げなさい」

さつきよりは小さくなったけど幽香自体も動けるみたいなのでさつきよりも厄介なのはあきらかだった。

「7」

一瞬にして私の目の前に飛んできて傘マスパから光の弾幕（光の矢）を飛ばす。近すぎ！

私は漂わせていた光の弾幕で相殺しようとしたが、あっちのほうが力が上なのか見事に貫通して私に飛んできた。鬼畜すぎる！

時間を止めて移動してもすぐに私のところめがけて飛んでくるこの弾幕は私には早すぎて時間を止める余裕さえない。だから、霊夢の能力をつかう。

バンツと空気を踏み台にするようにすごい勢いで飛ぶ。それでさつきまで目の前に迫ってきたマスパ弾丸を避ける。これで残りを勝負だ。

「6」

私は必死に避けるのに専念する。

「5」

「4」

「3」

「2」

このとき、幽香の攻撃がやんだ。いきなりどうしたんだ？

「1」

私も警戒しつつも動きを止めた。そしてタイムアップ。よし、逃げ切った。

「よし、じゃあ帰ろう」

「いえ、帰らせませんわ」

「え」

「ハル、時間切れになったときはどうなるか分かるかしら？」

「え？それは無効試合だろ」

「そんなルールはないわ。また再戦か第三者に勝負の優劣で勝敗を決めてもらうのがマナーってところよ」

そういつて幽香は微笑む。

「じゃあ第三者の皆さん、私とハル、どっちが優勢だったかしら？」

・・・あつ、もしかしてこれを狙っていた？

「・・・そうね、私は幽香が優勢だったと思うわ」

「・・・私もそう思います」

「フランはわかんない」

「フツツなら私の勝ちね」

「・・・」

畜生。そんなマナーとか無しでしょ。私は咲夜からルールしか教わ

っていないんだぞ！というか、ルールとしてつくってくれ。

「ならハルは私の一日奴隷」

扱いが酷くなっている。

「そんな……」

「大丈夫、今日じゃなくてもいいから、ね」

そんな笑顔で微笑んでも笑えない。

「ああ、何をさせるか楽しみだわ」

そういつて幽香はどこかに飛んでいった。……はあ。ため息が出ない。

「残念ねハル」

「そう言う割には顔が笑っているんだが」

「フツ、ハルがここに来るときは私も一緒に行くわ」

「……」

最近、嫌な事ばっかな気がする。

夜になったので探検隊は解散。輝夜とウドンゲは永遠亭へ、フランと私は紅魔館に戻ろうとしたが、フランは一人でやりたい事があるということなので私とフランも更に別れた。フランは力のコントロ

ールの練習かな？それとも他に何かある？まあ、いろいろあるが私が知ったことでもできないので考えるのを止める。危険な事なんてないだろう。前はフランのほうが危険だったし。

ということでは私は紅魔館に戻ってきている。中には入らず屋根に座っているけど。

「はあ・・・疲れた」

主に弾幕ごっこに疲れた。決闘はあんなに大変なものなのか？一回やるだけでこんなに疲れるなんて・・・。  
私は空を見る。月は三日月だった。

「はあ」

「あら、こんなところに居たの」

音を立てずにレミリアが目の前に飛んで現れる。

「ん、ダメだったか？」

「別に気にしないわ」

そっぴいながら隣に座るレミリア。

「フラン、頑張っているかしら？」

「？まあ、人付き合いは前よりずっとよくなっている。後は力のコントロールをつければもう基本的なことは教えなくていいだろう」

これはフランの教育の事だ。フランを世話するときレミリアに私が相談したのだ。したら少しだがどういふことを教えて欲しいかを聞いたのでそれをやってきたのだ。だが、それは外に出るとすぐ



に達成した。

「そう。感謝するわ」

「感謝するも何も私は世話係だからな」

「フツツそうね。でもやっぱり悔しいわ。私はフランに何もしてやれなかったのに元は他人だったハルにフランをあんな簡単に変えられたなんて」

「・・・そうか？レミリアでもすぐにどうにかできそうだけど」

「・・・私にはできなかつたわ」

そういつて立ち上がるレミリア。・・・すごい気を悪くさせた感があります、私。

「さあ、すこし働きましょうか？」

「え？」

「あら、私だつてこの紅魔館の主。働いていないわけ無いじゃない」

そういつて飛んでいった。なんか嵐みたいだったな。というか働いていたんだ、レミリア。何しているんだ？・・・思いつかない。フランとレミリアってどういう関係なんだ？今度フランに聞いてみよう。

「ハル」

「？・・・紫か」

今度は後ろから紫が出てきた。

「夜の幻想郷はどうかしら？幻想的でしょ？」

「・・・殆ど真っ暗で何も見えない」

「残念ね。ハル、あなたにあってほしい人がいるの」

「？誰だ」

「行ってからの楽しみよ」

「・・・今日は止める」

「拒否権は無いわ」

・・・結局強制かよ。

私は下にできたスキマに落ちる。紫も一緒に。

「はあ・・・今日はいろいろ疲れたんだぞ」

「そう、でも大丈夫。あつてほしいのは私の友達だから」

「ふん」

紫に言われながら一緒にスキマを出る。うん・・・なんとというか空気が違う気がする。私じゃなんともいえないな。

「ここは何処だ」

「冥界にある白玉楼という場所よ」

「冥界？」

「冥界は死者が行く場所の事ね」

「・・・そんなところに来ていいのか」

「ええ、大丈夫」

ちよつと気が進まないが・・・というかまったく無いが、とりあえず紫についていく。

紫についていき、いろんな襖を勝手に開けて進んでいくと、そこには一人の女性？がいた。なにか食べているな。

「！」

「あ」

紫はその女性の背中を軽く叩く。もしかして食べ物詰め込みすぎで喋れなかったのか？

「ふう．．．ありがとうございます。紫」

「詰め込みすぎはよくないわよ」

「え〜、だって美味しいんだもん」

「はいはい、ならゆっくりと食べてね」

そういつて紫は私のほうを向く。

「幽々子、あの少年が私の代理管理人のハルよ」

「そう。私は西行寺幽々子、宜しくね」

「．．．はい、私は神崎ハルと言います。．．．宜しくお願いします」

初対面にはやっぱり敬語。これは殆ど癖だ。まあ、周りに白くてふよふよしている丸い玉とかがいることやここの環境とかもあるけど。

「．．．．．」

「．．．．．」

何故かずっと見られているんだけど。

思わず目をそらす。

「．．．かわいいー！」

「おわー！」

いきなり飛びつかれた！どうする？よし、もがく。というか紫、笑っていないで助けてくれ。

「ちょっと幽々子さん！何しているんですか！」

「え〜、だつてかわいいもん」

「はあ？」

「幽々子様、ただいま戻りま」

そして小さな女の子が私が抱きしめられているところに来る。

「きつ貴様！幽々子様になんて事を！」

「え！違つ！これは幽々子さんが勝手に抱きしめてきたんだ！」

「うるさい！この私の刀で切り裂いてやる！」

少女は買ってきたと思われる食材を投げ出し、腰に挿している刀を抜刀しようとする。だが、幽々子さんが私を抱きしめたまま、その少女のところに飛んで行き

「なっ何するんですか幽々子様！」

「妖夢もかわいい！」

幽々子さんはかわいいのに目が無いのか？だが私はかわいくないぞ。

そして妖夢と呼ばれた少女も抱きしめられて落ち着いたところで私は放してもらつ。

「はあ．．すみません。誤解していました」

「ああ、気にしないでいい」

「すみませんでした。．．．ところで幽々子様、放してもらえますか？恥ずかしいです」

「いいじゃない〜。減るものじゃないし」

「はあ．．．」

この人は紫とは違うけどなんかこう・・・何考えているか分かりずらい人だ。

「妖夢。この子が紫の家族に加わる人よ」

「はあ・・・」

「いや、いつ加わると言った」

「え〜と・・・紫から前聞いた気がする」

「・・・いつから私はそうなったんだ紫」

「フツツそうだったかしら？」

「・・・もういいや」

「（ハルさんも大変なんだなあ）・・・幽々子様、そろそろ放してくれませんか夕食が作れないですよ」

「あつそうだね。はい、じゃあ早くお願いね〜」

「はい。・・・ハルさんもここで食べていきますか？」

「え？いやいいよもう紅魔館に」

「ええ、私も一緒にいただくわ」

・・・言葉を遮られた。

「はい、わかりました。それと、私の名前は魂魄妖夢です。ここの庭師をやっています」

そういつて食材を取ってどこかに行く妖夢。・・・というか普通は知らない人がきてすぐ一緒にご飯一緒に食べますか？とかないだろ。

「ハル、外の常識とここの常識は違うのよ」

・・・紫が私が考えていた事に対しての答えを言う。

「・・・ああ、わかったよ」

ちよつと納得しなかったが結局は一緒に食べることにした。

## 第二十九話（後書き）

弾幕ごっこのことを書いてみましたかどうですか？

指摘とかがありましたら感想にビシッ！バシッ！っを書いてください。お願いします。

## 第三十話（前書き）

ついにぐだぐだを捨てる事に成功したと思う作者でございます。



## 第三十話

えーっと・・・幽々子さん？のところで食べた夕食はそれは夕食といえる状況じゃなかった。

いや、妖夢が作った料理はすごく美味しかったよ。あんなに小さい・  
・そういえば私より年上だったな。

だが、紫が連れてくるのか何なのかいきなり人が集まり始めた。最初は萃香が来たと思えばその次に何故か霊夢、魔理沙、アリスと並んでくるし、最後には騒霊とかいう幽霊三人組・・・たしかプリズムリバー三姉妹だっけ？（そのときやった演奏が耳に残っていて名前もついでに覚えた）そんなのも来てもう宴会状態だった。なんでこんなに来たのか？そう思っただけに紫に聞いたら萃香が自分の能力を使って人を集めているらしい。まだまだ能力を使用して人を集めようとしていたようなので能力をコピーしてやった。そしてやっと人が増えるのが収まった。

だが増えた人たちで宴会が始まった。そこで私はその宴会場から逃げて外で空を見ていた。

中で妖夢の悲鳴と私に助けを求めてくる声があったが苦勞してるんだな、と同情して紅魔館に戻った。そのときはもう疲れていたんだ。許してくれ、妖夢。

そして、それから一週間が過ぎた。ここにはカレンダーがある。しかも、今で言う太陽暦のカレンダーが。妖怪には月が大事だからと

か何とかで、常に最新の暦を外から取り入れているらしい。

そして、私は図書館に来ている。何故かと言うと異変のときに話していた魔法をパチュリーが今日、教えてくれるというのだ。人間には到底真似できない神秘の力・・・憧れるぜ。

私はやる気十分でとりあえずパチュリーを探す。

「パチュリー・・・」

探してみると・・・寝ていた。しかも本を読んだまま。

「（どうする？起こす？それともそつとしておく？後からでもできるし。だとしたら何処に行く？フランは今日は寝ていると思うし・・・また永遠亭？いや、やっぱり勉強かな？）」

私は起こさないように飛んで自分の部屋に戻ることにした。

「・・・だれ」

「・・・」

飛んで音を出してもいないのに何故起きる。

とりあえずまたパチュリーのところまで行く。

「・・・おはよう」

「ええ」

「ところで魔法の事なんだが、眠いなら後でにする？」

「別にいいわ。教えてあげる」

そういつて立とうとするが、寝起きだからなのかちょっとフラフラしている。大丈夫か？

「じゃあ教えてあげる」

そういつて私はパチュリーについていった。

着いた場所はパチュリーの個室と思われる場所。だが図書館と同じで本がたつくさんある。だが、なにかの研究でもやるのかいろんな瓶や液体なども置かれていた。

「ここでやるのか？」

「ええ、暴発されて本が傷ついたらいやだもの」

「・・・そうだな。だったら外でやればいいんじゃないか」

「私がいや」

「・・・だけど、ここでやっても暴発したら大変な事になると思うけど」

「私の部屋には特別に大切なものはないわ。・・・昔はあつたけど」

「？魔理沙に盗られたのか？」

「・・・違っわ」

そのとき私をずっと見つめていた。私もずっとパチュリーを見ていた。だがすぐにパチュリーは、はあっと息を吐き、私に魔法を教える事をはじめた。

「まずはあなたにどんな魔法があつかを試すわ」

「試すって・・・どうやって？」

「これ」

そういつて本の中の一部を見せる。分かりやすいように日本語だ。

「難しい上級魔法になると別次元の言葉やレベル、構造の魔道書もあるわ」

「へえ、そうなのか」

「とりあえずそこを見なさい」

魔道書つて魔法についての知識が書いてある本か？・・・ここらへんも後で聞いてみよう。

本を見る。・・・なんか、どこかの詩みたいだな。

「これを全部読めばいいのか？」

「ええ。ただし、読むときはその色を想像して読むこと」

「わかった」

すぐに読み始める。

中には春夏秋冬の景色を想像させるような詩のようなものがある。

「・・・声に出して読まないとだめか？」

読む前になって恥ずかしくなった私。

「・・・できたらそうしてほしいわ」

「わかった」

私は声に出して読み始める。すごい恥ずかしいがしかたないな。

「はあ、よんだぞ」  
「……」

読み終わって深呼吸。ずっと読んでいたが別に自分に変化は無かった。これで何が分かるんだ？

「パチユリー、これで何が分かるんだ？」

「……驚きね。まあ予想通りでもあるけど」

「？何かあったのか？」

「あなたは本ばかり見ているからよ。魔法は本に出てくるわけ無いでしょう。あなたが本を読んでいる間に火、水、氷、月の属性の魔弾を出現させたわ。あなた、能力を発動させた？」

「いや、使っていない。というかその発想が無かった」

「そう。つまりあなたは能力無しではその属性の魔法は一応、使えるみたいね」

「……やったな」

「でも一応、よ。これは本当に簡単な魔法。魔方陣、詠唱、魔法発動の材料を使わずにただ自分のイメージだけで作る……これを無詠唱魔法と私はよんでいるわ」

「ふ〜ん。じゃあちゃんとした魔法をやるにはどうすればいいんだ？」

「それはもう、人間の場合は才能があるかないかの問題ね。無ければ発動はしない。ただ失敗するだけ。無詠唱は魔法の属性を想像してつくるから誰だつてできるわ」

「じゃあ霊夢もか」

「……ええ、一応は」

霊夢の名前を出したとき、少し嫌な顔をしたように見えたのは気のせいかな？まあ気のせいだろう。

「でも、あなたは私の能力だってコピーしているのでしょうか？その能力さえあれば大体の基礎魔法ぐらいはできるでしょう。主に属性だけだ」

「うん・・・でも弹幕ごっこは非殺傷だからそこまで強力な魔法なんて必要ないだろう。逆に無詠唱ですばやく大量に作れるほうがいいかも」

「そうね。でも攻撃するだけが魔法じゃないのよ。まあいいわ。今日は無詠唱の練習をしましょう」

攻撃するだけが魔法じゃない？どつという意味だ？

聞きたいけどそれはまた今度という事なので、私はまたパチュリー講座を聞くことにした。

無詠唱魔法の練習法。・・・実に簡単だな。

「さあ、実際にやってみなさい」

「・・・分かった」

無詠唱魔法の発動は属性の起源、火なら炎とか、水なら雨とか、氷ならチルノとか（ふざけていました）、月なら宇宙とかそんな連想ゲームみたいな事をして作り出すそうさ。まあ、無詠唱だけあってなれると自然にイメージが定着していちいち考えなくても作り出せるようだけど。それと能力を使うのはなし。

「パチュリー本当にここでやって大丈夫か？」

「心配ならそれを飛ばさないように練習しなさい」

・・本当に室内でやるつもりなんだな。

「はあ・・・よし、やるか」

無詠唱魔法は、本当に誰でもできるものだな。うん、絶対そうだ。

私のイメージ力というか想像力があるのかすぐに魔弾はできた。(ただ簡単なだけだった。ちょっと自分すごいなと思った私は馬鹿だった)

後はこれを大量にすばやく作れるようにするだけになって、それを一日かけてまあまあできるようになった。これで少しは勝率も上がっただろう。

「ふう、よし。ありがとうパチュリー」

「・・・ええ。お疲れ様」

「じゃあ私は戻るか」

自分の部屋に。

と思ったらパチュリーに呼び止められた。

「どうした？」

「・・・ここに座って」

「は？あついや・・・分かった」

パチュリーが指した場所、パチュリーの隣に座る。・・・何がしたいんだ？ぜんっぜん分からん。

「パチュリーなにがした」

パチュリーを見ると、寝ていた。

「・・・もしかして、寝るための肩掛けにするために私をここに呼んだのか？・・・まあ、等価交換だから仕方ないか」

パチュリーの手元を見る。そこにはなにか記録していたような本があった。

見ると・・・私の記録だな。私がどんな魔法を使ったかなどを書いてあった。・・・すごい、こんな真剣に教えてくれているなんて。

「・・・ありがとう、パチュリー」

私はパチュリーが起きるまでここで待った。

私が起きたのは、肩にかかる何かの重さを感じたからだった。



「ん……」

私は何をしていたのだろうかと思いきったばかりのパチュリーは一瞬考え、すぐに思い出す。

「……私は寝ていたのね。しかもハルの隣で」

最初はボーツとハルを見つめていたパチュリーだが、だんだん何てことしたんだと顔を赤くする。

「はあ……ハルは寝ているみたいね。……私はどのくらい寝ていたのかしら」

パチュリーの自室には窓は無い。ちなみに、ハルはずっとやる事が無くて魔弾を作って頭の上でぐるぐる回して遊んでいたら自分に被弾して気絶しただけである。

パチュリーは動こうとするが動こうにも今度はハルがパチュリーにもたれ掛かっているのでパチュリーは動けない状態である。

「……どうしようかしら。……ハルの魔法の状態でも見とくかしら」

そういつて手元に落ちている手帳のようなものを拾って開く。そしてすぐに自分の世界に入る。（読書タイム）

力づくで退かすこともパチュリーはできたがそれは……その……まあ、別にパチュリーはハルといられる時間が悪い気はしなかったから起きるまで待つつもりのようなだった。

「……………」

目をいきなり大きく開き私は立ち上がる。少し頭がズキズキするが起きた私。なんで寝ていたんだ？あの時は全然眠たくなかったんだが……まあいいか。

「あら、起きたのね」

「え？ああパチュリー？」

ちよつと視界がもやもやするのは何故？

とりあえず聞こえた方向に向く。今の視界はモザイクだ。

「ごめん。いつの間にか寝ていた」

「別にいいわ。私も寝ていたんだし。ハルもたくさん魔法を使ったから疲れているのよ」

「そうなのか？だったら今視界がモザイクなのもそうなのか？」

「それは……分からないわ。すこし見せなさい」

私はパチュリーがいると思うところ歩いていくが、何かに引っかかって転ぶ。

「きゃー！ちよつとー！」

「?もしかして今引っかかったのってパチュリー?」  
「違うわよ!」

じゃあどういう意味だ?

とりあえず立とうとするが何故か立てない。しかも視界はまだモザイクでどこで転んだのかさえ分からない。しかもなにか柔らかいものの上にいるんだが、・・・もしかして人食い植物とか!?

「なつなあパチュリー、今の私どうなっているんだ?できたら教えてほしいんだが」

「え?いえ、どこどこにいるかですって?」

「あっああ」

マジで怖い。さっきから何かの吐息みたいなものも感じる。一応は能力を発動させている。

「・・・その場所でゆっくり起き上がりなさい」  
「わかった」

パチュリーにしたがいゆっくり起き上がる。

「・・・よし」

起き上がるのに何故か一苦労したがそのままつつ立っているとだんだん視界が戻ってきた。ぼやけていたのはたぶん起きたばかりだからだろう。たまにあるよね、そんなこと。

「まったくもう・・・ハルが」

最後のほうが小声で聞こえない。

「どうした？」

「・・・なんでもないわ。とりあえずは無詠唱はもう殆ど弾幕ごっこに使える領域よ。勘違いしないでよ。これは誰にだってできる事なのだから」

「ああ」

「・・・これで今日は終わりよ」

「よし！ありがとな、パチュリー」

すこし屈伸をしてからパチュリーにお礼。

「・・・ええ、他の魔法を習いたければまたここへ来なさい」

「わかった。・・・以外にたくさん来るかもしれないがいいか？」

「・・・ええ」

「ありがとう」

じゃ、っと言ってドアに向かう。そして、図書館にもどった。

### 第三十話（後書き）

パチュリーはやるときはやる子なんです。いい子ですね。

間違い等あれば指摘お願いします。

2010年11月9日に書き足りなかったのに気づいて書き足しました。すみません。

### 第三十一話（前書き）

ふう・・・やっと、テストが終わりました。

今回は本気で取り組んだので小説更新がおくれました。まあ本気で取り組んだところで作者は？なのであまり意味が無いのですが。

それでは、どつぞ

### 第三十一話

図書館に出た後、私は自分の本を積み上げて置いた場所に行き、魔法について書いてある本を読んでいた。そしたらいつの間にかパチユリーが隣にいて、パチユリーが私が読んでいる魔法についての説明をしてくれた。その時のパチユリーは普段より元気のようにだった。自分が得意な魔法について語れるのがうれしいのかな？

結局、魔法の授業みたいになっちゃったが私は満足だった。

本を読み続けているとだんだん眠たくなってきたので、自室に戻り眠る事にした。ここは窓が全然無くて外の状況が分かりにくいがたぶんもう夜ぐらいにはなっているだろう。

「ありがとうな、ここでも教えてくれて」

「いえ、私もうれしかったからいいわ」

「そうか。じゃあもう寝るわ」

「ええ・・・おやすみなさい」

・・・まさかパチユリーからそんな事いわれるとは思いもしなかった。まあ紅魔館の皆は家族ということだし当たり前かな？

「ああ、お休み」

私は歩いて自室に戻る。今スキマにはいったら紫がいそうだし、眠たすぎてうまくスキマを開ける自信がない。

「はあ・・・おやすみなさい」

誰もいないがとりあえず眠るための挨拶をしてねる。

「・・・・・・・・」

漂う。・・・体が揺ら揺らしている。・・・これは本当の夢？

パキィッ！

・・・あつちからなにか聞こえる。・・・それも今は本当の夢だろう。

そう思つてまた意識が飛ぶ。今度はもつと明確に音が聞こえる。これは本当の夢？それとも境界線を操つてできている夢空間？こんな意識がはつきりしているからたぶん境界線のほうだろう。

「・・・なかなかすごい能力を持っているのね貴方」

「・・・だろ！もつと褒めてもいいんだぜ！」

あの声は・・・紫。だけど誰と喋っているんだ？

「・・・そろそろ終わりにしましょうか」

「さて！俺はそっちに行きたいんだ！生まれてきてずっと願っていた夢、それは・・・幻！想！郷！にいくことだー！」



「・・・無理ね。まだ問題が一つ残っているわ。それを解決してからじゃないとね」

「またまた・・・幻想郷は全てを受け入れるんだろ？」

「・・・幻想郷が幻想郷として成り立つくらいには、ね」

「ならいいじゃないか。どうせ俺みたいになちっぽけな人間一人くらい」

「ええ、そうね。だから、また後で連れて行ってあげるわ」

「いいや！紫は絶対に来ないな！こうなったら倒しても連れて行ってもらおう」

「・・・わがままなのね」

「ふっ、そうでもない。だから早く連れて行け」

・・・だんだん話が拗れてきたな。

「・・・私に勝てると思っているの？」

「ああ、当然。それにその状態じゃ俺には勝てないね」

・・・紫は怪我をしているのか？・・・助けるべき？うん・・・一応出るか？

「私は戦わないわ。別の人を代理を勤めるわ」

自分から出る前に紫に出される。さっきまでは意識だけで漂う感じだったが今は自分で全てを見れる。

「・・・うわぁ・・・大丈夫か紫？」

「ええ、問題ではないわ」

なんか、ところどころ剣で掠ったような痕がある。しかもすこしだ

け服が血で染まっている。さっきまでリアルな戦闘をしていたようだ。

だが、私と同じぐらいの男子のほうを見る。・・・無傷だ。

「お、真打登場？」

「・・・違う。紫に引つ張り出されただけ」

「自分で出てこようとしていたのに？」

「・・・気にするな」

紫は敵なのか味方なのかどっちだ。

「まあいい。じゃあいくぞ」

「さて。なぜお前は戦おうとする」

「何故つて・・・スキマにいたなら聞いていたんだろ？」

「まあ最後のほうくらいは、な」

「ならいいじゃねえか。俺は！幻想郷に行つてあとの人生パラダイスしたいんだYO！」

・・・テンションたかいなおい。

「・・・なら、なんで戦おうとするんだ？ここで死んだら意味ないだろ」

「フツツだれが死ぬつて？俺にはこの能力があるんだ」

そついつて何も無いところから剣が出てくる。

「この能力があるから紫にも攻撃できたし無傷でいられたんだ」

「・・・本当なのか？」

「ええ、本当」

「なら幻想郷に連れて行けばいいじゃないか？なんで連れて行かないんだ？」

「私は二人も面倒は見切れないわ」

「は？それって私とこの人ってこと？」

「そう」

「なんでだ？放置しとけばいいじゃないか」

「言っておくけど、貴方は弾幕を撃てるのかしら？幻想郷の住民には弾幕ごっこ以外で攻撃したらダメなのよ。でも外来人にはそんな決まりはないわ」

「・・・そうか、そういうことね」

つまり、紫はこの人を心配しているわけだ。この人は幻想郷の住民には弾幕ごっこで対処しないといけないが、この人は霊弾を作り出せないから攻撃する手段が無い。(もし、それを破ったら幻想郷のルールを破ったとしてたぶん外の世界に戻される。記憶を消されて)だからすぐに食われる、ということが。

(ハル、もしあつちが戦おうとしたら時間を止めてこの世界から私と一緒に消えてもらえるかしら？)

小声で紫が言う。

は？それもどつという意味だ。

「大丈夫だ、問題ない。俺は最強の盾も作れるんだぜ」

今度は盾を何も無い空中からだす。・・・もう訳わかんない。とりあえず、能力を発動させて時間を止める・・・じゃなくて時間の流れを遅くして超スピードで動く。そして紫をお姫様抱っこしてスキマを開いて飛び込む。

もちろん、あの男子には見えない。（見えない、というより気づくのに私がいる時間より長くかかる）紫はどうしているか分からないが。

「・・・せっかちなのね」

「いや、もう訳分からなかったからとりあえず逃げた」

とりあえず、落ち着いたところで紫に質問する。

「まずあの空間は何？まさかあの人の夢？」

「ええ、そうよ」

「・・・次から人の夢の中に入るのは止めたほうがいいだろ」

「いえ、そうしたら私の仕事ができなくなるわ」

「仕事？」

「ええ、ハルもいずれ知ることになるわ。私と一緒に生きるなら」

「・・・じゃあ次。あの人は何？」

「・・・あの人は、確か・・・ツキとっていたわ」

「名前か」

「ええ」

「そうじゃなくて、能力とか分からないのか？」

「・・・ええ、ただ武器を無尽蔵に作り出せるくらいしかわからないわ」

「・・・でも、紫が本当の戦闘で押されるくらいならただ武器を作るだけじゃないだろう」

「・・・そうね」

「後、なんで幻想郷に行きたがったんだ？」

「わからないわ。あの人は私を見るなり興奮しながらいつてきたわ」

「・・・それだけじゃ分からないな」

「なんだっていいのよ。幻想郷は拒まないわ」

「じゃあなんで断ったんだ」

「ハルがいるからよ」

「？イマイチ分からないんだが？」

「ハルとツキの面倒を見ることはできないのよ」

「それは分かるがそれなら霊弾の作り方を一日教えるだけでいいだろう。そしたら危なくなる事もないし」

「それだけじゃないわ。あのツキがいる世界はとてもしんでいる。

下手をすれば、幻想郷が発見されるくらいに」

「・・・私がいた世界とは違うのか？」

「ええ」

「それならしょうがないな」

「でも、あの人はもうこの存在を知ったみたいだから、あつちでけじめをつけて入ってこようとする時を待つわ」

「・・・そんな事で大丈夫か？」

「フフツ、まあ大丈夫よ」

そうして、紫は光が消えるように消えた。そして私一人だけになる。

「はあ、大変だな」

紫の能力。その能力でほかの物語、つまり別の世界に行く事ができる。紫はそれでツキに会ったんだろう。

その世界はどんな世界なのかなあ〜と思いつながら私は境界線を操り、また夢の世界に入った。

「・・・あれ？紫と少年は何処いった？」

逃げられた事に気づかないツキは回りを見渡す。だが真つ暗闇しかない。

「・・・もしかして、あの少年は能力持ちか。だとしたらサツキユンと同じ時間を操る能力とかだな。俺の前から姿を消せるのはそれぐらいしか思いつかない。くっそ！あと少しで俺のパラダイス、幻想郷にたどり着けたっていうのに！こうなったらなにが何でも行ってやる！」

一人激しく闘志を燃やしていた。

### 第三十一話（後書き）

紫の能力は対の存在の設定をいじれる（夢と現実、世界と個人とか？）という解釈で書いています。なにかおかしいと思う事がありましたら感想のほうに宜しくお願いします。

## 第三十二話（前書き）

遅くなってすみません。ちょっとリアルが忙しすぎて・・・

それではどうも。



## 第三十二話

「さあ、急ぎなさい」

朝起きたら大変な事になっていた。いつもと明るさが違うと思って目を開けたら幽香がいたからびっくりした。

そりゃ幽香との約束を長い間すっぱかしていたのも悪いけどさ、まさか寝ている間に連れて行かれるとは思わなかった。(妖怪にとつての長い間じゃなくて、私にとつての長い間)

それと、制服を霖之助さんに預けて修繕してもらっている間だから短パンにTシャツ状態でちょっと変な感じだ。咲夜さんが服を貸してもいいとか言っていたけどあれをつけられる人は男の中にはいないと思う。

そして、今は飛んで水を運んでいる途中だ。

これは向日葵を前の決闘で少しいためたので、手入れを私がしろと、幽香は言ってきたのである。しかも、能力使うのは無し。まずは水を汲んできて向日葵畑に運べということだった。

だが私は紅魔館前の霧の湖ぐらいしか水のある場所が思いっつかない。つた。

「水？どっからもってこればいいんだ？」

「何処からでもいいわ。どんな手段を使ってももってきなさい」

「・・・どんな手段でもって・・・危ない事はしない」

そういって、結局遠いが湖から水をもってくる事にした。

「はあ〜・・・これ終わった後、絶対決闘しかけてくるよな、幽香は。そして私は疲れてるからすぐ被弾。そしてまたこんな事の繰り返し。はあ〜」

そんなことを言いながら、一応は速いスピードで飛ぶ。幽香が昼までに指定された範囲の向日葵畑に水をあげなくちゃいけないからだ。

「う〜ん・・・幽香はS?・・・それともただ好戦的なだけ?・・・分らないな。たぶん二つだろ」

そんな事言いながら二つ目を運ぶ。腕が痛い。五キロぐらいありそうな水の量を持ったまま、飛ぶからかなりきつい。しかも、霧の湖は向日葵畑からかなり遠い場所にあるのでさらに、だ。

「今、思ったけどチルノが居ないな。いつもなら湖にいるのに・・・修行って結構本気でやっているのか?やっぱそこらへんはさすがだな、チルノ。たとえばそれがふざけた修行方法だとしても」

そんなことを言いながら三つ目を運ぶ。そろそろ手の感覚がなくなってきた。少し休むか?・・・それとも能力を使う?幽香は居ないから大丈夫だろ?・・・でも以外に見抜いてそうだ。妖怪だし。

休んだり、飛んだり、水を撒いたりしてすごい時間がたったと思う。腕はがたがたでやばいし太陽サンサンいい天気なわけないだろ。そのせいで更につかれた。

だが、とりあえずノルマ達成。一応は少し休んでから幽香のところに行く。すぐ戦闘は今の状態じゃきつ過ぎるからな。

「あら、終わったの？」

・休む暇も無く幽香が来た。

「・・・ああ、ノルマ達成」

「ふくん、嫌味は言えないのね」

・この人に友達感覚で文句言ってもいいですか？・・・ダメだよな。  
はあ・・・。

「で？次は何をさせる気だ？」

「そうね・・・殺し合いかしら？」

・やっぱそうきたか。

この後、少し抗議をしたがまったく聞き入れもらえなかった。なんで私が死なない事を知っているんだ。ルールは簡単片方がギブアップをしたらだ。私には死なないというオプションが付いてるから間違いなく本気で幽香はやってくる。私は・・・どうするか。本気でやっても幽香が降参するなんて思えない。それでもし、もしも、幽香を殺してしまったらと考えると恐ろしい。

「幽香、戦う場所は何処にする？」

「そうね・・・どこでもいいわ」

「そうか・・・」

幽香はこの向日葵畑で戦うといった。つまり向日葵を守りながら戦うつもりだ。ハンデ？・・・たぶん余裕だな。それほど私が弱く見えるのか。だが、向日葵畑ぐらいなら射命丸の能力を使って吹っ飛ばす事はできるんだぞ。だが、それで脅せばどうにかなるか？・・・戦うときにやってみよう。

「じゃあ始めるわよ」

「え？もう？」

「もちろん」

そういうと体が浮いた感じがして気がついたら空に吹っ飛ばされていた。

一瞬意識も消えかける。また目の前に来た幽香を見て、急いで死なない程度の能力を発動して、また蹴られる。

今度は意識はあつたので時間を止める。たけど、飛ぶことは考えられなかったのでドサツと向日葵畑に落ちる。

「・・・・・・・・」

ちよつとの間、倒れていた。蹴り飛ばされたとき二撃目で頭を蹴られたらしい。人間的には一回死んだって事か？・・・嫌だな。だが、痛みは感じなかったからラッキーだ。それほど幽香の蹴りは速すぎた。

これで、もうなりふり構ってられない。なんとしてでも生き残る。

逃げるという選択肢はない。何処までも追いかけてきそうだし。

時は動き出す。動くときに自分の時間を早くした。これで一応は見える。

「幽香！本気でやる気か！」

「ええ！そうよ！」

「たとえ向日葵畑が消えてなくなってもか！？」

「何を言っているの？そんなわけ無いじゃない。消える事は無いわ。貴方の命以外ね」

「・・・そうか、ならいい！！！」

私は幽香の蹴りやパンチを避けながら叫ぶ。傘や殺傷弾幕も放つので大変だ。

「これで・・・どうだ」

私はまだコントロールもついていない風を操る程度の能力を発動して嵐をよぶ。まだ向日葵畑には当てずに頭上で待機しているが、それでも向日葵は今にも吹き飛びそうだ。

「・・・それがどうしたっていうの？そんなもので私の向日葵が無に帰るとでも思っているのかしら？」

「ああ、ならやってみるか？」

「ふん、やってみなさい。できるものならね！」

「っが！」

ちよっと油断していた。

弾幕に後ろから襲撃されてまたしても吹っ飛ぶ。そして、嵐もなくなる。撃たせてくれるんじゃないのですか!? あ、できるものならってそう言うことか。

「・・・じゃあ、やる」

体勢を立て直して、また嵐を作る。今度は幽香じきじきに殴りかかってくるが時間を止めてかわす。そして、嵐を向日葵畑に飛ばす。

「させないわ」

幽香はその嵐に向かって傘を一振り。それだけですごい風圧が飛ぶ・・・どんだけだよ。

だが嵐は消えずに向日葵畑に直撃。・・・だが、やっぱり残る。違うか。幽香が能力で再生させたのか。

「ね？無意味でしょ？」

「そう言う割には怒っているように見えるが？」

「ええもちろん。何があるのが向日葵を傷つけた奴は必殺決定よ！」

さつきとは比べ物にならない速さで飛んでくる！びっくりして思わず時を止める。

「・・・嵐は効くけど再生させられる。なら植物を操る程度の能力だ」

時は動き出す。

動き出した瞬間、また体が訳も分からず吹っ飛んだ。見えない。も

つと自分の時間を早くする。正直ここまで来たら境界線操って妖怪になりたいけど、どうなるか分からないから遠慮。

また嵐を作る。そして、届く限り適当に妖力をこめて植物を支配に掛かる。・・ヒット。一部分だけだしコントロールが最悪で適当だけど多分これで外からの能力は受け付けない。幽香が強く働きかけたらどうなるかわからないけど、この能力はまだ知らないから多分大丈夫だ。

「よし、行くぞ！」

また、向日葵畑に嵐をぶつける。幽香は今度は向日葵を再生させる事だけに集中して止まっている。私も見守る。

嵐は轟音を立てながら向日葵達をバラバラにする。大半がすぐ再生するが、一部分だけが再生しなかった。

「!どうなっているの!」

「さあな。このままどんどん無くなっていったついにただの野原になるかもよ」

「・・ありえないわ」

殴りかかってきたので避ける。さっきまではあたっていたが今は避けられた。動揺している？

「続けるのか？それとも降参するか？」

「ありえない、ありえないありえないありえないありえない」

・・壊れた? ・・めちゃくちゃ怖い。だが、もう一息だ! 汚いけど、これじゃないと本当に死ぬ!

「よし、もう一回!」  
「……やめて」

そのとき、確かに聞こえた。

「……降参か？」

「……降参でも何でもするから私の向日葵達を傷つけるのはやめて!」

……よし、勝った……

「分かった。ありがとう、幽香」

早速吹き飛ばした向日葵のところに行く。近づいてからのほうがちゃんと成長させる事ができる。

私は向日葵をちゃんと元の形まで成長させてから、幽香のところに行く。幽香は私が成長させた向日葵を見つめている。私が来ると話しかけてきた。

「……何をしたの？」

「能力で咲かせた」

「……なんで私の能力が効かなかったの……」

「さあな」

これからも教えないほうがいいかも、と思って植物を操れる事は言わない事にした。



「……貴方の勝ちよ。私に何でもいいなさい」

「……汚いやり方でごめん。あれぐらいじゃないと私は勝てないよ」

「……そうね、わかっているわ」

「私が幽香に頼む事は、私がここにきてももう勝負を挑まない事だ」

「……私に貴方を見過ごせと？」

「……まあ、そうなるのかな。逃げてもよかったけど、幻想郷じゃいつかは会うし、ちょっと憂鬱になるからこんな解決方法にした」

「……分かったわ。私も少し浅はかだったわ」

(……幽香が謝るってなかなか無いんじゃないか?)

そうして、戦いは終わった。

あとで、いろんな人が来て軽い騒ぎになったから更に疲れたけど。

### 第三十二話（後書き）

幽香にとっては向日葵は家族ですから、消し飛ばす事は相当やばい事ですね。

植物を操るってなかなかにせこいですね。執筆していています。

### 第三十三話（前書き）

この頃更新速度が遅れがちです。

でも、絶対に描き続けますのでよろしくおねがいします。

### 第三十三話

幽香との殺し合いが起きてから数日、私は香霖堂に来ていた。幽香に向日葵を吹っ飛ばした事で謝りに行くとうと何度も思ったが、やっぱり怖くて無理だった。あの時は戦意喪失した幽香だったから大丈夫だったけど、今はどうなっているか分からない。本当に約束を守るかも定かではないし。

そんなことを考えながら毎日を過ごしていたら、気がついたら服の修繕が終わっている事に気づいたのでここにやってきた、ということだ。

「すみません」

語尾をのびしながら言った。そしてすぐに霖之助さんが出てくる。

「君は・・・ハルだったか」

「はい。服の修繕が終わっている日を忘れていました。すみません」

「いいよ、気にしないでおくれ。君は客だからね」

「・・・はあ・・・」

そういわれて少し笑う。霖之助さんは部屋の奥のほうへ行き、私の制服を取ってきた。

「ちょっと君の制服というこの服は君から教えてもらった事とどういふ用途に使うのかも踏まえて修繕したんだがどうだい？君が想像していたとおりになっていたかい？」

私は制服を見してみる。白のシャツと黒のズボンはそのまま完璧に再

現されている。

「だけど・・・もう一つの制服は・・・」

・ ・ ・ あきらかに女子がつける制服だ。私が通っていた中学の制服ではないが、現代風の制服とは言えるものだ。

「これは君の情報を元に再現したものだよ。外ではこれを女の子がつけて寺子屋のようなどころにいくんだね？」

「はい。だけど、なんで作ったんだ？」

「ああ、まあ暇つぶしかな」

「・・・すごい」

暇つぶしでこんなものまで作ってしまうとは。

「じゃあ、代金のほうだけどいいかな？」

「はい」

「君が持っているお金。それは外の世界で使う硬貨、つまりは円だね。この世界で使う金はその硬貨自体に価値があつてその価値でお金の役割を果たすから君の金も一応は使えるわけだ。まあ、お札の方も、たまに来る外来人が持ってきて流行らしているから使えると思うけどね。それより、私は外から流れてくるいろいろな物についての説明をしてほしいんだ」

「え？それでいいんですか？」

「ああ。ただし、出し惜しみはなしたよ」

「それ以前にはつきりとそのものの原理を分からないのが殆どだと思っただけど・・・」

「ああ、使い方は分かるかい？」

「・・・たぶん」

「なら大丈夫だ」

そんなことをいわれてしぶしぶついて行く。正直お金を払って早く戻りたいのだが・・・まあ、それでいいんじゃないか。

「じゃあ、まずはこれ」

「・・・パソコン？」

「ああ、そうだよ」

「・・・こんなものが本当に流れ着くんだな。でも、どうやって流れ着くんだ？」

「霖之助さん。どうやってこんなものが外から流れ着くんですか？」

「正確にはわからないけど、結界と境界線の綻びからじゃないかな」

「・・・それって、紫達の職務怠慢？」

「さあ、ね。あの少数で幻想郷全てを完璧に作動させるのは難しいだろうし、もしかしたら、何か考えがあって意図的にやっているのかもしれない」

「・・・確かに」

「まあ、分からないのは気にしないほうがいい。幻想郷で考えていたらきりが無いからね」

「そうですね」

私は、すぐにいろんなものの説明を始めた。パソコンは原理なんて知らないので使い方と今はインターネットというものが使えないという事を教えた。もっとパソコンの台数を増やして、インターネットを管理する機械を作れば一応はできると思うけど、幻想郷は昔に隔離されているから今の技術は無い・・・と思う。

次に、テレビ。しかも液晶。これも付くけど砂嵐。ゲームとかDV  
Dなら頑張れば見れるかもな〜と思いつながら理由を言いながら使  
えないと言った。

次に、自転車。こんなものまで流れるのかと驚いた。霖之助さんの  
能力はどういう用途に使うかが分かるだけだから、道を走るとい  
う事しか分からなかったらしい。まさか、勝手に道をはしると考  
えていたなんて・・・心の中では正直爆笑しました。表に出さな  
いようにするのが大変だった。

そして、最後に何故か海水浴セットらしきもの。こんなものど  
うやって流れてくるんだと思うくらいに大量だった。（家族十人分  
くらい？）海で使うとしか分からないらしいけど、実物が無いから  
さすがに大きい水溜りのなかで泳ぐとしか言えなかった。幻想郷は  
内陸だからな。こればかりはどう使用もなかった。

「ん、もうこんな時間か」

気が付けば夕方。夕日の日ざしが窓から入ってきて眩しい。

「よし。もうこれくらいでいいだろう。ありがとう、ハル」

「・・・こちらこそ」

「また、何かあったら僕に頼んでくれ。もちろん、現代のアイ  
テムの事を教えてくれるのが条件だけど・・・いいかな？」

「はい」

「ありがとう」

そうして私は香霖堂をでた。二つの制服を持って。

「うん・・・外の世界のアイテムはすばらしい物ばかりだったな」

ハルがいなくなって独り言をつぶやく霖之助。

「パソコンはもっと台数を増やさないと意味のないものだから・・・これを河童にもっていき量産してもらうのはどうだろう。・・・ああ、あとインターネットとかいうやつもか」

霖之助は作動しているパソコンを見てつぶやく。

「それと、これも一緒に河童の皆さんに任せたほうがいいのか？  
だが、テレビやDVDは今にはないみたいだから・・・まあ、いつかはやってくるだろうし、パソコンと一緒に持っていこう」  
今度はテレビを見てつぶやく。

「後のものは大体自分で見て直せそうだから大丈夫かな。そのほかのものは商品として並べよう」

そんなことをいいながらず～～と独り言を続けた。未知のアイテムのことになると止まらないようだった。



「ん……これ、どうする？」

紅魔館の自室に戻ってきて、私は悩んでいた。

制服が戻ってきたのはいいけどこの女子がつける制服……どうすればいいんだ？誰かにあげる？それがいいかも。けどだれに？レミリアにはでかすぎだろうし、咲夜かな？フランにも小さすぎるだろうし、美鈴には小さすぎる。咲夜かパチュリーかな？

「あ、でも、私がへんな趣味とか言われる可能性が……」

咲夜なら絶対やってくるし、パチュリーも何を言ってくるか分からない。

「なら、ハルが使えばいいんじゃない？」

そう聞けると、目の前にスキマが開く。

「……紫、私は男だ。こんなものつけられるはずが無い。紫がつければいいだろ」

「そうね。外の世界に行くときには丁度いいかもしれないわ。でも、ハルも女になる事はできるのよ？」

「……境界線を操ればってことか？」

「そう」

「……万能だな。ほぼ何でもできるだろ、紫の能力」

「そうね、でもできてやってはいけない事もあるからそこまで万能ではないわ」

「ふん……それってどういう意味？」

「でも、ハルを女にする事は可能よ」

・人の問いかけを無視した。

「しなくて結構。紫が着れよ」

「あら？私に着てほしいの？」

「いや、美鈴やパチユリーでもよかつたけどもって行ったらへんな趣味持っていると思われそうですさ」

「私にも思われているわよ？」

「いや、紫はいい。別に気にならないし」

「（私はあなたからしたら友達なのね）そう・・・でもいいわ。それはあなたが持っていないさい」

「えー・・・いつか見られたら大変な事になるんだけど」

「しらないわ」

「・・・はあ・・・まあいいか」

そのときはそのときだ。というか、美鈴たちが私の部屋に入ってくるはず無いしな。

### 第三十三話（後書き）

ハルは紫の事を本当はどう思っているのでしょうか・・・

能力が昇華（進化）する事はありますか？感想お願いします。

### 第三十四話（前書き）

「フフツ、ハルが起きたときが楽しみだわ」

「何しているのかしら」

「あなたの妹の教育係を教育したいので少し連れて行ってもよろしいかしら？」

「・・・ええどうぞ。そのかわり、問題が起きたら責任を取りなさい」

「ええ、もちろんわかってるわ」

ハルを連れた（拉致った）謎の人物は謎の闇空間へと消えた。

## 第三十四話

始めに来たときはいろいろな事件やハプニングがおきて大変だった幻想郷。今はもうパターン・・・というかどたばたせず普通にほのぼのした生活ができるようになってきた。

フランももう私がいなくても大丈夫だろうし・・・そうしたら私はどうするかな。まあ、後で考えよう。今はそれどころじゃない。

「・・・ここは、どこだ？」

幻想郷に来たときにもこんなこといった気がするがこれはそうとしか言いようがない状況だろ。

あたり一面真っ暗で、だけどなにかへんなものはふよふよ浮いている。火の玉みたいなものとか骨・・・みたいなものとか。まさか私の夢中ではないだろう。そうだ絶対、うん、絶対。

もう一度、あたりを見渡す。よく見ると真っ暗闇というわけじゃないく道みたいなものがある。

・・・それにそっていつてみるか。

「おっと、そこから先に行ったら大変な事になるよ」

後ろから声をかけられた。知らない声だ。

そんな事を思いながら振り向く。そこには体育着のような上着にスカートを合わせたような格好の角の生えた女の人がいた。

「どづいつことですか？」

「坊やはここがどづいつところか知っているかい？」

「・・・正直のところ分からなくて迷子です」

「そうかいそうかい。やっぱりね〜自分から元地獄の場所に行こうとしているやつなんて普通、いる分けないからね。君は地上からの迷子かい？」

「？あまりよくわかりません」

「そうかい。まあ、あるきながら話そう。とりあえずまずここから離れようか。怨霊に取り付かれたりされたら大変だからね」

「・・・わかりました」

外の世界ではどんなに優しそうな人でも知らない人には付いていかない。これが常識なんだけどここではそんな常識は無い。

という事で私はついていった。もちろんあるきながらこの説明とかも少ししてもらった。

その説明によると、ここは幻想郷の地下みたいなところで地底界というところらしい。（実際は幻想郷に含まれないとか）更にその中の旧都と呼ばれるところで、またさらにその中にある元地獄の施設の中だったらしい。

で、さつき私がいた場所は怨霊という悪さをする霊がいるらしい。ふよふよ浮いていたものがそうか。だから呼び止めたようだ。

で、今向かっているのが地霊殿というなんか地底界で偉い人がすんでいる館らしい。

「君は幻想郷から来た人だね」

「はい」

「やっぱりか……前の異変からこの存在も公になったし勝手に入ってくるのも増えたね……おかげでこっちは仕事が増ええたけど」

「すみません。でも、私は自分でこっちに入ってきたのではなく、自分の部屋で寝ていたはずが朝起きたらここにいたんです」

「はあはあ、なるほど……君、人里の人だろ？」

・・勘違いされているけどいいか？そのままです。

「……たぶん」

「たぶん？曖昧だねえ……まあいいや。人里の中にここにつながる道なんてないからあの妖怪のせいだろうな」

「あの妖怪？」

知らないふりしているが自分もそう思う。

「紫とかいう名の妖怪だよ。まあ、君達のような人里に住んでいる人にはあまり有名ではないか」

「はあ……」

「まあ、いいさ。いつもなら君を食べているんだけどね。今日はそんな気分じゃないから君はラッキーだな」

「え」

そんな笑いながら言われても、すごい怖いですけど。

「だが何で人里の人間をこっちに飛ばしたりしたんだろうねえ。外人なら分かるけど」

「……」

私は外人なんだけど……いったら食べられそうだから言わない。

「見えてきたよ、あれが地霊殿。ここの偉いやつが住んでいるところだよ」

「へえ」

地霊殿は紅魔館の赤くないバージョンみたいな館だった。

さっきまではへんなふよふよ浮いているものからしか光が出ていないように見えたが、この館からは光が出ている。地下なのになんでも光が出ているんだ？上から光が差しているんならわかるが。

「私が案内するのはここまでだ。あの中に入ったら古明地サトリとかいうやつに会いな。そしたらすぐ幻想郷にもどれるさ」

「はあ・・・」

「じゃあ私はこれで」

「あの・・・ありがとうございます」

「おお、いいねえ、礼儀正しくて。またこっちにこないようにね」

そういつて笑いながら私達が来た暗い道に戻っていった・・・いまさらだけどあのひとは鬼？・・・今度萃香に聞いてみよう。

「だけど、許可を得ずに不法侵入はちょっと遠慮だな」

誰かいますかと声を出してみるが返事は来ない。

今思えばスキマを使ってすぐに戻れるんだからこんなことしなくてもいいと思ったけど、人里の人って言うっちゃっているから無能力という事で通そうかな？ほら、力をひけらかすとなんか妖怪が戦いに挑んできそうだし（幽香みたいな人がいたらだけど）、いろいろと悪い方向に行きそうなので、穏便に行くにはこの設定で通したい。



スキマは最終手段という事で。

何回か誰かいますか〜とか、すみませんとか言ってみるけど、返事無し。何これ、入るなら勝手に入ってくださいってこと？

「にゃ〜ん」

「！きた・・・と思ったら猫かよ」

私の声に反応したのか猫が出てきた。こんなところに猫がいるなんて思わなかったからちよつとびっくりした。

「なあ、この館の人呼んで来てくれないか？」

「・・・にゃーん」

「・・・むりですよね〜」

てゐがウサギになれたんだからこの猫だってもしかしたら妖怪かもって思ったんだけどそんな事は無かったようだ。

「・・・にゃ〜ん」

しかも、また館に戻るし。

「ニヤーン」

「・・・」

「ニヤーン」

ずっとこのつちを見つめている。なに？私にどうすれというんだい？

「にゃーん」

猫は門を引っ掻いている。付いてこいって事？・・・まさか。

「まじでついてこいという意味だったとは・・・驚きだ」

私は今、屋敷の中にいる。猫は私の言葉が分かるのか。やっぱり後で妖怪になるってこと？あ、もしかして私を食べるためにここにいられたのかも。

「にゃーん」

「？この扉を開けるってか？」

「にゃーん」

「・・・わかった」

ドアを開けると中には大量の動物に囲まれた少女がいた。妖怪だと思っけど。

「・・・」

「・・・」

どっちも無言。

「あなた・・・人ね」

「・・・そうですか」

食べるつもりとか言わないだろうな。

「別に食べるつもりはないわ」

「そうか……?」

心が読まれた?

「そう、私には人の考えている事を読むことができるの」

「へえ……」

「あなたは人里の人ではないのね」

「……やっぱばれますよね」

じゃあ、普通に戻るか。

スキマを開こうと……あれ?おかしいなあ……なんで開かないんだ?……紫iiiiiiii私をこんなところに捨て置くつもりかああああ。

もういい。いろいろ弾ける。

「あなた……何者?」

「ただの人間」

「そんなはず無いわ」

「いや、そんなことあるんですよ。ただ能力があるだけだね」

「紫と同じ能力かしら?」

「いや、こういう能力」

……はい、コピーしました。

そうすると少女がつけていた目みたいなお飾品が私にも出てくる。・  
・なんか不気味だな、これ。生きているんじゃないか?

「能力のコピー……」

「そういうこと」

「そう。早く幻想郷に戻りたいのね」

？話が変わったな。心読めるから私が何したいのかわかるんだな。

だったら心の中で会話した方が早くない？とおもったけど、この能力は本当にどんな生き物でも思考を読むな。猫とか犬とかの思考が大量に入ってきてどれがこの少女の考えなのか分からん。

「ああ、どうやって幻想郷に戻るんだ？」

「簡単よ。ここと幻想郷がつながっている場所があるからそこから行けばいい」

「それは何処にある？」

「……私のペットが案内してくれるわ」

「分かった。ありがとう」

「……どういたしまして」

さあ、もどいたら紫を一発殴らないといけないな。

### 第三十四話（後書き）

人里の人でも人里から出ると襲っていい対象になりますからね。怖い怖い。

私を書いた人物像？だけで何のキャラか分かる人はもうそのキャラを知り尽くしているという事でいいと思います。

そして、何処までもインチキな能力ですね。ハルの能力は。皆さんはどう思いますか？

## 第三十五話（前書き）

この頃遅くてすみません。

### 第三十五話

「・・・明るいなあ、地底なのに」

今、私は幻想郷を目指して飛行中である。さとのペットを頭に乘せて。

ところで地底が明るい事についてだが、何でこんなに明るいかを猫に聞いてみることにした。もちろん、あの少女、ええ〜つと・・・古明地さとりからコピーした能力で。

だが、正直驚いた。あんなに小さい少女・・・みたいな妖怪が偉いなんて。今思えばレミリアもそうだけど幻想郷はすごいなあ。

話が逸れた。

「なんで、地底なのに明るいんだ？」

（灼熱地獄跡があるからよ）

「灼熱地獄跡？なんだそれ？」

（名前のとおり罪人を地獄の業火で焼く所かしら？）

「何故に疑問系なんだ」

「私も聞いた話なの」

「そうか・・・ありがとう」

つまり、その火の光というわけかここが明るいは。

（あとは個々が発している光とかその他いろいろでしょう）

「・・・解説どうも」

（お礼言っている暇があるなら弾幕に気をつけたほうがいいですよ）

「え」

そういわれたと瞬間に何か足に当たった。多分霊弾。ちょっとだけ体勢を崩したけどすぐ持ち直して飛ぶ。さっきは地霊殿の近くだったから弾幕を出してこなかったのか。

(びっくりしている場合じゃないよ。ほら、次！)

この猫の言う通り、さっきとは比べ物にならないくらいの弾幕が襲ってきた！

「さとりはこれを知っていただろ！！」

だからさとりはくすくす笑って私を送り出したのか！

避けながら叫ぶ。猫はまだ頭に捕まっている。てか、髪の毛がいろいろやばいから放せ。

(ちょっと、動きすぎ！)

「だったら降りろ！どうせ猫は猫でも妖獣なんだろ！」

(知っていたの)

「ああ！さとりが心でおしえてくれたからなあ！というかなんて私はこんなに狙われているんだア！」

そう。さっきからおかしいだろこれ。なぜ私一人に弾幕が飛んでくるの？戦いたいならあんた達だけでやってくれ！

(獲物を食べるため？)

「……そうか……ちくしょー！」



どこまでいっても私は食べるのに都合のいい餌かよ。

私は喚きながら弾幕の嵐を避けながら進んだ。

「妬ましい、妬ましい、妬ましい」

・ ・ ・ なんか、その幻想郷に続くとか言う穴の近くに來たら目の前にすっごくい負のオーラみたいなもの纏っている人がいた。

「あれだれ？」

(パルスィね)

「・ ・ ・ 害は無いのか？」

(あるときもあればないときもありま〜す)

「・ ・ ・ 今はどうなんだ？」

(さあ、いつもあんな感じだから分からない)

「・ ・ ・ これで襲われたら・ ・ ・ 」

おっとこれ以上言ったら本当に襲われそうだから止めておこう。

私はさっきのように飛んでパルスィの横を素通り・ ・ ・ できませんでした！

「ちよっ、やっぱりか！」

「あなた・ ・ ・ なんでそんな私から逃げたそんな顔をしているの？・ ・ ・ 」

「・ ・ ・ 妬ましい」

「・ ・ ・ いやー、もう帰らせて〜」。

(そんなに帰りたい?)

「ああ!」

(だったら私がパルスイの邪魔をするからその間に通りなさい)  
「え?」

そういつた瞬間、猫は光を発しながら猫の姿から人型になった。私の頭の上で。

「ニャオ〜ン」

「・・・」

どいてほしい。

「ちょっとパルスイと遊ぶからその間に通ってね」

「・・・ああ」

そして私の頭から飛んでパルスイのところに行く。・・・あ、始まった。

猫がすばやい動きで四方八方から弾幕を放つ。

それをパルスイは上に飛び左に飛びと弾幕を出しながら避ける。

・・・実況している場合じゃなかったな。帰ろう。

気がついたら、着いていた。

いや、なんと言いますか、穴に向かって光に包まれても気にせず飛んでいたら気がついたら博霊神社に出ていたというね。さっきの穴は結局なんだったの？まあいい。とりあえず・・・

早速スキマを開こうとするが開かない。

・・・紫。次こそは必ず。

### 第三十五話（後書き）

「紫様、ハル様が幻想郷に戻ってきました」

「ZZZZZZZZZZZZ」

「………はあ」

ある妖怪の式神は言う。だがその使役している人は寝ていた。

「……ハル様が怒っていなければいいのですが」

……それは無理だ。

どうでしたか？楽しんでもらえれば幸いです。

ついに地霊殿キャラだしました。残るは……あれですね。

でも、出したといっても全員ではないのでいつか少しずつ出していきたいと思います。

### 第三十六話（前書き）

遅くなつてすみません。（この頃こればかり言っている気がする）

絶つつつつ対に投げ出さないのて宜しくお願いします（これも言つたきがする）

### 第三十六話

暗い暗い闇の中。私はそんなところにいた。しかも紫もいる。

「なあ、紫」

「何かしら」

「なんで私を地底界になんか置き去りにしたんだ」

あの地底界に紫に連れていかれて弾幕の嵐にあつてから後、ちよつとフランとの弾幕勝負があつてフランに八つ当たり気味に弾幕を放つてやつてしまつて、フランに謝り、本を読んでストレスを発散させていたらいつの間にか寝ていた。

そして、いつもの夢の中だ。

「ハルが知らない世界を知ってほしかったのよ」

「だったら一度くらい私に許可、その場所の説明、生態系とかぐらい教えてくれてもいいんじゃないか」

「ハル、聞いて行く気になるかしら？」

「.....」

そついわれると困る。正直あそこは本当に戦える人じゃないと行つちやいけないだろ。それを考えてまた、次期管理人なんちゃらで紫は私を地底界に投げ出したのかもしれない。

でも、人を勝手に危ない場所に投げ出したんだから.....

いろいろ考えたけどややこしくなったので終了。

「ああ、もういいよ」

「そう。でも、私から一言謝るわ。ごめんなさい」

「……」

まさか、紫からその言葉を聞けるとは……

「次から話したうえで突き落とすわ」

「結局かよ」

・落とされないようにしないと。たぶん無理だけど。いや、諦めてどうする私。

「私がここにきたのはこの話じゃなくて別の話があったて来たの」

・それって、本当は私にやった事なんてどうでもよかったみたい  
な言い方だな。

やっぱ殴ってやろうかと思ったがやめた。さっきの謝罪で一応、怒りは収まっているし。

「それで？その内容はなんだ？」

「前に戦おうとした外来人のことを覚えているかしら？」

「それって夢の中のことか？」

「ええ」

「ああ。たしか、名前をツキとか言っていたな」

「私はあの子に約束をしたの。幻想郷に連れて行く約束を」

「……いまから連れ出すのか？」

「ハルが心をちゃんと読めるようになってからよ」

「・・・さとりをしっているのか」

「ええ。その能力でツキの目的を読んでほしいの」

「何故読む必要があるんだ？」

「場合によっては追いつ返す必要があるからよ」

「・・・なるほどね」

だったらついでに紫の心を読んでやろうと思い、第三の目を出したが、紫はこれを読んでいたようだ。

（私の心を読むことはそう簡単にはできないわよ）

そんなことを心で言い返された。第三の目がでてきたら心を読むというのがばれるな。

「・・・わかった。だが、何を考えているかぐらいなら今でもできるぞ」

「そう。なら、私が呼ぶときに協力してもらおうわ」

そういうことでこの話は終了した。その後に紫が別の話を持ち出した。

「ハル。外を見てみない？」

「？どういうことだ？」

「外の世界を、ってことよ」

「・・・何のために」

外の世界。

私とその世界から存在が消えた場所。

そこに何をしに行くんだ。



「ハルが元いた場所じゃないわ。ツキがいる世界よ」  
「・・・なんだ。そこかよ」

自分の世界を見ないということとでちょっとだけほっとした。自分がいなくても普通に回る世界なんて、見ていると嫌になってくるからな。

「自分が知らない世界を見るのもたまには面白いものよ」

「この頃はたまにじゃなくてよく見させられている気がするんだけどな」

「フフツ、気のせいよ」

紫は目の前にスキマを開く。さっきまで暗かったこの空間に光が差す。

「じゃあ、行きましょう」

紫に手を取られてこけそうになりながらスキマを通る。通った先には、夜景の町が広がっていた。

「・・・っておい！落ちる落ちる！..!」

私は紫に思わずしがみついた。そう、夜景が見渡せる場所、つまり上空だ。

そして私は飛べることを忘れて少しの間紫にしがみついていたのは萎える思い出だ。夢でありたい。しかも、紫は笑っていて飛べること教える気がなかったし。

「……もう帰りたい」

「大丈夫よ。なかなか面白かったわ」

「……………」

無言で紫を見つめる事数分。

「これはわざとではないの。地上付近でスキマを開けると人に見つかる可能性があるからこんなところであけたのよ」

「……本当にか」

ちよつと声を低くして聞く。

「ええ。だから、元気出して行きましよう？……一緒に手をつないでからでもいいわよ」

私が紫の手を握っている事に気がついた。さっきのびびりから反射的に掴んでいたんだと思う。すぐに放そうとした……が、紫が放さなかった。

妖怪だから私の何倍も力が強すぎて強引にほどけない。

「こつやれば落ちる心配は無いでしょ」

……私にどれだけ恥ずかしい思いをさせるつもりだああああ！！

「こつがツキの住む家よ」

「……はあ」

抵抗するのを諦めてずっと手をつないでここまで来た。紫を男と考  
えていたらだんだん恥ずかしくなくなってきたけど顔見るとやっぱ  
り顔が熱くなる。・・一生なれないだろうな。

「今日はここまでしか入れないわ。いつもなら夢の中で会うのだけ  
ど」

「・・・じゃあ今日はここで終わりか？」

「ハルがそうしたいのなら」

「・・・手を離してくれたらもう少し町を回りたい」

「そんなに嫌かしら？」

好きな人とだったらそうじゃないかもしれないがにやにや笑う紫と  
手をつなぐのは嫌だ。

「だったらその笑みを何とかしてくれ。イライラする」

「あら、ごめんなさい」

いつもの笑みを広げた紫に戻る。ってか、切り替えはやっ。

「これでいいかしら」

「・・・まあとりあえずは」

「そう、なら行きましょ」

そうして私は紫と夜の街を歩き出す。

夜道を照らす街灯。夜勤を終えて帰宅途中の人。

そんな町を回って思ったことは一つ。町並みはここまで私がいた世  
界とは変わらなかつたこと。紫がこっちの世界は進んでいるといっ

ていたのはどういう意味が分からなくなってきたので聞こう。

「紫」

「どこがハルの世界より進んでいるのかって事でしょ？」

「そうそう」

お見通しだな。

「・・・私がこの世界に来たとき、人払いの結界をしていたのにも関わらず、声を聞いたの。私に喋りかけているような声。そのこえは私にこの世界から出て行けと喋っていたわ」

「？実際はなんと言っていたんだ？」

「『お前はこの世界の人ではない、元の居場所へ立ち去れ』と言っていたわ」

「・・・ふ〜ん。聞いている限り、それは人の言葉ではない気がする」「ええ、そうね。でも、だとしたら誰が私に呼びかけたのかしら？」

確かに。だとしたら誰？私達が歩いているとき一体も妖怪は見かけなかったし変な空間や場所もなかった。・・・やっぱり人間？

「・・・やっぱ人だとしてそのひとは何だ？能力者か魔法使いか？それともこの世界の科学の力か？」

「現実的ね。私達の存在を見ているのに」

「いや何処が現実的なんだよ。能力者とか言っている時点で非現実的だ」

「私という存在がいる時点で能力者という存在は現実的よ。私達が確認していない存在、それは・・・世界」

「世界？どういうことだ？まさか世界が紫に話しかけてきたというのか？」

「私が考えではね。他の世界に行ったときもそう言うことがたまに

あつたから。でも大丈夫よ。あなたのいた世界ではそう言うことはなかったから」

「分かったから、話の続き」

「いいわ。つまり、世界には私達みたいな別世界からやってきた者達に対してその世界を変えられないように抑止力のような力があるのと思うのよ。そしてそれは一端にいる神様さえ凌駕するほどの力を持っている」

「じゃあ私の世界ではなんでそれが起きなかつたんだ？」

「私が居ても問題がなかつたか、その世界にはその力はなかつたかのどちらか、ね」

「・・・世界はややこしいな」

「そうね。ハルはこれからいろんな世界をみることになるわ。私と行動を共にするなら」

「・・・それは別にいいけどさ。そろそろその中身の内容を教えてくださいない？いつもそうは言っているけど肝心の中身を言わないよな」  
「そうね。でもまだ言えないわ。今のあなたに迷いを生じさせてはいけないもの」

何回かその仕事の内容を聞き出そうとしてみたが結局は無理だった。そうじらされたら余計に気になってしょうがないけどな。

戻るときさっきの話でスキマを開いてさっさと逃げたのか？と思って聞いてみたら無視したみたいだ。・・・さすが紫。

「それじゃあまたな」

「ええ」

スキマで幻想郷に戻ってきてから私と紫は分かれた。

・・・それにしてもツキか。大変な事になりそうだ。

### 第三十六話（後書き）

ツキのいる世界はハルがいた世界の別世界で、まあパラレルとも取っていいかもしれません。もう町のこととは出ずか分かりませんが。

### 第三十七話（前書き）

ちよつと・・・というか大幅にというか変更した点があるので伝えておきます。

ハルの能力で敵の能力を奪うとき敵の力を奪うというなんとも都合主義というような効果がありました。が、やっぱり自分はそんな能力の名前に合わない効果をつけ続ける事は無理でした。勝手な事しですみません。なので1話から能力についての会話をちよつと変更しました。

ここまで読み続けている人は別にそこまで変わっていないので読み直さなくてもストーリー理解には問題ないです。（ちよつと主人公の強さが変わっただけ）

## 第三十七話

新しい幻想郷の住民になるツキ。先のことといつても私と同じ人が増えるのですこしうれい。

だが、ツキは何を考えているか分からない。それはちょっと不安の種だ。

今考えても仕方ないので今日という日を始めよう。

「ふあ〜あ・・・よし」

私の周りには誰もいない。まあ、私の部屋だから普通か。

・・・ちなみに今は朝だ。・・・何言っているんだろう私。

咲夜の能力で遠い洗面所まで行き顔を洗って完全に目を覚ます。個室に一つ一つ付いていたらきりが無いからしょうがないだろうがやつぱりちよつと遠い気がする。

そんなどうでもいい事を思いながら咲夜と一緒に朝食。ちなみに今日は洋風だった。

・・・そして暇人になる。

「・・・・・・・・」

暇という言葉を言ったら誰か厄介ごとを持ってきそうだから言葉に



出さない。

咲夜の手伝いでもするか？

そう思っただけのこととしたがやる気がしない。・・・何処の魔人だ私は。

「・・・そうだ」

私がいつか考えていた重要事項を思い出した。

それは・・・いつ一人暮らしするかである。

決してふざけていないぞ。私は。ただ、もうフランも精神安定してきたし私は紅魔館にいる意味ないと思うし、そろそろ自立しないとイケない頃だと思うんだ。（主に私が）このごろ本業すっぱかしているし、何より私がいろいろ迷惑かけている感じなので嫌だ。

確かに外の世界ならこんな話は無理な話だがここでは基本自給自足、つまり私でも何とかできる状況だし、能力があるから万屋みたいなことをすれば何とか生活できるんじゃないかという計算である。

そんなに世の中甘くないと思っていてもやっぱり迷惑かけるのは嫌だ。私の思い込みすぎかもしれないけど自立する準備はするべきだ。

という事でまずは家を何処に構えるか考えるため私の悩みを一番まともに聞いてくれそうな慧音さんに聞くことにした。

そして寺子屋。今はまだ授業を始めていないのですぐに入れる。

「おはようございます。慧音さん」

「おはよう、ハル。君がここに来るなんて珍しいな。どうしたんだ？」

「あの・・・なんとというか、人生相談に来ました」

「ほう？」

「私、一人暮らししたいんです」

「君は確か今、紅魔館にすんでいるんだよね」

「はい」

「何故一人暮らしがいいんだい？一人暮らしは大変だぞ？」

「それは分かっていきます。ですが、ずっと紅魔館で暮らしていくわけにはいけないので」

「それは君が迷惑をかけているといたいのかい？」

「はい。たとえそうじゃないとしても自分が嫌なんです」

「そうか・・・私に相談してきたのは人里に住む場所があるかないかを聞くためかい？」

「・・・それもあります。私の相談を真面目に聞いてくれる人なら慧音さんがいいと思いました」

「ははっ、たしかにそうだな」

寺子屋が始まるまでの間、慧音さんは私の相談を熱心に聞いてくれた。人里に住むなら慧音さんが空き家を探してくれるから少しの間待つとけという事。後一つ住める場所としたら魔法の森ぐらいいだらたぶん、人里に私は住むだろう。そのほうが仕事の収入もいいだろうし。

話も終わったので寺子屋をでる。これから何しようかな？

・・・久しぶりに勉強しようかな。

いや、別に私は馬鹿ではないと思うよ。でもね、私は暇になるのが嫌な人間なんだ。

ということでも自分の部屋に戻り、外の世界からもってきていたかばんの中から、勉強道具一式を出して勉強を始めた。

勉強をしてなんと数時間をすごした。外の世界だったら完全な真面目君になれる勉強量だな。

紅魔館の外に出てみる。あと少しで夜だな。

さらに時間つぶしをするために紅魔館近くを散歩する事にした。チルノに会ったらちょっと現状を聞いてみるか。もう、むやみにこっちに勝負を挑んでこないだろう。私がチルノは最強と認めたからな。

だが、チルノはこういうときには会わない。会いたくないときには会うのにどういうことだ。ラーソンを見つけたが、・・・会いたくない。まだあいつはバトルマニアだからな。いまからフランと遊ぶのにこんなところで弾幕ごっこしていたら後で大変な事になる。

ただ、森と湖の中と周りを歩くだけで終わった。まあ暇つぶしできたからいいけど。

さて、紅魔館に徒歩で戻ってきたはいいいけど、なにがおきている。

紅魔館の門の前で戦いか分からないフランとレミリアの光の魔弾の投げ合いがおきている。

どうしたんだ二人とも。姉妹喧嘩？

美鈴はこんな状況下でも門にもたれて寝ているし。

そこに咲夜がやってくる。

「あつ咲夜」

「おかえりなさい。フラン様があなたの事待っていたわ」

「そうなのか？でも、目の前のこの状況はどういうことだ？」

「フラン様があなたのことをまっっている間、お姉さまとちよつともいいから仲良くなるうとしたのよ。あなたが来る前はそんなこと考えもしなかったのに」

「いや、だとしてなんで仲良くなる方法がこんな危なさそうな方法なんだ」

「レミリア様とフラン様はキャッチボールを真似して遊んでいるのよ」

「……は？」

目の前にはすごいスピードで相手に飛んでいく魔弾。どう見たって殺そうとしていないか？

だが、よく見ると二人とも笑っているように見える。妖怪からしたら普通なのか？

「……これが妖怪のキャッチボールか」

「レミリア様とフラン様は特別よ。とても力を持っているからこん

なことができるのよ」

「じゃあ美鈴がやつたら？」

「・・・こうなるわ」

美鈴のところをチラッと見て言う。そして、五本のナイフが飛ぶ。

一本は額に命中。ほかのナイフは帽子、手、・・・さらに頭にもう一本刺さった。

「いつったあーい！」

びっくりしてとびあがった美鈴。まあ、そうなるな。

「あなたも混ざって来たら？」

「いや、遠慮しとく」

「以外に弾幕を避ける練習になるかもしれないわ。それにフランの世話係はあなたでしょう？」

「・・・ああ、もう！」

この後私は刺激的な夜を過ごした。二度と味わいたくないことだぞ。絶対に人間はやらない事をおすすめする。

### 第三十七話（後書き）

この頃気づいたんです。別に小説は長くなくてもいいのだと。という事で区切りがいいように終わって、（作者的に）。しかも短くなるように努力しました。このこと、前にも言った気がします……

穏やかな日常はいいですね。皆さんはどう思いますか？

次から異変とまでは行きませんがちょっとした事件が起こるかも……です。

### 第三十八話（前書き）

またオリキャラ追加です。正直、カオス要員がほしかったので追加です。これでもっと面白くかけるかも！？

・・・そう思っていた時期が私にもありました。（実際は作者の腕次第だった）

## 第三十八話

忘れたときに厄介ごとはやってくるって誰が言っていたけ？まあいいか。

とりあえず、ついにあのときが来た。

「さあ、準備はいい？」

「・・・ああ」

そう、ツキを幻想郷に迎える日だ。

私と紫はスキマにツキを落として幻想郷の中に連れ込むことにした。もちろん、ツキが独りになったときに行動に出る。一瞬だからあつちの町のセンサーも異常に気づかないと思うし、これならばれてもすぐにいなくなれる。

「さあ、ツキは何処にいるのかしら？うん・・・この時間帯は・・・私的には学校に登校中ってところだな」  
「なら好都合ね」

そういつてスキマの中からツキを探す。といっても、紫がツキの靈力を探るだけの簡単なことだけど。だが、もし私がやるとなったら大変なことになるだろう。私はあまりうまく探せないし。人間だからしょうがないという事で自分を説得しておこう。

「・・・いたわ」



隙間から見えるものは・・・おお、ツキだ。しかも一人だけ。

「すごいな」

「私に掛ければこんなものよ。限界はあるけど」

「十分だろ」

「そうね」

さっそく、ツキの真下にスキマを作る。もちろん不意をくらって驚きながらおちてくる。そして、盛大に尻餅をついた。

「いつてえー！」

ちよつとスキマの中は広いし、上にスキマを開いて落としたからな。痛いのは当然。あ、でも私がやったんじゃないぞ。紫だからな。

「・・・迎えに来てくれたのはありがたいがこれは酷い。しかも、まだ親に旅に出るとは言っていないぞ」

「あらそうなの？ごめんなさい」

紫はニコニコ微笑みながら答える。いつものなに考えているのか分からない表情だ。

「それは後からだ。ここにきてもらったのはまず幻想郷のルールを覚えてほしいからだ」

「ああー、なるほど。でも大丈夫だ、問題ない。俺は大体の事は知っている。だから俺が質問する事だけ教えてほしい」

「わかった」

何故幻想郷のルールを知っているのか分からなかったがとりあえず

質問に答えた。だが、質問の内容がちよっとおかしかったと感じるのは私だけ？紅魔館は何処にあるとか地霊殿は何処にあるとか美鈴はどうなっているとか等……

「……これだけか？」

「ああ、これだけだ」

ちなみに答えたのは私だ。紫は何かをずっと考えている。

「で、どうするんだ？紫」

「……え？あ、ツキをどうするかってことかしら？」

……紫がうるたえているのなんて初めてみた。いや、これで二回目ぐらいか？

「ツキの世界で何かこっちに来るために遣り残した事があるのなら今、やってきなさい」

「よし！じゃあすぐ行こう」

ツキが自分の家の自分の部屋にスキマを作ってくれというので作って落とす。そしてまたでかい音を立てて尻餅をつく。

「いつてえ！おい！さっきもやったばかりだろ！」

「……」

聞こえてはいるが答えられなかった。笑いをこらえるのに必死だったからな。

「……まあいいか、とりあえず持っていくもの準備するか」

そういつて、ツキは部屋の中からいろんなものを取り出し、大きなリュックにつめる。自分もこれだけ準備する時間があればもつといふんなものをもってこれたのになあ。

数時間が過ぎた頃、やっとツキは持っていくものをつめ終わった。

「よし！じゃあ後は親に旅に出ると伝えるだけだ」

そういつて部屋からでた。私もツキを追う。その先にはツキの親とツキがいた。

「そういえば自分の親ってどんな顔だったっけ？」

思い出せないなんて親に失礼だが、ずっと私と姉をほったらかしにしていたんだからあたりまえだろう。

そんな事を思っているとツキは母親を説得したのかすぐに部屋に戻ってスキマを開けと虚空に言う。・・・これで私たちがいなかったら頭がおかしい人に見えるな。

私はスキマを開く。今度は着地を綺麗に決めた。・・・ちつ。

「親にはちよつとばかり旅に出るといつてきた」

「それで本当に大丈夫なのか？」

「ああ。あつちの世界は犯罪なんて起こりっこないからな。毎日が普通で平凡。それで俺はム力ついていたんだ」

「ふ〜ん」

「親は犯罪なんて起こらない世界だから俺が何処行こうとすぐに許

可が出るわけ。まあ、今行こうとしているのは事件があるのが当たり前の世界だけだな」

「なるほど」

「・・・そろそろいいかしら」

「あ、いたのか紫。もどつかに行ったのかと思っていた」

「ええ、今から眠りに行くわ。ツキはあなたが何とかしなさい。何かあったら私の家に連れてきてもかまわないわ」

「俺は絶対に行きたくないけどな」

紫はそれだけ言うとスキマを開いていなくなった。

「・・・じゃあとりあえず私達もここからでしょう」

スキマを開いてとりあえず人里に出た。

「ありがとよ。だが、ここからはプライバシーの侵害だぜ。俺はやりたい事をやるからついてくるな」

「・・・別についていきたくないけど」

だって、今のツキは危ない人のようなだからな。興奮しすぎだ。

だが、ツキは私の予想通りすぐ戻ってきた。理由は簡単だ。

「・・・自分が空を飛べず移動手段が無い事を忘れていた」

「・・・やつぱりか」

「連れて行ってくれ」

「ええ〜、ついてくるな、でしょ？」

「すまん」

ちよつとの間これでいじめていたがふて腐れ始めたのでそろそろやめるか。

「……はいはい、分かった。何処に行きたいんだ？」

「……紅魔館に連れて行って下さい」

「……ああ」

ツキ、お前にそんな喋り方は似合わない。それと上目使いをやめる。気持ち悪い！

私はツキを見ずに（ここ重要）紅魔館までスキマを開いて連れて行く。

「おお〜！ここが紅魔館」

「じゃあ私は中の図書館にいるから次行きたい場所があるなら私のところに来てくれ」

「わかった。よし！」

ツキはめいり〜んと叫びながら門のところを駆け出して行った。

「ふう、やっといなくなった」

一人静かな図書館で一息。パチュリー？その辺で寝ていると思う。

「読み途中だった馬鹿でもわかる魔法の泉とかいう本を読もうかな」  
「ハルウ〜」

どうやら読めなさそうだ。

「・・・今度はなんだ。あとその呼び方止める」

「いいや、止められないね。とりあえず次の場所に行きたい」

「何処だよ」

「地底界！」

何でそんなところまで知っているんだ？私だってこの頃知ったばかりというのに。

「・・・分かった。だが何でそんなに幻想郷に詳しいんだ？それをせめて教えてくれ」

「フツ、大人の事情ってヤツサア」

・・・くそっその顔を止める。いらいらする。

だがつれていかなかったらうるさいので連れて行く。

地底界について一番最初にツキがやった事、それは・・・

「星熊勇儀いいいい、いるならきてくれ」

と叫ぶ事だった。なんでもフラグが大事とか何とかいっていた。私は来る筈がないと思っていたけど誰かこっちに向かってくる人がいてびっくりした。だが、たまたまという可能性も思ったがすぐに打ち砕かれた。あっちも大声で返事をしてきたのだ。

「私が星熊勇儀だよ」

・・・しかもあの人、私を前に助けしてくれた鬼の人じゃないか。

「な！フラグは立てないと回収できないからな！」  
「・・・意味わからねえ」

ツキがフラグも分からないのかとか言っているけど分からないものは知らない。後で教えてやるとか言っているけど教えてもらいたくない。

「で、私に何のようだい？おや、君はまたきたのかい」

「ええ、このツキとか言う人のせいで」

「そんな言い方するなって。むしろこれでよかったと感謝するべきだろ」

「何故」

「・・・まあいい。勇儀さん、お願いがあります。俺と友達になってください！」

驚きの大胆発言。美鈴にもそんな事いつたのか？

「ほお、私と友達になりたいのかい？それはまたおかしな人間だねえ」

「それが俺の取り柄だ」

「なるほど。だが私は強い奴とじゃないと友達になる気はないよ」

嘘だな。今、私は心を読む能力をこっそり使っているが内心久しぶりに戦いたいと思っているだけだった。

「いいだろう。だけど弾幕ごっこじゃなくてリアル決闘にしてくれ」

「・・・いいのかい。仮にも私は鬼だよ」

「・・・できたらハンデをお願いします」

「ははっ！威圧をされてもやる気とはいいね。分かった、この勝負を受けて立つよ」

・・・死ぬんじゃないのかツキ。それとも何か、秘策でもあるのか？

こうして、リアルファイトが始まる事になってしまった。私のせいじゃないぞ。これで紫が何か言ってきたとしても責任は取らないからな！



### 第三十八話（後書き）

中途半端なところで切ってしまいました。が戦闘シーンをどうやって書くか考えたいからです。

できることならおもしろおかしいバトルがいいですね。

### 第三十九話

「じゃあ、はじめ」

何がはじめかというのと、ツキと勇儀さんの試合だ。殺し合いとも言  
うが。

審判が欲しいという事なので私がやる事になった。ただ突っ立って  
ことの成り行きを見守る簡単なお仕事です。

一応、この試合にもルールが課された。一つ目。誰も飛んではいけ  
ない。二つ目。弾幕禁止。三つ目。両者一回でも有効打をあてられ  
た時点で負け。その有効打は私が決めるのだが。まあ、どちらかと  
いうとツキへのハンデだ。

で、さっきから続いている試合のほうはというと・・・

「はっ！せい！」

ツキが能力で刀を作り出しその武器で勇儀さんに切りつけようとし  
ている。だけど、その勇儀さんは余裕の表情。ツキの能力はあとで  
コピーしておこう。

今は心を読む能力は使っていない。ずっと使用するのには限界があ  
るからだ。

「君の能力かい？」

「ああそつだ！」

ツキは追加して短剣を作っている。だが、ツキは所詮一般人。完全  
に刀を扱えていない状態で短剣をもっても意味ない気が・・・

と思ったらツキはバックステップで後ろに飛んだ後、その短剣を投擲した。・・・咲夜さんよりはうまくない。が、ちゃんと勇儀さんにめがけて飛んでいく。

「おっと！」

一瞬だが不意を突かれたのか、勇儀さんの回避が遅れる。それでも掠りもしないが。

「・・・もういいですか、勇儀さん」

お、ツキにも体力の限界がきたのか？交渉に入っているし。

「まだまだだよ。次は私から！」

すごいスピードでツキに迫る。能力使用無しで目に見えるくらいのスピード。勇儀さんは完全に手加減している。

対するツキはすこし小さ目の盾を取り出す。動く気はもう無いのか？それと同時に勇儀さんのパンチが炸裂。なんてただのパンチなのに土煙が舞うんだよ。これは威力のすごさを物語っているのか？

「へえ、避けないで防ぐとは・・・やっぱ人間にはおかしいね君は」

「・・・そういつてもらえるとうれしいね」

土煙がはれたら盾で勇儀のパンチを防いでいるツキの姿があった。パンチもすごいがそのパンチをくらって壊れない盾もすごい。ツキ？・・・すごいのか分からない。

「まだまだ行くよー！」

「え、ちよつとま」

ツキがなにか言おうとしていたが勇儀さんのパンチで遮られた。バーンと音もでかいパンチ。

その後も格闘している音が聞こえる。土煙で見えないので気を扱う程度の能力を発動。この能力はすべての気が見えるようにもなるから生きているか生きていないかの確認にもつかえる。気は生命の強さも表しているからな。それでツキの気を確かめる。うん、小さくなっていない。生きている証拠だ。

すこしのあいだ土煙の中での格闘が続く。そしてツキがいきなり土煙の中から飛び出した。

思いつきり飛んでごろごろ転がる。みたところ吹っ飛ばされたようだ。

「あゝ・・・いたいなあれ。めっちゃ手が痺れているし」

「人間の存在であんたは頑張っているよ」

土煙の中から声が聞こえる。

これでまた距離を置く二人。早く決まらなかなと思っているとツキが今度は槍を作り出した。

「もう、終わりにしないか？」

「んゝ・・・まあいいよ」

勇儀、飽きたのか？え？酒が飲みたくなつた？・・・どうでもいいな。

だがツキは終わらせる発言したくせに動かない。目も閉じている。そんなツキを動きだすまで待つのか勇儀さんは・・・両者ともに動

かない。

「よし、できた」

さっきまでもっていた槍が変化していた。全体が真っ赤で刃のところは黒い羽ができています。・・・どっかで見たことあるような・・・

「俺のこの能力のチートな特徴、それが効果付加だ。いくぞ勇儀！」  
「来たいなら早く来てくれ」

勇儀は攻めもせずまた突っ立っている。次にツキが攻めて来たら一気に倒すつもりか。

だがツキは槍を思いつきり投げた。・・・だけだった。

「そんなのが私にあたると思うのかい？」

「ああ、飛翔するその槍はグングニルという愛称だ」

なに！？レミアアと同じ槍の名前だと・・・。驚くところが違ったか？

「そして、グングニルの効果は・・・必敵命中だ」

そういつて、避けたのにも関わらず勇儀の手にグングニルが刺さっていた。それってあり？ていうか最初からやれ。それともなんだ、勇儀さんがただ戦いたいだけというのを知っていたのか？

「・・・勝者、ツキ」

「よつつつしやあ！」

声を上げて喜ぶツキ。対して勇儀は

「へえ、こんな能力所持者がいたとはねえ」

どうでもいいという表情。

「じゃあ、勇儀さん。これから宜しくな！」

「ああ、よろしく。次は弾幕を出せるようになってからきな。私も手加減しすぎの戦闘はつまらないからねえ。やるなら本気で死なない弾幕ごっこのほうがいいのさ」

と言うと、さつきとは違って一瞬でいなくなった。速すぎる。だが、声だけはしっかりと聞こえた。萃香に会いに行こうかな、と。

「よし、フラグ建設二つ目完了だ。これで俺の嫁計画もあと少し」  
「……………」

友達から始まる恋愛？・・・誰がそんなこと言っていたっけ・・・

「お前もフラグを立てたらどうだ？」

「遠慮しとく」

「・・・まあいい。今度は地霊殿に行こう」

「分かった」

早く終わらせて寝たい。能力を多用すると疲れるんだよ。使用しているのは自分の所為だけでも。

ところ変わって地霊殿。入ると猫のお出迎え。その猫は私達を主人のところまで誘導案内してくれた。猫に感謝、ということとで頭を撫でてやる。にゃーと一声あげると何処かに行ってしまった。

だがそこにいるのは猫の大群。あ、猫だけじゃなくいろんな動物が混じっている。

そして、その中に埋もれていたらしいさとりさんがでてきた。

(おひさしぶりです)

(・・・後ろの人は誰?)

(ああ、このひとは)

「俺の名前はツキだ。さとりん、人の心を読むのは止めにして言葉で会話しようぜ」

さとりは変な名前と呼ばれたことに驚いたのかそれとも会ったことも無い人に名前を呼ばれたことに驚いたのかわからないがとりあえず驚いていた。同時に少し引いていた。

ちなみに私が能力をコピーする程度の能力をもっているということはツキは分かっているようだ。私の能力は境界を操る能力だと思っっているな。

「・・・何しに来たの」

すぐに無関心のような無表情。さとりさんに笑うときはあるのだからか。

「灼熱地獄跡の場所を教えてほしいんだが」

「・・・何のためにいくの?」

「・・・お友達の輪を広げるためさ」

普通はこんなところにお友達なんていない。

お、また心の中でさとりさんが何か言っている。

(・・・行くの?)

(・・・まあ、危なくなったら逃げます)

(そう)

ツキには聞こえない会話。その本人はずっとにやにやしたままだ。自分の未来予想図を考えてにやにやしているのか？

「・・・来て」

「おう」

さとりについて行くツキ。おい。知らない人について行っちゃダメなんだぞ。そんな当たり前のことも習わなかったのか？

という私もついていく。私の場合は別に知らない人ではないからいいんだよ。

今の灼熱地獄跡は何か分からないが火力発電所状態らしい。そこでさとりさんのペットが火力調整そこに残っている怨霊の管理をしているらしい。

「・・・ここから落ちるといけるわ」

「・・・ありがとうございます」

さすがのツキもひいた。私なんかもう行きたくないと思っているんだぜ。

灼熱地獄跡は地霊殿の下にあって庭からそこに入るための穴がある。



その入り口からでもわかる。ものすごく熱い。ツキは何しにここに行くんだ？死ぬため？干からびる為？

（・・・後は知らないわ）

（ありがとう。この中に入るときに必要なものをせめて教えてください）

（・・・その人間じゃ耐えられない熱に負けない意思）

そんなこと言っただけで帰らないで下さいとさりさん。これは幾らなんでも意思とか関係ないでしょ。しかも人間じゃ耐えられないって・・・入ったら蒸発するの？

「なあ、ハル」

「なんだ？」

「一緒にいこうぜ」

「一人で逝ってこい」

そういつて逃げようとしたが、ツキにつかまれて一緒に穴に落ちる。だがツキはあることを失念しているのか私より先に自由落下をはじめる。

「あ、俺って飛べなかった」

いまさらかよ！

と心の中で突っ込み私は飛んですぐにツキをつかまえて、霊夢の能力、空を飛ぶ程度の能力でツキを浮かせようと試みる。霊夢の能力で以外に便利だよな。能力の使用者だけでなくいろんなものを浮かせるし。ツキをお姫様抱っこできるほど私は強くないからな。しかしちよつと失敗。能力の使用回数が少ないから全然使いこなせない。そのため、ツキが悲鳴を上げながら上に吹っ飛んだ。

「おいしいいい！」

「ごめん」

また自由落下に戻ったツキの隣で一緒に飛んで降りながら謝る。自分で来たくせにそれぐらい我慢しなさい。

地面に激突するところでもまた霊夢の能力を発動、また上にぶっ飛ばして着地させるよていだが・・・さっきはうまくいかなかったのに今はうまくいってしまった。

「・・・・・・・・」

無言でこっちを見てくるんですが・・・どうかしましたか、ツキさん？

「・・・・・・・・もういい。お空さ〜ん。何処にいるの〜？」

なにやら一人合点して歩き出していく。さあ、倒れるのはいつだろうか・・・

私はチルノの能力を発動して自分だけ涼しくしてツキを見守ろうとしていたが、ツキがこっちの状況に気づいたのか知らないが私のところに来てきた。

「おい！一人だけ涼しむんじゃねえ！」

「・・・なにも準備してこない奴が悪い」

「していたさ！愛と勇気をたくさんこめる準備をな！」

「・・・だったらその愛と勇気でどうにかしろ」

「・・・・・・・・」

さすがに無理があるので結局また一緒に行動する。ちなみにツキはまだ私の能力に気づいていない。冷気も魔法だと思っっているみたいだ。・・・そんな魔法、あるのかな？

ちよつと歩き回っていると変な妖怪が出てきた。何処が変と言われたら体の四肢のうちの三つがおかしいとしかいいようがない。そして大きな翼。この妖怪はなんの妖怪？

「ここは立ち入り禁止だよ！早く立ち去りな」

「おおー！本物はやっぱり違うねえ」

一人でなに関心しているんでしょうか？

「・・・む、お前は・・・」

え、私？どこかで会っていたっけ？

「あ、お隣が言っていた人間」

だれ？お隣？・・・知らないな。

「・・・私達は古明地さとりさんから許可を得てここに来た」

「うにゆ？・・・ああ、私達の主人！」

さとりにここに来る前に教えてもらった事だがさとりの名前を出せばペットは襲ってこないといっていたがこいつ、一瞬誰？みたいな顔していた。主人の名前を忘れてどうするよ。

「あなたの名前は・・・はな！」  
「・・・ちがう」

さとりさんに心の中で自己紹介をしているから自分の事が分かるのは何故？と思わないが大丈夫かこいつ。堂々と人の名前を間違えて当たっているでしょみたいな顔をしている。熱で頭をやられたんじゃないかと思っているとツキが耳元でささやく。

(お空は物事を忘れやすいんだ)

なるほど、鳥だけに忘れやすいのか？みんなから鳥頭とか呼ばれていそうだ。

「俺の名前はツキ。お空さん。俺と友達になりませんか？」  
「？友達？いいよ」

・・・あっさりと承諾している。友達の意味を間違えていなければいいが。

「えーっと・・・」  
「私の名前はハルだ」  
「あ、そうそう！ハルハル！お友達ってなに？」  
「・・・やっぱりか」

マンガならずるって効果音付きと思うくらい呆れた。

「だいたい仲良くする間柄ということだ」  
「ほお・・・なら私はたくさんお友達がいるね」

・・・また誤解している気がするが疲れるからもういいや。

「じゃあ俺はお空さんとお話してくるから！」

ツキは暑さなんてどうって事ないというようにお空さんのところに行き、どこかに二人で歩き出した。その姿はさながら彼氏と彼女にも見えなくも無いが・・・

ところで私はどうすればいいんだ？

### 第三十九話（後書き）

一番幻想郷で頭がいいのは紫と永琳？そして？なのはチルノとお空？

ツキの能力紹介します。

武器を作り出す程度の能力

武器を作るときは何かをモデルにしなければならぬと言つ制限は無く自分が思い描いた形で武器を作れる。重さなども自分で考えないといけないのである意味大変。

出現させるときはところは自分の半径五メートルくらいの中なら何処にでもだせる。

特殊効果をつけるときはその効果も作るときに追加でイメージして作る。イメージしたことが特殊効果になり、しかもその武器ができる範囲のみ。

例

絶対に当たる槍をつくる場合

槍の形、色、重さなどを想像すると同時にその槍を投げて相手Aにあたるイメージを描く。

それをどこに出すのか決める。

だしたらもって投げる。（Aに投げてあてるイメージをしたので必ず投げないと特殊効果が発動しないし発動してもAにしか当たらない）

作るための原料が自分の霊力のため任意で消す事も可能。地球に優

しい設計。

## 第四十話（前書き）

ふうう。ぎりぎり更新です。

何がギリギリかと言いつと・・・いろいろです。



## 第四十話

「みんな。ツキのフラグ教室だよ！」

「馬鹿。違うだろ」

私はツキの頭を叩く。コイツはどこでもこんな感じなのか？

ツキを元気いつぱい夜の幻想郷を飛び回らせたことでツキのやりた  
いことはひとまず終わった。私もそろそろ能力を多様しすぎて疲れ  
たので眠りたい。

「じゃあ、私はそろそろ眠るから」

「へ？ああ、おやすみ」

ぐいっ！

紅魔館に戻ろうとしたらツキに首元を引っ張られた。地味に苦しい  
からやめる。それにどうした？まだ何かあるのか？今さっき眠るっ  
ていったよね、私。

「ちょっとまで。すこしおかしいと思わないか？」

「・・・なにが？」

なにもおかしいと思うところは無いぞ。そう、予定通りツキは紫の  
家に置いていく。それが何か？

「なんで俺はここにいるんだ？」

「なんでって・・・外来人だから？」

「ちがうだろ！俺が言いたいのは、何故！俺がここで寝る事になっ

たかだ！」

「だって、お前はほかに寝泊りできる場所なんてないだろ？」

「それはそうだが、ほら、よくあるだろ？ 親切な人が自分の泊まらせてくれるとか」

「それが紫の家」

「ダメだ！それは親切じゃない！犯罪だ！詐欺だ！」

めちゃくちゃ嫌がっているけど何が嫌なのか分からない。何、この人野原で野宿したいの？ そんなことをしたら確実に死ぬね。

これ以上話を長引かせると面倒なのでツキの寢床は紫の家に強制的に決定。泊まれるだけでもありがたいんだから感謝しろよな。

「んじゃ、そう言うことで」

「おい！なにがそういうことだよ！」

「はいはい。文句は明日から聞くから」。紫にもフラグを立てとけば？」

私はスキマに落ちてスキマを閉じる。もうこれ私は誰にも邪魔される事無く眠れるはずだ。

朝。誰にも邪魔される事無くゆっくり眠れた。紫の夢に入ってくるという安眠妨害もなかったしな。さっそく、ツキのところにも行くか？ いや、まだ寝ていそうだからいまは止めておこう。とりあえずいつもどおりの朝を過ごすか。

「おはよう、咲夜」

「おはよう、ハル。昨日の外来人はどうしたの？」

「紫の家に宿泊中だ。めっちゃくちや嫌がつていたけど置いてきた」

「ここで泊まらせればよかつたんじゃない？」

「咲夜たちはそれでよかつたのか？」

「うん．．．まあ、あなたがいるからね」

「そうか．．．なら悪いことしたかも」

私は紅魔館のみんながちょっと遠慮するんじゃないかと思ってツキを紫の家に置いてきたんだがそうでもないようだ。あ、でもツキがここにいたら今度はどうなるかわからないな。血を吸われたり吹っ飛んだり．．．

まあいいか。そのときはツキの責任とすること。さてと、私もそろそろツキのところに行きますか。

「ハル．．．やつときたか．．．」

どうしたんだ?!なんか、すごい疲れているようにみえる。

「お前が俺をここに置いていったせいでどんな目にあつたか分かるか？」

「いや全然」

「．．．最初はただ寢床をあのお揚げ大好き女狐．．．じゃなくて藍に用意されたところまでいい。その後が大変だつたんだ!」

「．．．いつたい、何が起きたんだ？」

「ハル、お前は眠れなかつたら辛いよな」

「ああ。もしかして、お前．．．」

「そうだ。俺は」

「紫の家だからって緊張して眠れなかつたのか？」

私とツキが同時に放つ言葉。だが、どっちとも言っている事は違った。

「お前、俺を苛めたいのか？ そうなんだろう。そのわざとさはそうとしか言いようが無い。それともなにか、マジでそれを言っているのか？」

「そうだが」

「・・・もついい。俺はそんなんじゃないって悪夢にうなされたんだよ」

「悪夢？」

それと紫の家にどんな関係が・・・あつたな。

紫の家は紫の手中といてもいい。だから簡単に紫の能力が使える。その能力で夢をいじられたのか。

「おそろしかった・・・言葉では言い表せないくらい」

ツキには悪かったと思うが一応お前は泊まらせてもらった身だそれを忘れないように。それによく考えると悪夢って言ったって紫が出てくるだけじゃないか？ ツキは何故か紫を嫌がっているし。

「分かった。とりあえず、今後の話をしよう。私はそのために来たんだ」

ツキに今後どうするかを聞いた。ツキは本気でここに住みたいみたいだしそれを止める理由も私達にはない。ツキはとりあえず幻想郷で生活を始めたからそのために働くと言い出した。働かざるもの食うべからずだからな。だがその仕事をどうするかが問題だ。

「何の仕事をして生活していくつもりだ？」

「それは・・・まあいろいろ。妖怪退治なら能力でぱっとできるし、一応学もあるんでな。寺子屋でもやっていける」

「ふくん・・・ちなみに年はいくつだ？」

「17歳だ。そう言うお前は何歳だ？」

「・・・15歳だ」

私より背が大きいからまさかとは思ったけどこいつは私より年上なのか。年上の威厳とかゼロだけどな。あ、そういえば妖怪の殆ども年上か。

「やっぱり俺より年下か！なるほど俺が年上か・・・」

自分が年上と言う事が分かり笑みを漏らすツキ。その様はどこかのガキ大将。ツキはどうやら年上「偉いとかいう脳内構図でも出来上がっているのかもしれない。それを幻想郷で考えていたら妖怪なんて全て偉いやつになってしまっぞ。

「あなたは私よりかなり年下よ」

「！でた、妖怪スキマb・・・いやなんでもない」

いま、ツキが何を言おうとしていたか悪夢のことを考えるとだいたいわかる。だがそれは禁句。妖怪からしたらこのときが人間で言う十代みたいなものだろうし。

「勝手に幻想郷で生きていくのも構わないけどこっちにもいろいろと事情があるの。だから私があなた達の話の取りまとめをするわ」

「別にいいけど。じゃあツキ。仕事の事は一旦置いて、住む場所はどうする？」

「・・・ここ以外考える」

ツキは何故紫が嫌なんだろうな。後ろにいる紫もそんなに私が嫌いかしら？とかいつているし。・・・そこまで酷いやつではないと思うぞ？紫は。

「ありがちな紅魔館への住み込み働きでもいいけどなあ・・・」

「ああ、私がやっているみたいにか？」

「そ」

「うん・・・いいかもしれないが何言われるか分からないぞ。もしだめだった場合の事も考えよう」

「分かった」

話し合いの結果、次善策は人里で住むということになった。私と一緒に。別に私が男と一緒に暮らしたいとかそんな趣味を持っていたわけじゃないぞ！ただ、私が前々から考えていた紅魔館からの自立の話にツキを混ぜただけで・・・ってなに考えているだ私。それでツキは仕方が無いなあというような感じで承諾する。

話がまとまったので紅魔館へスキマを開ける。っと思っただが今思えば、主のレミリアは今は睡眠中だな。

「ツキ、人里から行くぞ」

「？何故？」

「レミリアは今は睡眠中だ」

「しょうがないな」

なんでツキが妥協する側なんだ。

話がまとまったのでさっそく慧音の元へ。

里の外回りに空き家が一軒あったと慧音さんからの報告。外観は普通の木材建築で三角屋根。中を見てみると長い間無人だったのか、寒々としている。埃もかなり多い。だが3時間くらいかければ何とかなる程度だとおもつ。

「慧音さん。ありがとうございます」

「どういたしまして。この家は昔住んでいた外来人のために立てたものだ。今はないけどね」

「・・・そうですか」

「何か出るとかそういうことはないから安心してくれ」

「はい。あの・・・御代は・・・」

「御代？そんなものはいらさないさ。使わなかったら宝の持ち腐れだからな。外では必要なのかもしれないが。私はこれで失礼しよう」

慧音さんが去って私とツキだけが部屋に残った。ツキには慧音さん、気づかなかつたな。なぜか？ウドンゲの能力を使ったからさ。慧音さんにはまた後日ツキの存在を知ってもらうことにした。今日ここで話されても困るし。

「・・・これで紅魔館のみんなとお別れか」

「ん？お前、紅魔館から出て行くのか？」

「ああ。ずっと世話になっっているわけには行かないからな。確かに仕事をしているといえはしているけど、相手からしたら割りに合わない仕事内容だし」

「それって何の仕事だ？」

「レミリアの妹のフランという子の世話だ」

「・・・マジかよ。お前、それで割に合わないってどんだけもらっているんだよ」

「初めは死に掛けたけど今はそうでもないからな。それにもうフンは私無しでもやっていけるよ。こんどは私が自立しないとイケない番なんだ」

「ふうん・・・まっ、俺にとってはどうでもいいけどな。だが、もし紅魔館に住めなかったらよろしくな」

「ああ」

このときのツキの言葉はもう私と住むことが決定しているような言い方のように感じた。  
気のせいだろうけど。

「そうだったら毎日俺の知識をお前に授けてやるっ」

「それはいらない」

そして私は、紅魔館メンバーとのお別れを決意した。



## 第四十話（後書き）

いいですね。

なにがって？・・・いろいろですよ。

このことでフランが裏切ったー！なんていってハルに襲い掛からなければいいですけど。まあ、これくらいで精神が不安定になることは今のフランには無いでしょうけど。

## 第四十一話（前書き）

作者は風邪です。いつそ風邪ではなくて「ウイルスくらいに掛かればいいのに」。

## 第四十一話

夜。レミリアが起きている時間になった。この時間になるまで私はずっと慧音さんがくれた家の中の掃除をしていた。といっても能力を使って埃を外に飛ばしたただけだけど。家具などはまだ無い。後から本格的に集めたりするつもりだ。

つと。いまはこのことは置いておこう。

「行くぞ、ツキ」

紅魔館。朝は日の光だけが館を明るく照らしていたのに、夜になると朝の静けさが嘘みたいにがやがやしている。音をだしているのは主に妖精メイドだろう。これが人里だったら完全に近所迷惑だな。下手すりゃ巫女が飛んで来る事態に・・・そんなことはないか。

とりあえずレミリアのところにツキと徒歩で移動。扉を数回ノックして入る。ノックをしないで入ったら礼儀知らずとしてレミリアに説教されるからな。以上、レミリアの教訓その一。

「あらハル、どうし・・・」

ん？どうした、レミリア。なんで顔が引きつっているんだ？

「あーやっぱりな」

「なにがやっぱりなんだ？」

(レミリア前こっちに来たとき幼女、貧乳とかカリスマ(笑)とか

言ったんだ)

(おい！)

小声で話しているがレミリアには聞こえているだろう。今、ツキが襲われていないのが奇跡だな。そこはやっぱりいついかなるときも優雅に。感情に流されてはいけないうレミリアのカリスマてき教訓その二から来ているのかも。これはもう、紅魔館で働くとか絶対に無理。もしかしてあの時、私に言ったあの言葉はこれを予想してか？

「ど、どうしたのかしら？」

「あ、ああ。こいつのこと、分かるよな？」

「ええ、ええ。分かるわ」

「ちよつと話があるみたいだから。後、よろしく」

後ろで「ちよつ、まで、おい！」とか「裏切ったあー！」とか聞こえるけど今から起こるであろう戦いに巻き込まれたくないの撤退。部屋から出て扉を閉める。

・・・何も聞こえない。静かだ。

と思っただらすぐにどたばたと走る音や、ガキン！バシュツ！ドオン！と、恐ろしい音が聞こえてくる。咲夜、この騒動をどうにかしてくれ。ていうか、なんで来ない？もしかしてレミリアに言われているのか？「破壊音が聞こえたらそれはツキを処刑している音だから気にしないでいいわ」とか。

しばらくすると静かになった。やっと終わったか・・・

ゆっくり、ゆっくりと扉を開けると、また無傷のツキとはあはあと荒い息をして倒れているレミリアがいた。・・・ツキの能力がイン

チキすぎるな。

「はあ、はあ・・・攻撃が効かないなんて、ひ、卑怯よ」

「弾幕ごっこじゃないからルールなんてないぜ？それに自分が負けたのを潔く認めないのか？それならやっぱカリスマ（笑）から幼女に降格だな」

「！・・・負けは認めるわ」

今にも泣き出しそうなレミリア。ツキはここにきた理由を忘れているんじゃないかと思う。

「ところでなんだが、ここで働かせてくれなイカ？」

忘れていなかったようだが言うタイミングがかなり最悪。

「・・・ふざけているのかしら？」

「いたって真面目だ」

あ、レミリアの表情が変わった。どうやら、Sのレミリア様が降臨したようだ。いつの間にかカリスマと表情が余裕の表情に戻っている。

仕事内容も予想の斜め上、血の提供者か咲夜と同じ紅魔館全体の掃除、下僕のどれか。

「「最後はおかしい」

「「・・・これくらい当たり前だわ。さあ、どつするのかしら？」

「血の提供はどのくらい？」

「さあ、どのくらいかしら？」

おお、不気味にレミリアが笑っている。・・・いや、声に出して笑うのをこらえているのか？どっちでもいいが、血はほぼ全部を吸血されそうだ。

「分かった。俺が出す答えは一つ。それは・・・ここで働く事を諦めるだ」

「え？あなた、他に当てがあるのかしら？ないからここに来たのではないくて？」

確かに、まさかこんなやつに他に生活する当てがあるとは考えられない。だって行動を見ている限りツキは行き当たりばったりだからな。レミリアはツキが懇願してくるのを見てほくそ笑むつもりだったんだろう。

「まさか。俺みたいな奴を他のやつがほっとくわけないだろ。当てなら幾らでもある」

嘘付け。

ツキの仕事の話が終わったので今度は私の番だ。

・・・よし、言っぞ。

私は世話係を辞めることをレミリアに伝える。それを聞いたレミリアは予想していた事と言った。

驚きだね。うん、驚き。辞める理由まで8割当たっていたし。

今は咲夜にせめてお別れ会をしましょうと言う事でパーティーの準備をさせている。何故かツキはその仕事を手伝いに行った。能力を使って心を読むと自分が食べる料理に変なものを入れられないか見るため、らしい。ツキがそのパーティーのメンバーに入っているかが謎だが。

その間、私はフランのところに行く。目的は今日で世話係を止める事を伝えるためだ。だがしかし、それを知ったフランはどうなるのか。少し悲しむかもしれない。いや、それは私の考えすぎか。そこまで私はフランに大切に思われていないだろうし。

「フラン、いるか？」

「うん、いるよ」

ぐわっ！ひ、久しぶりだな、殺人級ハグ。しかも後ろからの不意打ち。

「あ、ごめんなさい」

前とは違って力加減できるようになったのですぐに殺人級はゴリラのハグ級になる。ゴリラにハグされたことないけど、だいたい骨が折れるくらいじゃないか？

「大丈夫だ。フランがちゃんと力加減を分かっているからな」

「そう？ちゃんとできてる？」

「ああ」

ちょっとめきめきとか変な音が聞こえているが死にはしないだろう。だが、さすがにあれなので放してもらおう。・・・ふう、生き返る。

「なあフラン。ちょっと話があるんだがいいか？」

「うん。いいよ」

「だがその前に一つ約束だ。私が今から話すことで暴れたりしないように。OK？」

「オーケーオーケー」

これも私の教育の成果だ。これも相手と仲良くなるためのコミュニケーション能力の一つとして教えたんだからな。間違った方向には教えていない、と思う。

「よし、なら話そう。．．私はこの度フランの世話係を辞める事になった」

「え」

話すとやっぱりフランの表情が驚きに変わる。

「なんで？どうして？何故なのお兄ちゃん？」

「フラン、泣くな。別に消えるとかいなくなるとかそう言うわけじゃない。別の場所で働いただけさ。フランはもう私がいなくてもやっていけるし、ずっとくっついたままではいけないだろ。フランも私から離れて一人で生きていくようにならないとな」

私は泣き顔のフランに優しく話す。一人で生きていくはちょっと大げさすぎたかも。

「うえ、うっ、うっ、うっ」

「フラン．．．私のこと大切な人と思っていてくれたのか？」

「．．．う、うん」

「そうか、．．．ありがとうな」



恋人とかそういう意味ではないからそこは勘違いしないように。

そのあと問答をしているうちにフラン再発狂・・・ってあるわけないだろ。一回も発狂はしなかった。今思えばそれはやっぱりフランの成長した証だろう。前のフランならこんな事が起きたら、自分の思い通りに行かなければすぐにキュツとしてドカーン！・・・だろう。もし、そうなっていたらまだフランの世話係を続ける必要があったかもしれないな。

「じゃあフラン、咲夜さんたちが私のお別れパーティーをしてくれるからいこう」

「うん、分かった」

スキマで移動しようとしたら手を握って一緒に歩こうとしてフランに私の手を碎きそうになったのは気にしないでおう。

## 第四十一話（後書き）

フランの生態？

進化

進化

フラン（発狂状態）  
もっと進化するかな？

フラン

フラン改（今ここ）

ハルの生態？

進化

進化

ハル（雑魚）  
者）

ハル（能力覚醒者）

ハル（能力採取者・多重能力

今

ここ

進化する予定？

## 第四十二話（前書き）

久しぶりに長い気がします。

## 第四十二話

「咲夜さ〜ん。言われたとおり適当に切り刻みましたよ」

「・・・分かりました」

こちらは厨房。最初は咲夜一人で料理するつもりだったのだが、ツキが俺にも何か手伝わせてくれと何度も言ってくるので面倒だと感じた咲夜は自分のペースを乱されない程度のお手伝いをツキにさせている。

意外にツキの手つきも良かったので今はちゃんと共同で作っているが。

「しっかしこの材料の量、多すぎじゃありませんか？」

そういつて切っている材料に目を戻す。

野菜の千切りから始まって肉、あと得たいの知れない何か。ゆっくりとかなんとかいつている気がする食べ物。さっきから見ているのはそんなものが大量に山になって置かれている景色。

「それはキノコよ。よく喋るきのこのなの」

「・・・そ、そうなんですか。(てっきりゆっくりだと思った)」

ちなみにツキの言葉が敬語っぽくなっているのは咲夜にナイフで脅されたからだったりする。

「・・・すごいな」

フランを説得してパーティー会場に来たのはいいが、・・・すごいことになっているな。料理の量と人の数的に。

「すごいことになっているだろ」

「ああ。なんでこんなにあつまっているんだ？」

私はツキに尋ねてみた。しらなそうだけどな。

「この主はこうやって騒ぐのが好きなんだってさ。咲夜が言っていた」

「・・・レミリアにそんな趣味が」

「私もお姉ちゃんに賛成！騒ぐならいっぱい人がいたほうがいいもん！」

「さすが姉妹。これからだんだんカリスマ（笑）に似てくるのか？」

ツキ・・・おまえ、まだレミリアの事そんなふうと呼んでいるのか。レミリアがキれるからやめたほうがいいぞ。会ったび戦っていたら疲れるからな。

「その呼び方は辞めなさい！」

「あ、聞こえていたみたいだな。じゃあ後で！」

案の定レミリアが飛んできた。がんばれ〜と心の中でどっちにも応援。

「お兄ちゃんはこれからどうするの？」

「そうだな・・・」

そう思つて周りを見渡す。・・・霊夢に魔理沙、早苗さんに霖之助さん。霖之助さんは魔理沙に引つ張られてきたんじゃないか？それにしてもよくこの短時間にここでパーティーをすることが伝わったものだ。

ほかにも人外がたくさん来ている。チルノとかその他の妖怪。名前は覚えていないし分からない奴もいる。頭が向日・・・じゃなくて向日葵畑を守っているひとも来ているぞ。

喋りかけるのもいいが、正直今はそんな気分ではない。今は後のことについて考えたい。

「ちよつと外で独りになりたい」  
「そう。じゃあまたあとでね！」

人ごみならぬ妖怪の中にまぎれていくフラン。小さいからすぐに見えなくなった。

歩いているとゆっくりしていつてねとか聞こえたが私にかけた声ではないだろうと思ひそのまま会場を出る。

一人になるなら何処がいい？決まっている。自分の部屋、・・・と言いたいところだが行ったら行つたで誰か居そうだ。

私はちよつと行儀の悪いと思うが屋根の上でくつろぎながら考える事にした。

「おお。はじめて上つたがなかなかいい景色だ」

紅魔館の屋根に上つて見える景色。見えるのは森と湖。・・・私はこれの何処がいい景色と思つたんだ？・・・じゃなくて、夜空が綺麗に見える、だな。

夜空を見上げながら、私は今後のことを考える。

住居は確保できた。家具なども欲しいけど仕事と食べるものが最も必要だ。他のものは少しずつ集めていって、とりあえず仕事の安定、食料供給の安定が先だな。

仕事の内容は・・・もう決めていたな。慧音さんにもそれで問題ないだろうと許可も貰っているし。広告も一応しておくと言っていたから、初日から依頼が少なくとも一つくらいはあるはずだ。

ツキはどうしようか・・・あいつは睡眠時間を削ってでもいいから飛び方、弾幕の出し方を教えないとな。もちろん夜に。教えるために仕事をやらないとかそういうのはなしだ。

「ハル」

「はい？」

考えに耽っていたので突然の呼びかけに内心びくつとしながら声が聞こえた方向を見ると・・・なんだ、レミリアか。

「ツキを知らないかしら？」

「知らないな。というか、ツキはこんなところに来ない。来れない」

飛べないツキがこんなところに来て万が一転落したら大変だし。

「そう。ならいいわ」

といて私の隣に座るレミリア。月光でレミリアが輝いて見えてさらに優雅に見える。だが、一つ問題がある。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

私、喋る事ないんですけど。

さつきから今後の事を考えていたしレミリアに特別に言う事なんてないし。

「ハル、本当にここを出て行くのかしら？」

「・・・ああ」

「そう。・・・私は、あなたに言わなくてはいけないことがあるわ」「なんだ？」

「・・・フランを救ってくれてありがとう」

「・・・またそのことか。私はただ」

「違う！・・・聞いてちょうだい」

珍しく声を荒らげたレミリアの気迫に押されたのか、私は黙ってしまった。

「フランはあなたがここに来たおかげで変わった。これまでにどんな遊び相手、遊び道具を用意しても変わらなかったフランの心を変えたのはあなた。私も最初はフランを変えようと頑張ったわ。フランには壊す事以外のことができる必死に教えようとした。でも、どんなに頑張っても、どんなにいろんなものに触れたりさせても変わらなかった。そして、どんどんフランの思考も壊れていった。それで私は仕方なく紅魔館から出ることを封じたわ。すべてを壊さないように。そしてその間にフランを救おうと決意した。でも、できなかった。・・・私はダメな姉よ」

「・・・・・・・・・・」

「異変を起こしたとき、私を懲らしめに来た霊夢や魔理沙もフランに弾幕ごっこで立ち向かってフランを変えようとしたけれど、変わったのは表面だけ。心の中はまだ黒と血の色で染まっていたの」



「そんなときにあなたはやってきた。最初はおかしな人間と思ったわ。そして冗談交じりで言ったフランの世話も何も聞かずに承諾してしまった。それと同時にすぐに前に私達の所に泊まってフランの話聞き、あなたのように軽い気持ちでフランを救って見せるといった外来人のことを思い出したわ。あの時は少しそんなことを言ってしまった自分にも驚いたわ。私も、もうフランのことを諦めていたのかもしれない」

「・・・ちなみにその外来人はどうなったんだ？」

「・・・すぐに消えてなくなつたわ」

「・・・」

「でも、あなたは違つた。最初にフランと戦つたときこそもうだめかと思つたけど、フランがどういう状況に置かれているのかをしっかりと理解して、変えようとしてくれた。そして、フランは変わったわ。あなたと戦つて、壊せない、壊す事のできない大切な事を知つて」

「・・・レミリアでも咲夜でもやっぱり変える事はできたと思うぞ」

「できない。できなかったわ。・・・フランを救つたのはあなた。

あなたがどれだけ否定してもそれは変わらない事実なの」

「・・・そうか。だったらこっちも。・・・どういたしまして」

「フフツ。今回はあなたがいなくなることでフランにまた亀裂が入るのではないかと心配していたけれどそれはなかったようね」

「ああ。今はみんながいるからな」

「その中に私も入っているのかしら」

「入っていいというよりもう入っていると思うぞ。フランはレミリアがちゃんとした気持ちを伝えなくてもその気持ちを持っていることを前々から知っていたみたいだし」

「・・・そつ、そつなの？」

声が震えている。泣きそうなのか。・・・プライドからか人前では

泣かないようにしているのか？

「ああ。こんど、ちゃんと正直に気持ちを伝える事をオススメする」  
「え、ええ。わか、わ、分かったわ」

うつむきながらはつきりとした言葉ではなかったがレミリアは言った。そして、屋根から降りていった。

・・・なんとというか、重いです。話の内容が。私の過去より100倍くらい重い。やっぱり長年生きていると大変なんだな。

「ハルさん」

今度は美鈴が跳んで来た。飛ぶではない。ジャンプだ。さっきから下を見ていたから分かるが美鈴はツキからここに逃げてきたんだな。ツキもなにをしているんだか。

「どうした美鈴」

「本当に、本当に行ってしまうんですか？」

・・・何、その私がどこか遠くに旅立つような言い方は。

「ああ。だけど、他の場所に住む所を変えるだけだし、ここは自由の幻想郷だからいつでも会おうと思えば会えるよ」

「そう、ですか・・・」

ちよ、なんで泣きそうになるんだ。美鈴、俯かないでくれ。なにか私悪い事いいました？

「・・・わかりました。だったら、たまには紅魔館に遊びに来てください」

「わかった」

美鈴も退場する・・・と思ったらまだ話があるみたいだ。またこっちに戻ってきた。

私はたまには遊びに来るという約束をしたので涙を拭いてまた門のところに戻ろうと思いましたが。だが降りるとき、ふとあることを思いついてしまった。

気持ちを伝えるなら今しかない、と。

自分とハルさんしかいないこの場。しかも、星空が綺麗に輝き演出もばっちり。これは思い切っているしかない！

「ハルさん！あなたにいいたいことがあります」

「何？」

「あの、あの！」

「お、おう」

「あな、あなたのことが！」

もし、ことわられたらどうしようという不安と、肝心なときに言葉が出ない自分にイライラしながらも言葉つむいでいく。

「・・・ちよつと！なに言おうとしているのよ！」

「え？！パチュリー？！」

「そ、そんなあー」

でかかった言葉はパチュリーの出現により遮られていきにしぼんでいった。

パチュリーは何故ここに来たんだ？夜空を見にか？綺麗だからその気持ちも分かる。パチュリーが自分から紅魔館のそとに出てくるというのは驚きだけ。

「ちよつと目を放した隙に何をしようとしているのかしら？」

「勝負は先手必勝というのが私のモットーですから」

美鈴とパチュリーがお互いににらみ合い、何かを言い争っている。ちよつと離れているので内容までは聞けない。近づくのは勘弁だ。巻き込まれたら大変だからな。

その言い争いが終わるまで私は座って月でも眺めておこうかな。意外に月の表面にウサギが見えたりして・・・こっから見えたらどんだけそのウサギはでかいんだー！ってことになるけどな。

「ハルさん!」

「ん?終わったのか?」

「そうではなくて!あなたに聞きたいことがあります」

見たところ何かの言い争いは終わったみたいだ。パチュリーは美鈴の後ろで私を睨んでいる気がするが気のせいだよな。

「ああ、さっきの事?」

「はい。・・・私はハルさん、・・・あなたのことが好きです」

「え?それってどういう」

「そのままです。いいですか?これは本気です。真剣です」

思考が追いつかない。

「・・・私も、たぶん、あなたのことが好きよ」

・・・もしかして、さっきからこの事を言い争っていたのか?誰が私に先に告白するのか、とか。いや、誰が先に告白しても変わらないだろ。第一、私に告白して何になるっていうんだ?イカン、私も驚きすぎて考えがまとまらない。

「答えを聞いているのではないわ。ただ、あなたに伝えただけ  
いと思つて伝えただけ」

「え?あ」

「無理にいわなくてもいいです。ハルさんがじっくり考えて答えを出してきてください。私達はそれを受け入れます」

そういつて去っていく美鈴とパチュリー。残された私は少しの間思

考停止。頭の中ではさっき言われた言葉がぐるぐる回っていた。

## 第四十二話（後書き）

兄弟や姉妹の絆はすばらしいものがあると思います。バラバラになっても心は一つみたいな感じで、みている人も元気がでてくる気がするからです。（意味不明だったらすみません）

あと、

恋や恋愛の仕方は人それぞれですよ。皆さんはどんな恋や恋愛を試してみたいですか？

作者は・・・フヒヒヒ。ちょっと秘密です。

## 第四十三話

「おい、ハル」

「・・・なんだ」

「お前、どうしたんだ？元気が無いぞ」

「・・・気のせいだろ」

さつきからこれ。ハルがパーティーに最後まで参加しなかったのはパーティーを余り好きじゃないという事で終わってもいい。俺は楽しめたからな。だがこっちは気のせいじゃダメだ。この短時間でハルの何が分かるんだと第三者に言われてもしかたが無いがこの変化はさすがに誰だってわかると思うぜ？落ち込んでいるというか上空。絡みづらいから困るしこれから一緒に住んでいくんだ、初日でこれじゃ楽しくやっていけねえ。

「なあハル。なにが原因で落ち込んでいるんだ？」

「・・・別に落ち込んではいないさ」

そうか・・・じゃない。だったら元気を出せ、元気を。それとも何、俺が嫌いなのか？いや、それはないな。だったら最初から一緒に私とやらない・・・じゃなくて住まないか？なんて事いわないはず。・・・だとしたら、パーティーに参加していない間に何かあったのか？そう考えるのが普通だよな。

「じゃあ、なぜ元気が無い」

「・・・気のせいだろ」

「いや、そんなはずは無いね。確かに会ったときからお前は人生才



ワター！とか言いそうな目とかテンションだった気がするがそれはまた別の状態になっている」

「・・・お前、私のことをそんなふうに見ていたのか」

「別に気にする事でじゃあない。で、何で元気が無いんだ？」

「元気が無いわけではない。ちょっととした考え事だ」

「で、考え事って何だ？」

「・・・人に話せることじゃない」

「なんだよ・・・もしかして、いやらしい事？」

「違うわ！」

そこは勢いよく否定するのか。だが確かに元気はあるな。

「冗談。友達をからかう癖が出てきてしまったぜ」

「私はもうお前からしたら友達なのか」

「だろ？数少ない幻想郷の外来人仲間だし？」

「・・・そうだな」

「ということでは考えていたんだ？」

「・・・ノーコメント」

「そこまで人に言えないことなのか？」

「・・・そうではないけど・・・お前じゃなあ」

「ひど。大丈夫だ、問題ない。俺はこういふときは真剣に聞くタイプなんだぜ？」

「・・・本当にか？」

「ああ」

「だったら笑ったりしたら上空に吹き飛ばすか何処かの場所にスキマ送りだぞ」

「・・・いいだろう。受けて立とう」

あいつ、なかなか危ない提案してきやがる。だが大丈夫、さっき言った事は一応本当だし。聞いて解決できるならそのほうがいいだ

る？

俺はハルの話に耳をかたむけた。

「・・・なん、だと・・・」

ツキに話してからのツキの第一声。私が悩んでいたことに対して馬鹿にしているわけではないから吹き飛ばしたりはしない。だが、正直言うべきか迷った。だって、考えていた事がまさか・

「美鈴とパチユリーに告白された、だと・・・」

「私も最初は何かの誤解だと思っていたけど、どうやら本気みたいだった」

「・・・殺す！」

そういつてツキが能力を使って出すのは白刃の輝く刀。日本刀ともいうのか？ってそんな事考えている場合じゃなかった！

「ちよつ、危ない！」

私は日本刀を振りかざしてきたツキの攻撃をかわして能力を発動。ツキの能力をコピーする。そうすると日本刀も消えた。いや、伊達に速い弾幕を見てきていないな。ツキの振り下ろしがそこまで早く感じなかった。というか、いきなり刀を振りかざすな。危ないだろ。

「・・・きさまあ、俺の美鈴をお」

「さて、どういう意味だ？美鈴には何もしていない。もちろんパチユリーにも」

「パチユリーはお前にくれてやってもいい。だが美鈴はダメだ」

今度は素手で殴りに掛かってきた。私はチョン避けて回避。そういえば、ツキは能力のこと聞かないのな。まだ気づかないのか？

今思ったが話の論点がずれていつているよな。私もさっきの沈黙はどこいったのやら。

「はあ、はあ・・・」

「・・・話を戻そう。お前の言い分は後で聞くから」

「・・・ああ」

「私は昨日、確かに美鈴とパチユリーに告白された」

「何かの誤解だったらうけるけどな」

「・・・そうだったほうが私には良かったかもな」

「ああ、しけるな！で、お前は何を迷っているんだっけ？」

それもあまり言いたくない事だな。確かに、私の今の状況は一般男性からしたらすごい幸せな状況なのかもしれない。二人からも告白されたんだからな。だが私からしたら、悩み事の一つでしかない。それはそう。一人しか選べないから。一人を選ぶと一人が不幸せになる、そう思うとどちらも選べない。だが、そうすると結局どちらも傷つけてしまう。というなんともありがたいな考えをぐるぐる頭の中で考えて悩んでいた私。

「どうすればいいかで私は迷っている。片方を選べば片方が不幸せになる気がしてな」

「なんだ、そんなことか。だったら迷わずパチユリーを選べ。美鈴

の心の傷は俺という存在で埋めてやる」

そんなことって・・・もしかして、ツキは別の考えがあるのかも。思い立ったらなんとかで私は心を読む能力を発動。ツキはやっぱり気づかない。どれどれ・・・『ハルには二人を妻として取るということは頭に無いのか』・・・そういうこともありなのか。だが、それで二人は納得するのか？というか、二人の妻って・・・考えられない。

今は置いて話の続きだ。

「女の人の心ってそんなに単純なのか？」

「さあ？だが、何とかしてみせる」

「すごい自信だな」

「だろ。だから選ぶならパチュリーな」

「・・・まあ、考えておくさ。ありがとな、ツキ」

「どうも。ということできささと人里に行こうぜ」

「そうだな。行こう」

ツキと自分のことを話しすぎて忘れていたが私達は今日から自立して一軒家に二人で暮らしている。今は朝。ここにすんで一日が過ぎたわけだ。だが家具は一つもなし。食材も何も無いので会に行く必要があるんだ。

私達はさっそくスキマを開いて人里に向かった。

で、人里に着いたわけだがまずは何をしようか。やっぱり朝ごはんを何処かの店で食べるのが先か？

「ツキ、最初は朝ごはんから調達するか？」

「ん？どつちでもいい」

「・・・そんなこといわれてもな」

「ていうか、こつちにレストランみたいなものあるのか？」

「ああ、一応ある」

妖怪も客として招き入れているから夜も開いているぞ。

「ふくん。まつ、どつちでもいいけど」

「じゃあ、慧音さんのところに行くか」

「何故？」

「慧音さんに私の仕事のことを人里の人たちに広めてくれているんだ。だから、その仕事が入っているかの確認。もちろん、ツキも働けよ」

「仕事？どんな事をやるつもりだ？」

「何でも屋」

「・・・どこかの侍みたいな事をやるのか」

「？どの侍かは知らないけど、私にできるのは正直のところ余り無いからな。特に専門的なことは。だから、妖怪退治や農作業の手伝いのことを期待している」

「だったら仕事内容を限定しろよ」

「・・・まあ、何事も挑戦だ」

それはちよつと考えていなかった。次からそうしようかな？

そして慧音さんの家。寺子屋とは別だ。

「慧音さん」

戸を数回ノックする。朝寝坊ということは無いだらう。お、出てきた。

「おはよう。ハル」

「おはようございます」

「ハルの隣に居る君は新しい外来人かい？」

「そうだ。はじめまして慧音先生」

慧音さんは何を見て外来人と分かるんだ？いや、レミアとかもだけど。服装？人里の人も自分達とそう大差ないだろ。どっちかという人里の人のほうがビツクリな服装をしていると思う。

「君の名前は？」

「ツキだ」

「・・・君の名前を否定するつもりは無いがそれは偽名ではないか？」

「そんなことはない」

・・・うーん、常に心を読む程度の能力を発動させていたほうがいいかな？こんな会話を聞いているとすごい心の本音を聞きたくなる。ただ自分で決めたからな。必要以上に心を読まない、って。今は・・・必要ではないからダメだな。

「そうか。疑ってすまなかった」

「いやいや。それほどでも」

「話を戻そう。ハルがここへ来たということはもう紅魔館の人には言ってきたのか」

「はい。それで依頼の方は・・・」

「ああ、ある。万屋は一応君達意外にも少しだけあるが人間のできる範囲しかできないからな。君達はもちろん能力や幻想郷の中で生きていける力を持っているのだろう？」

「はい」

ツキに向けた言葉だつて言うのは分かる。私の能力はもう話してあるからな。ついでに言っておくが私は慧音さんの能力はコピーしていない。見たことも無い。話には聞いているけど。確か、歴史を食べたり創ったりするだっけ？・意味不明。

「だから、その力が必要になる依頼も一応受けておいた。と言っても、それでもまだ始めたばかりだ。期待はしないでくれ」

「はい」

「では、ひとつずつ紹介していこう」

話を聞いたところ、今依頼されていることは三つ。一つは神社への参拝路の護衛。神社に行きたいけどその道中が妖怪祭りで危ないからいけないだそう。二つ目は配達。中身は依頼主のところに行つてからののお楽しみ。三つ目は農作業の手伝い。

「どれを受けるのも構わない。農作業の手伝いだけは今すぐ行つて遂行しても大丈夫だ。まあ、君達にも話し合いや準備が必要だろう。どれをやるか決めたら来てくれ」

「分かりました」

私達、退場。

「慧音さん。やっぱり凜々しいな。この幻想郷では一番真面目なキャラだな」

「そうだな。おかげで助かる。で、どの仕事を誰がやるかだ」

「二人で一つずつこなすんじゃないのか？」

「効率が悪い。稼ぐなら一人一つだ」

「え〜」

「文句を言うな。それで、ツキはどれをやりたかったか？」

「どれもやりたくねえ」

「その選択肢は無い」

「・・・だつたら護衛」

「やつぱりか。お前の能力からしたらそれが一番楽だよな」

「お前は どうするんだ？」

「今回はお前にその仕事を譲る。私は農作業に参加するわ」

「がんばれ〜」

「それと、今能力使えるか？」

「何を当たり前のことを聞いている。使えるぞ」

手にさつきとは違う形の剣をツキはだした。さつき能力コピーしたからまだ戻っていないかなと思つたがこれなら護衛も安全、安心だ。

話がまとまつたのですぐにまた慧音さんの家にお邪魔する。

「もう決まつたのか」

「はい。私が農作業で、ツキが護衛です」

「なるほど。だがツキ。君には護衛する人々を守る力があるのか？」

「ああ、ちゃんとあるぜ」

そういつてまた武器をつくりだした。ついでに能力の説明も。靈力切れが起こらないのか心配だな。護衛している最中にそうなら危険だ。

「なるほど。それなら大丈夫だな。よし、ではどこに依頼主がいるかを教えよう。頑張ってくれ」

「はい」

「ああ」



慧音さんが取り出した二枚の紙。その一つを貰ってみてみると、分  
かりやすく依頼主の場所とその周辺が書かれていた。さすが慧音さ  
ん。

じゃあ、初の農作業に行きますか。

## 第四十三話（後書き）

もっとおもしろ成分をいれたい。そう思う作者です。

第四十四話（前書き）

お仕事回です。

## 第四十四話

慧音さんから依頼主の居場所を聞き、さっそく依頼主のところへと向かった。あつたらまず挨拶。その次に何をするかを依頼主さんから聞いた。依頼主、なかなかのイケメンだったと思うよ？そんなことより名前聞くべきだったな。

そして農作業。私は絶賛水田の雑草とり。

ふう・・・疲れた。開始一時間くらいでギブアップ。雑草をザックザック刈る、抜くのは簡単だが、照りつける太陽&屈みの体勢がきつい。だが・・・

ちらつと依頼主さんのところを見る。集中しているような表情で水田の手入れをしている。自分の水田だから当たり前か。・・・というか、一人でそこまで動けるなら自分じゃない気がする。だけど辞めると報酬もなくなるから頑張らないと。

・・・明日は、筋肉痛だな。

「よし、準備はいいか？」

こちらはツキ。ちょっとテンションダウンしながら護衛中だ。何故かって？・まさか護衛する人が

「じゃあ、お願いしますかのぉ」

おじいちゃんおばあちゃんしか居ないとは・・・これっておかしいよな？外では若者が神信仰していないのは分かるけどここは幻想郷、神がいて当たり前場所だ。若者も参拝に参加するはず。・・・は！もしかして、今が働く時間だから若者が働いていて、年寄り暇つてか？・・・くっそ！別にフラグを立てたいわけじゃないがさすがにこれは嫌だ！それに、他にも問題が。

「はい、分かりました」

だが笑顔で返事を返して歩き出す俺。営業スマイルだ。

他の問題と言うのは非常に簡単。どうやって守るかだ。人里の外だから力が無い人はすぐぱくつかれる。なのに危機感が無いのか普通におしゃべりしているし・・・しかも、なんだその大量の荷物。ピクニックにでも行くつもりか！長年できなかったお供え物か何かかわからないけどもつと減らしてこい。次から荷物制限いれるか？・・・だがそこまで動きにくい装備で来るってことは俺に期待しているっていう風にもとれるな。みんな、慧音さんからの紹介だから安心していいのか。

「皆さん、注目」

「ん？どうかしましたかの？」

「いえ。ただ皆さんが歩いているここは妖怪が普通に人を食べているゾーンです。弾幕勝負ができない人はすぐに食べられてしまうの

で一応俺がいるとしても少しの危機感をもってください」

「わかったよ」

「あと、これをもってください」

俺は能力で作った盾にはならない木製の盾を渡す。老人達の体の負担を減らすために木材をイメージして作っているから軽い。優しいな、俺。もちろん効果がついている。その効果は絶対防御といっつかならず攻撃を防ぐ。だが雑魚妖怪の不意討ち数回に耐えられるぐらいの強度。フラワーマスターとかがきたら吹っ飛んで使い物にならないけどまさか襲ってこないだろ。

これで安全で確実に神社にたどり着ける。俺はやるときはしっかりやるんだぜ。

・・・今思ったけど、どっちの神社だ？守矢神社？博麗神社？・・・歩いている道的には博麗か。だが聞いて確かめるか。

「みなさん、二つの神社がありますがどっちに行こうとしているんですか？」

「博麗神社じゃよ」

・・・なんか、あたりまえのような言い方されてムカつく俺がいる。だが、博麗か。霊夢より早苗にあってみたかったけどな。まあいいや。

とある水田。

「くたばれ」

誰に言ったのかというと、妖精に言った言葉だ。さっきまでいなか  
った妖精がだんだん沸いてきてちよつとした嫌がらせで水田の稲を  
盗んでいこうとするので私がその妖精退治に当たっている。まだ成  
長途中の稲盗んだって何もならないけどな。依頼主さんはこれが当  
初の私にさせる事だったみたいだな。その依頼主さんは私が妖精を  
消し飛ばしている中、黙々と手入れを続けている。すごい集中力だ。  
私が近くでドンパチして暴れているのに・・・そんなこと考  
えている場合じゃなかったな。仕事をパーフェクトにこなさなくて  
は。

山道。ちよつとしたRPGのような道。

「はい、ちよつとごめんね」

飛んでくる妖精、妖怪達をころさず刀身に当たると飛んでいくとい  
う剣を使って吹っ飛ばしていく。簡単だが単調、そして喋る人がい  
なくてつまらない。そろそろ博麗神社についてもいいんじゃない？俺  
は方向音痴ではないから迷子はない。

「それにしても、なかなか」

つと妖怪が飛んできたので攻撃を盾で防ぎ同時に剣を振りかざす。  
刃が無いがあたれば即吹っ飛んだ。

・・・なかなか、俺の知っている妖怪がないな。

そう思いながら歩いている俺だった。

「よし、こんなもんだろ」

「今日は終わりですか？」

「ああ、ありがとうな」

水田の妖精退治が終わって夕方。朝からこの時間まで昼食以外休まずに依頼主は手入れをやり続けた。今回は割りと頑張ったほうらしい。まあ、私がいるからな。自分で妖精を退治する手間が省けたんだろう。

そして今は依頼主の家の縁側。二人でくつろいでいます。

「今回はご苦労様。すごいはかどったよ」

「いえいえ。受けた仕事はちゃんとしなといけませんから」

「しっかりしているなあ。外来人は皆そうなのかい？」

「・・・どうでしょう？」

ツキ、今頃どうしているかな？

「まあいいさ。とりあえず今回の報酬。まだ実っていないから金で許してくれ」

「いえ、ありがとうございます」

「これからほぼ毎日のように来てもらうからな。よろしく」

「はい。それと、名前を教えてくださいますか？まだ顔を完全に覚えて



いないんでもしかしたらのためにお願ひします」

「そうかい。私の名前は荒馬水連だ。君の名は？」

「私は神崎ハルといます」

「ハルか。・・よし、たぶん覚えた。これからまた聞くかもしれないけどな」

「私もです」

「はっははは・・じゃあ今日はこれで終わり！もう帰ってもいいぞ」  
「はい。お疲れさまでした」

よし、これでしばらく収入源は安定だ。ただ弾幕はって妖精飛ばしていただけだから疲れなかったしラッキーだな。

ツキは大丈夫かな？と思ひながら自分で稼いだ金の存在を確かめながら家に帰った。

ついた。やっとついたんだ。博麗神社に。

「ああー疲れた。山道は歩くとじじいじゃなくても疲れるわ」

「ご苦労様。おかげでこっちはたくさんのお宝銭とお供え物を入れることができたわ」

「よかったですね、貧乏巫女」

「うるさいわね」

となりで抗議を申し立てている霊夢がいるが気にせず霊夢がだしたお茶を飲む。はあく・・生き返るわく

俺は老人達のほうを眺める。みんな思い思いに賽銭やお供え物をして祈っている。よかつたな、無事にたどり着けて。まあ、俺がいるから当たり前だけど。

それにしても疲れた。予想外のハードさだった。妖怪や妖精はふわふわ飛んでくるし、一歩歩くたびに襲われるペースだった。その所為で慎重になりすぎて時間掛かったし、能力多用とその他の理由で精神もぼろぼろだ。あれだあれ、もしこれがゲームだとしたら評価はAからEまでしかないのを突き抜けてZだ。

「まあいいわ。さっきのは水に流してあげる。あんた、これから毎日こんな事するの?」

「やだ。別の仕事を探す」

「だめよ。ずっとこの仕事を続けなさい。そして私に奉仕しなさい」

「自己中巫女だな。そんなだと信仰する人がいなくなるな」

「大丈夫、場はわきまえているから」

うわく、なんて奴だ。マジで別の仕事ないかハルに後で聞いてみよつと。慧音さんはちよつと俺苦手だから。

「じゃ、そろそろいくか」

「誰一人殺すんじゃないわよ」

「それぐらい分かっている」

さあ老人達との下山の時間だ。里に帰ったら金をたんまり巻き上げてやる。

「ただいまー。あれ？ツキ？いるか？」

私が入って確かめるとツキはいない。あれ？ツキは護衛の仕事だったはずだよな。ツキの能力なら余裕で博麗神社に着いて人里まで余裕で返ってくると思っていただけ、何で居ないんだ？・まさか、妖怪に負けたわけではないだろう。あいつの事だから寄り道していいそうだ。

「しょうがない。晩飯、作っておくか」

私は帰る前に買った食材（今晚と明日の朝の分）をもって台所へ向かう。

何つくろうかな。と思ったらすぐにただいま、と声が聞こえた。

「ツキ。遅かったな」

「寄り道していないぞ。老人の足にあわせていたらこうなっただけだ」

「あつ、そう。たいへんだったか？」

「ああ。精神的にも肉体的にもダメージが大きいぜ」

そういつてツキは私に稼いだ金を渡す。お、意外に稼いだな。

「今日はハルが料理当番な」

「ああ、いいよ。元からそのつもりだし」

「じゃあ、俺、すこし外をうるついとくわ」

・・・行っちゃった。さびしくなんてないからな！  
・・・つくるか。

夕食を食べた後はツキの修行かそれとも生活に必要なものをそろえるために動くか迷ったが後者にした。生きていくには必要なものが無いのにどうやって生きていくんだよというツキの突っ込みを受けたからだ。

まずは寝るために必要なものから。これは紫があげてもいいといっていたがなんか怪しいから断ったぜ。それに他人にできるだけたよらずがモットーだからな。

次にテーブルなどの家具。私は余り家具には詳しくない。ツキも同じだったので今必要だよな？と思うものを買った。

そんなこんなで、家に配置してまあちゃんとした家、っぽくなったよな。

「何か足りない気がするのは俺が現代っ子だからか？」

「ああ、私もそう思う」

しょうがないよな。冷蔵庫と洗濯機が無いのは。妖怪の一部の人たちは持っていたが人里には無い。それは紫が人間は人間で進化させるといってその技術を人間には教えていないからだ。外の世界から持ってきてても電気無いんじゃ使えないしな。

「冷蔵庫、じゃなくて他の人たちはどんな方法で食べ物保存しているんだろ？」

「魚なら乾燥させてだろ。後は・・・忘れた」  
「あ、そうすればいいか」

私がコピーしたチルノの能力があったな。よし、早速試した。

「ちよつとどいて」

「何する気だ？」

「冷蔵庫の代わりに思いついた」

集中して、氷結を大きくしないようにして・・・できた。

凍ってあるのは朝食に使うと思って買った食材。・・・いい仕事したな。

「なるほど、魔法か」

「は？お前」

まだ魔法だと思っていたのか？

「これは魔法じゃない。能力だ」

「は？お前の能力は境界を操る程度の能力じゃなくて？」

「いや、私の能力は能力をコピーする程度の能力だ」

「なにそれ、チート？バグ？もしかして俺のもコピーした？」

「ああした」

「・・・チクショー！」

今夜はまだまだ眠れそうに無かった。

#### 第四十四話（後書き）

ツキの気持ちなんとなく分かります。自分が特別だと思っていたのにそれを超える特別が居たときの絶望感と嫉妬感。作者もよくあります。

でも、悪い意味での特別は違います。

## 第四十五話（前書き）

遅くなつてすみません。設定等を整理したりしていました。

他にもいろいろありますが書いてもつまらないものなので書きませ  
ん！

## 第四十五話

・・・朝か。なんか、疲れが取れていない気がする。

布団からでて一息。

それもそのはずだよな。昨日、私の能力をツキにばらしたらツキが暴れだした。理由？そんなものは聞かなかった。とりあえずうるさかったし眠れなかったので境界いじって強制睡眠。夜中にうるさくするのは近所迷惑だ。近所って言うてもすぐ隣に別の人の家があるわけじゃないけど。

だが私が眠ったのは月が昇って沈み始めて・・・だいたい4時間くらい？・・・昨日で言う tomorrow になってから眠ったところか。私は早寝早起きをもットーにしているのにこれじゃだめじゃないか。フランのところのいたときは妹紅の能力を使っていたから別に睡眠しなくても良かったけど今は身体を成長させるために能力を極力使わないようにしなくては。・・・今思っただけど能力を使っていないからって成長すると言う理屈は正しいのか？能力を使っても不死身と言う事しかわからなかったし・・・正しいと信じておこう。

「朝ごはん、作るか」

少しだけ重い体を動かして台所へ。

ちなみに私が作れる料理は一桁ぐらいしかない。だから料理の本に頼っている。



できた。・・・ツキを起こすか。

「おい、ツキ。起きているか？・・・起きていたか」

布団があるところには布団が無い代わりにツキがいた。

「おはよう」

「おはよう、じゃねえ！昨日はよくも強制睡眠させやがって！」

おお、昨日の事、まだお怒りのようだ。

「だってうるさいし。それに、なんで怒っているんだ？」

「俺だけがチート能力だと思って喜んでいた俺の喜びを返せ！」

「・・・そんなこといわれてもしょうがないだろ。しかも私の能力の何処がチートなんだよ」

「は？ふざけているのかお前。能力が操れると言うことは存在する全ての能力が使えるということだぞ」

「とはいっても本人の力には敵わない」

「それでも！たくさん使えるということはそれだけでチートだ。しかもお前、能力コピーしかできないって言っているけどな、操るんだからそれ以外もできるんじゃないか？」

「それ以外？と言うと？」

「能力を奪うとか消すとか別の奴に与えるとか・・・」

「さあ、どうだろ。できるかも知れないがやったらやったらでなにか大変そうだ」

「実際にやってみろ」

「は？」

「俺にだつたら大丈夫だろ」

「いいのか？奪う事はできてもお前に与えることはできないかもしれないぞ？」

「……やっぱ辞めとく」

能力の話が終わるとすぐに働きに行く準備をする。

だが、今思えば確かにコピー以外の力を持っていたのかもしれない。コピーした後、能力の戻りに時間差があったりしたし。……能力の応用、頑張ってやってみるか。

そうして、朝ごはんを食べて各自の仕事に早めに出かける。家にもやることはないからだけど。

そんなこんなで一週間が過ぎた。誰かの文句が聞こえた気がするか気のせいだろ。

この一週間の間に私とツキの生活はパターンになった。朝起きてこ

飯食べて働いて食べて寝るといふパターン。・・・これは真面目な話だ。この一週間は帰ってきたらだるくてなにもやる気が起きなかつたんだよ。

だが一週間もするとこの環境にも慣れたのかそこまで疲れも出なくなってきた。だから、そろそろツキに弾幕の作り方とか飛び方とか教えようと思った。ツキは自力でできるようになるうとしていたけど、現状を見ると・・・無理だ。

「・・・なあ、そろそろ諦めたら？」

「・・・くそー！」

生活が安定してからだがツキが自主トレーニングを始めた。朝と夜になにやら怪しげな行動をしているなと思ってみると、ツキが地面に寝転がって何かしていたのがみえた。しゃちほこのように体をそっていたり、腹を使ってジャンプしようとしていたりしていた（魚が陸で跳ねるような感じ）・・・が、何も起きない。

あとから聞いたら飛ぶ練習をしようとしていたようだが、私より酷い練習法だ。

しかも、服を汚して一日に何着も着替えるから迷惑だ。洗濯するのは、誰だと思っている！

・・・まあこれくらいにしておいて、さっさと教えるか。

「もう教えるから。立て」

「・・・」

無言で立ったツキに一言。

「どっやったら飛べるかという・・・イメージだ」

「イメージイ？」

「どこのヤクザだ。．．とにかく、自分が飛ぶイメージを試してみる。すぐ飛べる」

「．．そんな簡単だったとはな」

さっきまでイラツキ気味だったが飛べると言う事にやっぱり少しだけ喜びを感じているようだ。まあ、外の世界では無理だったからな。

そして、ツキは飛んだ．．．ってあれ？

「なぜ飛べない」

「いや、私に言われても」

「なに？俺には飛ぶ資格が無いってか？」

「怒るな。うぐん．．ツキ、どんな想像した？」

「普通に空を飛んでいるということ。頭の中で何度も何度も思っただけだが」

「そうか．．．だったら私が一回飛ぶからそれを見てもう一回イメージしてみて」

私はそうして．．飛ぶ。といっても見せるために飛ぶからそこまで早くは飛ばないけど。

そうして、ある程度飛ぶ姿を見せてツキに一声。

「ツキ、イメージしてみて」

「分かった」

目を瞑ってイメージを始めるツキ。ちなみに私は飛ぶのを終えて見守っている。

おお、浮いた！

「ツキ、もういいぞ」

「・・・おお！やったぜい」

ツキはうれしいのか飛び回っている。やっぱり、イメージが固まっていなかったから飛ぶことができなかったんだな。

すこしして、ツキを強制的に連れ戻して弾幕の事を教える。もっと飛びたかったようだがしらない。気にしない。

弾幕のルールを一応説明。基本の確かめだね。弾幕ごっこで避けられない弾幕は張らないとか致命傷になる弾幕、能力は抑えて使うことなど。ツキは大体知っていると言って流していたけど。

その後に霊弾の作り方説明。これはただ自分の霊力を発射するだけだからイメージするのも楽だね。ツキも私が何も言わないでもすぐに出せた。こつちに乱射してきたので私が弾幕の使い方を体で教えてやった。

最後はスペルカードを作る。せめて一枚はもつとかなないと完全に不利だからね。あ、一枚使っておわったら負けか。じゃあせめて二枚だな。と言う事で二枚作らせる。

「この紙は何だ？」

「さあ？何でできているかは不明。紫からスペカ作成用に貰ったんだ。弾幕をイメージして霊力をこめるとできる」

「ふうん。一回作ると書き換えはできないのか？」

「さあ？紫に聞いてくれ」

「・・・いいや。とりあえず・・・よし、一枚」

はや。そんな簡単に作っていいのか？自分なんて二枚作るのに半日かけたぞ。しかも、名前もネーミングセンスが無いとかレミリアに言われて笑われたし。レミリアのスペカを見せてもらいたいなあ。そうしたらいいスペカができそう。

とりあえず見てみる。おお、すご、なんかかっこいい。剣のような弾幕がツキの周りで浮かんでいるシルエット。私のよりかなりましだ。自分のなんて・・・やめておこ。

「なかなか才能あるな」

「だろ？だが名前はまだ決めない」

「なんで？」

「名前は時間をかけていい名前をつけたいからな。恥ずかしい名前付けると宣言するとき精神的に死ぬからな」

「・・・なるほど」

その言葉がじみに心に染みだ。別に自分が恥ずかしくないから改名する必要はないか・・・と開き直る事にした。それでいいだ。うん、それで。

むなしかったけど改名を考えるとツキも言っていた通り時間をかけないといけないのでそのままにする。さあ、あとはツキが弾幕を使

いこなすだけだ。

練習のためにツキだけ村人の外へ。自分？行く分けないだろ。だるいし。何かあったら大きい目の霊弾を空に打ち出せとか言ってるから大丈夫だろ。

と言う事で私のやることは終わった。だから、・・・ツキが来るまでくつろいでおこつと。

コップにお茶を注いで一気に飲む。

プファ！・・・はあ。

これが幻想郷での私の日常になった。外の世界からしても日常風景だけだ。この平和はいつまで続くかな？

## 第四十五話（後書き）

書いた後に思った。最後の独白はフラグのような気がする、  
と。

次もまた更新が遅れるかもしれませんが。そのところを頭の隅に入れておいてくれたら助かります。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1697/>

---

世界に忘れられた少年

2011年7月31日17時56分発行